# 芭蕉発句全講

# V

阿部正美著

明治書院

# 目次

# 凡　例

一、句の排列は成立年代順とし、年代の明らかでないものは、推定時期の下限を以て排列の基準とした。概ね拙著『新修芭蕉伝記考説』作品篇の年代考定に準拠したが、その後の私見によって修正したものもある。

一、注釈は最初に発句の本文を掲げ、以下、季語、語釈、大意、考の各項にわたって細説した。句形は諸種あるうち、最初に掲げるものを本位句とし、年代の古い最も信頼し得る俳書或いは資料の本文を掲出して、他の同句形のものは書名・資料名を挙げるにとどめた。本文の下の括弧内が本文の拠った書名・資料名である。本位句には句頭に番号を付した。他の資料によって本文を改めた場合は、その部分を□で囲んだ。

一、本位句の次に、順次異形を挙げた。掲出の要領は本位句と同じである。これら凡て濁点を加え、底本にある濁点は右傍に（ママ）と注記した。

一、異形のうち、年代の降る書に見える小異などは、本文として掲げなかったものもある。

一、句の前書に関する語釈は、本位句の前書についてのみ記し、他は省略した。異形句の前書も含め、本文として挙げなかったものは、〔考〕の条の初めにまとめて掲げた。

一、〔考〕の条では、成立年代、推敲過程、解釈鑑賞上の要点等、多岐にわたる問題を扱った。

# 元禄七年

827 ほうらいにきかばやいせの初便（真蹟自画賛）

真蹟短冊・正月廿九日付曲翠宛書簡・五月十三日付浪化宛去来書簡・炭俵・芭蕉翁追善之日記・卯花山・陸奥鵆・泊船集・篇突・伊達衣・皮籠摺・梟日記・続別座敷・宇陀法師・去来抄・蕉翁句集・十論為弁抄・木葉漬・蕉門録

元禄七の春

蓬萊にとはゞや伊勢の初便（遠帆集）

春季（ほうらい）。

**語釈** **○ほうらいに** 「ほうらい」（蓬萊）は、上方で行われた正月の飾り物。三宝の上に白紙・歯朶・楪葉（ゆずりは）・昆布を敷き、米・榧（かや）・搗栗（かち）・ほんだわら・串柿・橙（だいだい）・柚子・蜜柑・野老（ところ）・海老・梅干等を積む。中国で古く東海中にあるといわれた神仙の山蓬萊山に擬した祝儀物であるが、江戸ではこれと類似した饗膳用の飾りを「喰積（くいつみ）」といった。「に」は、「蓬萊にきく」と続く語法ではなく、その場を規定するような働きをする。「蓬萊に対して」「蓬萊を前にして」の意。［考］参照。「倭俗新年三方台置海老熨斗昆布榧橙穂俵等。先供賀客祝新年。是謂蓬萊台」（『日次紀事』）「和国の風俗、歳初に盤上に栗・榧・海藻・昆布・野老・蝦、其外果類品々・米など積かさねて、来客に是を進め、自分も是を賞す。名附て蓬萊と言。これ仙島に准じて齢を延るの祝義なるべし。中華に所謂の春盤の類ひ也。尤この盤上の所有種類は、飾とか祝ふとかの詞をむすびて春に用べし」（『滑稽雑談』）「蓬萊の具につかひたし螺の貝　圃沾」（『続猿蓑』下）。**○きかばや** 「聞（き）かばや」。聞きたいものだ、という自己の願望。**○いせの**

**初便** 「伊勢（いせ）の初便（はつだより）」。「いせ」は、ここでは伊勢神宮を指す。「初便」は、年が明けて初めての便り。慈鎮の歌に基づく表現であることは、芭蕉自身の解説がある。［考］参照。「ひらりくとゆきのふり出し　利牛　鎌倉の便きかせに走らする　野坡」（『炭俵』上）。

**大意** 正月の蓬莱飾りを前にして、神々しい伊勢神宮のあたりからの初便りを聞きたいものだ。

**考** 「いづれの春にやおぼへず」（『篇突』）「元禄七甲戌春歳旦」（『木葉漬』）等の前書がある。年代については標掲した自画賛の前書の外、元禄七年の正月廿日付意専宛と同月廿九日付曲翠宛の芭蕉書簡にこの句の事に触れており、同年五月十三日付浪化宛去来書簡に「翁の当歳旦に」、支考の『芭蕉翁追善之日記』（元禄七年成）にも「此春の歳旦」として引いているから、元禄七年の歳旦吟であることは疑いない。右にいった意専宛には、「愚句京板に出候而、門人の引付ごとに書とられ候間、いづれにて成共御覧可被成と書不申候」とあり、京の書肆井筒屋板の歳旦集に載った外、京や江戸の門人達の歳旦帳に付録として出たらしい。「とはゞや」という異形を収める助叟の『遠帆集』は、元禄七年の刊行ながら他門の集なので、誤伝の可能性が高いであろう。

　この句の内容については、正月廿九日付の曲翠宛に芭蕉自ら説くところが委しい。即ち、

伊勢に知人音づれてたよりうれしきとよみ侍る慈鎮和尚の哥より、便りの一字をうかゞひ候。其心を加へたるにては無御座、唯、神風やいせのあたり清浄の心を、初春に打さそひたるまでにて御座候。

と述べてある。慈鎮の歌「このごろは伊勢に知る人音づれて便りうれしき花柑子かな」（『詞林采葉抄』）から「便り」の一字を貰って、目出度い初春だから伊勢神宮の神域の清浄な気分を連想させるように仕立てたので、伊勢の知人が訪れて来て伊勢便りをもたらしたという歌の内容を句意の上に加えたのではないというのである。慈鎮の歌については別の書簡にも「便り一字、慈鎮和尚より取伝へ申候」（正月廿日付意専宛）「彼いせに知人音信てたより嬉しきとよみ侍る、便の一字を取つたへたる迄に候」（二月廿五日付許六宛）等と簡略ながら触れてあり、『去来抄』に、

先師返事に曰、汝聞処にたがはず、今日神のかうぐ〳〵敷あたりをおもひ出て、慈鎮和尚の詞にたより、初の一字を吟じ侍る斗なりと也。（以下行間）いせに知人音信て便りうれしきと慈鎮和尚のよみ侍る、便りの一字の出処にて、聊歌のこゝろにたよらず、汝が聞く、清浄のうるはし、神祇のかうぐ〳〵しきあたりを、蓬萊に対して結したる迄也。汝が聞る所珍重ト也。（先師評草稿）

とあるのも曲翠宛と同じ趣旨であるから、同様の事を去来にも言い送ったのであろう。浪化宛で去来が「蓬萊にまづ初の一字、翁の魂寄妙（ママ）に奉存候」といっているように、慈鎮の詞に「初」と冠したところが芭蕉の独創で、俳意の存するところでもあった。

右の『去来抄』に見える芭蕉の解説の前には、やはり句の内容に関連した去来との問答が記されている。

深川よりの文に、此句さまぐ〳〵の評有。汝いかゞ聞侍るやと也。去来曰、都・古郷の便ともあらず、いせと侍るは、元日の式の今様ならぬに神代をおもひ出でて、便聞ばやと、道祖神のはや胸中をさはがし奉るとこそ承り侍ると申。（先師評草稿）

去来は句中に都や古郷の便りとはなくて「いせ」の便りとあるところから、元日の仕来りが古式に則って現代風でないのにつけて神代に思い及んだものと見て、「便聞ばや」には作者の旅に出たい願望が籠められていると考えたのである。これは「汝が聞る所珍重」と褒められた程だから、芭蕉の意に叶った鑑賞と見られる。

「ほうらいに」の助詞の取り方によって、蓬萊そのものに初便りを聞きたいと解するか、或いは蓬萊を前にして初便りを聞きたいとするか、説は二つに分れる。前者の立場は、

伊勢の初便はきゝたけれども、元日なれば聞事成難し。幸蓬萊に有伊勢海老、伊せの事は知べし。渠になりとも聞ばやと也。（正月堂『師走囊』）

という説を始め、

蓬萊の飾りの中に当時伊勢から産する何等かの物が混つてゐたのであらう、海に関したものが。芭蕉の句の眼ざすところはいつもさう云ふところにある。穂俵或はひじき藻かとも思はれる。その伊勢に関係した物を眼に見て、自然に心が伊勢の国へ及んで行つて、「伊勢の初だより」と出たのである。その初便りは神風の伊勢の海上などのあけゆく光景であらう。（『芭蕉俳句研究』幸田露伴）

「蓬萊に聞かばや」は、勿論蓬萊に対してさうした希求の念を起したのであるが、語脈からいへば蓬萊そのものに聞きたいといふ願ひである。このにを英語の in の意に解する説（『芭蕉俳句研究』の瓊音氏説参照）もあるが、次にばやと続いて居るのだから、どうしても直接蓬萊に聞きたい意とせねばならぬ。のみならずさうしたいはばナンセンスな言ひ方によつて、始めて作者のひたむきな願望も十分あらはされて居るのである。（穎原博士『芭蕉俳句新講』）

等と説かれている。後者としては、

新年に蓬萊を飾つて年始を祝つてゐる場合には何よりも先づ尊く目出度い伊勢の国の初便が聞きたく思はれる。聞きたいものじやといったのである。蓬萊と神風の伊勢国、何となく調和がよい。（内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈』）

「蓬萊に」のにには普通のにとは異つてゐる。之れは英語の in の意味で、後世の俳句にはよく使つてあります。「蓬萊のあるところで」の意と思ふ。蓬萊の飾りのある此の所で、伊勢からでも便りが来れば善いと考へたのです。（『芭蕉俳句研究』沼波瓊音）

等が挙げられる。文脈上「蓬萊に聞く」と取るのが必然だという考え方もさることながら、『去来抄』に「神祇のかう〴〵しきあたりを、蓬萊に対して結したる迄也」とあるのを思えば、後者のような見方が確かであることは論を俟つまい。なお、露伴説は「に」についていっているわけではないが、蓬萊飾りの物の中に伊勢から産するものがあったから「いせの初便」が出たというのは余りに膚浅で、『師走嚢』の説と共に従い得ないところである。

芭蕉が「此句さま〴〵の評有」（『去来抄』）といって去来の見方を尋ねたのは、蓬萊と伊勢の初便りの組合わせが一

見分りにくかった為に、色々な評があったことを思わせる。慈鎮の歌は当時かなり知られていたらしいけれども、意味内容と無関係に「便り」の語を取込んだ点を、芭蕉がしきりに説明しているのも、分りにくさを自覚していた為であろう。句柄は守武の句「元日や神代のことも思はるゝ」に類した趣で、ただ正月の雅情を掬するに足るというまでである。許六宛書簡に自身「愚句は……一等鎮め候而目にたゝせず候」と述べているのによっても、地味な句柄であることは分る。

828　一とせに一度つまるゝ菜づなかな（泊船集）　――蕉翁句集草稿

一とせに一度つまるゝ若菜哉（三冊子）　――蕉翁句集

一年ンに一度つまるゝ薺かな（泊船集書入）

春季（菜づな）。

語釈　○**一とせに一度つまるゝ**　「一年に一度摘まるゝ」。七種の日の若菜として一年に一度摘まれることをいう。「一年に七日の夜のみあふ人の恋も過ぎねば夜は深けゆくも」（『万葉集』巻十、人麻呂歌集）「年に一度の月のこよひぞ　七夕のあふはあふかは川のはた」（『毛吹草』巻七）「Ichido.」（『日葡辞書』）。○**菜づな**　「薺」の異表記。ぺんぺん草を指し、春の七草の一である。既出（Ⅱ271等）。

大意　ぺんぺん草などといわれて普段は問題にされない薺も、正月七日には摘まれて七種粥に炊き込まれ、一年に一度だけもてはやされることだ。

考　『三冊子』には、

此句、その春文通に聞え侍る。その後直に尋侍れば、師のいはく、其頃はよく思ひ侍るが、あまりよからず。打捨しと也。

と、句にまつわる直話を披露しており、『蕉翁句集草稿』にも、

> 此句、其年対面之上、思ふ所を尋侍れば、一度はよろしきかと思ひ侍れども、さのみの事なく、できざるよし被申侍る也。

と同じ趣旨の記事がある。同じ土芳の『蕉翁句集』では、この句を元禄七年の部に入れてあり、『三冊子』に「その春」というのは七年春のことと考えてよい。句の成った時土芳に文通を以て報じ、その後帰郷した夏か秋に直話があったのであろう。

板本としては元禄十一年の『泊船集』が最も早く、土芳が『句集草稿』で下五を最初「若な哉」としながら「若な」を見せ消ちして「薺」と改めているのは、『泊船集』を参照した為と思われる。土芳が覚えていた句形が「若菜」だったことは、『句集草稿』に先立つ『三冊子』にそうあるのによっても明らかであろう（『句集草稿』で句形を訂しながら、「白船（ママ）に若な哉とあり」とも細書しているのは事実に反し、矛盾でもある。錯誤と考えざるを得ない）。彼が『蕉翁句集』で再び「若菜」に戻していることについて、井本農一博士は『校本芭蕉全集』俳論篇の『三冊子』補注で、土芳が一旦『泊船集』に従って句形を訂したものの、あとで自分の手許の芭蕉書簡などを参照し、「若菜」であることを確認して、『句集』にはその形にした可能性もあると指摘しておられる。そう見れば「若菜哉」の信憑性が増して来ることになり、杜撰な点の多い『泊船集』の編纂態度からしても、そのような見方は一理あるものといえよう。ここでは『泊船集』の誤りという確証があるわけではないので、その句形を本位句とし、「若菜哉」にも信憑性があることを言うにとどめたい。許六の『泊船集書入』の句形は根拠が明らかでなく、問題にはならない。

薺が七種の時だけもてはやされる以外は雑草扱いされるのを哀れに思い遣った句とすると、哀れさ侘しさが主調になるけれども、それでは正月の句として明るさも華やぎもないし、軽みと興を専ら唱道した最晩年の作にも相応しくあるまい。

……一年にたゞ一度もてはやされる蕣の手がらが句の眼目であり、而もどこかさうした蕣のわびしさ、寂しさが余情となつて流れてゐる。たゞ全体があまりに説明的な言ひ方となつて居る為に、そのわびしさ、寂しさが深く味はれない気がする。……

　これを解して、人も一生に一度得意の時代があるといふ教訓的の句だとしたり（『芭蕉句集講義』竹冷説）、又実社会に貢献することなき自身を蕣に託したと見たり（服部氏『芭蕉句集新講』）する説には賛し難い。（潁原博士『新講』）

という見方が穏当である。「たゞごと」に類した表現は、一面この時期の好みでもあったが、この句の場合、時が経って見ると然程良くも感ぜられず、結局捨てられたのである。

*829*

**腫物に柳のさはるしなへ哉**（正月廿九日付去来宛書簡）

五月十四日付芭蕉宛去来書簡・芭蕉庵小文庫・泊船集・去来抄・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

**はれ物にさはる柳のしなへかな**（有磯海）

矢矧堤・宇陀法師

春季（柳）。

**語釈**　○**腫物**「ハレモノ」。顔などに膿をもって腫れたできもの。「峯次郎さんが腫物（はれもの）が出来て十日ほど絶食同様で」（『春色梅美婦禰』二十三回）「**Faremono.**」（『日葡辞書』）。○**柳のさはるしなへ**「柳（やなぎ）の触（さは）る撓（しな）へ」。なよなよとした柳の細枝が腫物に触って撓うさま。［考］で述べるように、柳の枝のしなやかな体を「腫物に触るようだ」と譬喩にとる説があるが、「柳のさはる」の句形では、柳の枝が実際に腫物に触ると解するのが妥当であろう。動詞「しなふ」には四段と下二段の二つの活用があり、連用形が「しなへ」となるのは後者である。「折〳〵や雨戸にさはる荻のこゑ　雪芝」（『続猿蓑』下）「をのづから草のしなへを野分哉　圃燕」（『続猿蓑』下）「**Vuoga teni sauatta.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　腫物に柳の細枝がさわって撓う感じは、一種名伏し難いものだ。柳の枝のたおやかさよ。

考　正月廿九日付の去来宛書簡は元禄七年と推定されるもので、句の前に「頃日初発句致候」とあり、この句が同年正月に成ったことは確かである。同年五月十四日付の芭蕉に宛てた去来書簡でも、

……御発句、去年より被仰下候内、若其元の御集にもれ中候御句も御座候はゞ、此度浪化集に拝領仕度候。

と希望を述べて「御発句」として列記した最初にこの句が見える。「其元の御集」とは、当時編纂が始まっていた『続猿蓑』を指すとおぼしく、「浪化集」は『有磯海』（元禄八年刊）のことである。句形に問題はあるが、右の文言は、この句が浪化の集に収められるに至った事情を示していると考えられる。

『有磯海』の「はれ物にさはる柳の」という句形については、その翌年に出た史邦の『芭蕉庵小文庫』に、

此句、浪化子のありそ海に、さはる柳のしなへかなと去来が書誤りて入集しはべるとて、常に此ことをくやみぬるまゝ、このつゐでとなしぬ。

と注記が見える。史邦は元禄六年以来江戸に住むようになったが、もとは京の人で去来とも親交があったから、東下後も文通することは多かったであろう。その折に去来が自分の失敗を洩らすこともあったと思われるので、この記事は信用出来よう。芭蕉自筆の書簡と去来書簡が一致する句形が正しく、『有磯海』の句形は去来の「書誤り」ということになる。これに対して許六はその著『宇陀法師』（元禄十五年刊）で、

小文庫に先師の句

はれ物に柳のさはるしなへ哉　此句あやまり覚えて書ゝに迷はし侍る。是首きれ連哥也。

はれ物にさはる柳のしなへ哉とこそはつゞき侍れ。其上、腫物にきつと柳のさはりては、一句おかしからず。

はれ物にさはる柳と自筆の短尺に有。

と論じて、『小文庫』の句形を誤りとした。許六の説は解釈に関する点もあるが、それは後で触れるとして、『有磯海』の句形については、『去来抄』同門評にも、左のような去来の説が見える。

浪化集に、さはる柳と出。是は予が誤り伝ふる也。重て史邦が小文庫に、柳のさはると改め出す。……許六曰、先師の短尺に、さはる柳と有。其上、柳のさはるとは首切也。来曰、首切の事は予が聞処に異也。今論に不及。先師之文に、柳のさはると慥也。六曰、先師あとより直し給ふ句おほし。真跡、証となしがたしと也。……
　来曰、いかなるゆへや有けん、此句は汝にわたし置。必人にさたすべからずと江府より書贈り給ふ。其後、大切の柳一本、去来に渡し置けりとは支考にも語り給ふ。其比、浪化集・続猿集両集にものぞかれけるに、
　浪化集撰の半、先師迁化有しかば、此句のむなしく残らん事を恨て、その集にはまいらせける。

右に去来のいう所は、さきに述べた経過と大体に於いて異なるものではない。『有磯海』の句形が誤りであることを去来自身証言しているのは最も重要な点で、『小文庫』に「柳のさはる」の句形を出したのは、去来の意向だったかとも思われる。「許六曰」以下が『宇陀法師』に関する記事であることは殊更説明を要しない。「来曰」以下の付記に、芭蕉が「此句は汝にわたし置。必人にさたすべからず」といったとあるのは、正月廿九日付の書簡には見えないが、五月十四日付去来書簡に「発句の事被仰下候以後、一句も外へもらし不申候」ともあり、恐らく事実であったろう。最初は『有磯海』にも入っていなかったのを、芭蕉歿後去来の判断で入れられたことが分るのも貴重である。こうして見ると、「はれ物にさはる柳の」は誤伝と考えざるを得ない。許六が「自筆の短尺」を証拠に「さはる柳」を正しいと主張しているのは注意すべく、好意的にとれば初案を彼の許に送ったとも考えられないではないが（後案ならば「汝にわたし置」とまで言われた去来が知らない筈はない）、強情な許六のことだから、その証とする「短尺」が果して存在したかどうか疑わしい。

　文献面の考察は以上で終るとして、次は内容・表現の解釈である。『去来抄』同門評には、さきに引いた一節の中間に、門人達の左のような問答が記されている。

　支考曰、さはる柳也。いかで改め侍るや。去来曰、さはる柳とはいかに。考曰、柳のしなへは腫物にさはる如し

と比諭（ママ）也。来曰、しからず。柳の直にさはりたる也。さはる柳といへば両様に聞え侍る故、重て予が誤をたゞす。考曰、吾子の説は行過たり。たゞ、さはる柳と聞べし。丈艸曰、詞のつゞきはしらず、趣向は考がいへる如くならん。来曰、流石の両士爰を聞給はざる、口をし。比諭にしては誰〻も謂はん。直にさはるとは、いかでか及ばん。格位も又各別也ト論ず。

「さはる柳」の句形を支持する支考は、全体の内容を「柳のしなへは腫物にさはる如し」と譬喩に解し、「柳のさはる」の句形を支持する去来は、譬喩ではなくて実際に、柳が直かに腫物に触ったことを句にしたのだとし、「さはる柳」では、譬喩にも実際にも両様に取れるから良くないという。丈草は、詞続きはどうか知らないが、句の趣向は支考のいう通りだろうといって、去来に反対した。去来は、譬喩の趣向ならば誰にでも言える。直かに触るということを案ずるのが先師の及び難いところだと、支考・丈草両人の無理解を口惜しがっているのである。

古注でも、しなやかな柳の枝のさまの譬喩と見る説が多く、

此句は柳の嫋（タワ）やかなる体、人間の身に譬ていはゞ、腫物などにいとやはらかにさはる心持也。是等のやさしき体を云たる句也。（正月堂『師走嚢』）

柳の物にさはる、腫物をいらふがごとしと、その和らかなるを称したる也。腫物を質俗にいひなせる俳諧見つべし。（杜哉『蒙引』）

等とあるのが代表的である。柳の譬喩と見ながらも、

……柳のさはるしなへ哉とつゞければ、何やらん腫物に柳のさはるやう也。左にはあらねども、句段、さはる柳のといゝたるよりいゝ下し過たるやう也。さはると句を切てよめば分別也。柳のさはるしなへかなと有時は、柳のさはるやうなるしなへ哉と聞心也。（東海呑吐『句解』）

と、「さはる柳の」と「柳のさはる」とで句意がちがって来る点に着目した説も、注目に値しよう。「柳のさはる」と

いえば、腫物に柳の枝が触ることと受取れるのは、去来もそう解したように事実なのである。

……唯垂柳の窈窕(タワヤカ)なる姿を称美の趣意也。誠に万事は腫物を厭が如く、荒〻しからず柔和に柳の如く直こそ善との義なるべし。（信天翁『笈の底』）

などと、世渡りの心得についての寓意があるように見る説は問題にならない。

明治以降も依然として譬喩説が多いけれども、『続芭蕉俳句研究』では、「さはる柳の」の句形を採りながら、諸家が去来の見方に賛同し、露伴も、

腫ものに柳がさはつたので、柳の柔かさを譬喩であらはしたのでは無い。しかし句は「さはる柳」でよい。

と言っているのが注意される。これと正反対なのが加藤楸邨氏で、句形は「柳のさはる」を採りながら、

「『腫物にさわる』ということをもののたとえにもいうが、いま垂れた青柳がまさに腫物にでもさわるかのように、おずおずとしなやかに風に靡いていることだ」の意。（『芭蕉全句』）

と解し、

青柳の枝のたおやかな感触を言いとったものである。「腫物にさわる」という俚言を、実感に支えられた譬喩として句中に生かすところに、「軽み」の工夫の存した作であろう。……「腫物にさはる」とある方がことばの続き方としては自然であるが、「腫物に柳のさはる」という、許六のいわゆる「首切(くびきれ)」の表現の方が、柳に対する発見のおどろきといったものは鮮明にあらわれてくるのではないかとおもう。……

「腫物にさはるやう」という俚語……は『毛吹草』には見えず、文献では『春色辰巳園』四編（一八三五年刊）あたりが初出か。この語の裁入(たちい)れとして見れば、「柳のさはる」の方が味わい深い。（同右）

と付説しておられる。「腫物にさわるよう」という諺が十八世紀末より古くは溯れないことは事実のようである。山本健吉氏は、譬喩としても実際としても格別の面白味はなく、「さはる柳の」として譬喩とした方が表現としては自

然だが、門人達が論じ立てた割にはつまらない句と見ておられ（『芭蕉全発句』）、最近の井本農一博士の注も、「さはる柳の」を本位句として「柳のさはる」を初案とし、

春の柳の形容に、腫物のような卑俗な、しかし現実感のあるものを持ち出したところに俳諧性があり、軽みがあるが、必ずしも成功した作品とはいえないであろう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と見ておられる。

この句は去来が『有磯海』に誤った句形を出しさえしなければ、それ程問題にならなかったのではあるまいか。支考・丈草・許六らは、譬喩と見られやすい「さはる柳の」を最初に目にした為に、その方が先入主になってしまったのだと思う。両句形に推敲関係があるかどうかも、前述したように、許六のいう真蹟短冊に胡乱な点が感ぜられるので、確言は難しい。こう見て来ると、去来宛芭蕉書簡の作者自身の記した句形と、去来のいう所を信ぜざるを得ないのは当然であろう。「柳のさはる」であらわされた、腫物に柳の細枝のさはる一種病的な感覚は、案じた当座の作者には、かなりの出来と感ぜられたので、「大切の柳」として漏れないように他言を禁じたりもしたのである。ただ、芭蕉の生前には『有磯海』の入集予定句からも除かれていたところから見ると、時が経つにつれて作者自身この句に対する高い評価が揺いだのではないか。確かに何れの解をとるにせよ、この句がそれ程高く評価出来ないことは事実である。前の「一とせに」（828）と同様の経過を辿って捨てられた句なのであろう。

## 830　梅が香に昔の一字あはれ也　（笈日記）

後の旅・泊船集

春季（梅が香）。

**語釈**　**○梅が香**　「梅が香」。既出（Ⅳ663）。**○昔の一字あはれ也**　［考］に引く古歌を背景に、その中の「昔」という言葉が、しみじ

みとあわれに思われる、といった。追悼句なので、「昔」には亡き人の在世当時を偲ぶ意がある。「壬戌左才の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘て嵐戎と名付」（芭蕉「悼松倉嵐蘭」）「Ichiji.」（『日葡辞書』）。

**大意** 梅花の匂いが漂うにつけ、亡き人が偲ばれて、古歌の「昔」という一字が、しみじみとあわれに思われます。

**考** 『笈日記』大垣部に、

文通

何某新八去年の春みまかりけるを、ちゝ梅丸子もとへ申つかはし侍る

梅が香に昔の一字あはれ也　　武陵芭蕉

一歳の夢のごとくにして、猶俤立さらぬ歎のほどおもひやる斗に候。

二月十三日

梅丸老人

と、書簡中の句として紹介されている。大垣の如行の撰した芭蕉百ヶ日追善集『後の旅』にも、「何某新八身まかりける一周忌に、ちゝ梅丸がもとへ文通なり。これを見るに、猶夢のごとくにして哀也」として同じ書簡を収めているが、これには日付と宛名を欠く。恐らく二月十三日が一周忌だったのであろう。この書簡の年代について今栄蔵氏は、『笈日記』に於ける「去年」の語が凡て元禄七年を指すところから、「去年の春」は梅丸宛に書簡を出した時のことと見、新八の逝去はその一年前と推定しておられ（『校本芭蕉全集』書翰篇等）、従うべき説と思われるので、ここに配しておく。梅丸（ばいがん）は水谷氏、通称十太夫、屋号を楠屋といった商家であるという。俳諧はもと木因門、後に蕉門に帰した。元禄十五年歿、享年未詳。

句意は、

梅が香はありし世にかはらぬとも、人は昔となり、今花の香に入俤をうかべおもひ出し給ふならんと也。（東海呑吐『句解』）

といったことであるが、梅丸の気持もさることながら、中心は故人を追悼する芭蕉の情でなければなるまい。「昔の一字」といったのは、古歌を背景にした表現であるが、その出典としては、「ひとはいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける」（『古今集』巻一、貫之）「きみこひてよをふるやどのむめのはなむかしのかにぞなほにほひける」（『土佐日記』）「むめがかにむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる」（『新古今集』巻一、家隆）等の歌が従来引かれており、これらが作者の脳裏にあって「昔の一字」の表現が生まれたことは確かであろう。業平の「月やあらぬ春や昔のはるならぬわが身ひとつはもとの身にして」（『古今集』巻十五）も考えてよい。型通りではあるが、衷情を酌むべき句といえる。

831 むめがゝにのつと日の出る山路かな （炭俵）

真蹟短冊・笈日記・梅桜・泊船集・篇突・今日の昔・旅寝論・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・芋頭・蕉門録

春季（むめがゝ）。

**語釈** ○**むめがゝに**　「梅が香に」。梅花の香りの漂う中で。「むめ」は、発音に忠実な表記法である。既出（I 224等）。○**のつと日の出る山路**　山路の彼方に突然太陽が顔を出すさまをいった。「のつと」は、突然にあらわれる情況をあらわす俗語の副詞であるが、「ぬつと」が不気味な気分を伴なうのに対して、ここでは規模の大きいものの悠揚とした感じがある。「出る」は口語。「山路」は既出（I 110、236）。「義理の時常のしまつをのつと出す」（『俳諧すがたなぞ』）「有明高う明はつるそら　馬莧　柴舟の花の中よりつつと出て　沾圃」（『続猿蓑』上）「De, zzuru, eta.」（『日葡辞書』）。

**大意** 梅の花の香りが漂う中、山路を辿っていると、突然行く手に太陽がのうっと顔を出したことよ。

**考**　この句は野坡との両吟歌仙の発句として『炭俵』（元禄七年六月刊）に見えるのが最も早い。野坡は貞享以来の蕉門ながら、俳諧活動に中断の時期があり、芭蕉の最晩年に再びその身辺に現われる。風律の『小ばなし』によると、野坡は元禄五年の冬に芭蕉が素龍と初めて会った席を取持っているが、元禄七年と推定される森川許六宛の芭蕉書簡には、

野坡が三つ物は、去秋愚風に移り、いまだうゐ〳〵敷て、さぐり足にかゝり侍れども、年来の功少増り、器量邪風に立越候故、見所多く候。

とあるので、本格的に俳諧に復帰したのは六年秋からとすべきであろう。軽みの風を最初に世に問うた『炭俵』の巻頭に掲げられた歌仙の発句でもあり、成立は七年の早春と推定される。

この句の内容は、

北にむかへるかたは雪も解ず、余寒身を通す山路を分登れば、春の気色もなからんに、峰にさしかゝれば、おもひがけなく朝日かゞやき、あたりもことに長閑に、梅花もあやなく薫り、格別に長閑なる気色いふ斗なし。のつと日の出るは、初めて朝日に相対る所也。（東海呑吐『句解』）

と解してよい。支考の『笈日記』雲水部の記事によると、最後の旅の途次芭蕉が京の去来宅に滞在していた時、支考も同座しての話題に、この句が上り、支考が「梅が香の朝日は余寒なるべし。……是を一躰の趣意と註し候半」と言うと、芭蕉も「いとよし」と答えたという。この句は春浅い頃の余寒の気分を背景として鑑賞すべきものなのである。それと今一つ、ここに描かれたような山路の早春の景は、江戸の街に居ては体験し難いものであろう。芭蕉はこれまでの旅の体験に基づいて、想化によって句をまとめたもので、詠作時の境涯をそのまま句にしたものではあるまい。句中に想定される人物は、作者と限定されない「旅人」である。信天翁の『笈の底』に「梅之香（ガカ）の山路は歌也。依て乃都止（のつと）と云俗語を以て俳諧を定む。実に滑稽と云べし」とあるように、この句の俳意は「のつと」という俗語の巧妙

な用い方にかかっていることも確かである。更に「むめがゝに」は、梅花の匂いを感覚を通してじっと受けとめている微妙な措辞であるが、同時に、梅が香に誘われて朝日が昇るような印象を伴なう表現であって、「旭の梅がゝに誘れ出しごとく作たる所曲折也」（曲斎『七部婆心録』）「梅が香に招かれて日の出づるが如くなる、正に是れ俳諧の極真極高のところ、一歩を過れば甚だ俗甚だ陋なるに堕つ」（露伴『評釈炭俵』）等の見方が至当であろう。ここにも俳意の現われがあるといえる。

早春の山路の夜明け、梅が香が馥郁とあたりに漂う中を、太陽が突兀と顔を出す。梅が香の山路だけでは和歌の世界であるが、「のつと日の出る」で俳諧になった。この俗な表現は、清爽な全体の気分を破ることなく、しかも俳諧らしい新味に満ちており、嘗て志田義秀博士が「芭蕉の軽みの代表的な作の一と云ひ得るものである。淡泊な境地軽快な風調の作で而も滋味を感ぜしめるものがある」（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』）と言われたように、「軽み」の傑作と称してよい。

この句の「のつと」の巧みな使いざまを真似て、一類の俗語の副詞を用いることが蕉門の間に流行した。去来の『旅寝論』に、その事に触れた左のような記事が見える。

……其角一日語テ曰、今同門の輩、先師の変風をしたふものを見れば、

　梅が香にのつと日の出る山路哉　　先師

と吟じ給へば、或はすつと、きつとゝなどいへり。師ののつとは誠ののつとにて、一句の主也。門人のきつと、すつとは、きつともすつ共せず。尤見ぐるしゝ。晋子是を学ぶ事なし。

其角の激しい怒りに対して、去来は「初学のものは、句を似せ言によるも又よし」と融和的態度であるが、言葉だけ表面的に真似ても無意味なことは言うまでもない。こういう亜流の句が多く出来たことは、一面この句の「のつと」の「一句の主」としての働きと、その影響力の大きさを示すものであろう。この語の表現効果に関する諸注の説を挙

げておく。

のつと出るとは頗る山路の日の出に適した形容でのつと丶言つた為めに全面が引立つて景色が目に浮ぶやうに思はれる。思ひ切つた言葉を使つたものである。（内藤鳴雪『評釈』）

二月頃の山路の景色がよく出てゐる。凡て梅に限らず、花は咲き初めに朝日に匂ふものである。野ばらなど殊にさうである。梅の咲いてゐる処へぬつと日が露はれて梅が香の一段と発する趣も思ひやられる。（『芭蕉俳句研究』幸田露伴）

自分の語感では「のつと」といふ言葉には突然の感じと柔かなとぼけた感じとが結合してゐる。今の言葉に訳すれば沼波さんの「ひよこつと」などがいいと思ふ。（同右、阿部次郎）

なかんずく「のつと」という口語には、一種の量感のある動きが生きている。早春の朝日の、無表情でしかも思いがけない出現を言いとめ、かつそのことにゆらめく心情をいきいきと伝えている。対象の中に滲透してそれを把握するという芭蕉の特質が、「軽み」の実践としてあらわれている姿をここに見ることができよう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

「のつと」の語感についての私の受取り方は、楸邨氏の「一種の量感のある動き」というのに近く、前記のように、規模の大きいものの悠揚とした感じを中心にして鑑賞したい。阿部氏のいうような「ひよこつと」では、大きさが感ぜられないと思う。

*832*　あすの日をいかゞ暮さん花の山　（可都里書留）

春季（花）。

**語釈** ○**あすの日をいかゞ暮さん** 「明日の日を如何暮らさん」。花見の済んだ後の明日という日を、どのように過そうか、の意。「いかゞすべきや。……此馬のとゞまる所にて馬を返し玉へ」(『おくのほそ道』)「Icaga arôzuru.」(『日葡辞書』)。○**花の山** 桜の花が盛りの山。江戸ならば上野の山などが考えられる。「はなのやまどことらまへて哥よまむ　晨風」(『あら野』巻二)。

**大意** 花の山で賑やかに一日を過した。歓を尽した後では、明日という日をどのように過そうか。

**考** 化政期の甲州俳人可都里の書留に見える元禄七年三月七日付の曾良宛依水書簡(昭和五十六年十月俳文学会全国大会で森川昭氏紹介)に載る句である。即ち、

一、二日に翁同伴に而四五人桜見に登り、山静にして大古のごとし、日長して少年に似たりとは、誠に画中に入る如し。例之瓢箪の底をたゝき、肴はたんぽゝに而、毛氈之上の腹鞁も狸まけぬ酔心、翁の野々宮・熊坂も出る程之大繁昌に而、少々は紅裏も見へ、甚作意とも近来之義と申、翁も御噂折々被申候。……此日、翁帰りに、前書長き事にて忘レ候。

あすの日をいかゞ暮さん花の山

其外一句づゝ御座候得共、いつもかはらぬ言捨にて、書送るにいとまもあらじ。委細は掛御目緩々御語可申謝候。

とあり、古俳書には全く見えない逸句であるが、依水は元禄元年の深川八貧句文(Ⅱ438)に見える人で、書簡の内容に疑うべき点はない。元禄七年の三月二日、依水ら数人を伴なって上野の花見を楽しんだ時の作と認められる。

句の内容は、花見の歓を尽した後の寂しさ、遊びの後の放心したような気持を、「あすの日をいかゞ暮さん」と言ったものと受取れる。依水書簡によれば長文の前書があったというが、その文章は伝存を聞かず、句も言い捨てに過ぎない。

833

## 八九間空で雨降柳かな　（真蹟草稿）

八九間空は雨降柳かな　（矢矧堤）

八九間空に雨降柳哉　（陸奥鵆）

春季（柳）。

**語釈**　○**八九間**　「ハツクケン」。一間は曲尺（かね）の六尺、約一・八二メートルの長さ。「柳ちるかと例の莚道　野水　軒ながく月こそさはれ五十間　同」（『あら野』員外）「Icqen.」（『日葡辞書』）。○**空で雨降柳**　「空（そら）で雨降（あめふ）る柳（やなぎ）」。「空」は、虚空・空間の意。緑したたるばかりの枝垂柳のあたり、八九間もの空中で雨が降っているというのである。「空で」は、口語的な砕けた言い方。「冬ながらそらより花のちりくるはくものあなたははるにやあるらん」（『古今集』巻六、清原深養父）「Sora.」（『日葡辞書』）。

**大意**　降るとも見えず春雨が煙っている。あの枝垂柳の緑のひろがる八九間ほどの空中に雨脚が見えて、地を濡らす程ではないことだ。

**考**　『続猿蓑』の巻頭には、この句を発句とした沾圃・馬莧・里圃らとの歌仙一巻が収められており、その草稿が本位句の底本としたものである。李東の編んだ『八九間雨柳』（文化八年刊）に真蹟が摸刻されている。この句の成立については、支考の『梟日記』元禄十一年七月十二日の条に見える記事を是非参照しなければならない。即ち、

素行曰、八九間空で雨降柳哉といふ句は、そのよそほひはしりぬ。落所たしかならず。西華坊曰、この句に物語あり。去来曰、我も有。坊曰、吾まづあり。木曾塚の旧草にありて、ある人此句をとふ。曰、見難し。この柳は白壁の土蔵の間か、檜皮ぶきのそりより片枝うたれてさし出たるが八九間もそらにひろごりて、春雨の降ふらぬけしきならんと申たれば、翁は障子のあなたよりこなたを見おこして、さりや。大仏のあたりにてかゝる柳を見

木枯・続猿蓑・浪化日記・泊船集・梟日記・刪毛序・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・花はさくら・八九間雨柳

をきたると申されしが、続猿蓑に、春の烏の畠ほる声といふ脇にて、春雨の降ふらぬけしきとは、ましてさだめたる也。去来曰、我はその炑の事なるべし。我別墅におはして、此春柳の句みつあり。いづれかましたらんとありしを、八九間の柳、さる風情はいづこにか見侍しかと申たれば、そよ、大仏のあたりならずや。げにと申、翁もそこなりとてわらひ給へり。

この記事にあるように、支考（西華坊）が木曾塚の草庵に芭蕉と共に居た時としては、元禄七年六、七月の頃の外に元禄四年の秋も考えられるが、壺中・芦角共撰の『木枯』（元禄八年刊）には、

過ぎし春の吟なりと伝ふ。

八九間空で雨ふる柳哉　翁

おなじ夏はしばらく京におはしけるよしも、……

とあって、以下に元禄七年の事を記しており、「過ぎし春」は七年春、『梟日記』に書かれている事も同年夏秋の交の事と推定されよう。去来がその秋に芭蕉が落柿舎に来たようにいっていることについては確証がないけれども、盆会の為に伊賀へ帰る前、木曾塚の無名庵から嵯峨へ往復する機会はあった筈で、去来の記憶ちがいとは思われない。従ってこの句が、京の大仏のあたりの景色の印象を素材として、元禄七年春に成り、歌仙の発句ともなったことは確実であろう。後年の『花はさくら』（秋屋撰、寛政十三年刊）には「春興」と題して、

春の雨いと静に降てやがて晴たる頃、近きあたりなる柳見に行けるに、春光きよらかなる中にも、したゞりいまだおやみなければ

という文が前にあるが、年代の降るものだけに、芭蕉の真作としては疑問のあるものと言わざるを得ない。また、去来の説の中に見える芭蕉の語に「此春柳の句みつあり」とあるのは、当面の句と「腫物に柳のさはるしなへ哉」（V 829）「傘に押わけみたる柳かな」（V 834）等の句を指しているとも思われる。「空は雨降」（『矢矧堤』）「空に雨降」（『陸奥鵆』）

とした異伝は誤りとおぼしく、真蹟草稿や『続猿蓑』の句形が信頼し得るものである。

八九間は木高きをいへり。……雨の降るにはあらず。柳のしだれたるが、さながら雨のふるごとく也とかや。（東海呑吐『句解』）

此吟は柳枝を雨と見たる眼前体也。誠に大樹の垂柳の嬌かに打聳へたる風情、和漢共に柳条を春雨に興ふ詩歌多し。（信天翁『笈の底』）

といった解が江戸時代の注には多いけれども、「八九間」を柳樹の高さと取るのは良くない。露伴が「八九間も空に聳えて、と解しては柳の本性に反き、欅、杉、檜などの如く、心得がたくなる也」（『評釈続猿蓑』）と指摘する通りである。また、「（柳の）八九間もそらにひろごりて、春雨の降ふらぬけしきならん」（『梟日記』）という支考の鑑賞を芭蕉が肯定したのを以て見れば、雨後の景色ではなく、雨中の景であることも自明であろう（雨後の景とするのは、前に掲げた『花はさくら』の「春興」の文の影響もあるらしいが、これが信じ難いものであることは既述の通り）。従って解釈は、

たゞ是れ柳のいと美しく春に青みあひて、やはらかに空を蔭ひたるに、降る雨も有るが如く無きが如く打煙りて静なるを、かくは云へるなり。……柳の煙るか雨の煙るか、眼には定かに及ばねど、降り居れるなるを、空に雨降るとはおもしろく調べ奏でたるなり。（『評釈続猿蓑』）

という露伴の説が確論と見られる。古注には、陶淵明の詩の一節に「方宅十余畝、草屋八九間、楡柳蔭二後簷一、桃李羅二堂前一」（方宅十余畝、草屋八九間、楡柳後簷（ゆりうこうえん）を蔭（おほ）ひ、桃李堂前に羅（つら）なる。「帰園田居」其一）とあるのに拠ったとする説もあるが、陶詩の「八九間」は室数をいったもので、芭蕉の俗語としての用い方とは全く異なる。単なる言葉としても、芭蕉の頭にあったかどうか疑わしいと言わざるを得ない。

山本健吉氏は『梟日記』の記事を肯定して、次のように見ておられる。

……「八九間」はもちろん高さでなく、ひろがりであり、八九間ほどの空間に雨脚がきらきらと見えるということである。……地を濡らすほどの雨ではない。ただ青々とした柳の葉をバックとして、雨を見とめることができるほどの、銀糸のような細雨である。……もちろん春の柳であるから、こんもり茂った柳ではない。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

右に述べられた句の内容をなす情景の把握は、露伴の説と共に的確と称してよかろう。更に山本氏は全体の評として、八九間の空間を限って雨を認め、その異変に柳の巨木の立姿の真実を捕えたと言うべきか。一本の柳の木がつくり出す、ある一定の空間の他とは劃然と区別されるところの美である。さらに、「八九間」と言い「空で」と言ったところ、ここに芭蕉の当時の「軽み」への志向を読み取ることができるのである。ややともすれば些末なものに傾きがちな「軽み」の句としては、これは句柄が大きいのである。（同右）

と見ておられる。「春雨の柳」は抑々和歌連歌の世界のものであるが、その巨木の立つ虚空に春雨の在処を見留めたのは新境地であり、それに「八九間」「空で」と俗語によって表現の味付けをして興じた趣を出したところは、正に「軽み」の唯中というべきであろう。京での過去の印象をもとに、江戸で句を作るようなことは、芭蕉にあっては異とするに当らないことで、其処にも眼前の「写生」に執する近代以降とは異なる態度を看取することが出来る。

834　傘に押わけみたる柳かな　（炭俵）

矢矧堤・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集・続新百韻

春季（柳）。

**語釈**　○**傘に押わけみたる**　「傘に押し分け見たる」。「傘」は、油紙を骨に張って轆轤で開閉するように作った傘。唐風の傘の意で「からかさ」という。「に」は手段をあらわす助詞。傘でもって押し分けて見るのである。「傘をたゝまで蛍みる夜哉　舟泉」（『は

るの日』）「只一人落行勢ノ中ヲ押分押分、峰ノ堂ヘゾ上リケル」（『太平記』巻八）「Caracasa.」「Voxivaqe, uru, eta.」（『日葡辞書』）。

**大意**　芽吹きそめた青柳の糸が如何にも美しい。雨上りにふと興じて、すぼめた傘で試みに柳の枝を押し分けてみることだ。

**考**　『炭俵』初出の句で、『幽蘭集』や成美の『俳諧録』には、芭蕉と濁子・涼葉・野坡・利牛・宗波・曾良・岱水らの連衆による、この句を発句とした歌仙一巻が見える。野坡と利牛が加わっているから、元禄七年春の作であろう。「元禄六年酉春」という『幽蘭集』の年記は信じ難い。

句の内容は、

雨の日、柳の風なく只しだれたるを、愁に押分て見ると也。外の花木に傘にて押分見べき梢はなし。嫣なる体、傘に云わけたる、尤めづらしき趣なり。（東海呑吐『句解』）

というに尽きる。

これも柳のゆら〳〵としてゐる様を叙したので、……春雨の中に柳のたれてゐるのが如何にも美しいので、傘をさした儘柳の中へ押わけて這入つて見たといふので、如何にもよく柳の風情が現はれてゐる、他より見たら画にも書ける景ぢや。此句も巧を弄した所はあるが、かく迄実地に適切なる事を言ふと巧み乍らも感興が主となり、随つて厭みを免れることが出来る。（内藤鳴雪『評釈』）

柳の枝がバサ〳〵と傘に擦れる音、露の玉がバラ〳〵と傘の上に落つる音まで聴覚に浮ぶやうな面白い句で、かういふ経験は、我々にないことはない。多少興じたやうな点もないではないが、その幼な心を真正面から素直に叙べて居るので、毫も厭味に聞えない。（半田良平氏『新釈』）

等の説は、蓋し名鑑賞であろう。興じた自分の行為を述べながら、おのずから柳の糸に滴り落ちる雨雫が胸に浮んで来る。「軽み」というのは斯うした境地を指すといえば、誰しも自得するところがあると思う。雨中の趣と見る説が

多く、露伴は傘をひろげていなければ面白味がないというけれども、私は山本健吉氏の『全発句』のように雨上りの時と見たい。一寸した心の動きをとらえて成功した句である。

うへの丶花見にまかり侍しに、人〳〵幕打さはぎ、もの丶音小うたの聲さま〴〵なりにける、かたはらの松かげをたのみて

*835* 四つごき（ママ）のそろはぬ花見心哉　（炭俵）

陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集・犬椿集

春季（花見）。

語釈　**○うへの丶花見にまかり侍しに**　「上野の花見に罷り侍りしに」。「うへの」は、今の東京都台東区の花の名所。（Ⅰ*105*）参照。其処の花見に参りましたところ、の意。「まかり」は、行くことで、改まった言い方である。「雪見にまかる」（Ⅱ*329*）参照。**○人〳〵幕打さはぎ**　「人〳〵幕打ち騒ぎ」。花見に集まった人々が幕を張り廻して、中で騒いでおり。幕を張り廻すことを「幕を打つ」といい、戦場での本陣などの場合にも用いる。「さはぎ」は「さわぎ」と書くのが正しい。「いつちよく咲た所へ幕を打」（『柳多留』初編）「Macuuo vtçu.」（『日葡辞書』）。**○もの丶音**　「物の音」。楽器の音をいう。ここは三味線などであろう。「かやうのをりは御あそびなどせさせ給ひしに、心ことなるもののねをかきならし」（『源氏物語』桐壺）。**○小うたの声**　「小歌の声」。「小うた」は、三味線を伴奏にした俗謡小曲。「小六ついたる竹の杖。ふしぐ〵多き小歌にすがり」（『貝おほひ』序）「Covta.」（『日葡辞書』）。**○さまぐ〵なりにける**　「なりにける」については、従来明解がない。「に」を省いている書もあり、「さまぐ〵なりける」という形容動詞に助動詞を続けた形ならば普通の文で、「に」は余計に見える。しかし「に」を省くのも根拠に乏しく、「に」を加えて解するとすれば、「鳴りにける」の意であろう。そう解した場合、「ける」で句点を打つことも考えられるが、ここでは一応下へ続けて、「さういふ賑やかな傍らの」としておく。「もとより鼓は波の音、……とゞろく〵と鳴る時は」（謡曲「藤栄」）「Cane, cai nadoga naru.」（『日葡辞書』）。**○かたはらの松かげをたのみて**　「傍らの松蔭を頼みて」。人々が賑やかにしている近くの松の木蔭を自分の居場所として、の意。「たのむ」は既出（Ⅲ*603*）。「いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有」（「幻住庵記」）「松嶋の松陰に

ふたり春死む　素堂」（『をのが光』）「Michino cataura.」「Matçucague.」（『日葡辞書』）。**○四つごきのそろはぬ**　「四つ五器(ごき)の揃(そろ)はぬ」。「四つごき」は大小四個の鉢が入れ子になった食器で、行脚僧などが持ち歩く。「五器」は既出（Ⅲ*579*前書、Ⅳ*737*）。色々な椀が揃っていないのである。「御器といふ語は食器の汎称として用ひられたと云ふことを幸田さんから教へられた。仏家のうち禅僧は一組になつた食器を持つてあるいた。嘗て名古屋の護国院を訪うた時、この食器を見せて貰つたが、あの托鉢僧の鉢の外に汁椀のやうなものや小皿のやうなもの凡て大小五つあつて、それが入れ子になつて、別の大鉢のなかに入れられるやうになつてゐる。附属品として箸、匙子、サバ取り、水板と下敷にする添紙とがある。『句選年考』に「今世俗五器と書く。仏家に用ふるところの器五つあればなるべし」とある。……それがまた四つで間に合はすやうになつたので、「四つ五器」とも云ふのだが、……僧ならぬ俳諧人は此の略式の四つの方を携へたものと見える」（『続芭蕉俳句研究』沼波瓊音）「四つ五器(ごき)重(かさね)ての御意」（『本朝桜陰比事』巻五目録）。**○花見心**　「ハナミゴヽロ」。花を見る気分。

**大意**　四つ揃いの五器さえも満足に揃っていない自分の花見気分は、さんざめく人々の気分とは随分ちがうことだ。

**考**　「東叡山」（『陸奥鵆』）「うへのゝ花　詞がきはすみだはらにあり」（『泊船集』）等の前書がある。『炭俵』初出の句なので、元禄七年春の作であろう。元禄五年には「花もいたづらに散果、公辺之花、名利の客のみさはぎのゝしりて心得ず候故、しか〴〵花にも出不申候」（三月廿三日付意専宛）と書簡に書き、翌六年の甥桃印を失った嘆きを記した書簡には「精情草臥、花の盛春の行衛も夢のやうにて暮」（卯月廿九日付荊口宛）と見えている。七年の花見については、三月七日付曾良宛依水書簡の記事（Ⅴ*832*）があり、三月二日に上野の花見に行ったことは確かである。文面では、芭蕉一行の席も結構賑やかだったようで、芭蕉も「野宮」「熊坂」を謡う程の御機嫌とあり、『炭俵』の句文の持つ気分とは聊かちがった感じもあるが、花の間そう度々上野に出掛けることもなかったろうから、「四つごきの」の句も三月二日の花見を機縁に成った句と見てよいと思う。但し、当日に「あすの日を」の句があったとすれば、『炭俵』所載の句は後日に成ったのかも知れない。

　前書には主として周囲の花見の賑わいを叙し、句で自らの花見の趣を述べている。実際四五人連れの花見だったら

しいが、句の内容は孤独な心境の色合が濃い。

喧騒の中にあって貧しい行厨を開き、一人花を見るひとりごころを詠んだもの。さびしい気持だが、芭蕉はそのひとりごころの中にしっかり栖みつき、深みのある寂寥感をとらえている。(『芭蕉全句』)

という楸邨氏の見方は的確である。「四つごきのそろはぬ」は単なる譬喩ではなく、実境がそのまま心境の反映ともなっているものと見たい。それに入れて携えた食事も質素なものであったろうし、桜の下ならぬ「松かげ」を頼む侘しさも、この頃の作者には相応しいことであった。「此こゝろ推せよ花に五器一具」(Ⅳ737)の句も思われる。

## 836　花見にとさす船おそし柳原　(蕉翁句集)

春季(花見)。

**語釈** ○**花見にと**　ここは「花見」という一語ではなく、「花を見にと」の略であろう。その方が「さす船」へのかかり方もなだらかであり、西行歌の「花見にとむれつゝ人のくるのみぞあたらさくらのとがには有ける」(『山家集』)も連想される。○**さす船おそし**　「さす」は、棹を水に突き立てて船を漕ぐこと。「おそし」は、急ぐこともなく長閑な体である。「川風に一むら柳春見えて　宗長　舟さす音もしるきあけがた　宗祇」(「水無瀬三吟」)「遅き日のつもりて遠きむかしかな」(『蕪村句集』)「Funeni sauouo sasu.」「Vosoi」(『日葡辞書』)。○**柳原**　「ヤナギハラ」。筋違橋(万世橋)から浅草橋まで十町余の神田川南岸の土手のあたりをいう俗称地名。柳の木が多かったという。明治四年に土手が取り崩されて片側町になった。

**大意**　此処から見える柳原の土手は、緑したたるばかりの佳い眺め。花を見に出掛ける人を乗せた船も、のんびりと漕いでいます。

**考**　土芳の『蕉翁全伝』に、この句を「ものゝふの大根にがき咄哉」(Ⅳ811)の句と並べて引き、「此二句ハ玄虎武江

ノ旅舘ニ会ノ時也。……花ハ戌の春ト也。……花六句ニテ終ル」と見える（竹人の伝も同じ）。「戌」は元禄七年甲戌の歳を指し、藤堂玄虎の江戸に於ける旅舎でこれを発句に表六句があったことは、伊賀の所伝として信じ得るであろう。丁度この句に詠まれた柳原土手の北側、和泉橋筋の向柳原に藤堂藩上屋敷があり、玄虎の宿所も其処だったと思われる。なお、『芭蕉句選拾遺』頭注に「元七戌春玄虎子武江ノ旅舎に会の時也。歌仙六句にて終る」とあるのも参考になる。但し、この日の表六句は今伝わらない。

『一葉集』の前書に「玄虎子の深川の旅舎を訪」とあることから、以前は「柳原」との関係を解するのに苦しんで諸説があったが、藤堂藩上屋敷からの神田川の眺めとすれば、問題は解消する。また、「さす船おそし」を、花を早く見たいもどかしさとか、玄虎に早く会いたい寓意などを云々するのは、挨拶性を取り違えているのではあるまいか。上屋敷（玄虎亭）からの眺めを賞することが、そのまま挨拶の意に叶うのであって、「おそし」もじれったがっているのではなく、のんびりと漕いで行く形容と見るべきである。花見時の一般的情趣が表現されているだけであるが、「船足も休む時あり浜の桃」（Ⅰ237）に似た駘蕩たる季節感が好ましい。

837　春雨や蓬をのばす艸の道　（艸の道）

蕉翁句集

春季（春雨）。

**語釈**　○**春雨**　既出（Ⅱ370）。「はるのあめ」（Ⅱ274）参照。○**蓬をのばす艸の道**　「蓬を伸ばす艸の道」。「蓬」はキク科の多年草。早春に新苗が芽ぶいて香気があり、草餅の材料として摘まれるので、餅草とも呼ばれる。葉裏の白い綿毛を集めて艾を造る。連歌以来この草は雑の扱いで、俳諧で「蓬餅」などとしてはじめて春季とされる。「艸」は「草」に同じ。ここは「蓬のびたる艸の道」といっても同じであるが、「のばす」は春雨が伸ばすのであり、色々な草の中で蓬が目立つのを、このように表現したのである。

「蓬さしもぐさ、させもともいふ。皆同草也。もぐさもおなじ物ながら、ほしたる蓬をもみて灸に用時の句躰ならば、植物になるべからず。……蓬餅……春也。三月三日に世にもてはやす故也。蓬団子、雑也」（『御傘』）「よもぎ根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり」（「幻住庵記」）「野は枯てのばす物なし鶴の首　支考」（『続猿蓑』下）「Yomogui.」「Nobaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。

大意　春雨が草の道をうるおす。殊に蓬を伸ばして際立たせることだ。

考　『艸の道』（宇鹿・紗柳撰、元禄十三年刊）の野坡序に「往昔深川の雨の日云捨られし一句」とあり、野坡が芭蕉に親炙するようになった元禄六年秋以降、最晩年の七年春に成った句と思われる。『蕉翁句集』に元禄二年とする根拠は明らかでない。

草庵近くの径を散策した折の属目であろう。春も漸く深まる頃の空気のしめり、地上の潤い、遠景のうち霞む趣などが、おのずから感ぜられる佳句である。春雨が蓬を伸ばすように言ったのは技巧であるが、「春雨や」と初五に切字を置いた為に表現にゆとりが出来て、わざとらしさが消え、種々の草の中で特に蓬の伸びが著しいことが自然と了解される。成功した表現といえよう。半田良平氏は『芭蕉俳句新釈』で、こうした景情を詠んだ歌などが昔から多くある中で、この句が抜群に清新の感じを与える理由として、蓬という物を捉え来ったことと、「艸の道」に着眼したことを挙げ、

……田舎に育つた人にはよく分ることだが、一体蓬は他の雑草に比べてかなり早く芽を出すもので、多少黝みを帯んだその葉は、特に注意を惹き易い点もある。つぎに、……『草の道』とあるので、その蓬の生えて居る場所が広々とした野原などでなくて、田の中か畑の中をほそぐ\と通じて居る道だといふ特殊的な点が窺はれる。従つて作者が、雨の降る日に、その道をぽそく\歩いて居るといふやうな光景迄が暗指される。……景情並び備はつた秀句で、芭蕉の心持が豊かに打ち出て居る点に、私は限りなき愛著を覚えるのである。

と精しく鑑賞しておられる。

*838* 青柳の泥にしだるゝ鹽干かな　（炭俵）

陸奥鵆・泊船集・俳諧問答・伊達衣・蕉翁句集・許野消息

青柳の泥にみだるゝ鹽干哉　（矢矧堤）

春季（青柳・塩干）。

**語釈**　**○青柳の泥にしだるゝ**　「青柳(あをやぎ)の泥(どろ)に垂(しだ)るゝ」。芽吹いた柳の枝が潮の引いた後の川底の泥の上に垂れているさま。「柳」は春季である。下二段活用の「しだる」は四段活用から転化したもの。「檉の字をしだり柳共、川柳ともいふ。垂糸柳をしだれやなぎともよめり。しだりとは、下へたるゝの謂なるべし」（『滑稽雑談』）「青柳のしだれや鯉の住所　伊賀一唉」（『猿蓑』巻四）「蘭の花や泥によごるゝ宵の雨　鈍可」（『あら野』巻三）「**Auoyagui, P. i, Yanagui.**」「**Xidare, ruru, eta.**」（『日葡辞書』）。**○塩干**　「シホヒ」。「潮干」と同じで、「塩」は宛字。陰暦の三月三日上巳の節の頃は、春の彼岸の大潮で、海水の干満の差が一年中で最も大きく、浜辺が遠くまで干上る。大勢の人が潮干狩に出掛ける頃である。「けふの塩路」（I *72*）参照。「潮乾(シホヒ)　今日海潮大乾(ニ)。泉州界浦特甚(ニシ)。故諸人競集拾(ニ)蛤蜊(ヲ)執(ニ)小魚(ヲ)。洛人亦赴(レ)之(ク)」（『日次紀事』三月初三日条）「貞徳師云、潮干とばかりは雑也。住吉の潮干は春也。△此説によつて古俳書に、住吉の潮干と記せり。今日の潮干、住吉に限るべからず。諸国の海上も此日には潮干る事侍り。然ども住吉の浦は景色もすぐれて、其上京都近き海浜なれば、京家の貴客或は逸士に至る迄、此地に来りて貝ひろひ藻をかきて遊興となせり。依(レ)之此所潮干を眺望する第一の壮観の地なれば、住吉の潮干名高き物歟。又は武州江戸品川の潮干など、江戸にちかければ又眺望の興おほかめる。……扨けふ殊に潮のかはく事、いかなる故にや。……常に朔後三日は潮勢大なれば、汐勢も又大なり。ことに又三月は時におゐて春也。陽の中たれば、今日潮の干事すぐれたるならし。潮は汐の満るを云、汐はしほのかはくを云。又朝を潮と云、夕を汐と云説も侍る也」（『滑稽雑談』）「帯ほどに川のながるゝ塩干哉　沾徳」（『炭俵』上）「**Xiuofini mairu.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　三月三日の潮干の今日、青く芽吹いた柳の枝が、干上った川底の泥の上に垂れていることよ。

考　『泊船集』には「重三」と前書がある。『炭俵』に収められているから元禄七年春の作と思われ、六年春の可能性もないではない。蘭亮の『船はし』（宝暦・明和頃成）所収「許六野坡筆談」に見える野坡の語「此句拙者同座して承候」が信じ得るものとすれば、七年春に確定する。『矢矧堤』（睡闇撰、元禄八年刊）は他派の集であり、その異形は誤りであろう。

川べりの柳、平生は水多くひぢて有つるに、けふの汐干には、めづらかに泥にたれしと也。此泥にたるゝといふ所、俳諧のをかしみ也。（素丸『説叢大全』）

という見方が解釈として的確である。夙く許六はこの句について、

予つくぐ〳〵と見て、此句景曲第一也。しかれ共新古の事いぶかしくて、数篇吟（ママ）じ返し、大きに驚き、初て此風の血脈を得たり。是正風躰たるべし。（『俳諧問答』自得発明弁）

汐干に青柳のかけ合、これ名人の作也。古しといへば古し。新しきといへば是より新しき物はなし。泥はむすびにして継め也。舟と成共橋と成共こゝろにためて、面白き物を継合する也。（『歴代滑稽伝』）

と論じている。この句の景の傍らに潮干狩の人を考える向きもあるが、私は余り人を点じたくない。要は上巳の節の川添いの景であって、瑞々しい「青柳」と「泥」の対照が、俳諧の眼のつけ所であろう。「軽み」の典型的なあらわれという意味で「正風躰」の句なのである。

*839*　春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　（炭俵）　わせの道

春雨や蝉の巣つたふ屋ねのもり　（泊船集）

春雨や蜂の巣ふたつやねの漏　（蕉翁句集草稿）　蕉翁句集

春季（春雨・蜂の巣）。

**語釈** ○**蜂の巣つたふ**　「蜂の巣伝ふ」。「蜂の巣」は春季。脚長蜂・雀蜂などの冬を生き残った雌が、春になって出て来て一匹で巣を作り、その窩に卵を生みつける。卵がかえって成虫になると協力して窩をふやして大きくして行く。「つたふ」は自動詞。既出（Ⅱ370）。「屋ねの漏」が伝わるのである。「蜂の巣　雷斅曰、蜂房有二四件一、……二名二石蜂窠一、只在二人家屋上一、大小如レ拳、色蒼黒、内有二青色蜂二十一箇一、或只十四箇、其蓋是石垢、其粘処是七姑木汁、其隔是竹蛀也」（『滑稽雑談』）「うで首に蜂の巣かくる二王哉　松芳」（『あら野』巻八）。○**屋ねの漏**　「屋根の漏り」。朽ちた屋根からの雨漏り。「漏」は名詞法である。「よもぎ根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て、狐狸ふしどを得たり」（『幻住庵記』）「**Moriga cacatta.**」（『日葡辞書』）。

**大意** 春雨が降り続くことよ。屋根の雨漏りが軒下の蜂の巣を伝って滴り落ちている。

**考** 『炭俵』初出の句で、恐らくは元禄七年春の作、六年春の可能性もあろう。『泊船集』の「蟬の巣」は明らかな杜撰である。土芳の『蕉翁句集草稿』に中七を「蜂の巣ふたつ」とし、

此句炭表也。（ママ）白船に、（ママ）蜂の巣つたふと有。

と注しているのは、両書の内容と全く異なる。二つとも土芳の手許にあった筈なのに、どうしてこんな記事を書いたのか、不可解な錯誤という外ない。これを承けて『蕉翁句集』も「蜂の巣ふたつ」となっているが、信じ難い句形であって、結局『炭俵』が拠るべきものと考えられる。

『許野消息』所収の野坡書簡には、この句について、

春雨の蜂の巣、是はまことに世の人さほどに沙汰をせぬ句なりといへども、奇妙天然の作なりと、翁つねぐ吟じ申され候。此蜂の巣は去年の巣の草菴の軒に残たるに、春雨のつたひたる静さ面白くいひとりたる、深川の菴の体そのまゝにて、幾度も落涙致候。

と述べている。この句の解としては、人も住まなくなった荒れ果てた庵の趣とする見方が古くからあるけれども、句

の印象からしても人無き庵とは思えない。春雨の降る或る日の芭蕉庵の即景と見るべきであろう。人も訪わぬ春雨の一日、所在なく机による庵主が、ふと軒下の蜂の巣に雨漏りの滴りが伝い落ちているのに眼をとめたのである。「蜂の巣つたふ屋ねの漏」には、細かい写生的な眼が光っているが、それがそのまま春雨の情趣を生かすものになっている。秋の雨の蕭条とした寂しさとはちがった、ぬくもりのあるその風情が、何がなし伝わって来るところ、「奇妙天然」という所以であろう。ただ有りのまま見たままであって、何の趣向・技巧も施されていない「軽み」の作ともいえる。古注には、「つく〳〵と春のながめのさびしきはしのぶにつたふのきの玉水」（『新古今集』巻一、大僧正行慶）という歌を引くものがあり、必ずしもこれに拠ったとは認められないが、「しのぶにつたふのきの玉水」が和歌の情趣ならば、「蜂の巣つたふ屋ねの漏」が俳諧の新味であることは確かである。

贈桃鄰新宅自畫自讃

*840* 寒からぬ露や牡丹の花の密 （別座鋪）

陸奥鵆・泊船集・四山集・蕉翁句集

夏季（牡丹）。

**語釈** **○贈桃鄰新宅自画自讃** 「桃鄰の新宅に贈る自画自讃」。「桃鄰」は「桃隣」と同じ。天野氏。芭蕉と同じ伊賀上野の出身で、血縁のつながりがあったと伝えられる。元禄四年十月東下の芭蕉に随ってはじめて江戸に来て点者となり、太白堂一系の祖となった。享保四（一七一九）年十二月九日歿。享年は七十余とも、八十一、二ともいう。この人の寓居は、芭蕉が元禄五年五月に第三次芭蕉庵に入るに当って、それまで居た日本橋橘町の借屋に桃隣を残したことが書簡に見え（元禄五年五月七日付去来宛）、当面の「新宅」は、その後に転居した所と思われるが、何処にあったかは不明である。「新宅」の語は既出（Ⅱ*411*、Ⅲ*633*前書）。「自画自讃」は、自ら描いた画に自ら賛（褒める意味の詩文）を書くこと。句の内容に徴して、牡丹を芭蕉自ら描いた画に句を賛したのである。「自画」（Ⅰ*241*前書）「賛」（Ⅲ*454*前書等）は既出。「讃」は「賛」に同じ。「先師在世の時許六亭にて、……自画自讃を汶村が家珍とす」

（『宇陀法師』）「Iisan. Mizzucara fomuru.」（『日葡辞書』）。**○牡丹の花の密**　「牡丹の花の蜜」。「牡丹」は夏の季語。「花の富貴なるもの」といわれる華麗な花を咲かす。既出（I 243）。「密」は「蜜」の誤り。蜜は花の蕊にある甘い液体。『陸奥衢』『泊船集』には「蜜」となっている。「蜂蜜に根はうるほひて老木哉　夜半亭蕪村」（『孝婦集』）「Mitçu.」（『日葡辞書』）。

**大意**　この牡丹の花に宿る蜜は、冷い秋の露とはちがって、「寒からぬ露」とでもいったところかな。安住の新宅を得て先ずは目出度い。

**考**　「桃隣新宅自画自賛」（『陸奥衢』）「贈新宅自画自賛」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『別座鋪』の宝暦二年再刻本には、「芭蕉翁図ニ調写之」とした図と共に収められている。『別座鋪』（子珊撰、元禄七年刊）初出の句であるから、元禄七年夏、西上の旅に出る前の作と見てよい。

諸注多く祝意が那辺にあるかを知るに苦しんでいるが、自画の牡丹に桃隣の新宅を擬し、其処に安住する趣を「花の蜜」や「寒からぬ露」という表現に託したと見られよう。「寒からぬ家居の褒称を調べて主を祝し給ひし」（鳴沙『過去種』）趣向とおぼしく、「寒からぬ露」に「冷たい露の秋にも安住できる新宅を得たとの祝意をこめた」（今栄蔵氏『芭蕉句集』）ものであろう。牡丹が富貴草などといわれるので、この新宅が華美なものだったように見る向きもあるが、桃隣は江戸に来て生活の為に点者となったのであって、そんな贅沢な家が出来た筈はない。芭蕉自身が、

是非もなき於泥（ママ）の中に落入て、名利の点者となり果候半も不便ながら、先我等召つれ候ものとて、其角など連衆不残取持、目をかけ候而、……愚眼ゟは不便に存候へ共、ぬしは本懐之体に悦ぶ気しきにて御座候。（元禄五年五月七日付去来宛書簡）

と桃隣について書いているのを思うべきである。「名利の点者」になることは、芭蕉の生き方として採る所ではなかったが、是非もない窮迫した事情があった桃隣が世に立って行く為に、芭蕉は俳諧を生活の手段にすることを許容したのであった。

*841*

# 木隠れて茶つみも聞や時鳥（別座鋪）

炭俵・矢矧堤・陸奥衛・俳諧問答・泊船集・篇突・旅寝論・蕉翁句集

夏季（時鳥）。

**語釈** ○**木隠れて**　「木隠（こがく）れて」。木蔭に隠れて。「なげきのみしげきみやまのほとゝぎすこがくれゐてもねをのみぞなく」（『大和物語』六十五段）「Cogacure.」（『日葡辞書』）。○**茶つみも聞や**　「茶摘（ちゃつ）みも聞（き）くや」。「茶つみ」は、製茶の為に茶の葉を摘む作業をする人。茶摘みの作業を始める時期は、処によって異なるが、昔から八十八夜（立春から八十八日目）の頃とされる。晩春の季語であるが、この句では「時鳥」が季語として立つ。「や」は、疑問に詠嘆を含む切字。「大和本草曰、茶の葉中華より本邦にわたる事、中古よりの事也。久し。……茶の種子を日本に栽し始は、何の時か分明ならず。……一説、宇治の茶は、将軍足利義満公大内氏に命じてうへしむるより始る。……私云、当世諸国の産多し。殊に栂尾（今はおほく高雄製之）・宇治を第一、二とす。茶を摘に三月節を以て候とす。宇治の手始と云は、おほくは三月一日、二日、三日也。但其節の遅速、其年の寒暖によれり。三月中より以後は煎茶也。爾雅云茗也。所によりて五月以後ふたゝび摘者、二番茶とす。……毛吹草曰、聞茶、茶つむ、同手始と三月部に侍る。近来の俳書に新茶を春にのせたり。甚非なるべし」（『滑稽雑談』）「山畑の茶つみそ（ママ）かざす夕日かな　重五」（『はるの日』）「Tçumi, u, unda.」（『日葡辞書』）。○**時鳥**　「ホト、ギス」。

**大意**　木蔭に隠れて、茶摘み女たちも、この声を聞いているだろうかなあ。ほととぎすの声がする。

**考**　『別座鋪』所収、素龍斎全故の「贈芭叟餞別辞」に、元禄七年の初夏、芭蕉西上の旅立ち前に素龍が芭蕉庵に滞在した間の事として、左の記事中に見える。

今年猶、後のさつきを郭公知ておこたる夜比にや、初音聞侍ずとかこちて、此比の愚詠を、

むら雨やかゝる蓬のまろねにも
たへて待るゝほとゝぎすかな

と吟じつれば、折のよきにや、めでくつがへりて、ぬしも今宵句をさぐり得たりと、

木隠れて茶つみも聞や時鳥

これなん佳境に遊びて、奇正の間をあゆめる作とはしられにけり。予も、

青雲や舟ながしやるほとゝぎす

かうも在べきやなど、誹諧にくらす日も在けり。

これによると芭蕉庵での吟であって、実境に基づく写生句ではなかったことになる。

芭蕉が時鳥から茶摘みを案じたのは、やはり嘗て或る時そういう景色を見た体験があったからであろう。許六はこの句を種にして、季と季の取合わせということをやかましく云々するが、茶摘みは春季だから、この場合は単純な配合ではない。「時鳥」と配合することによって、この茶摘みは『滑稽雑談』の記事にある二番茶の趣になる。茶の木に隠れて姿は見えないが、茶摘み女たちも時鳥の声を聞いているだろうと思い遣ったところが、表現の曲であろう。「茶つみも」については、「賤の女すら聞といへる賞翫の意」（杜哉『蒙引』）とする説もあるが、「自分たちと同様に茶摘みも」（加藤楸邨氏『全句』）と解するのが穏当である。果して茶摘み女が時鳥の音を耳に留めたかどうか、聞いて感動したかどうか分りはしない。そんなことが問題なのではなく、こう表現することによって雅情が酌み取れ、面白味が出るのである。

「木隠れて」は和歌的な表現で、「人しれず大内山の山もりは木がくれてのみ月を見る哉」（『頼政集』）の歌が引かれたりするけれども、歌といえば［語釈］に引いた『大和物語』の例など恰好ではあるまいか。「なげきのみしげきみやまのほとゝぎすこがくれゐてもねをのみぞなく」の歌を背景にすれば、「木隠れ」の時鳥を「茶つみ」に転じた俳諧と見られよう。この歌が芭蕉の脳裏にあったという保証はないが、「木隠れて」と和歌的情趣を持つ表現で始めながら、「茶つみ」という卑近な生活感のある素材を「時鳥」に配合したところに俳意が確かめられ、また、この時期

の「軽み」にも叶うことは事実である。初夏の野外の明るい風光が生き生きと描かれた秀吟であった。

## *842* 卯の花やくらき柳の及ごし　（別座鋪）

炭俵・陸奥鵆・泊船集・今日の昔・東華集・千句塚・土大根・蕉翁句集

夏季（卯の花）。

**語釈** ○**卯の花**　「卯の花」。ユキノシタ科の卯木の花。その白い花は初夏の代表的季物の一である。既出（I *240*等）。○**くらき柳の及ごし**　「暗き柳の及び腰」。「及ごし」は、腰をやや曲げ爪先立って離れた所の物を取ろうと手を伸ばす時のような不安定な姿勢をいう。ここは柳枝の形を擬人的に譬えた表現である。「くらき」は、葉が茂って小暗い程の柳のさまをいった。「柳」は春季であるが、この句では「卯の花」の方が季語として立つ。「及びごしに牡丹をおるや猫せなか　吉勝」（『玉海集』巻二）「Voyobigoxi.」（『日葡辞書』）。

**大意** 卯の花が白く咲いている。その傍の小暗く茂ったしだれ柳の形は、及び腰で卯の花に触ろうとするかのようだ。

**考** 前の「木隠れて」の句の条で引いた『別座鋪』所収の「贈芭叟餞別辞」（素龍作）の文の続きに、

……又、
　卯の花やくらき柳の及ごし
の佳句は、柳暗花明なりといへる碧巌に似かよひ侍を、夏の小雨をいそぐ沢蟹と、卒爾に脇をさへづる折も有つゝ、いつか十日もとまり侍けるに、……

として見え、元禄七年初夏の頃、素龍が芭蕉庵に滞在していた間の作と知られる。付合は脇だけで終ったのであろう。

句の景については潁原博士が、

こちらには卯の花が真白く咲いて居る。青く茂つた夏柳が、そこへ手を延ばすやうなさまで枝を垂れて居る。庭

前などの実景であらうが、卯の花は垣根に明るく浮き出、柳は向ふの方に暗く屈曲して居るさまが見えて面白い。
（『芭蕉俳句新講』）

とまとめておられるのが的確である。「くらき柳」は葉の茂った小暗い蔭の形容であることは勿論ながら、おのずから黄昏か宵の口の、陽光の乏しくなった頃を思わせる。素龍は『碧巌録』の「柳暗花明十万戸、敲レ門処処有二人応一」の詩句を連想しているが、句は禅意に関する所はなく、普通の詩にも「柳暗百花明、春深五鳳城」（王維「早朝」）「山重水複疑レ無レ路、柳暗花明又一村」（陸游「游二山西村一」）といった例が見える。

卯の花の白さが印象的で、それにしだれている蔭の濃い柳のさまが確かに把握されている。柳のさまを「及ごし」と擬人的に見立てたところが、景の把握の域外に踏み出した「軽み」らしい興であろう。その辺の気分を山本健吉氏は、

卯の花と柳を擬人化して、柳が及び腰で卯の花にたわむれかかろうとするところに、ちょっとしたエロティシズムが漂うが、句体はややいやらしい。（『芭蕉全発句』）

と見ておられ、蕉句を注した明治の俳人達が皆「及ごし」の語を問題視しているのも、こうした連想を写生以外の余計物と感じた為と思われる。それはそれとして尤もではあるが、初夏の黄昏時の幽暗さの持つ艶な気分を伝えているのもこの見立あればこそであって、景の把握の的確さと共に、その余情の巧緻極まる表現は驚くべきものがある。私には厭らしさよりも、その巧みさを賛嘆したい気持が強い。

*843*　紫陽草や藪を小庭の別座鋪　（別座鋪）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（紫陽草）。

**語釈** **○紫陽草** 「アヂサヰ」。普通は「紫陽花」と書く。ユキノシタ科の落葉灌木。根から幹が叢生して高さ一メートル半ぐらいになり、梅雨の頃、球状の花序に花弁状の萼片四、五枚を持つ小さな花が群がり咲く。花は青紫や紫褐色など、土質や開花後の日数によって色々に変る性質がある。「和訓義解云、あぢさいは厚咲の訛言也。和名にあづさいと云。……和に生ずる者はおほく藍色也。……愚按に、……其花ちいさき者、名て為㆓雪毬或蓏葉花㆒。和の異名四英の花と詠ず」(『滑稽雑談』)「あぢさゐの花や手鞠の染かへし　北枝」(『草刈笛』)。**○藪を小庭の別座鋪**　「藪(やぶ)を小庭(こには)の別座鋪(べつざしき)」。「別座鋪」は、母屋とは別に造った離れの部屋。其処の小庭が、あたりの藪をそのまま眺めに取込んであるのである。「座鋪」は普通「座敷」と書く。「夏ざしき」(Ⅲ *467*)参照。「小庭などならば御前を遠くなすべし」(『花鏡』時節当感事)「**Coniua.**」(『日葡辞書』)。

**大意** 時節のあじさいが咲いて、藪を眺めに取込んで小庭としたこの離れは、なかなか風情がありますな。

**考** 『別座鋪』(元禄七年刊)の子珊序に、

麻の生平のひとへに衣打かけ、身がるく成行程、翁ちかく旅行思ひ立給へば、別屋に伴ひ、春は帰菴の事を打なげき、扨誹談を尋けるに、翁、今思ふ躰は、浅き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに軽きなり。其所に至りて意味ありと侍る。いづれも感入て、及ずも此流れをしたふ折節、庭の夏草に発句を乞て、咄ながら歌仙終ぬ。是を巻頭として、有合たる巻〱、夏の句の云捨たるをとり集、門人の餞別をむすびて、伊賀の山家のつれ〲に送侍る。

とあり、「紫陽草や」の発句に始まる巻頭の歌仙は、芭蕉以下子珊・杉風・桃鄰・八桑・執筆らの顔触れである。右の文にある通り、元禄七年夏上方へ旅立つ前、その餞別の会が子珊の別墅で催された時の発句であった。子珊の経歴はよく分らないが、芭蕉最晩年の深川連衆の一人で、杉風と親交のあった人である。恐らくは商家で、深川に別宅があったのであろう。元禄十二年正月十日に歿した。

句の内容については『笈の底』に、

此吟は眼前体也。藪の端を小庭に取たる離れ坐敷、片田舎などに多き物也。紫陽花は其性湿地を好て日影を不レ

善。故に、かやうの藪の木陰などに多し。今案、此句などを以て掛合の趣を工風すべし。先ヅ紺繡毬の生る地は、端山の麓雑木の下、或は藪陰の墻根などに多く叢生す。亦庭に植るも、立木の元或は植込垣の小陰などへ寄て植る也。庭の正面に栽たる人も無し。……此吟、藪を小庭と云処、誠に粉団花の発べきの処成べし。

と精しく見ているのが的確である。

……こゝでは、藪そのものが小庭になつて居る訳でなく、小庭の先に藪があつて、それが座敷から眺められる位置にあるのである。紫陽花は恐らくこの庭の隅に咲いて居たのであらう。そして座敷に坐つて庭を眺める人には、その紫陽花がおのづから景情の中心となるのである。（『芭蕉俳句新釈』）

という半田良平氏の説も、同じ見方に発しているが、紫陽花が景情の中心であることを言ったところは鋭い。それは初五に「紫陽草や」と打ち出した句作りの当然の帰結であった。

見たままを無造作に句にしていながら、「紫陽草や」と先ず焦点を定め、「藪を小庭の」と簡潔的確に描写して、その「別座鋪」のたたずまいを褒めて挨拶としている。見掛けは淡々と飾らないが、全く隙がない。「浅き砂川を見るごと」き軽みの実践といえよう。

844　窓形に昼寐の臺や簟　（続猿蓑）

　　笛の淵明をうらやむ

泊船集

窓なりに昼ねのござや竹むしろ　（五月十四日付芭蕉宛去来書簡）

窓形に昼寝のござや簟　（三冊子）

窓なりに昼ねの床やたかむしろ　（俳諧新々式）

――蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（簟）。

**語釈** **○晋の淵明をうらやむ** 「晋の淵明を羨む」。「晋」は、三国時代の後を承けて中国を統一した王朝の名。洛陽・長安に都した西晋は五十二年続いたのみで前趙に滅され、その後建康に都した東晋が江南を領して百四年続いた。「淵明」は、詩人陶潜の字。東晋の興寧三（三六五）年に生まれ、東晋の次の王朝宋の元嘉四（四二七）年に歿した。仕官を厭うて隠逸の境涯を愛し、その心境と生活を叙した「帰去来辞」は有名で、六朝期の代表的詩人である。ここは淵明の隠逸の生活を羨む意。「倩年月の移こし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ」（「幻住庵記」）「Vrayami, u, ôda.」（『日葡辞書』）。**○窓形に** 「窓形」は、「弓形」等の語と同じく、「窓の形の通りに」の意。ここは「窓に添って」ということであろう。「船形りの雲しばらくやほしの影　東潮」（『続猿蓑』下）「Nari.」（『日葡辞書』）。**○昼寐の台** 「昼寐の台」。「台」は広く物を載せるものをいうが、ここは昼寝する時横になる中国風の寝台のようなものを考えたのである。淵明へのあしらい。「昼寐」は既出（Ⅱ399）。この時代には、まだ夏の季語ではなかった。「石台にのせられて竹椽のはしのかたにあるは、上ゝの仕合なり」（『炭俵』下、野坡発句「石台を」前書）。**○簟** 「タカムシロ」。竹を細く割って筵のように編んだ敷物。暑い夏の間、寝床などに用いる。「簟……たかむしろは、たけにてをれる莚也」（『増山井』）「漣やあふみ表をたかむしろ　其角」（『花摘』）「Tacamuxiro. i, Taqede cumi auaxeta muxiro.」（『日葡辞書』）。

**大意** 涼しい窓辺に添って昼寝の台を据え、竹筵が敷いてある。そんなところでのんびり寝そべりたいものだ。

**考** 元禄七年筆の五月十四日付芭蕉宛去来書簡に、「御発句去年より被仰下候内」として挙げてある句の中に見えるのが最も早い。六月の季題たる「簟」からして元禄六年の作たる可能性が高いが、淵明を慕う意味の句なので、七年作の可能性も皆無ではなかろう。

去来書簡と『三冊子』等土芳系の所伝とは、「竹むしろ」「簟」の表記が異なるのみで、同じ句形である。土芳は「此句、淵明をうらやむと前書あり。はじめは、昼ねの台やと中の七字有」（『三冊子』）「此自筆の句也。続猿には、昼ねの台やと有。後直る歟」（『蕉翁句集草稿』）と、「台や」の方が初案であるような書き方をしているが、『続猿蓑』編撰前の去来書簡に「ござ」とあるのだから、「ござ」を「台」と推敲して『続猿蓑』に入れたと考えるべきで、「ござ」

が日本の庶民風であるのに対して、「台」が中国風の感じを際立たせた表現であるところからも、「台」の方が後案でなければならない。土芳は「ござ」とした真蹟を見ていたので、その方に惹かれたのでもあろうか。『俳諧新々式』許六自筆本の「床」は誤伝に過ぎない。

『蒙求』の「陶潜帰去」の条に、

嘗言、夏月虚間、高二臥北窓之下一、清風颯至、自謂二羲皇上人一。

（嘗て言ふ、夏月虚間、北窓の下に高臥し、清風颯として至らば、自ら羲皇上の人と謂はんと）

また「帰去来辞」には、

倚二南窓一以寄傲、審二容レ膝之易一レ安。

（南窓に倚りて以て寄傲し、膝を容るゝの安んじ易きを審らかにす）

と見え、句の想はこれらに基づくこと明らかである。淵明の高風とその清閑を慕い、これに倣おうとする心持を述べている。「昼寝のござや」に、くつろいだ俳味を見ようとする説もあるが、莫蓙が即ち簟だと聞えるような句作りは、余り感心出来ない。

元祿七仲夏のころ江戸を出侍しに、人〳〵おくりけるに申侍し

845　麥のほをちからにつかむわかれ哉　（真蹟懐紙）――陸奥衛

麥の穂を便につかむわかれかな　（芭蕉翁行状記）――有磯海・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（麦のほ）。

**語釈**　**○元禄七仲夏のころ江戸を出侍しに**　「元禄七仲夏の頃江戸を出で侍りしに」。「仲夏」は、陰暦五月をいう。この年芭蕉が江

戸を出て上方へ向ったのは、[考]で述べるように五月十一日であった。「維旹元禄四稔辛未仲夏」(『猿蓑』丈艸跋)「Chica, i; Goguachi.」(『日葡辞書』)。**○人〳〵おくりけるに申侍し**　「人〳〵送りけるに申し侍りし」。見送ってくれた人々に留別として作った句、の意。「侍し」の下に「句」が略されている。「申す」は、「いふ」と同じく「句を作る」ことである。既出(Ⅰ*215*前書)。**○麦のほ**　「麦の穂」。穂を出して赤く熟した麦秋のさまが思われる。「穂麦」(Ⅰ*239*)「麦あからむ」(Ⅳ*674*)参照。「麦の穂と共にそよぐや筑波山　千川」(『炭俵』上)。**○ちからにつかむ**　「力に把む」。倒れようとするのを支える力として麦の穂をつかむ意。「花すゝきとらへぢからや村すゞめ　野童」(『炭俵』下)「Chicara.」(『日葡辞書』)。

**大意**　人々との別れに当って、倒れそうになる身の支え力として、道傍の麦の穂をつかむ。心細さも一入だ。

**考**　「人〳〵川さきまで送りて餞別の句を云。其かへし」(『有磯海』『泊船集』)「五月十一日武府を出て古郷に趣。川崎迄人〳〵送けるに」(『蕉翁句集草稿』)「五月十一日武府ヲ出て古郷に趣ク。川崎迄人〳〵送りける」(『蕉翁句集』)等の前書があり、『句集草稿』は「是自筆の趣也」と注して、『有磯海』の前書をも参照している。

江戸出立の日については、路通の『芭蕉翁行状記』(元禄八年刊)に、

元禄七年翁の齢五十一、……深川の桃梨散過れば、卯の花雲立わたるまゝに、かんこ鳥の一声二声そゞろにものなつかしき方もおほしとて、おもひ立旅心しきりにて、五月十一日江府そこ〳〵にいとまごひして、乙州がやどせし京橋の家に腰かけ、いざとよ、ふる里がへりの道づれせんなど、つねよりむつましくさそひたまへども、一日二日さはり有とてやみぬ。名残惜げに見えてたちまどひ給。弟子ども追〳〵にかけつけて、品川の駅にしたひなく。

　麦の穂を便につかむわかれかな　翁

とあって五月十一日とするのに対して、桃隣の『陸奥鵆』(元禄十年刊)には、

然ども老たるこのかみを心もとなくや思はれけむ、故郷ゆかしく、又戌(注、元禄七年)五月八日、此度は西国に

わたり、長崎にしばし足をとめて、唐土舟の往来を見つゝ、聞馴ぬ人の詞も聞んなどゝ、遠き末をちかひ、首途せられけるを、各品川まで送り出、二時斗の余波、別るゝ時は互にうなづきて声をあげぬばかりなりけり。駕籠の内より離別とて扇を見れば、麦の穂を力につかむ別哉、……

とあって五月八日となっている。桃隣は見送りの一人と思われるので、その所伝を一概に無視することは出来ないが、後述するように、駿河の島田に着いたのが五月十五日であることは動かし難い。すると五月八日江戸発では日数がかかり過ぎるのに対して、十一日発ならば島田まで前後五日を要したことになって、日程に不自然がなくなる。前掲の前書類が凡て五月十一日であることも併せ考えて、『行状記』の所伝に従うべきであろう。また、前書には「川崎迄」であるし、見送りとしては品川あたりが普通で、六郷の渡しを越えた所まで行くのは、どうかとも思われるけれども、人々が見送ったとあるのに、『行状記』や『陸奥衛』は品川で別れたことになっている。桃隣の記述はかなり具体的で、土芳の伝える「自筆」に「川崎迄」とあったとすれば、その方に信憑性があろう。

『炭俵』にも、

翁の旅行を川さきまで送りて

刈こみし麦の匂ひや宿の内　利牛

おなじ時に

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡

おなじこゝろを

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水

とあって、麦畑の眺めが川崎の宿場あたりの実境だったことが知られる。今度の旅には寿貞の子次郎兵衛が随行し、見送りの曾良は小田原まで同伴して名残を惜しんだ。

「ちからに」「便に(たより)」の句形の異同は問題のあるところである。前者の真蹟は信ずべきものであり、後者も土芳のいう「自筆」があったとすれば、一概に疑えない。「便に」は帰郷後の改案とも考えられ、楸邨氏のように、「真蹟懐紙が明らかに後日の染筆を示す前書を付していることからすれば、「力につかむ」の形が再案決定稿である可能性もある」(『芭蕉全句』)という見方もある。ここでは「便に」とした真蹟は今伝わらないので、真蹟懐紙の句形を本位句とした。表現としても「ちからに」の方がすぐれている。

麦畑の眺めが句の発想の動因になったことは疑いないが、麦の穂をつかむ行為は実際の事でなくともよい。五十を越して特に身の弱りを感じていた芭蕉の心細さが、異様なまでに「麦のほをちからにつかむ」という表現に出ており、旅の途中で果てることを予感したかと思われる程である。尾形仂氏は、別れの情況を記した『陸奥衛』の記事を引いて、

……この一句が、そこに書かれているような、別れの場に臨んでの、送る者、送られる者、相互に泣かんばかりの離別の感情の高まりの中でよまれたものであることは確かだろう。……一句の俳諧性はそうした状況と密接に結びついている。……ゆらゆらと揺れて、身体をささえる頼りにはなるべくもない麦の穂を、力草として必死につかんでいると言ったところに、笑いによる悲哀の表現としての〝俳諧〟がある、とも取れる。(『松尾芭蕉』)

と述べる一方、門人達の餞別吟が麦という素材を通して別れの場を明るくし、旅の前途の豊かさをことほぐ意があるのに鑑みて、その返しとしてのこの句には、

「麦の穂」に托されたあなたがたの心を、私の心のささえとしてしっかりつかむ、ということではないだろうか。そこには、連衆心への確かめと、反芻と、共鳴とがあり、感謝と惜別の思いがある。……そこに老いのくずおれを思い描き、もしくは今生の別れの予感を読みとるのも、鑑賞としては含まれていい。だが、離別の場における連衆心の交響の中で、芭蕉が第一次の読者として想定した見送り門人たちに伝えようとした伝達内容の核心は、

右の点にあったはずだと思う。（同右）

と見ておられる。こうした明るい気持を背景に置けば、『芭蕉俳句研究』で露伴が指摘した、離別に柳の枝を折る漢土の習わしを、麦の穂をつかむことにしたのが俳諧という見方も、改めて顧みられよう。

最後に「ちからに」と「便に」の異同に関する説を挙げる。尾形氏は、

……語感としては「力」がやや誇張的に耳立って聞こえるのに対して、「たより」にはそうした力んだ跡もなく、より心理的に、「麦」に托された連衆心をたしかめすがろうとする感じが深い。どこまでも心の自然に即こうとする〃かるみ〃期の芭蕉の潔癖さが、この改稿をあえてさせたのである。（『松尾芭蕉』）

として、「便に」を後案とされ、加藤楸邨氏も、これまでの旅立ちの句境とはちがって、

何よりもそこには、老いの自覚があったのだとおもう。「たよりに」と「力に」とでは、前者がよりゆとりを残した表現であることは疑えない。前者を決定稿と見れば、そこには激情をむしろ寛げる方向での推敲のあとを認めることができ、それは「軽み」の性格を示すものであるともいえる。（『芭蕉全句』）

と同じ見方に立って「軽み」を目途にした改案としておられる。しかし、さきに触れたように、「ちからに」が後案である可能性も否定してはおられず、要するに「ちからに」から「便に」への推敲は絶対の論ではない。身の弱りに堪えながら、新しい旅に向って気力を振い起そうとする「鬼気」は、寧ろ「ちからに」の方にあると私は思う。

箱根の關越て

*846*　目にかゝる時やことさら五月富士　（芭蕉翁行状記）

泊船集・蕉翁句集

夏季（五月）。

**語釈** **○箱根の関越て** 「箱根(はこね)の関越(せきこ)えて」。「箱根の関」は、今の神奈川県足柄下郡箱根町箱根の芦の湖の岸にあった関所。小田原藩が監理して、江戸からの「出女」と「入り鉄砲」を取締ったが、特に女性の出入りを厳しく監視したという。（Ⅰ*185*、Ⅱ*331*）参照。**○目にかゝる** 視野に入って来る意。富士の山容が目につくのである。「さきぬやと越えはゆけども山桜猶めにかゝる雲だにもなし」（『亀山殿七百首』藤原為世）「**Cacari, u, atta.** …… **Meni Cacaru.**」（『日葡辞書』）。**○こと さら五月富士** 「殊更五月富士(ことさらさつきふじ)」。五月晴れの富士の姿を、特に格別にといって賞めたのである。「五月」は陰暦では梅雨の時期で、晴天は珍しい。「ことさらに唐人屋敷初霞」（蕪村『落日菴句集』）「**Cotosara.**」（『日葡辞書』）。

**大意** 富士の姿がたまたま目に入って来る時しも、殊に珍しい五月晴れの富士は、如何にも美しい。

**考** 「富士」（『泊船集』）「五月三十日富士先目にかゝるに」（『蕉翁句集』）等の前書がある。この句が元禄七年五月西上の旅での吟であることは、路通の『行状記』の前書によって疑いがないが、五月十一日江戸を発したとすれば、箱根越えは十三日だった筈で、五月三十日という『蕉翁句集』の前書は信じ難い。「三十日」は或いは「十三日」を転倒させた結果かも知れぬ。この時の箱根越えの模様は、曾良宛の左の二通の書状に委しく述べられている。

はこねまで御大義忝(ママ)、次良兵へも少学問致候よし申候へ共、漸く草臥之躰みえ申候。はこね雨難義(ママ)、下りも荷物を駕籠に付て乗申候。漸く三嶋に泊り候。三嶋新町ぬまづ屋九良兵へと申飛脚宿、能宿とり申候。今迄の一番にて御座候。（五月十六日付）

小田原まで御送り之礼、嶋田ゟ一通頼遣し候。相届申候哉。貴様御帰り之日に御書付、道くも二良兵へと申やまず候。はこね山のぼり、雨しきりに成候而、一里程過候へば少小ぶりになり候間、はたまで参、小あげに荷をもたせ候而宿まで歩行致候て、下り三嶋までかごかり、三嶋に泊り候。

右に見えるように、曾良は「はこねまで」とも「小田原まで」ともあって、何処まで見送ったかはっきりしない。『別座鋪』には、

箱根迄送りて
ふつと出て関より帰ル五月雨　曾良

という句も見えるが、芭蕉が書簡で登りの際の模様を述べ、関の手前の「はた」（畑宿）のことにも触れているところを見ると、関所までは曾良は行かずに小田原をはずれた登り口あたりで別れたのであろう。句の「関より帰ル」は、いわば興じていったもので、事実と見る必要はあるまいと思う。何れにせよ、関越え当日は雨で天候が悪かったのだから、富士を見ることは不可能だったと思われる。句は三島より後の何処かで成ったものか。たまたま雨の山路で、雲の切れ目に富士を仰ぎ見たとも考えられる。この句を散文的に言い直せば、「ことさら五月富士の目にかかる時や」となるところで、

常に見てさへあく事なきに、富士見ばやと難所わけ登りて、雨の晴間に富士をながめたるは、こと更風流となり。時やは、晴間珍しきをいふなるべし。（東海呑吐『句解』）

という解が的確である。古注以来、『伊勢物語』東下りの条に「ふじの山を見れば、さ月のつごもりに雪いとしろうふれり」（九段）とあるのがよく引かれ、『蕉翁句集』の「五月三十日」や、『一葉集』の前書「さつき三十日の不二の思ひ出らるゝに」等も、或いは其処から出ているかとも思われるが、こうした古典の典拠は、この句の場合無関係であろう。思い掛けぬ晴れ間に富士を仰ぎ得た喜びが、素直に出た句である。芭蕉には駿河路にかけてのこの時の旅路が、富士の見納めであった。

*847*
ど（ママ）むみりとあふちや雨の花曇　（芭蕉翁行状記）
しどけ（ママ）なく道芝（シバ）にやすらひて

泊船集・蕉翁句集

夏季（あふちの花）。

**語釈** **○しどけなく** だらしなく、しまりのないさま。ここは歩き疲れているのである。「いみじくしどけなく、かたくなしく、なほし・かりぎぬなどゆがめたりとも、たれか見しりてわらひそしりもせん」（『枕草子』六十三段）「**Xidoqenai.**」（『日葡辞書』）。**○道芝にやすらひて** 「道芝」は、道傍に生えた芝草の意から、道傍の草地などをいう。其処に腰を下して休むのである。「やすらふ」は既出（Ⅰ*199*前書）。「いづくにかねぶり〳〵てたふれ伏さんとおもふかなしきみちしばのつゆ」（『山家集』中）「**Michixiba. P.**」（『日葡辞書』）。**○どむみりと** 色合が暗く潤んで見えるさまをいう俗語。曇り空などにも用いる。「む」は「ん」と同じ。「雀を荷ふ籠のぢゞめき　二嘯　うす曇る日はどんみりと霜おれて　乙州」（『ひさご』）。**○あふち** 「楝」。梅檀（白檀）の古名。ビャクダン科の常緑喬木で五、六月頃薄紫色五弁の小花を穂状に開く。端午の節供に菖蒲と同じく軒に葺く習慣もあった。花によって夏の季語とする。「順和名抄曰、楝和名阿布知。△和に生ずる者又説の如し。四五月紫花を開く。俗此木を梅檀と称す。その芬香相似たる所侍るにや。又、樗をあふちと称す。非也。樗は諸書を考ふるに、椿に似て気臭し。……順和名に、樗は沼天と訓じて、阿布智の訓なし。異名を雲見草と云。瑞雲おほくは紫なる故に、花を呼て云也」（『滑稽雑談』）「虹の根をかくす野中の樗哉　鈍可」（『あら野』巻三）「**Vôchi.**」（『日葡辞書』）。**○雨の花曇** 「雨の花曇り」。「花曇」は、本来桜の咲く頃の曇り空をいうが、ここでは今にも雨になりそうな曇天を花曇りに見立て、「花」の語によって「あふちの花」を際立たせている。「雨の花」（Ⅱ*351*）の語も利かせているであろう。「ぬく〳〵と日足のしれぬ花曇　長虹　見わたすほどはみなつゝじ也　胡及」（『あら野』員外）。

**大意** どんよりと暗い色合で楝の花が咲いている。今にも雨になりそうな曇り空を背景にして、如何にも雨時の花に相応しい趣だ。

**考** 『蕉翁句集』には「道芝にやすらひて」と前書がある。『行状記』には「目にかゝる」の句の次、島田での「五月雨や」の句の前にあるので、元禄七年五月十五日に島田に到着するより前の作と認められる。『日本古典全書・芭蕉句集』の頭注に、初案として「どんみりと曇るや雨の花あふち」という句形が見えるが、出典を明らかにしていない。

今度の旅での芭蕉の健康状態については、閏五月二十一日筆と推定される杉風宛書簡に、

拙者道中嶋田あたりまでは、つかえなども折ゝ音づれ候得共、次第に達者に成候而、道ゝ二三里、日により五里ばかりも養生の為歩行、足場能所は馬にも乗旁致候而、無恙上着致候。

とあるのによって、大体の様子を知ることが出来る。しかし後の九月廿五日付曲翠宛には、

伊賀ゟ大坂まで十七八里、所〳〵あゆみ候而、貴様行脚の心だめしにと奉存候へ共、中〳〵二里とはつゞきかね、あはれ成物にくづをれ候間、御同心必御無用に可思召候。

ともあって、僅かの間にも身の衰えは明らかであった。もう細道行脚の頃のような健脚は期待すべくもない状態だったのであって、「しどけなく道芝（シバ）にやすらひて」という前書は、そういう情況を背景にして読むべきであろう。なお、この前書は『行状記』の撰者路通の付したもので、芭蕉自身の文ではない。

句の内容は、

上五文字どんみりの文字、感吟不少。夏日の晴れやらぬ炎上の気、山鳩の声に一入くもりて、猶花もおぼろなり。何となくあふちは面白き花なり。（杉雨『評林』）

楝花を雨に見成たる也。此花は中夏に開く。専五月雨の比を盛とす。殊に花薄紫に、其色鈍（ドミ）て雨の花共云べし。歌にも紫の雲と詠来るを以て、雨の花曇と置く。此詞優にして名誉也。今案、雨と云、曇と云、誠に楝の花は、鬱々として曇る共云べき風情の色也。亦、度武美里と云俗談にして俳諧とす。五月雨の空朦朧たる時節を思ひめぐらして可レ味の吟也。（信天翁『笈の底』）

等とある説で十分である。「雨の花曇」という修辞は、

……桜の花によくいふ花ぐもりを樗の花に持来り、其の樗の花ぐもりの間へ雨のと入れて句を曲折させた……
（内藤鳴雪『評釈』）

と見ればよい。但し、「あふちや」と切れているから、「花曇」が楝の花のそれであることは、上から読み下して来た

ところによって、自然と諒解されるのである。「どむみり」という俗語は如何にもよく利いており、「のつと日の出る山路かな」(V 831)と同じく、成功した例となっている。この俗語の働きは、山本健吉氏が、

「どんみりと樗や」と「雨の花曇」とは、言わば言葉の重複である。俳句のような短詩型には、言葉の重複は避けねばならないことの一つだが、この場合は不思議に効果的なのだ。……「どんみり」は雨天の形容であるとともに、樗の花の形容であり、むしろ雨天の樗の花の形容である。そして、「樗」と「花」、「雨」と「曇」とが、言葉としてもイメーヂとしても重複である。一つの風景画を描くのに、何度も淡い絵具をぬり重ねながら、一つの雰囲気をかもし出すのに成功したような句である。

雨はむしろ細かい雨で、降りみ降らずみの、雨天と言っても曇天と言ってもいいような天候である。その中間的な感触が、この句の重複的表現によって生かされている。そこに樗の花が、紫色を暈したように、浮き上がって描き出される。それは作者の心の色でもあるような、やはり中間的な色彩である。ある虚脱の感じであり、楸邨が「旅の憂愁が重く滲透してゐる」と言うのも、うなずかれることである。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

と述べられた通りで、右の「中間的な感触」を生かす語として「どむみりと」以上のものはあるまい。「陰暦五月の曇天、樗の花の鈍重な薄紫色、そしてこれを見上げる旅疲れの芭蕉、これらが「どむみりと」という擬態語に集約されている」(加藤楸邨氏『全句』)のである。また、楸邨氏は『別座鋪』の餞別句の中に「一休み樗の花や昼の辻」という杏村の句があるのを指摘しておられるが、これは当然芭蕉の脳裏にあったであろうから、当面の句はそれに応えた作ということになる。

筍 道中より聞ゆ

## 848　鶯や竹の子藪に老を鳴　（別座鋪）

炭俵・枯尾花・陸奥衛・泊船集・蕉翁句集・十論為弁抄

夏季（老鶯・竹の子）。

**語釈**　**○筍**「タケノコ」。**○道中より聞ゆ**「道中より聞ゆ（だうちゆうよりきこゆ）」。旅の途中から手紙などで知らせがあったことを注した文。この「聞ゆ」は、述者の耳に入った意で、「さしてもなき事をこと〴〵しくいひつらね侍るときこへし評に似たり」（『去来抄』先師評）と同じ用法である。この前書は『別座鋪』の撰者子珊が付したもの。「二良兵へ道中達者に而、拙者苦労にもなり不申、能つとめ申候」（閏五月廿一日付猪兵衛宛芭蕉書簡）「Dôchu. i, Tochû. Michi naca.」（『日葡辞書』）。**○鶯**「ウグヒス」。単独では春の季語であるが、ここでは下に「老を鳴」とあるので、夏季の「老鶯」の趣になる。夏までも囀っている鶯である。「鶯は、……夏秋の末までおいごゑに鳴きて、むしくひなど、ようもあらぬ者は、名を付けかへていふぞ、くちをしくくすしきここ地する」（『枕草子』四十一段）「山中や鶯老て小六ぶし　支考」（『今日の昔』）。**○竹の子藪**「竹の子藪（たけのこやぶ）」。竹の子が処々に顔を出している竹藪。「藪鶯（やぶうぐいす）」の語もあって、「藪」は「鶯」と縁が深い。「竹の子」は既出（Ⅳ*668*等）。「たかうな」（Ⅰ*53*）参照。**○老を鳴**「老いを鳴く（おいをなく）」。「老」は既出（Ⅰ*87*）等。「老鶯は、もと漢詩に言った言葉で、狂鶯とも乱鶯とも残鶯ともいうが、時期外れというだけで、別に声は狂ったり乱れたりすることはない。だから「老を鳴」は、聞く者の主観である。繁殖期に入って笹藪や森林などに巣を営む」（山本健吉氏『芭蕉全発句』）。

**大意**　処々竹の子が顔を出した竹藪で、季節を過ぎた鶯が、老いを嘆くように鳴いていることよ。

**考**　『別座鋪』の前書によって、元禄七年夏の旅で西上の途中から江戸の門人に報ぜられた句と知られる。同書では次に「駿河路や花橘も茶の匂ひ」の句を掲げて、これも同じ道中の所報としているが、「駿河路や」の句は『炭俵』に「此句は嶋田よりの便に」と注して出ており、「鶯や」の句も島田からの便りにあったと見てよく、島田に至るま

での道中での吟と推定される。『枯尾花』（其角撰、元禄七年刊）所収の「芭蕉翁終焉記」には、「四たびむすびつる深川の庵を又立出るとて」としてこの句を引くけれども、これは不正確な記述と言わざるを得ない。

支考の『十論為弁抄』（享保十年刊）第九段に、

ある時故翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯といひ病蚕といへる此詞のおもしろければ、

鶯や竹の子籔に老を啼

さみだれや蚕わづらふ桑の畑

かく此二句をつくり侍しが、鶯は筍籔といひて、老若の余情もいみじく籠り侍らん。……

と芭蕉の直話を伝えている。芭蕉の話そのままかどうかは兎に角、この句が古詩の詞から竹の子藪に鳴く時節外れの鶯の声を表現し、若々しい竹の子との対比に作者の老懐を託したものであることは確かであろう。其角の「終焉記」が旅立ちの時の句であるかのような書き方をした為に、別離の情も含んでいるとする解が新古にわたってあるけれども、旅立ちに詠まれたもののならば、『別座鋪』の前書のような文が書かれる筈はない。兎角杜撰な其角の記述態度のあらわれと見るべく、別離の情はこの句に含まれていないとするのが穏当である。

849

するがの國に入て

するがぢやはなたち花もちやのにほひ（芭蕉翁真跡集）

別座鋪・炭俵・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

夏季（はなたち花）。

**語釈** ○**するがの国に入て**「駿河（するが）の国（くに）に入（い）りて」。「するがの国」は、伊豆半島の部分を除いた今の静岡県東部の旧国名。東海道でいえば、三島はまだ伊豆であるが、沼津から駿河に入る。（Ⅲ518前書）参照。○**するがぢ**「駿河路（するがぢ）」。ここは、駿河地方の意。（Ⅲ646

前書）参照。**○はなたち花**　「花橘」。柑橘類の花をいい、夏の季語になる。「橘」（Ⅳ676）参照。「橘……夏也。……惣別九種の柑類をしなべて橘とも花橘とも哥道には申也。さくとか匂ひとかなくば、夏にはなるべからず。……花を賞翫して橘とよび出ゆへに、咲・匂の詞そはでも皆夏になる也」（『御傘』）「老ふたり花たちばなに酔泣す」（『白雄句集』）「**Fanatachibana.**」（『日葡辞書』）。

**○ちやのにほひ**　「茶の匂ひ」。駿河は茶の名産地である。

**大意**　駿河路はさすがに茶所だ。折柄薫る花橘も茶の匂いがする。

**考**　「橘　前に同」（『別座鋪』）「するが路」（『泊船集』）等の前書がある。『別座鋪』の「前に同」は、前の「鶯や」の句の前書に「道中より聞ゆ」と注したのを承けたもので、「するが路や」の句を収めた『炭俵』には「此句は嶋田よりの便に」と注してあるから、二句とも島田からの書状に書き付けて江戸の門人に報ぜられたものと推定される。箱根越えをした五月十三日は、三島新町の沼津屋九郎兵衛という宿屋に泊っており（五月十六日付曾良宛書簡）、この句は十四、五日頃沼津から島田までの間で詠まれたものと思われる。桃鏡の『芭蕉翁真跡集』（明和元年蓼太序）に摸刻されたものを底本としたが、これは島田で芭蕉が世話になった塚本如舟の後裔桃舟の家に所蔵された真蹟に拠っている。原物の伝存することを聞かないが、『続蕉影余韻』『蕉翁遺芳』に紹介された伝真蹟懐紙はこれを粉本としたものと見る『校本芭蕉全集』の尾形仂氏の説に従って、『真跡集』を採ったのである。

茶所の駿河路を行けば、折柄新茶を製する時で、何処へ行っても新茶の匂いが満ちている。それを香り高いものとされる「はなたち花」に配して趣向とした。

此国茶を製して名産とす。故に其国に至て其地の産物を誉出たる吟也。駿州は南海に出張たる地形にて暖国也。依て橘類も多し。其香さへ茶の薫に気おさると也。此詞にて其外の物迄も茶の香に隠るゝの意、言外に現れたり。至て茶を称美の趣也。此地道路其外御城後に山の裾原野生に夥敷是を植ゆ。（信天翁『笈の底』）

という解で十分であろう。内容的には新茶が中心なので、「ちや」を季語にしたいところであるが、「新茶」とはなく

て「ちや」とあるだけを「新茶」に見做すわけにも行かない。加藤楸邨氏の説に、「花橘も茶の匂ひ」というのは、おおまかな表現とも見られようが、この上に「駿河路や」と置かれてみると、非常に句柄が大きくなる。芭蕉が感覚を生かす場合には、鋭いというよりも包みこんでゆくようなふくよかさがあるが、これもその好例である。「茶の匂ひ」を単に強調したものではなく、「花橘」と「茶の匂ひ」の二つの季物をもって「駿河路」という土地柄をたたえた句であろう。(『芭蕉全句』)と見ておられるのは良く、句全体に弾んだ調子があって、芭蕉自身旅を楽しんでいる趣が見える。「はなたち花もちやのにほひ」は、この時期「軽み」と共に強調した「興」のあらわれとも言えよう。「大国に入て句をいふ時は、その心得有」(『三冊子』)の模範であって、島田の如舟への挨拶もさることながら、何よりも、豊かな「するがの国」への挨拶であった。

*850*

五月の雨かぜしきりにおちて、大井がは水出侍りければ、しまだにとゞめられて、如舟・如竹などいふ人のもとにありて

ちさはまだ青ばながらになすび汁　(芭蕉翁真跡集)

笈日記・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・蜀川夜話

夏季（なすび汁）。

**語釈** ○**五月の雨かぜしきりにおちて**　「五月の雨風頻りに落ちて」。「雨かぜ」は、「雨と風」の意の外に、「風が加わった雨」の意に用いることがあり、ここはその場合と見られる。また、「雨」について「落つ」を用いたのは珍しい。「花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、こゝろあわたゞしくちり過ぬ」(『徒然草』十九段)。○**大井がは水出侍りければ**　「大井川水出で侍りければ」。大井川が溢れて洪水になりましたので。「大井がは」は、駿河と遠江（今の静岡県西部の旧国名）の境を

流れる川。既出（Ⅳ725）。「水」は、洪水の意。既出（Ⅱ307）。○**しまだにとゞめられて**　「島田に留められて」。「しまだ」は、大井川東岸の宿場で、今の静岡県島田市。洪水の為に其処で足止めされたのである。○**如舟**　「ジョシウ」。塚本氏、通称孫兵衛。島田の人で、大井川の川庄屋であった。享保九（一七二四）年閏四月十七日歿、享年八十四。○**如竹**　「ジョチク」。島田の人で、如舟の俳諧仲間。『芭蕉翁行状記』に、この西上の旅のことを述べて、「島田には塚本氏・杉本氏などいひて久敷音信馴し方あればとて」とある「杉本氏」がこの人に当るかと思われる。生歿年未詳。○**人のもとにありて**　「人の許に在りて」。○**ちさはまだ青ばながらに**　「苣はまだ青葉ながらに」。「ちさ」は、キク科の一、二年草。葉は苦みがあり、育つに従って少しずつ下から掻き取って食用にする。季語としては春で、夏になると黄色い花をつけて、葉は食べられなくなる。それが夏までも青々としているのを賞したのである。「春もはや山吹しろく苣苦し　素堂」（『続虚栗』）。○**なすび汁**　「茄子汁」。茄子の味噌汁。「初茄子」（Ⅲ504）参照。「川ざこや紫くゞる茄子汁　来山」（『津の玉柏』）。

**大意**　付け合わせの苣は夏もまだ青々とみずみずしく、初物の茄子汁をお振舞い下さった。おもてなし、まことに忝けない。

**考**　「五月雨の雨風しきりにおちて、大井川水出侍りけるにとゞめられて、しまだに逗留す。如舟・如竹などいふ人のもとにあそびて」（『笈日記』『蕉翁句集草稿』）「嶋田塚本氏之もとにて」（『蕉翁句集』）「如舟・如竹などいへる人にもてなされて」（『蜀川夜話』）等の前書がある。前の「するがぢや」の句、次の「さみだれの」の句と共に、『芭蕉翁真跡集』所収の真蹟懐紙摸刻に見え、元禄七年五月島田で成った句であることは確かである。滞留の事情は、当時の芭蕉書簡に左の如くくわしく書かれている。

十五日嶋田へ雨に降られながら着申候。つかもと孫兵へ宿に居合、先と留候。其夜雨風、大井十六日渡り留り申候。定而十七日昼過渡り可有候。持病心無御座、定而無事に上着うたがひなく候へ共、精分つかれたるやうにて気ぜはしく、少〻いそぐ気味御座候。与風持病も出可申哉などゝ被存候故、嶋田の逗留幸と休み申候。（五月十六日付曾良宛）

十五日之晩方嶋田。いまだ暮不果候間、すぐに川を越可申哉と存候へ共、松平淡路殿かなやに御とまり、宿も不自由に可有と、孫兵へ方音信候へば、是非共にとゞめ候。川奉行役之ものに而候へば、いかやう共川をこさせ可申候間、先とまり候へと申内に、大雨風一夜あれ候而当年之大水、三日渡り留り候。さのみ俳諧の相手にもならざるほどのもの共、先キにも能がてんいたし、俳諧ばなしのみにて、近所草庵のある所など見ありき、少もの書てとらせ候へ共、唐帋など医者の方まで才覚にありかせ候へ共、一枚も無御座、奉書に竹などをかきてとらせ、三日二良兵衛足をやすめ、拙者も精気をやしなひ、幸の水に出合候。(閏五月廿一日付曾良宛)

十五日嶋田へ着候而、一夜留候処、其夜大雨風、水出候而三日渡り留候而、十九日立申候。いまだ高水にて、馬のしりがひやうくかくれぬほどの事に候得共、嶋田の宿は懇意之者共故、馬・川越随分念入、一手ぎは高水をこさするを馳走に致候。(閏五月廿一日付杉風宛)

最初芭蕉は島田に逗留するつもりはなかったが、対岸の金谷に大名が泊っていて、宿も不自由であろうと、川奉行役の塚本如舟宅を尋ねた。如舟は元禄四年十月の東帰の旅でも世話になった懇意の人物である。如舟にして見れば滅多にない機会なので指導も受けたく、強って引留めた処、一晩中大変な風雨で水が出て、十六日から三日間川止めになってしまった。旅疲れの芭蕉は次郎兵衛共々川止めを幸いと休養を兼ねて此処に滞留したのである。「さのみ俳諧の相手にもならざるほどのもの共、先キにも能(よく)がてんいたし、俳諧ばなしのみにて」とあるのは面白いが、その講話の傍ら、記念に書き与えたのが、『真跡集』所収の真蹟であって、

やはらかにたけよことしの手作麦　如舟
田植とゝもにたびの朝起　ばせを

という付合を記した別の一葉の末には、

元禄七五月雨に降こめられて、あるじのもてなしに心うごきて、聊筆とる事になん。

とも書かれている。如舟らの歓待ぶりがここにも窺われよう。『笈日記』雲水部所収の当面の句の前書には、最初に「額」と注してあり、『真跡集』の前書と趣旨は同じながら異同もあって、原拠が同じとは思えない。『笈日記』を写した『句集草稿』の頭注に、

此一章ハ如竹亭ノ額トナリテ残モノカ。

とある推測が正しいとすれば、如舟に遣わしたものとは別に如竹にも書き与えた真蹟があり、『笈日記』はそれを再録したと考えられる。また『句集草稿』には、

自筆物に、しまだ塚本氏のもとにてと前書有。

とも見え、『蕉翁句集』の前書は、その「自筆物」に拠ったものであろう。華雀の『芭蕉句選』に中七が「青葉ながらや」となっているが、その根拠を知らない。

句はもてなしに出た物を機縁として、謝意をこめた挨拶としたまでである。

其時の饗応に萱をどうかしたのと茄子汁とがあつたと見える、時は五月であるから萱は追々長けて亡くなる頃ぢやのに未だ亡くなりきらず青葉ながらにゐるし、又茄子の時候には早いのに既に茄子汁を喰つた、萱と云ひ、茄子汁と云ひ、誠に珍しき物ばかり頂戴して御馳走様であつたといふやうな意で、而して表面は唯だ客観的に実物を打見てそれを愛で賞したことゝなつてゐるのぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

「ちさ」は、……春の柔かい葉を下葉から掻き摘んで食べる。苦味があり、茹でて食べるのが普通である。夏になると黄色い頭状花を開くが、この時はもう夏になっているのにまだ柔らかい青葉の料理を出され、終り初物としてその珍しさを賞したのである。一方、茄子汁は初茄子で、もちろん珍重すべきものである。つまり、初物にも終り初物にも、心の籠ったもてなしを感じ取ったのである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

等の説が行き届いている。「ちさ」も汁の実とする説があるが、汁とは別と見たい。

*851* さみだれの空吹おとせ大井川（芭蕉翁真跡集）

有磯海・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

島田には塚本氏・杉本氏などいひて、久敷音信馴し方あればとて、おぼつかなき五月の空をはらす

五月雨や雲吹落す大井川（芭蕉翁行状記）

さみだれの雲吹おとせ大井川（笈日記）

夏季（さみだれ）。

**語釈** ○**さみだれの空** 梅雨期の大雨を降らす天候。「空」は空模様を主としていい、天空の意を含む。（Ⅳ*754*）参照。○**吹おとせ** 「吹き落せ」。風への呼び掛け。「茴香の実を吹落す夕嵐　去来　僧やゝさむく寺にかへるか　凡兆」（『猿蓑』巻五）「Fuqiuotoxi, su, oita.」（『日葡辞書』）。

**大意** 暗い梅雨時の空模様。大雨に物凄い風まで加わっている。風よ、いっそのこと五月雨の降るこの空を、吹き落してしまえ。水嵩の増した大井川は滔々と流れて行く。

**考** 「大井川水出て、島田塚本氏のもとにとゞまりて」（『有磯海』『泊船集』『蕉翁句集草稿』）「大井川水出て」（『蕉翁句集』）等の前書がある。島田に書き遺した『芭蕉翁真跡集』所収真蹟懐紙の摸刻の中に、「ちさはまだ」の句に続いて見え、路通の『芭蕉翁行状記』にも、元禄七年五月西上の旅中の句として掲げられているので、同月十五日から十八日まで島田の如舟亭に滞在した間の句と見られる。「ちさはまだ」の句の条に引いた芭蕉書簡の文面にあるように、十五日夜は「大雨風一夜あれ候而、当年之大水」（閏五月廿一日付曾良宛）となったのである。

この句では「空」と「雲」の異同が問題になる。『笈日記』の「雲」は支考の誤写の可能性もあるが、また一方、

前の句の条に記したように、如竹に遣わした真蹟がそうなっていたとも考えられ、一概に却け難い。「雲」という句案もあったことは認めてよいが、如舟に贈られた真蹟（『真跡集』所収）と板本初出の『有磯海』が共に「空」であるから、ここでは「空」の句形を本位句とする。『行状記』の句形は、「雲」の句案が不正確に伝わったのであろう。

この句は古来、「大井川」への呼び掛けか、風への呼び掛けかで説が分れている。

……此句意は晴を祈力もなく、終には大井川に対して願ひたる趣也。陰雲覆ひ宛(つゝ)ても降続く空を、此急流の激る如の風勢を以て、一度雨雲吹流せ。然らば快く晴て、水重(かさ)も落なんと願たるべし。何れにも皐月雨を強く侘たる吟也。（信天翁『笈の底』）

という説は大井川への呼び掛けと見ているが、「急流の激る如の風勢を以て……雨雲吹流せ」というあたり、辻褄を合わせようとして、無理を犯していると言わざるを得ない。幸田露伴は、

幾日も降りつづいた雨で、濁流の色と、雨雲の色とが一つ色に物凄い勢ひで流れてゐる。恰もこれ水雲中より来る……の感で、その濁流の大井川に向つて「雲吹き落せ」と呼びかける心である。吹き落せとは無論風を云つてゐるのであるが、風と云はずして、大井川に向つて云つてゐるやうにしたところは句の手である。手の利いた句といふものだ。（『芭蕉俳句研究』）

と述べており、実質的には風への呼び掛けとしながら、謂わば表現技巧として大井川に呼び掛けたように作ったと見ている。しかし、「句の手」とするよりは、

五月雨が降つて大井川は滔々と流れ為めに自分は止められてゐる。この五月雨の雲を吹落せよ、この大井川へ一時に吹落して流してしまへよと風に希望したのである。文字に拘泥すると五月雨の雲を吹落してくれと大井川に希望するやうであるが、吹くといふ字があるから風の字はなくとも風に希望するので、それを落す所を大井川へ落せといふたのである。力の強い句法で実に雄大にして爽快といふ可きぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

という見方の方が説得力があろう。志田義秀博士も、「春雨や蓑吹きかへす川柳」「四方より花吹き入れて鳰の波」「しほらしき名や小松吹く萩薄」等、風をいわずに「吹く」とのみ言った例を挙げて「風」への呼び掛けと見、「大井川」は吹き落される場所を規定したものとしておられる。また「雲」と「空」の相違については、

雲と案ずることは芭蕉ならずとも大抵の俳人の案じ得る所であらう。併し空と案ずることは恐らく容易ではない。言はゞ凡慮の及び難い所である。同時にそれは奇抜過ぎると感ぜられる程激情の表現としては雲よりも遥かに強力である。芭蕉が雲の方を捨てゝ空の方を取つたのも恐らくかうした意趣からであつたらう。……この句は芭蕉の作中でも類の少ない、よい意味に於ける一奇作と云ふべき秀吟と云へよう。(『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』)

として、句の価値を高く評価された。これに対して山本健吉氏は、

……これでは大井川を単なる容物にしてしまったわけで、句の勢いが死んでしまう。……この句に「濁流の色と、雨雲の色とが一つ色に物凄い勢ひで流れてゐる」様を読み取るならば、上の五・七の激しい句勢を承けるのに、「大井川よ」と呼びかける形を以てしなければ、腰くだけになってしまうのである。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

と述べておられる。しかし私は、大井川に対して「吹おとせ」と呼び掛けるのは、やはり納得が行かない。「吹き落される場所」とか「容物」というと浅薄に聞えるが、「大井川」はもう少し広く、謂わば「句の場」なのである。だから、「風よ、いっそのこと五月雨の空を吹き落してしまえ。水嵩の増した大井川は滔々と流れるよ」とまとめれば良いと思う。句の場を設定した「大井川」が、呼び掛けのようにも取れるとすれば、其処は句作りの難点であって、秀吟とまでは言えないであろうが、自然が暴威を振う豪宕さをあらわした、「空吹おとせ」の強い表現は、やはり評価すべきものを持っている。川止めに遭って動くに動けず、陰雲とざす空を見上げて、晴れを願う気持なのである。

852

# 五月雨や蠶わづらふ桑のはた（芭蕉庵小文庫）

五月雨や蠶わづらふ桑ばたけ（韻塞）

陸奥鵆・続猿蓑・泊船集・花橘・蕉翁句集・十論為弁抄

夏季（五月雨）。

**語釈** **○五月雨**「サミダレ」。**○蚕わづらふ**「蚕煩ふ（かひこわづらふ）」。「蚕」は、絹糸を製する為に飼養される昆虫。春に孵化し、桑の葉を食べて成長する。幼虫の間に四回脱皮し、老熟して繭を作るが、その脱皮の間が食物をとらない眠りの時期で、飼っている間に病気に罹るのが「わづらふ」即ち病蚕である。「蚕」は春季であるが、ここは「五月雨」が季として立ち、「蚕」は「夏蚕（なつご）」になる。「かひ屋」（Ⅲ *492*）参照。「病蚕をば、跡をかゆる時拾ひ残して、跡もともに家外へ捨るもの也。その雨にたゝかれていとゞ哀なるさまをみ給ひ、いへりけるにや」（杜哉『蒙引』）「和に生ずる者、……春初に至て蛹より蛾を生ず。俗に蝶と云。此者紙に卵をへり附る也。此卵より蚡出る。和に蟻子と云、ちいさき蟻のごとし。此蚡に新芽（わかめ）の桑を細に剉て振りかけぬれば、是を喰て蚕の形と成長する也。古書の説のごとく、殊に不浄を忌者なれば、蚕屋幷棚などには注連を引、あたらしき薦を敷まふくる也。年始正月十五日は蚕屋払……とてあり。養ふ者蚕を呼て姫と称す。拠ある歟。総て此者神代より説あれ共、養蚕（こがひ）し糸取事、専ら欽明天皇の御宇より始ると聞ゆ」（『滑稽雑談』）「機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡　小昼のころの空静也　利牛」（『炭俵』上）「鶯の路には雪を掃残し　馬莧　しなぬ合点で煩ふて居る　沾圃」（『続猿蓑』上）「Caico.」「Vazzurai, ō, ōta.」（『日葡辞書』）。**○桑のはた**「桑の畑（くはのはた）」。「桑」はクワ科の落葉樹。その葉が蚕の飼料になる。「椹（クハノミ）」（Ⅰ *171*）参照。「はた」を「端」と取る見方もあるが、漢字を宛てた本は皆「畑」であって、「端」は一つもない。『韻塞』の異形も参考にして、「畑」の意とするのが当然である。「麦かりて桑の木ばかり残りけり　作者不知」（『あら野』巻三）「Cuua. l, cuuano qi.」「Fata. l, fataqe.」（『日葡辞書』）。

**大意** 五月雨がじめじめと降り続く。病気に罹った蚕が桑畑に捨てられているよ。

**考** さきの「鶯や」（*848*）の句の条に記したように、この句は支考の『十論為弁抄』第九段に「鶯や」の句と共に引かれ、『白氏文集』の「老鶯」「病蚕」の語に興味を感じて作った由が見えて、「蚕」の句に関しては、

蚕は熟語をしらぬ人は、心のはこびをえこそ聞まじけれ。是は鋌の一字を入て、家に飼たるさまあらんと、其句のまゝに中捨られしが、例の泊船集に入たるよし。今に其集をくやむ事は、それらの麁骨（ママ）おほければとぞ。げにも、煩ふに鋌とあらば、故事にも古語にも及まじ。これらを裁入の鑑とすべし。

と述べてある。内容のことは後に触れるとして、「鶯や」の句は島田から江戸の門人に報ぜられたと見られるので、「蚕」の句も島田滞在中までには出来ていたと推定してよかろう。『蕉翁句集』に元禄五年の部に出しているのは信じ難く、支考の関与した『続猿蓑』に見えることからしても、支考の所伝の方が信憑性がある。『韻塞』の異形は小異に過ぎず、問題にはならない。

古注には、蚕が病に罹るのではなく、蚕のことを思い煩うのだと解する説が見えるが、白楽天の詩の「病蚕」から案ぜられた句という支考の記事がある以上、見当ちがいである。「病蚕」の語そのものは白詩に見えないようだが、露伴は『白氏文集』巻五、「効（フ）二陶潜体（ガ）一詩」十六首并序の一首に「東家采レ桑婦、雨来苦愁悲、簇二蚕北堂前一、雨冷不レ成レ糸」（東家に桑を采（と）る婦、雨来つて苦だ愁悲す。蚕を北堂の前に簇（あつ）めて、雨冷うして糸を成さず）とあるのを挙げて、「情は此詩に似たるかたあり」（『評釈続猿簑』）と言っており、同じく白詩「酬二鄭侍御多雨春空過詩三十韻一」に「預怕レ為二蚕病一」（預（あらか）じめ蚕の病を為さんことを怕（おそ）る）の詩句があることも指摘されている（『新日本古典文学大系・芭蕉七部集』）。

句の解には、屋内・戸外種々の説があり、

……桑畑の中に蚕が病んで居るのではなく、唯だ漠然と其時の心持を叙して場所を明白には言はなかつたのぢや。即ち五月雨が降りつゞくので蚕がわずら（ママ）つてゐやう、桑畑は不相変雨中の景色ぢやといふ程の感想に過ぎぬ。

（内藤鳴雪『評釈』）

というのも一説ではあろう。しかし、私は左に引く太田水穂説が確説と思う。

……桑畑に蚕が煩ふといふのはよく見るものです。私の方(注、信州)で蚕を飼ふ時、病蚕、煩ひ蚕は皆桑畑に穴を掘つて埋めるのです。しかしよく穴から這ひ出して桑の木にのぼるのです。のみならず蚕糞を棄てる時一緒に掃溜にあけられた病蚕もよく桑の木にとまるのです。之は芭蕉が桑畑の桑に病蚕のとりついてゐるのを見て詠んだものと思ひます。(『続芭蕉俳句研究』)

これは[語釈]の条に引いた『蒙引』の説と揆を一にしており、こうした場合を材としたものであることは疑いあるまい。もとより芭蕉がこの旅中にそういう情景を見たとは限らないが、何時か実見したことがあったものが、白詩を思い出した時に句想としてまとまったものと思われる。日常卑近の世界を五月雨の季節感と共に描いた句として成功している。

さて、そのように見た場合、『十論為弁抄』の支考の記事が問題になりはしまいか。文の趣旨は、「病蚕」という語を知らない人には、この句に籠められた気持が分らないだろうからと、「筵」の字を入れて屋内の養蚕であることをはっきりさせようとしたが、うまく行かずに打ち捨てたということのようで、『泊船集』の杜撰さを難じている。これは同書に芭蕉の捨てた句を採録したことを非難したのか、それとも「はた」と仮名書きで出したことを問題にしたのか分らないが、それは兎に角として、支考自身編纂に関係した『続猿蓑』に「桑の畑」と出ていることは、どう考えていたのであろう。「畑」とすれば当然「家に飼たるさま」とは見られないわけだから、『為弁抄』の所説と矛盾することになる。山本健吉氏も、支考の所伝には早呑み込みによる誤解がありそうだと見ておられるが、『為弁抄』は芭蕉在世時より遥かに時を隔てた享保十年の刊行であり、支考の記憶や考え方に混乱が生じていたのかも知れない。「筵」の語を入れた別案の信憑性は甚だおぼつかないのである。山本氏はまた、句の背後にある作者の気持を次のように見ておられる。

この句は、それほど強い主観の裏打ちがあるわけではないが、……「病蚕」に自分の病弱をかこつ気持は、籠め

られているとすべきだろう。少くとも「老鶯」「病蚕」の言葉に対する共感度の深さは、単に古い詩句に見出だして興趣を覚えたというより、もっと深い心の底からの共感なのである。……この旅中、身の煩いをかこっていたことは、今日残る書簡の中からも、しばしば拾い出すことができる。あるいはそれ以上に、孤独感・寂寥感が、彼の心をむしばんでいる。桑畑における病蚕の孤影に、自分の心の影を見ているのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

### 竹ノ讃

853 たはみては雪まつ竹の氣しきかな（笈日記）

三河小町・蕉翁句集

冬季（雪）。

**語釈** ○**竹ノ讃** 「竹ノ讃」。竹の画に賛した句であることをいう。「讃」は「賛」に同じ。既出（Ⅲ454前書等）。○**たはみては** 「撓みては」。竹が弓なりに曲っているさま。「たはみ」は「たわみ」と書くのが正しい。既出（Ⅱ263）。○**雪まつ竹の気しき** 「雪待つ竹の気色」。雪を待っているかのような竹の様子。このような意味の「気しき」は既出（Ⅲ608）。

**大意** この画の竹の撓み方は、如何にも雪の降るのを待っているような様子だなあ。

**考** 「伏見にて」（『三河小町』）「竹之賛」（『蕉翁句集』）等の前書がある。『笈日記』雲水部嶋田の条に、「ちさはまだ」（850）「さみだれの」（851）の句の前書を含む真蹟を紹介したのに続けて、標掲の形で出ている。滞在中の模様を報じた閏五月廿一日付曾良宛書簡に、「奉書に竹などをかきてとらせ」（五六頁参照）とあるのに当ることは確かであろう。翌年支考が島田へ行って記録したのである。「雪」が季語になっているのは画賛としての興で、当面の季節とは関係がない。『三河小町』（白雪撰、元禄十五年刊）に「伏見にて」とある前書は、何かの錯誤と思われる。但し、旧作を書いたとすれば、「元禄二年冬、伊賀から奈良を経て上洛した折の、伏見での作か」（山本健吉氏『全発句』）という考え方も出来

よう。『杉風句集』に中七を「雪もつ竹の」として収めているのは、作者・句形共に信じ難い。
「たはみては」は仮定ではなく、画いた竹が既に曲っているのである。
竹を打見るに、其梢は撓むで幾分か斜に成つてゐる、其様が恰も雪が此身に積れかしと待つてゐるやうである、左様な竹のけしきであると言ふのぢや。（内藤鳴雪『評釈』）
という解が総てを尽している。雪を待つのは、竹の姿に興じた芭蕉の気持でもあった。

尾州野水新宅

854　涼しさを飛騨のたくみが指圖哉　（陸奥鵆）　――蕉翁句集

閑居をおもひ立ける人のもとに行て
涼しさはさし圖に見ゆる住居哉　（笈日記）　――泊船集

野水亭にて
涼しさは指圖にも知住居哉　（春草日記）

野水閑居をおもひ立けるに
涼しさは柱にみゆる住ゐ哉　（蕉翁句集）
かくれ家やさし圖を見るも先すゞし　（素巾書留）
すゞしさの指圖にみゆる住居哉　（芭蕉翁真蹟拾遺）

夏季（涼しさ）。

**語釈**　**○尾州野水新宅**　「ビシウヤスキシンタク」。「尾州」は、尾張（名古屋を中心とした今の愛知県西部の旧国名）のこと。「野

水」は名古屋の蕉門俳人。『冬の日』以来の古い門人である。既出（Ⅱ418前書）。野水が新しく建てた家を訪ねた時の吟なのである。この家は隠居所として新たに建てられたものであった。［考］参照。○**飛騨のたくみが指図**　「飛騨の匠が指図」。「飛騨」は、今の岐阜県北部の旧国名。「たくみ」は、家を建てる工匠、大工をいう。昔飛騨から毎年工匠が召されて上京し、公役に就いたので、この国の匠が有名になった。個人の名のように扱った説話もある。「指図」は、家の設計図。「が」は所有格である。「まさきわるひだのたくみやいでぬらん村雨過るかさとりの山」（『山家集』中）「蓬萊や舟の匠のかんなくず　湍水」（『あら野』巻二）「あからむ麦をまづ刈てとる　里圃　口〳〵に寺の指図を書直し　馬莧」（『続猿蓑』上）「Tacumi.」「Saxizzu.」（『日葡辞書』）。

**大意**　涼しさを旨とした、飛騨の匠のような名工の引いた設計図ですな。結構な御新宅の趣が今から思われます。

**考**　五月十九日に島田を立って大井川を越した芭蕉は、二十二日には尾張鳴海の知足や熱田の桐葉宅に立寄っている。名古屋の荷兮亭に草鞋を脱いだのも同じ日であったろう。荷兮亭には三泊しており、その間の詳細は次の句で触れるが、当面の句はこの名古屋滞在中に、野水の新宅を訪ねた時の吟である。それが何日の事だったかについては、『知足斎日々記』元禄七年五月の条に、

廿三日　なごや行。江戸芭蕉翁京町備前屋忠三郎方に見廻。

とあって、京町備前屋（野水の呉服屋の屋号）に居た芭蕉を知足が訪ねたことが知られる（「忠三郎」は野水の弟）。『陸奥衛』の前書にある「野水新宅」を芭蕉が訪れたのは、恐らくこの日に違いない。名古屋滞在中、芭蕉は荷兮亭に宿泊していたので、備前屋には泊っていたわけではなく、たまたま訪問していた先へ知足が尋ねて行ったのであろう。大虫の『芭蕉翁真蹟拾遺』所収の五月十一日（「閏五月廿一日」の誤写）付杉風宛芭蕉書簡に、

野水隠居所支度の折ふし
涼しさを飛騨の工がさしづかな
すゞしさの指図にみゆる住居哉

句作二色之内、越人相談候而、住居の方をとり申候。飛騨のたくみ、まさり可申候。

とあるのは、句案に関して大いに参考になる。つまり、芭蕉は二種の案を作り、同道した越人と相談の上、「住居哉」の方を定案としたが、芭蕉個人としては「飛騨の工」の句案の方が勝ると考えていたのである。「住居哉」の方に決したのは、越人の意向を尊重したのであろう。作者自身が「飛騨の工」の方がすぐれていると考えていたことが明らかである以上、これを本位句とするのが当然である。「住居哉」の句形については、『笈日記』尾張部に、初五を「涼しさは」として収めているのが問題で、杉風宛書簡も原物ではないから、何れとも決め兼ねる。今栄蔵氏が、荷兮系の俳人と支考との関係が疎遠であることから、支考はこの句の芭蕉真蹟など確かな資料を見ていないとして、「涼しさは」には信憑性がないとしておられる（「蕉句句形誤伝考抄」―『中央大学文学部紀要五十一号』）ことを、参考までに挙げておこう。庵原素巾の書留（元文五年八月十五日起筆）に見える「かくれ家や」の句形は、楓扇の話によればこれが初案だったという。楓扇は野水と交わりがあったらしい人で、この句形が信じ得るとすれば、「指図にみゆる住居哉」に先立つ案と思われる。他の異形は何れも誤伝とおぼしく、問題とするに足りない。

杉風宛に「隠居所支度の折ふし」とあるところを見ると、「野水新宅」は出来上っていたわけではなく、まだ工事中だったのであろう。その設計図を見せられ、工事場を案内されたりして、「すゞしさの指図にみゆる」と案じたのである。『徒然草』の「家の作りやうは夏をむねとすべし」（五十五段）という一節が芭蕉の頭にあったかどうかは兎も角、「すゞしさ」は当季の語であり、隠居する野水の俗世に関わらない清閑の心境をも思わせて、恰好の挨拶になる。それを更に一段すり上げたのが「飛騨のたくみ」の句案で、この語を入れることによって興じた俳意が強調されるのである。杉風宛で、越人と相談の上「指図にみゆる住居哉」に決めたといいながら、直ぐ続けて「飛騨のたくみ、まさり可申候」といったのを不審とする向きもあるが、閏五月廿一日付曾良宛書簡に「名ごや古老のもの共は、少俳諧も仕さげたる様に相見え候」とあるのを参照すると、芭蕉はこの時期荷兮・越人らを信用していなかったのであって、

その不信は彼等の鑑識眼にも及んでいたであろう。その場では融和を旨として越人の顔を立てたけれども、実は「飛騨のたくみ」の方が良いのだという作者自身の評価を、端的に示しているのである。

　　去年元祿七年、前の五月なるべし。尾張の國に入て、舊交の人〴〵に對す

855　世を旅にしろかく小田の行戻り　（笈日記）

芭蕉翁行状記・陸奥衛・泊船集・春草日記・今日の昔・蕉翁句集・世中百韻・かほり山

　　いぬの夏
　　　荷兮亭
　世は旅に代かく小田の行戻り　（ゆずり物）

夏季（しろかく）。

**語釈**　**○去年元禄七年**　「去年」は、『笈日記』の成稿刊行された元禄八年から見て前の年をいう。この書で「去年」といった場合は、凡て元禄七年を指すことは前述した（V *830*）。以下の前書は支考の文である。「去年の今宵は夢のごとく、明年はいまだきたらず」（支考「今宵賦」—『続猿蓑』上）「Qionen. Sannuru toxi.」（『日葡辞書』）。**○前の五月なるべし**　「前の五月」は、元禄七年が閏五月があった年なので、閏でない方の五月を「前の」といったのである。（本冊三四頁の素龍の文参照）。「元禄十一寅五月吉日」（『続猿蓑』井筒屋奥書）「Goguat. l, goguachi.」（『日葡辞書』）。**○尾張の国に入て**　「尾張の国に入りて」。「尾張の国」は、今の愛知県西部の旧国名。既出（II *442*前書）。「尾州」（V *854*前書）参照。**○旧交の人〴〵に対す**　「旧交の人〴〵に対す」。旧くから交わりのあった人々に対して、挨拶として詠んだ句の意。「旧交の人〴〵」は、荷兮・野水・越人ら名古屋の門人達を指す。「旧交ノ友サヘ来ラネバ」（『太平記』巻三十九）「田家の人に対して」（『続猿蓑』下、洒堂発句「山吹も」前書）「Taixi, suru, ita. i, Mucô. …… Fitoni taixite môsu.」（『日葡辞書』）。**○世を旅に**　この「世」は、生涯の意。「としくれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじき

かな」（『紫式部日記』）。○**しろかく小田の行戻り**　「代掻く小田の行き戻り」。「しろかく」は田植の前に植え代（田植をする区画）を馬鍬で掻きまわすことをいう。そのあとに早乙女が早苗を植えて行くのである。馬鍬は一メートル余の横棒に七、八本の鉄の歯が櫛状に並んだもので、これを牛馬に引かせ、牛馬の鼻取りと馬鍬を押す役の二人がつく。今はモーターの付いた耕耘機が普及したので、このような作業は見られなくなった。「小田」の「小」は接頭語で、「田」というに同じ。代掻きの作業に田を行ったり来たりするさまが「行戻り」である。「代かくやふり返りつゝ子もち馬」（一茶『八番日記』）「麓の小田に早苗とる哥、蛍飛かふ夕闇の空に水鶏の扣音、美景物としてたらずと云事なし」（『幻住庵記』）「鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋　ちらばらと米の揚場の行戻り　芭蕉」（『炭俵』下）「Voda. P. Ta.」「Modori.」（『日葡辞書』）。

**大意**　私は生涯を旅に過して来たが、それは丁度田の中で代掻きをする農夫が、絶えず行きつ戻りつしているようなものだった。兎に角久しぶりで皆さんに会えて嬉しい。

**考**　「名護屋にて」（『芭蕉翁行状記』）「行〳〵て尾州荷兮が宅に汗を入」（『陸奥鵆』）「尾刕に入ての吟とかや」（『泊船集』）「荷兮亭にて」（『春草日記』）「なごやにて」（『今日の昔』）「尾張にて旧交に対ス」（『蕉翁句集』）「尾張国に入て」（『世中百韻』）等の前書がある。元禄七年閏五月廿一日付の杉風宛書簡（『芭蕉翁真蹟拾遺』所収）にも「荷兮方にて」と前書して掲げられており、最後の旅で西上の途次、名古屋の荷兮亭で成ったことは確かで、『笈日記』前書の文考の推定とも一致している。これを発句とした歌仙を収めたのが『ゆずり物』（杜旭稿、元禄八年成）で、連衆は芭蕉の外、荷兮・巴丈・越人・長虹・桃里・傘下・桃首・大椿・初雪らであった。その前書「いぬの夏」の「いぬ」も、元禄七年甲戌の歳を指している。しかし、その初五「世は旅に」は孤立した所伝で信じ難く、措辞としても「世は」は、のっけから観相的気分が露骨になるので、「世を旅に」の方が穏当である。

この旅で芭蕉が名古屋の荷兮亭に滞在したのは、当時離反の動きを見せていた名古屋蕉門の故老達に、以前の通り隔意のないことを示して、融和をはかる為であった。これよりさき元禄四年秋に、路通のさまざまな不信実な所行をめぐって、野水・越人・凡兆らが芭蕉の面前でその非を鳴らし、これをきっかけに師翁から遠ざかるに至ったが、こ

うした人事関係の行き違いの上に、芭蕉のしきりに唱道した「軽み」への無理解が加わって、離反の動きが顕著になったのである。俳書では元禄六年九月の『俳風弓』（壺中撰）と、同十一月の『曠野後集』（荷兮撰）とがその代表とされ、後者に於いて、名古屋蕉門の中心人物荷兮は、遥か過去のものになった古風の俳諧への同感を表明して、日々新たならんことを期する芭蕉とは全く逆の志向を示した。これに対して芭蕉は、元禄六年正月廿七日付の凡兆の妻羽紅に宛てた書簡で、

なごやのやつばら共、いよ〱不通に成候と相見え候。のこり多候。

と、夙くも遺憾の意を表したが、『曠野後集』の露骨な反抗的態度に怒った去来が、度々手紙をよこしたのに対しては、

荷兮集之事日〻に御申越、其仕かた賤敷凡情を顕し候事、御とがめ尤に被存候。され共平人の情、常之事に候へば、少も御とんぢやく被成間敷候。万世に俳風の一道を建立之時に、何ぞ小節胸中に可置哉。彼等に似合敷心指（こゝろざし）にて候。立廻るうちに古く成候て、既三つ物、五年七年此方一動の働も見えず候。（正月廿九日付去来宛）

と、問題にしない態度であった。芭蕉にとっては「万世に俳風の一道を建立」することが何よりも大切なことで、「平人」の「凡情」は「常之事」に過ぎず、五年七年この方少しも新しい方向へ動こうとしない彼等の古さこそ指弾すべきことだったのである。しかし一方、一門の統率者として、故のない誤解や感情的なしこりは出来るだけ除いて置きたいわけで、そういう意味の和解を期した今回の訪問であった。師翁を迎えた名古屋の古参門人達の様子は、当時の芭蕉書簡に左の如く委しく書かれている。

荷兮へ寄候而三夜二日逗留、荷兮よろこび、野水・越人同前に而かたりつゞけ申候。朝飯夕飯夜食、一日に三所づゝの振舞に而、是非得まいらざる方〻音物それ〲に心をつかひ、例のうはきもの共さはぎのゝしり候。越人かたへは朝飯に参、夏大根の人参汁、一風流と作をはたらかせ候。……名ごや古老のもの共は、少俳諧も仕さげ

たる様に相見え候。旦藁と云ものは頃日商ひにかゝり、風雅もやめて居申よし、てんぼ成うはさなど相きこへ候。（閏五月廿一日付曾良宛）

細道行脚以後、名古屋蕉門は蕉風の流行に取残された形で、元禄四年十月の帰東の際にも、芭蕉は熱田に足を留めながら、名古屋は素通りしてしまった。絶縁とか離反とかいっても、その原因は、芭蕉の眷顧が薄くなったことに対する僻みに発していたのであろう。だから、師翁が斯うして昔通り訪ねて来て親しく接して呉れるのを見れば、わだかまりも解け、大騒ぎして歓迎するのであった。荷兮亭逗留は「三夜二日」（曾良宛）「三宿二日」（杉風宛）とあるから、五月二十二日の夕方に着いて二十五日に立ったわけで、「世を旅に」の発句に始まる歌仙は、二十三、四日の間に成ったことになる。ここに至るまでには複雑な経緯があり、師弟の間の微妙な感情の縺れが背景にあったのである。

生涯を旅に、街道を行きつ戻りつして過して来たことを、「しろかく小田」の農作業に譬えた句であるが、

田に水を入て牛にてかきならすを、しろかくと云。其如く旅に行つ戻りつすると也。（正月堂『師走嚢』）

長き日を一日往かへりく代かくは、世渡りも則旅なるに似たりと、苦をもおもひおこたらぬ業を見て、己をかへり見る心有べし。（東海呑吐『句解』）

とある両説では、比擬の関係が逆になっている。句の主意は旅に過す作者の境涯にあるのだから、後説のように解するのが非であることは言うまでもない。代掻きの作業を採り上げたのは、その時の属目であったか、或いはそれまでの旅路で見たことが、偶々念頭に上ったのであろう。「しろかく小田」は飽くまで譬喩にとどまり、象徴といった表現とは聊か異なるけれども、自らの生涯を顧みてふと漏らす溜息のような調子が、句全体に行き渡っている。加藤楸邨氏が、

「代掻く」は単なる比喩ではなく、旅中眼前に見てきた代掻きに、同じ街道を行き戻りして旅に生きる自分の境涯を思いあわせた実感である。旧交の人々に再会した喜びよりも、旅の中に流転する自分の姿をひとり観じてい

るような、言いようのない寂しさが揺曳し、挨拶の句らしい弾みがかげをひそめてつぶやきに似てきている。（『芭蕉全句』）と見ておられる通りである。

露川が等さやまで道おくりして、共にかりねす

856　水鶏なくと人のいへばやさや泊り（有磯海）

芭蕉翁追善之日記・笈日記・ゆずり物・泊船集・四山集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（水鶏）。

**語釈** **○露川が等**　「露川が等」。「露川」は、沢氏、名は市郎右衛門。伊賀の友生の出身で、名古屋札の辻の数珠屋渡辺家の婿養子となったが、後旧姓に復した。元禄四年冬芭蕉に入門し、宝永期に隠居後は諸国を行脚して俳壇に地歩を築いた。俳風は平俗である。寛保三（一七四三）年八月二十三日歿、享年八十三。［考］で述べるように、この時露川は素覧という門人を帯同していたので、「等」といったのである。「孤屋・野坡・利牛らは、常に芭蕉の軒に行かよひ、……十あまりなゝの文字の野風をはげみあへる輩也」（『炭俵』素龍序）「**Tomogara.**」（『日葡辞書』）。**○さやまで道おくりして**　「佐屋まで道送りして」。「さや」は、今の愛知県海部郡佐屋町。木曾川の支流に沿い、桑名・熱田間七里の渡の脇道となる街道が走っていて、ここから桑名へ川舟の便があった。既出（Ⅱ*336*前書）。「道おくり」は、旅人を途中まで見送ること。**○共にかりねす**　「共に仮寝す」。「かりね」は、ここでは旅先で宿泊すること。この時芭蕉ら三人は、佐屋の山田氏の家に宿泊した。「覚やすき夢の面影中〳〵にかりねくやしきさよの山かぜ法眼専順」（『新撰菟玖波集』巻十二）「**Carine.**」（『日葡辞書』）。**○水鶏なく**　「水鶏鳴く」。「水鶏」は渡り鳥で、戸をたたくような音を立てて鳴く。既出（Ⅲ*480*）。**○人のいへばや**　「人の言へばや」。人が言うからですよ。「や」は詠嘆の切字。疑問ではない。**○さや泊り**　「佐屋泊り」。佐屋で泊ること。「いなづまや堅田泊の宵の空」（『蕪村自筆句帳』）。

**大意**　佐屋で一晩御厄介になるのは、此処は水鶏のよく鳴く所だと、連れの者が言うからですよ。

考　「隠士山田氏の亭にとゞめられて」（『笈日記』）「戌の五月隠士山田氏の亭にとゞめられて」（『ゆずり物』）等の前書があり、『泊船集』と『蕉翁句集』の前書は『有磯海』と同じである。「戌」は元禄七年甲戌の歳であって、この前後のことは当時の芭蕉書簡に委しく書かれている。即ち、

露川方は荷兮と出合無之故、逗留之内だまり候て、町はづれ一里余まで荷兮・越人大将に而、若きもの共不残送りて出、餞別の句など道々申候。

麦ぬかに餅屋のみせのわかれ哉　かけい
別れ端やおもひ出すべき田植哥　傘下

其外先わすれ候。越人も挨拶など御座候。かけい方わかれ候跡を、露川、門人独召つれ、道に而待かけ、さやまでつき参候而、さやに半日一夜とゞまり、不埒成云捨十句計、俳談少々説きかせ候。是は元いがの在辺の生れに而候故、年〱いがへ参候間、正月比いがへ可参とわかれ候。（閏五月廿一日付曾良宛）

とある外、同じ日に書かれた杉風宛にも「佐屋へ廻り候処に、荷兮例之連衆道に而ぬけがけ待受候而、又佐屋半日一宿逗留」と見えている。佐屋での「不埒成云捨十句計」は、『笈日記』と『ゆずり物』に収められた歌仙の前半で（後半は支考らが加わって後に巻き継いだもの）、前半は芭蕉・露川・素覧の三吟である。支考の『芭蕉翁追善之日記』元禄七年十一月十六日の条に見える露川らの芭蕉追悼句文の中にも、

老翁回国のみちくさを素覧とともに見送りして、其夜は佐屋の泊に名残を惜しみければ、

水鶏啼と人のいえばや佐屋泊　翁

此水鶏の聞捨がたくて、我もいひ人も言ひて、半哥仙ばかりになしすてぬ。あけなん春はかならず伊賀に待べきなど聞へしは、此夏の事にてありしか。

と記されており、露川の同伴した門人は素覧だったことが確かめられよう。芭蕉が名古屋の荷兮宅を辞した五月二十

五日の朝、荷兮・越人ら大勢に見送られて町はずれで別れた後、荷兮らと交流のなかった露川と素覧が合流して佐屋まで行き、其処で一泊した時に「水鶏なくと」の発句が詠まれたのであった。一行を泊めた「隠士山田氏」は、通称庄右衛門または太左衛門と伝えられるのみで、経歴などは不明である。
句形の異伝としては、露川系の伝書『誹諧秘伝付録』に「水鶏鳴くといへばや佐屋の波枕」が初案だったとしているけれども、どれだけ根拠のあることか分らない。伝書類には兎角胡乱の説をなすものがあるから、用心しなければならぬ。
家の主人「山田氏」は露川の知人でもあったろうか。主への挨拶の気持を籠めた即興句である。佐屋に泊ることにした理由を、此処は水鶏の鳴く処だと人が言ったからとしたのはその場の逸興で、必ずしも事実でなくともよく、そういう形で露川・素覧をも挨拶の場に加わらせたのは、巧みといってよい。「水鶏なくと」で水辺の田園の趣が浮び、気散じな旅の気分が横溢している。「いへばや」を「いへばにや」と疑問の意を含めて解する説もあるが、「五月雨の降のこしてや」（Ⅲ489）等とちがって、この場合疑問と取るのは良くないと思う。

雪芝亭

857 涼しさや直に野松の枝の形 （笈日記）

泊船集・蕉翁句集・故郷塚百回忌

夏季（涼しさ）。

**語釈** ○**雪芝亭**「セッシテイ」。「雪芝」は、伊賀上野の造り酒屋山田屋の主で、広岡氏、名は保俊、通称七郎右衛門。土芳は父方の従兄、猿雖は母方の従兄に当る。芭蕉晩年の入門とおぼしく、『炭俵』『有磯海』『続猿蓑』等に句が入集した。正徳元（一七一一）年八月二十八日歿、享年四十二。○**直に**「直ぐに」。真直ぐであるさま。「さし柳たゞ直なるもおもしろし　一笑」（『あら野』巻二）

「Suguni.」（『日葡辞書』）。○**野松の枝の形**　「野松の枝の形」。「野松」は、野に生えた松。ここは野松をそのまま庭に移し植えたのであろう。「形」は、枝の形そのものをいう。「窓形」（V *844*）参照。「家賃ならべる憂をしらずや　成美　山城の衆に野松を見てもらひ　一茶」（『梅塵抄録本一茶連句』）「どれから見ましても、なりのよい御堂で御ざる」（狂言「鬼瓦」）。

**大意**　この庭の松は野松をそのまま移し植えた趣で、真直ぐに枝を伸ばした形が如何にも涼しげなことよ。

**考**　士芳の『蕉翁全伝』元禄七年の条にこの句を引いて、

此句ハ閏五月十一日ノ夜雪芝庵ニ遊テ、庭ノ松ノ物好モナク植タルヲ興□シ也。かせん有。

と書かれている。『故郷塚百回忌』（青吟撰、寛政五年刊）所収の呉川の句の前書にも、

わが祖父雪芝亭に松栽させける時に芭蕉のおはして、涼しさや直に野松の枝の形と吟じ玉ひしも元禄七年にして、遷化ありし年を同じうし、既に百年になれど、いまも亭〱と軒端に高し。をのづから野松の家と人もいへり。

と、七年作たることを言っており、『全伝』の記事は信ずべきものと思われる。この前日、芭蕉は雪芝（山田屋七郎右衛門）に宛てて手紙を書き、

一昨夕、少持病気味御座候処、昨今は苦労に成申ほどの事にも無御座候。明夕之事、いまだ俳諧心程にも無御座候へども、成合に可被成候はゞ、暮ざる内ゟ御見舞可得御意候。

と述べている。八日夕に持病が兆したが、それ以後大したことはなく、まだ俳諧をする気分にはなれないが、成行任せにして下さるなら明夕暗くならないうちに伺ってお目にかかりましょうというのである。この予定が実現したわけであるが、『全伝』にいう歌仙は今伝わらない。閏五月廿一日付杉風宛書簡に、「伊賀にて歌仙一巻言捨申候」とあるのは、この時の巻を指したのであろう。

芭蕉は五月二十六日に佐屋で露川と別れて後、伊勢長嶋と久居に泊って、二十八日に郷里の兄半左衛門宅に到着、以来上野に滞在中であった。

……廿八日伊賀へ上着申候。……同名此度は殊之外力を得よろこび候而、拙者も別而大悦仕候。（閏五月廿一日付杉風宛）

……いがへ廿八日に上着、同姓悦、旧友土芳・意川(ママ)・半残、日夜かたりよろこび申候。（閏五月廿一日付曾良宛）

等の文言によって、郷里での模様を知ることが出来る。

句は「直に」を「たゞちに」の意に解する説もあるが、やはり妙に庭師などの手に掛けずに、自然のまま枝を伸ばした形を「直ぐに」と言ったものと見たい。その野趣を賞することが、そのまま主の趣味を賞めた挨拶になるのであって、それは「軽み」に通ずる心でもあろう。この句に因んで、雪芝は野松亭とも号した。

*858*

# 柴付し馬の戻りや田うへ樽

（蕉翁句集）

夏季（田うへ）。

**語釈** ○**柴付し馬の戻りや**　「柴付けし馬の戻りや」。柴（粗朶の類）を背につけて運んで来た馬の、家への戻りには、の意。「や」は詠嘆の切字。「行戻り」（∨855）参照。「をの〳〵肩にかけたるもの共、かの僧のおひねものとひとつにからみて馬に付て」（『更科紀行』）。○**田うへ樽**　「田植ゑ樽」。田植え仕舞のふるまい酒を入れた樽。「植う」は古くはワ行、中世以降はヤ行に活用したから、「うへ」は何れにしても仮名ちがいである。「Taru.」（『日葡辞書』）。

**大意** 背に柴を積んで運んで来た馬の戻りには、田植え仕舞を祝う酒樽を乗せて行くよ。

**考** 土芳の『蕉翁全伝』元禄七年の条にこの句を引いて、「此句ハ猿雖方ニ遊テノ事也」とあり、竹人の伝も同様である。『芭蕉句選拾遺』には「元七戌蔵田氏に遊ての事也」と注するけれども、猿雖は窪田氏だったから「蔵」は「窪」の誤りか。何れにせよ『全伝』の方を信ずべきであろう。季語からして、五月末から閏五月半ばにかけて、郷

里に滞在した間の作と思われる。『一葉集』は下五を「田植酒」としており、内容は同じであるが、年代の古い文献に根拠を見出し得ない。

猿雖の家は内神屋という富裕な商家で、芭蕉とは若年からの親友だった。この句については、地主としての窪田家が小作の農夫に温情をかける場面という説もあるが、ただ情景を描いた趣のこうした句の場合、挨拶性に余りこだわる必要はないのではあるまいか。

……親しい仲だから、半日遊びに来ていて、農家の馬が荷を背負って行くのを往きも帰りも見たのだともいえる。そのような往来の嘱目に軽く感を発したと取っておいた方がよいであろう。(山本健吉氏『芭蕉全発句』)

という見方が妥当に思われる。山里に住む木樵などかも知れない。馬に柴を積んで農家に売りに来たのが、帰りには酒樽をつけて戻って行く。折柄田植の頃なので、馬に樽をつけていれば、ふるまい酒を貰ったと分るのである。田植え仕舞の「さなぶり」の酒であって、連句の例では、

齢とをしれ君が若衾　嵐雪

酒のみにさをとめ達の並ビ居て　執筆(『続虚栗』)

という付合も見える。「柴付し……戻りや」というだけで時間の経過をあらわしたのは巧みといってよい。

閏五月廿二日

落柿舎亂吟

859　柳小折片荷は涼し初眞瓜　(市の庵)

柳ごり片荷は涼し眞桑うり　(蕉翁句集草稿)

---

六月十五日付許六宛書簡・泊船集・東西夜話・蕉翁句集草稿・落柿舎日記

蕉翁句集

夏季（涼し・初真瓜）。

**語釈** ○**閏五月廿二日** 「閏」は、暦と季節との間のずれを調整する為に設ける余計な時間。大陰暦では三年に一度ぐらい一箇月をダブらせて調整する。元禄七年は五月が二度あったが、その後の方が閏五月である。「前の五月」（Ⅴ*855*前書）参照。「元禄七の年夏閏さつき初三の日」（『炭俵』素龍序）「**Vrŭ. i, Vrŭzzuqi.**」（『日葡辞書』）。○**落柿舎** 「ラクシシャ」。洛西下嵯峨川端村（今の京都市右京区嵯峨）にあった去来の別荘。芭蕉は元禄四年夏にもここに滞在して『嵯峨日記』を書いた。「題去来之嵯峨落柿舎」（『猿蓑』巻二、凡兆発句「豆植る」前書）。○**乱吟** 「ランギン」。連句の会で順番をきめずに連衆から出句させ、宗匠の判断で良い句を採るやり方。「出勝ち」ともいう。○**柳小折** 「柳行李」。行李柳の若枝の皮をはいで乾燥させ、麻糸で編んで造った旅の用具入れ。小型の物は弁当箱にもなった。「小折」は宛字である。「あしたの昼食は、この柳ごりにいつぱいつめてもらへば、もふほかになんにも入申さない」（『東海道中膝栗毛』初編）「**Cori.**」（『日葡辞書』）。○**片荷** 「カタニ」。二つある荷の一方。ここは、振り分けにして肩に掛けた荷の一方をいうのであろう。「葛籠片荷櫛筥ひとつなくとも、丸裸で我女房にほしきとしきりにこがれ」（『好色一代女』巻五）「**Catanizzuri.**」（『日葡辞書』）。○**初真瓜** 「ハツマクハ」。真桑瓜の初物。既出（Ⅲ*510*）。「片荷」に瓜を携えて土産に持って来たのである。（Ⅰ*141*）で述べたように、「真桑瓜」は今の岐阜県の真桑村から産した物によって名づけられたが、ここでは「瓜」の字音「クワ」の連想もあって、「クハ」と訓ませたもので、一種の宛字である。許六宛書簡や『泊船集』は「初真桑」と表記している。

**大意** 柳行李と振り分けにした片方の荷は、涼しげな真桑瓜。初物のお土産かたじけない。

**考** 『市の庵』（洒堂撰、元禄七年刊）の前書によって、成立の時期は明らかである。『芭蕉翁手鑑』に写しを伝える六月三日付杉風宛書簡にこの句を書いて、「珍夕哥仙、寄合一巻致候」とあり、六月十五日付の許六宛書簡にも、「洒堂参候哥仙興行に」として発句を披露しており、『市の庵』に歌仙の全容が収められている。『蕉翁句集草稿』は下五を「真桑うり」の形で出し、「此句はさが〔に〕おはしける夏、之道訪ける時の吟也。白船には、初桑瓜と有」と見えるが、之道が訪ねて来た時というのは誤りで、句形の異伝もその根拠を知らない。但し、後の方では『市の庵』を参照して「初真瓜」の句形を出している。

閏五月二十一日に書かれたとおぼしい杉風宛書簡には、伊賀から以後の自らの動静を左のように伝えている。

……今月十六日迄伊賀に逗留致候而、大和加茂猪兵衛在所一宿、十七日大津へ参、十八日より膳所に罷在候。伊賀同名方あつく、蚊も多候へば、夏中は膳所、折〻京へ出候而去来とかたり、若は嵯峨去来屋敷に休足致事も可有御座候。

また、他の書簡にも、

昨十七日大津迄出申候。……此内逢申仁も有之、且江戸へ之書状など頼可申為、昨日雨にぬれながら又七方迄たどり申候。此方智月宅も茶時、正秀も其通取込、定而曲水も殿御立までは隙入可申候間、此方へ御見舞、廿日過まで御延引可被成候。廿四五之頃、或は廿二三、拙者上京可致候。尤貴宅へ御案内可申候。少〻貴様へ用之事も御座候間、暫時逗留も致度候。……其段いづ方に而もかまひ無御座候間、御才覚被成可被下候。（閏五月十八日付去来宛）

……いがへ廿八日に上着、……のみ・かおほく、夏中はくらしがたく候故、ぜゞへ出申候。いまだ去来にも逢不申、丈草大津に被居、万事（盤子）はいせ山田をしこなし、庵など結候而、長官一家の洛中見物など取持候とて、大津へ一夜泊に参候所、ひしとあひ候而両夜一日かたり、又京へのぼり申候。孫右衛門いよ〳〵声高によろこび馳走致候。茶時分やかましく候故、菅沼殿に逗留分にて候。追付上京、去来にも逢可申候。嵯峨のやしきちいさく致候よし、是能閑地（よき）に候間、夏中はこれにも居可申候。（閏五月廿一日付曾良宛）

とあって、この間の事情がよく分る。芭蕉は閏五月十六日まで伊賀上野に居たが、加茂・大津を経て十八日から膳所の菅沼曲翠亭に滞在、大津の又七（乙州）方で盤子（支考）と偶然出会い、膳所では正秀（孫右衛門）にも会っている。閏五月二十一日までは去来に会っておらず、恐らく十八日の芭蕉の書状を見た去来が落柿舎に芭蕉を迎えることにして、二十一日中にでも芭蕉は膳所から嵯峨へ移ったのであろう。洒堂を落柿舎に招いたのも去来だったかと思う。

元禄四年夏の芭蕉滞在当時は大きな構えだった落柿舎は、その後小さく改築されていたのである。

前年洒堂（前号珍碩）は膳所から大坂へ移居して、宗匠の門戸を開いていた。六月三日付杉風宛書簡に、

珍夕段〻れきく〵の弟子共つのり候而、盤昌(ママ)致候。珍夕連中〻も京都へ飛脚音物など相勤、大坂へまねき色〻ねがひ申候。珍夕・之道両人さまぐ〵ねがひ候間、暑気去り候はゞ、しばしの逗留に下り申候事も御座あるべく候。

とあり、この頃大坂から屢々招かれていたことが分る。閏五月二十二日の洒堂の上京も、芭蕉に直接下坂を願う為だったことは想像に難くない。こうしてやがて九月には芭蕉の大坂行が実現することになるのである。

支考の『東西夜話』（元禄十五年刊）に、この句について「なにがし実相院などいへる山伏の、旦那もどりのさまなりと見て置べし」とある。地方の豪家などに出入りして加持祈禱などをする里住みの山伏が、真桑瓜を貰って帰るところだというのである。句作の背景を考慮しなければ、そういう見方も可能になるけれども、大坂から遣って来た洒堂を迎えての句とすれば、解釈は別途に出なければならない。真桑瓜を持参した洒堂の旅姿であろうとする大谷篤蔵氏の指摘があり（『校本芭蕉全集』発句篇下）、山本健吉氏も支考の説を非として、

「柳小折」は旅の具を入れた柳行李で、それと土産の初真瓜とを振分けにして担いで来たのだ。「涼し」と言い、「初」と言ったのは真瓜への褒美の言葉であり、従ってそれを持ってきた洒堂の志への挨拶となる。（『芭蕉全発句』）

と見ておられ、従うべきであろう。

句は「柳小折、片荷は涼し（き）初真瓜」ではない。「柳小折、片荷は涼し、初真瓜（初真瓜、片荷は涼し、柳小折）」でもない。「柳小折（の）片荷は涼し、初真瓜」である。この三つめだけが、片荷の中身をひとまず伏せておいて、涼に誘う作意を気づかせてくれる。なんだ、振分荷物の奇抜な取合せか、と最初からせっかちにわかってしまえば、面白くも何ともない。たった十七文字で、見るなといっても無理な話だが、こういう句では「初真瓜」をできるだけ後の楽みに取っておける読方、つまり切字の見つけ方が必要で、句眼は「片荷」である。

（『芭蕉発句新注』）

という安東次男氏の説も、確かな処に触れている。最初は柳行李に真桑瓜が入れてあるのかと思うが、「片荷」の語をよく考えて数遍読み返すと、句中の人の姿が浮んで来るのだ。練達の句作りといわなければならない。

## 嵯峩

*860*　六月（ロク）や峯に雲置クあらし山　（六月廿四日付杉風宛書簡）

句兄弟・或時集・芭蕉翁行状記・笈日記・陸奥衛・喪の名残・真木柱・泊船集・仏の兄・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・俳諧古今抄・落柿舎日記

夏季（六月）。

**語釈**　**○嵯峩**　「サガ」。「峩」は「峨」に同じ。京の西郊、今の京都市右京区嵯峨の地。ここに去来の別荘落柿舎があった。「嵯峨」は、もともと山が高く切り立ってけわしいさまをいう形容詞である。**○六月（ロク）**　「ロクグワツ」。底本にある振仮名は、音読すべきことを示すべく、作者自身の付したものである。「水無月」（I *158*等）参照。「Minazzuqi. P. i, Rocuguachi.」（『日葡辞書』）。**○峯に雲置クあらし山**　「峯（みね）に雲（くもお）置ク嵐山（あらし）」。「あらし山」は、嵯峨にある山。紅葉の名所である。既出（Ⅳ *669*）。その頂に大きな入道雲が腰を据えている感じを「雲置ク」といった。「嵐山が峯に雲を置く」という言い方である。入道雲を意味する「雲の峯」の語の連想もあろう。「里人に薦を施す秋の雨　越人　月なき浪に重石（ヲモシ）をく橋　羽笠」（『はるの日』）。

**大意**　さすがに夏の盛りの六月だ。嵐山の頂には入道雲がどっかり腰を据えて、炎天の感を増している。

**考**　「雲峯」（『或時集』）「嵐山」（『笈日記』『泊船集』『蕉翁句集』）「嵯峨に籠し比」（『陸奥衛』）等の前書がある。底本とした杉風宛書簡は元禄七年のもので、『行状記』も同年夏嵯峨野を逍遥しての吟としているから、この夏の落柿舎滞在中の句であることは確かである。この年六月十五日付李由宛書簡に、

京都ゟ膳所迄引退き候間ゝ、一通残し置申候。

とあるのによれば、芭蕉は十五日に落柿舎を出て膳所に移ったのである。従ってこの句は六月も十五日以前には成っていなければならぬことになる。

初五の「六月」を音読すべきことは、書簡に芭蕉自身の振仮名があるのによって明らかで、支考の『俳諧古今抄』も、

発句の五文字は、六月と音に吟ずべし。人もし、みな月と訓に唱へば、語勢に炎天のひゞきなからんとぞ。これらは音訓の妙用といふべき也。

と述べている。「水無月」では語勢に炎天の響きがないというのは、恐らく支考がこの句の詠作当時、芭蕉から聞いたことであろう。強い響きの語を冠に置いて「や」と切字を定め、炎天の感を出そうとしたことは疑いない。また『三冊子』には、

此句、落柿舎の句也。雲置嵐山といふ句作、ほね折たる所といへり。（赤雙紙）

と、中七の表現に苦心したことを伝えている。炎暑の盛夏であれば、この雲は当然入道雲であろう。それが峰にかかっているのではなく、眼前の山容の上にむくむくと雲塊を積み上げている。そのさまが宛かも嵐山の上に重石のように置いてあるように言いなして、感じを出そうとしたのである。嵐山の翠巒の色と入道雲の白とが対照をなして際立ち、万象寂として音もない日盛りの景が髣髴するところ、見事な表現といえよう。「あらし山」の名にかけて、

嵐山ならば吹きもちらすべきに、白雲の凝て動ざるは、げにみな月なりといひて、堪がたき其日の暑さを言外に置る……（杜哉『豪引』）

といったことも、作者の念頭にあったかも知れない。春の花や秋の紅葉とは別の、嵐山のたたずまいを見つけたところもこの句の手柄であるが、山本健吉氏の『芭蕉その鑑賞と批評』のように、去来への挨拶を重視するのはどんなものか。この点は余り強調せずともと思う。其角が『句兄弟』でこの句を「豪句」に分類しているのは適評であろう。

861

清瀧や波に藶なき夏の月　（六月廿四日付杉風宛書簡）

其便・正月廿九日付許六宛去来書簡・浪化日記・陸奥鵆・俳諧問答・旅寝論・去来抄

大井川浪に塵なし夏の月　（芭蕉翁追善之日記）

笈日記・三冊子・蕉翁句集草稿

夏季（夏の月）。

語釈　○清滝「キヨタキ」。現京都市北区の桟敷ヶ嶽を源流とし、高雄を経て愛宕山東麓を南流して保津川（桂川）に合する川の名であるが、句が落柿舎滞在中の作であることを考え合わせると、保津川に合流した後、嵯峨・松尾を流れる辺りをいったと見るのが妥当のようである。○波に藶なき「波に藶無き」。川の流れが澄んでいるさまの形容。「藶」は、かわらよもぎという草を指す字であるが、ここは「塵」に同じ。「いかでわれ心の雲にちりすゑでみるかひありて月をながめん」（『山家集』下）「Chiri.」（『日葡辞書』）。

大意　清滝の流れは本当に澄んでいる。塵一つない川波を夏の月が照らしていることよ。

考　「嵯峨に籠りて」（『其便』）「嵯峨に籠し比」（『陸奥鵆』）等の前書がある。元禄八年の正月廿九日付許六宛去来書簡に、

去夏古翁さがにて、
清滝や浪にちりなき夏の月
と申御句御座候。

とあるのによって、七年夏の落柿舎滞在中に詠まれたことが確かめられる。底本とした杉風宛芭蕉書簡に、「六月や」の句の次に並べられていることも一証となろう。

この句は芭蕉最後の病床で改案された句であるが、その事を記した支考の『芭蕉翁追善之日記』元禄七年十月九日

の条には、

服用の後支考にむきて、此事は去来にもかたりをきけるが、此度嵯峨にてし侍る大井川の発句おぼえ侍るかと申されしを、あと答へて、〽大井川浪に塵なし夏の月と吟じ申ければ、其句、園女が白菊の塵にまぎはらし（ママ）。是もなきあとの妄執とおもへば、なしかえ侍るとて、

清滝や波に散込青松葉　翁

とあり、『笈日記』も同文である。芭蕉逝去前後の模様を日記体に記した資料として『笈日記』が信ぜられた為に、改案前の句形は「大井川浪に塵なし」だったと思われて来たが、今栄蔵氏が「蕉句句形誤伝考抄」で指摘されたように、支考所伝の形は卒爾な勘違いによる誤りとおぼしく、芭蕉真蹟書簡と一致する去来系所伝の方が信憑性がある。ただ、支考が誤った「大井川」は、嵯峨の辺りを流れる大堰川を指すのだから、「清滝」が本来の上流の方を指すのではなく、下流の方を意味することの傍証になり得るであろう。大坂の病床での改案はかなり内容が異なるので、別の句として後で扱いたい。当面の句は、落柿舎に近い清澄な川の流れを月光が照らす夏の夜景を描いて、静寂な感じを出そうとしたものである。

*862*　夕顔に干瓢むいて遊けり　（六月廿四日付杉風宛書簡）

有磯海・泊船集・四山集・蕉翁句集

夏季（夕顔・干瓢むいて）。

**語釈**　**○干瓢むいて**　「干瓢剝いて」。夕顔の実を輪切りにして皮を取り、白い果肉の部分を薄く剝いて紐状にして、竿に掛けて乾燥する。この干瓢の製造は各地で行われるが、栃木県は産地として特に有名である。『毛吹草』以下に六月の季語としている。「干瓢むく」（『毛吹草』巻二）「諸国の瓠を産する地におゐて、瓠皮を剥て数丈の巾のごとくなし、竹竿に掛、夏日に曬せば、乾尽して

白麺のごとし。和俗蓄へて、余月にわたりて菜蔬となす。然れば古来より干瓢とばかりは雑也。只夏月是を製するの心、肝要に用ゆべし」（『滑稽雑談』）「家〳〵や干瓢むいて浦の風　惟然」（『住吉物語』）「Canpió. Fosu fisago.」（『日葡辞書』）。○**遊けり**「遊びけり」。

**大意**　夕顔の花の白く咲いているところで、干瓢を作るように実の皮を剝いて遊んだことだ。

**考**　元禄七年筆の六月廿四日付杉風宛書簡に嵯峨での句の一として見えており、この年閏五月下旬から六月十五日まで落柿舎に滞在していた間の作と推定される。

「夕顔に」の「に」は、「にてに通ふ也」（東海呑吐『句解』）といわれるように、「昼顔に米つき涼む」（Ⅰ157）「ほうらいにきかばや」（Ⅴ827）等の例と同じく、句の場を定める働きをする「に」である。また、「遊けり」とあるのによって、この作業が生活の為の事ではなく、全くの逸興であることも確かであろう。「干瓢をむく」という言い方は理窟をいえばおかしいけれども、［語釈］に引いた惟然の句にも同じ表現が見えるから、咎め立てする要もあるまい。白い花の咲く落柿舎の夕顔棚の下で涼みながら、慰みに瓢の実を剝いてみている芭蕉の姿が髣髴する。杜哉の『蒙引』は、

……其花にその実をむくとは、花実自在の俳諧をして、ほそみをたのしみ遊ぶとの事を比興してかくいへるならん。

と見ており、花実自在の俳諧を比興したというのは見当ちがいながら、夕顔の花に対してその実を剝くというところに興を感じた句であることは、潁原博士の『新講』の指摘された通りと思われる。この点が句の俳意で、軽みのあらわれでもあった。

……夕顔と干瓢との配合を訳なく言ひ放つた、無邪気な作の内に、少なからぬ趣味を見出す事が出来る、佳い句の部であらう。斯う云ふ訳のないつまらぬ事は人のちよつと云へないものである。（『芭蕉句集講義』小峰大羽）

という評は良い。

去年の夏なるべし。
去來別墅にありて

*863* **朝露によごれて涼し瓜の泥** （笈日記）

喪の名残・染川・俳諧問答・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・落柿舎日記

朝露や撫て涼しき瓜の土 （六月廿四日付杉風宛書簡）

画賛

朝露によごれて涼し瓜の土 （木枯）

続猿蓑・泊船集

夏季（涼し・瓜）。

**語釈** ○**去年の夏** 『笈日記』の「去年(きょねん)」は、凡て元禄七年を指す。以下の前書は支考の文。○**去来別墅** 「キョライベッショ」。嵯峨にあった去来の別荘落柿舎のこと。（Ⅴ *859* 前書）参照。別墅は既出（Ⅱ *357* 前書）。○**朝露** 「アサツユ」。朝に地上の草木などに置く露。「露」は秋季であるが、この句では「涼し」や「瓜」の方が季語として立つ。「あさ露や欝金畠の秋の風　凡兆」（『猿蓑』巻三）。○**よごれて涼し** 「汚(よご)れて涼(すず)し」。よごれるのは露にではなく、下の「泥」によごれるのである。「涼し」は、畠の瓜を見た印象を感覚的に把握した表現。「藺の花や泥によごるゝ宵の雨　鈍可」（『あら野』巻三）。○**瓜の泥** 「瓜(うり)の泥(どろ)」。「瓜」とのみいっても、実際は真桑瓜の類を指す。（Ⅱ *293*）等参照。

**大意** 瓜が泥にまみれたまま朝露に濡れているさまの、何と涼しげなことよ。

**考** 「朝露や」の句を披露した杉風宛書簡は元禄七年筆のもので、嵯峨での四句を並べた最後がこの句である。この初案形が成ったのが、六月十五日までの落柿舎滞在中だったことは確かであろう。芭蕉歿後の『笈日記』に、「よごれて涼し瓜の泥」の句案が初めて現われ、同じ頃の『木枯』（壺中・芦角撰）には「よごれて涼し瓜の土」ともあって、

後者の形は『続猿蓑』と『泊船集』がこれを採っている。土芳の『三冊子』には句の推敲について、

　この句は、爪（ママ）の土とはじめ有。すゞしきといふに活たる所をみて、泥とはなしかへられ侍るか。（赤雙紙）

と述べ、「瓜の土」を初案とする。土芳は恐らく「撫て涼しき」の最初の句形は知らずに、専ら「土」と「泥」との推敲関係を問題にしている如くであって、更に『蕉翁句集草稿』では、

　此句自筆に、泥と有。続猿には、瓜の土と有。さが去来別墅にての句也。

と記している。『草稿』のこの部分を見ると、土芳は最初「瓜の土」の形に従っていたのを「泥」と後で直しており、「此句自筆に、泥と有」は、後の書き加えである。彼は初め「瓜の土」を定案と考えていたが、「泥」と書いた芭蕉真蹟を見るに及んで考えを変え、「泥」を定案と見るに至ったようである。『続猿蓑』に「瓜の土」とあるのをどう評価するか、人によって説の分れるところで、今栄蔵氏の「蕉句句形誤伝考抄」では、『続猿蓑』の句形を最終案とし、『笈日記』の句形は誤伝と見ている。芭蕉親撰といった形で成立した『続猿蓑』を尊重するのは尤もな態度であるが、私は土芳が「泥」とした真蹟を見ている点に留意したい。杉風宛に見える初案から「よごれて涼し瓜の土」に推敲し、更に「土」を「泥」に改めて治定したのであろう。『続猿蓑』に「土」とあるのは、板行の際の杜撰とも考え得る。最近の『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』で井本農一博士は、一旦「泥」と直してみたが考え直して「土」に戻したかと見ておられるが、「泥」というすぐれた表現を何故捨てたのか、よく分らない。

　畠からもいで来た瓜という見方も十分成り立ち得るが、「朝露」があるから、ここはやはり畠に蔓についたままころがっている趣と見た方がよかろう。最初の「撫て涼しき」の形は、「撫て」が余計な言葉で無意味に聞えるので、これは当然改められなければならなかった。加藤楸邨氏はこの初案について、

　……それでは、触覚によって瓜についた土の涼しさを感じとったことになり、やや大袈裟な身ぶりが気になる。中七が下五に続く修飾語のかたちをとっているので、上五に切字「や」を用いたのであるが、「朝露」と「瓜の

士」とが二物配合に近い印象を与えることになり、感覚の新鮮さが必ずしも出てはいないようである。再案が視覚的把握によって句を統一し、中七に休止を置いた構成にしたことは、この点で、句の感覚性をいちじるしく高めたとおもう。（『芭蕉全句』）

と精細に述べておられる。「土」と「泥」の優劣については、

土を泥と案じかへたのは、土といへば何となく乾いた感があり、泥の方が濡れた感じを十分現はすからであらう。そこに涼味が湧いて来る。一字をも忽せにしない良匠の苦心である。（『新講』）

という頴原博士の説に言い尽されている。「朝露によごれて涼し瓜の泥」という三つの語の緊密な映発関係を味わいたい。印象鮮明な写生句という「軽み」の一面をよく示した作といえよう。「塵に交はる世なれ共、其心を変ぜざる心操を歎ずる句也」（正月堂『師走嚢』）などという古注の説は、詩を知らない僻説である。

*864*

人〳〵つどひゐて、瓜の名所なむ、あまたいひ出たる中に

瓜の皮むいたところや蓮臺野　（笈日記）

泊船集・金毘羅会・蕉翁句集

夏季（瓜）。

**語釈** **○人〳〵つどひゐて**　「人〳〵集ひ居て」。門人達が落柿舎に居る芭蕉の許に集まっていて、の意。以下の前書は支考の文である。「手間隙いれし屏風出来たり　洒堂　朝寝する内に使のつどひ居る　游刀」（『画兄弟』）「Fitoga mairi tçudô.」（『日葡辞書』）。**○瓜の名所なむ**　「瓜の名所なむ」。瓜の産地として名高い所を、の意。下の「いひ出たる」に続く文脈である。「名所」は「ナドコロ」と訓んでもよいが、歌枕とは異なり、名産地といった意味に用いられている。『毛吹草』巻四、諸国の名物の条には、山城の「八条　浅瓜」「九条　真桑　青瓜」「鳥羽瓜」「狛越瓜」等が挙げてある。「なむ」は係助詞だが、結びは「いひ出たる中に」

に消えて、文面に表われない。○**あまたいひ出たる中に**　「数多言ひ出でたる中に」。「いひ出づ」は、句を詠む意。瓜の名所の句を多く作った中の一つだといふのである。「和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ・山がつのしわざも、いひ出つればおもしろく」(『徒然草』十四段)。○**瓜の皮むいたところや**　「瓜の皮剝いた所や」。「瓜」は、真桑瓜など食用になる瓜。食べる為に皮を剝くのである。(Ⅲ *521*、Ⅳ *778*)参照。「むいた」は口語調。「や」は、いうまでもなく詠嘆の切字である。「相国、御前に枇杷の有りけるを一ふさ取りて、琴のつめにてかはをむきて」(『古事談』巻一)。○**蓮台野**　「レンダイノ」。今の京都市北区紫野・鷹峯あたり、船岡山の西から紙屋川に至る一帯の野。洛北七野の一で、東の鳥辺野、西の化野と共に葬送の地として知られ、古く火葬場もあった。「蓮台野　大根」(『毛吹草』巻四)。

**大意**　何時ぞやうまい瓜の皮を剝いて食べた所、あの蓮台野も瓜の名所といってよい。

**考**　『蕉翁句集』には「人々つどひて瓜の名所あまた云出たるに」と前書して、元禄七年の部に収める。『笈日記』には「京部附嵯峨」の冒頭に前の「朝露に」の瓜の句を掲げ、その次に当面の句が配されており、「朝露に」の前書「去年の夏なるべし。去来別墅にありて」は次の句にもかかると見てよいから、七年夏落柿舎滞在中の作と推定される。華雀の『芭蕉句選』には中七が「むいた所か」となっているが、その拠るところを知らない。

蓮台野が葬送の場である為に、無常観に結びつけるような説も古くから見えるが、何れも見当ちがいである。蓮台野は瓜の名産地でも何でもない。ただ嘗て其処で瓜を食べたことを回想して、その場の興としたまでなのである。潁原博士が、「瓜をむきたる姿を蓮台と見立、野の字を添て句をなし給ふ作意」(杜哉『蒙引』)とする説や、「蓮台野はあらゆる人々が、一切世上の煩悩の皮を剝き去る、即ち真の空に帰する場所やナア」(服部畊石氏『芭蕉句集新講』)と解する説を批判して、

これらは句が単純な即興たる事を見ず、強ひて蓮台野に意を求めようとしたものであらう。詞書から句につゞけてそのまゝに解すれば、たゞ蓮台野もまた瓜の一名所だといふ事を言つたにすぎない。人々が東寺だとか賀茂だとか、狛だとか、瓜の名所を竝べ立てて居る。芭蕉もいつか旨い瓜を食べた所のことを思ひ出した。そこは蓮台

野だつたといふのである。「瓜の皮剝いたところ」とは、要するに「瓜を食つたところ」といふ意に外ならない。しかし皮を剝いたといふので、当時路傍の茶店などに休んだ時のさままで思はれて面白い。（『芭蕉俳句新講』）と述べられたのが、最も精確な見方であろう。名産地ではない蓮台野を持ち出して、これも瓜の名所だといったのが、「興」であり「軽み」なのである。

野明亭

865 すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹　（住吉物語）

泊船集

涼しさを繪に寫したり嵯峨のたけ　（蕉翁句集）

野明亭

夏季（すゞしさ）。

語釈　○野明亭　「ヤメイテイ」。「野明」は、筑前（現福岡県）福岡の人。はじめ奥西善六、後に坂井作太夫包元（或いは宗正）と称した。黒田藩に仕えて千百石を食む大身であったが、仕官を辞して上京し、嵯峨に隠棲したという。俳諧は去来門、初号鳳仭。正徳三（一七一三）年、五十歳前後で歿。この人が芭蕉直接の指導を得たのは、元禄七年最後の旅での落柿舎滞在中のことであった。○絵にうつしけり　「絵(ゑ)に写(うつ)しけり」。「絵に描いたようだ」と解する説が多いが、この表現を譬喩に取るのは無理である。実際に絵にしたことと解したい。［考］及び（Ⅲ634前書）参照。「彼僧達ノ本尊ノ形、炉壇ノ様、画図ニ写(ウツシ)テ註進ス」（『太平記』巻二）。○嵯峨の竹　京の西郊嵯峨(さが)は、竹の名所である。（Ⅳ671等）参照。

大意　嵯峨の地の竹は如何にも涼しげ。その涼しい感じをあらわそうと、絵に描いてみたことだ。

考　芭蕉と野明との交渉については、『去来抄』同門評の「駒買に出迎ふ野べの薄かな」（野明）の句の条に、

予此人を教る事とし有。曽て不通。一とせ先師廿日斗の旅ねに抜群上達せり。

とあるのが手掛りになる。野明が芭蕉と俳席を共にしたのは元禄七年夏の落柿舎滞在中の付合二巻のみで、「廿日斗の旅ね」は元禄七年閏五月下旬から六月十五日までの嵯峨滞在を指すこと明らかであるから、当面の発句もこの間の作と見て誤りあるまい（大内初夫博士「俳人野明について」―『芭蕉と蕉門の研究』―参照）。『蕉翁句集』の句形は誤写と思われる。

句意については、

此句、涼しき体を云立て、たとへば嵯峨の竹を絵に写すがごとしと也。嵯峨は竹多き所にて、其所もいさぎよき所也。絵に写したるごとしといへる所、一作意也。（正月堂『師走嚢』）

嵯峨の竹園の涼しさを、そのまゝに庭に移されたるは、絵にて見るごとく也と称せり。（東海呑吐『句解』）

嵯峨は一帯に竹が多いので、野明亭の庭や垣のあたりにも、涼しげに竹が茂つて居たのであらう。竹葉が風にそよいで緑漪の如きさまを、恰かも涼しさといふものを絵にしたやうだと言つたのである。言はば、竹が涼しさの象徴なのである。（頴原博士『新講』）

といった説が多く、内藤鳴雪は、

嵯峨の藪を見ると涼しい気持がする、其の涼しさは実に画景の如し、といふのを画にうつしけりと言つたのであらう。又た一方から解すると、涼しい景色をよく画にうつしてゐるわい此の嵯峨の竹の幅は、と或る画幅を見て賞賛した句とも思はれる。（『評釈』）

と二説を挙げるのみで何れとも決せず、余り高く評価していない。しかし、「絵にうつしけり」を「絵にかいたようだ」「絵のようだ」と解するのは、表現に忠実でなく従い難い。

……文字どほり、この眼前の嵯峨の竹を、その涼しげな趣に誘はれて絵に写してみたことだといふ意にとりたい。野明亭での挨拶の意が含まれてゐるといふことはそれでも充分解決される。つまり、その家居にふさはしい矚目

の竹の涼しさに絵心を誘はれたといふところに、家居を褒美する意が出てゐるのである。(『芭蕉講座』発句篇(下))

という加藤楸邨氏の説が出て来た所以も、その辺にあろう。後の『芭蕉全句』では、句解が涼しさの譬喩とする立場をとりながら、絵心を誘われたと見る説もそのままで、全体として不審であるが、私には右の『講座』の説が最も納得出来るように思う。嵯峨の竹の画幅を褒めたというのも一説ではあるが、詩情は『講座』の説の方が豊かである。

他には、

涼しという体感を仮に視覚に置き換えてみれば、嵯峨の竹を絵に描いたようだというのであろう。(井本農一博士『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』)

という説も見える。

野明亭

866 清瀧の水汲よせてところてん (笈日記)

清瀧の水くませてやところてん (泊船集)

蕉翁句集草稿

夏季(ところてん)。

**語釈** ○**野明亭** 前の句の条に既出。(V861)参照。○**清滝の水汲よせて** 「清滝の水汲み寄せて」。「清滝」は、嵯峨あたりを流れる保津川の称。その川水を汲み寄せて、の意。「たまく心まめなる時は、谷の清水を汲て自ら炊ぐ」(「幻住庵記」)。○**ところてん** 乾燥させた天草を水に浸して搗き、それを簀の上にひろげて干した後、煮て溶かして麻袋で絞り、型に入れて固めた食品。暑い時季に好まれ、冷い水に放しておき、ところてん突きで突き出して、酢や醤油、蜜などをかけて食べる。古くは「こころぶと(心太)」と呼ばれ、京の市で売られていた。「こゝろぶと 俳。今ところてんといふもの也。庭訓に、西山の心太と侍るを、或説に東

山の無に対したれば、大根也といへり。先年其説にしたがひて、予も発句などにいひ捨し事侍りし。然るに、職人尽歌合にこゝろぶとの歌に、わが心てへとよめり。判の詞に、是心ぶとを売ありく物の詞なるよしきこゆ。然れば、心ぶとへといふべきを、こゝろてんといひ、又ところてんとあやまりいひつたへたるなるべし。先非悔るにかひなくこそ」（『増山井』）「白雨に躍り出でけりところてん　許六」（『浮世の北』）。

**大意**　清滝川の清流を汲み寄せて、ところてんのおもてなしとは。暑い盛りには、この上なく有り難い。

**考**　「野明亭」という『笈日記』の前書を信ずれば、元禄七年夏嵯峨の落柿舎滞在中の吟と推定される。『泊船集』には「清滝や波にちりこむ青松葉」（V910）の句の左注に、

波に塵なしといふを、か様になしけるは、翁の遺言也。へ清滝の水くませてやところてんとありしは、野明に引さきすてさせたまふ。笈日記ニ水くみよせてといふは、あやまりなるよし。

とあり、これによって『笈日記』の句形を誤伝と見る説が多い。しかし、七年夏嵯峨での句「清滝や波に塵なき夏の月」（V861）の句を「波にちりこむ青松葉」と改案した時に、野明方にあった句案草稿の破棄を命じたのは、「波に塵なき」の句の方であって、「ところてん」の句ではなかった（「波にちりこむ青松葉」の句の条参照）。『泊船集』の撰者風国は、「清滝」の名が句頭にある為に、「波に塵なき」と「ところてん」の句を混同して誤ったことは明らかで、『句選年考』に、

しかれば泊船集誤りなるべし。清きをほめて塵なき事を云へる所、清滝・白菊にこそ紛はしけれ、波にちりこむ青松葉に水汲よせて心太の紛はしき事侍らざるか。

と述べている見方が首肯される。従ってこの左注は全体として信じ難いものであろう。ただ、その問題とは別に、『泊船集』の伝える「ところてん」の句形に、何か根拠があったかも知れないという可能性はある。「ところてん」の句の『笈日記』の形では明確な切字がないのに対して、『泊船集』のように「水くませてや」とあれば切字がはっきり

りするし、句の調べにも芭蕉独得の特色が感ぜられるのである。去来を中心にした野明・風国の関係から、このような句案の存在を知り得る事情は、何がしか考えられよう。しかし、それも確かな根拠があるわけではなく、『笈日記』の句形にしても、全く非として却ける程のものではない。このように考えて、ここでは『笈日記』の句形を本位句とした。

「水汲よせてところてん」の形では、「ところてん」と据えて切字に代えたわけであろうが、半田良平氏の『新釈』に指摘してあるように、「汲よせて」のところにも軽い休止があると見たい。ところてんという卑近な季節の食物を材とし、「清滝」の名を生かして清流の趣を髣髴させているところも良く、挨拶の即興句として捨て難い味わいがある。

曲水亭

867 夏の夜や崩て明し冷し物　（六月廿四日付杉風宛書簡）

笈日記・ゆずり物・喪の名残・続猿蓑・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（夏の夜）。

語釈 ○**曲水亭**「曲水（きょくすい）」は、菅沼氏、名は定常、通称外記。膳所藩重臣の家柄である。細道の旅の後上方にあった芭蕉に入門、その篤実清廉な人柄を愛され、元禄五年二月十八日付の所謂「風雅三等之文」で、芭蕉はこの人を俳諧で最上位の十人足らずの内に数えている。享保二（一七一七）年、同藩家老の不正を憎んでこれを斬り、自刃して果てた。享年六十余か。初めの号は「曲水」で、元禄五年の『深川』あたりから「曲翠」に変えている。芭蕉は書簡などで「水」と「翠」を混用しており、明確に使い分けをしていない。○**夏の夜**「夏の夜（なつのよ）」。「短夜（みじかよ）」と同じであるが、それよりは夜の風情を楽しむ感じがある。「月に柄をさしたらばよき団扇」（宗鑑）蚊のおるばかり夏の夜の疵　越人」（『あら野』員外）。○**崩て明し冷し物**「崩（くず）れて明（あ）けし冷（ひや）し物（もの）」。「冷し物」は、水や氷で冷した果物・野菜や麺類の類をいう。それが夜宴の間に形が崩れて夜明けに至ったさまである。信天翁の『笈の底』に、「崩れ

で」と否定の意に取り、短夜ゆえに冷し物に箸を入れる間もなく夜が明けたと解しているが、僻説に過ぎない。「冷し物のこと、夏は瓜など、または何にても、錫の鉢或は茶碗のものなどに入れて、冷し候て出すをいふなり」（『酌次第』）「汁物、焼もの、ひたしもの、吸物、煮物、あへものなどと同じく料理の道の語、大根、栗、烏芋、梨、林檎、柘榴、九年母、柿、ぶだう、いちご、蓮根、防風などが其材料になる、水菓子とはちがふ。冷す故ひやしものと云ふ」（『続芭蕉俳句研究』幸田露伴）「冷し物は礼容筆粋に、冷しものは大酒の上今一献などゝ強ひて盛る時の事なり、尤も春より秋までは一トしほ其巧あるべし、時の機転第一なり、青梅、金柑、慈姑、林檎、白瓜、栗、梨子などの類を錫の鉢にて出すべし、とあり。冷しもの、おさへものなどいふ言葉も其物も、今は見聞くこと少くなりたれど、冷しものは特更夏の宴には主の盛意、客の賞翫たりしなり」（露伴『評釈続猿蓑』）「酔出ければ、ひやし物とて時ならぬ瓜を出しぬ」（『西鶴諸国ばなし』巻二ノ四）「Fiyaximono.」（『日葡辞書』）。

**大意**　夏の夜を徹した宴も白々と明けて来て、卓上の冷し物も形が崩れている。歓を尽した後、ふと寂しくなることだ。

**考**　『続猿蓑』には、この句を発句とした芭蕉・曲翠・臥高・惟然・支考ら一座の歌仙一巻が収められ、その前に「今宵賦」と題した支考の文があって、当夜の模様を知ることが出来る。その文は左の如くである。

今宵は六月十六日のそら水にかよひ、月は東方の乱山にかゝげて、衣裳に湖水の秋をふくむ。されば今宵のあそび、はじめより尊卑の席をくばらねど、しば〳〵酌てみだらず。人そこ〳〵に涼みふして、野を思ひ山をおもふ。たま〳〵かたりなせる人さへ、さらに人を興ぜしめむとにあらねば、あながちに弁のたくみをもとめず。唯萍の水にしたがひ、水の魚をすましむるたとへにぞ侍りける。阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて、ことしはみな月さつきのあはい（ママ）を渡りて、伊賀の山中に父母の古墳をとぶらひ、洛の嵯峨山に旅ねして、賀茂祇園の涼みにもたゞよはず。かくてや此山に秋をまたれけむと思ふに、さすが湖水の納涼もわすれがたくて、また三四里の暑を凌て、爰に草鞋の駕をとゞむ。今宵は菅沼氏をあるじとして、僧あり俗あり、俗にして僧に似たるものあり。その交のあはきものは、砂川の岸に小松をひたせるがごとし。深からねばすごからず。かつ味なうして人に

あかるゝなし。幾年なつかしかりし人〳〵の、さしむきてわするゝにたれど、おのづからよろこべる色、人の顔にうかびて、おぼへず鶏啼て月もかたぶきける也。まして菟祭る比は、阿叟も古さとの方へと心ざし申されしを、支考はい勢の方に住どころ求て、時雨の比はむかへむなどもおもふなり。しからば湖の水鳥の、やがてばら〳〵に立わかれて、いつか此あそびにおなじからむ。去年の今宵は夢のごとく、明年はいまだきたらず。今宵の興宴何ぞあからさまならん。そゞろに酔てねぶるものあらば、罰盃の数に水をのませんとたはぶれあひぬ。

元禄七年筆の杉風宛書簡に見えることによって、この句が七年夏の句であることは明らかであるが、右の支考の文に、「阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて、ことしはみな月さつきのあはいを渡りて、伊賀の山中に父母の古墳をとぶらひ、洛の嵯峨山に旅ねして」とあるのも、七年夏の芭蕉の動静を叙したものである（深川の新芭蕉庵は元禄五年五月に成ったのだから、厳密にいえば三年にしかならないが、支考はその前年冬、芭蕉が江戸に帰着した時から起算して、「四年の春秋をかさねて」と書いたのであろう）。芭蕉は六月十五日に嵯峨から膳所へ移ったので（八一頁参照）、支考の文に描かれた宴はその翌十六日夜、膳所の曲翠亭で催されたことになる。句の成ったのは十七日の明け方以降であったろう。なお、この年は外ならぬこの六月十六日が立秋であったが、芭蕉は細かい暦日にはこだわっていない。

「崩て明し」は、「初めは手際よく盛揃へたるも、次第に狼藉になりて、果は夜も明る」（東海呑吐『句解』）と解してよい。門人達との清興の一夜が明けて、遊びの後の寂しさが何がなし感ぜられるのを、崩れた冷し物に焦点を当てて表わしたのであって、この冷し物にはそのような気分を象徴した味わいがある。近代の諸家の鑑賞を引いておこう。

……この句は、第一、取材が面白い。冷し物が崩れて居たといふやうなことは、普通人にも気づかぬことはあるまいが、そこから一つの詩を見出して来ることは却々容易でない。つぎに表現が巧みである。普通人ならば、冷しもの崩れて夏の夜は明けぬ、位の程度で現はすところを、飽く迄冷し物を中心にして、その冷し物のあるあたりが茫と明るくなつて来たといふ風に叙べてゐる為め、その場の情景が、読者の脳裡にはつきり再現出来て、巧

みな具象的表現となつて居る。いかにも渋味のある佳句である。（半田良平氏『新釈』）

一夜の清興はまだ尽きないのに、早くも暁の色が白く動いた。名残を惜しむその夜明の心持へ、形も崩れてしまつた冷し物の趣が、ぴつたりと相応じて来るのである。これは所謂同じ匂ひのうつり合ひである。空しく崩れて明けた冷し物に、白々した寂しい気もちが響いて居る。これは物と心と完全に合一した状態である。「崩れて明けし」といふ表現にも寸分の隙もない。（穎原博士『新講』）

十六夜の月見の饗宴が明け、興過ぎて後の何かしらじらしい感じが詠みこまれている。その感じを、崩れた「冷し物」という、一つの具象物によって捕えているのである。……この「崩れて」と言ったのが、この一句の眼目で、一夜を語り明かし、飲み明かして、座の空気も崩れてしまっている。「崩れて」は「冷し物」の形容でありながら、この座の空気でもあり、作者の心の色でもあり、そしてそれは短夜の白々と明けて来た時刻そのものでもあるのだ。挨拶の気持もはなはだ軽い。それは日常の俗語を用いて、「軽み」を実践した句と言うことができるが、単なる軽さに止まらず、それが深い心の色を言い取るまでに到っている。同じく「軽み」を実行しながら、江戸の俳人たちの市井の風俗に見出だしたような「軽み」を、芭蕉はすでにはるかに引きはなして、このような境地に到達していた。「軽み」の単純で直接的な表現、心のねばりを去った一種の乾いた表現の、到り着く裏側を、それはすでに予感させている。許六は「かるきといふは発句も付句も、求ずして直に見るがごときを言ふ也。詞の容易なる、趣向の軽き事をいふにあらず。腸の厚き所より出て、一句の上に自然とあり」と言っている。この句の如きはそれに該当し、『炭俵』『別座敷』の軽みとはすでに異質なものに、芭蕉だけが到っていたことを思わせる。私はそれを「軽みの昇華」と呼びたい。死の前に作った、深い寂寥相を示した句は、「軽み」を経た上での一つの到達点なのだが、そのような表現の深味は、この句あたりから出発しているのである。（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）

日常的な素材を通じて、歓楽の後の寂寥――作者の隠微な心の色が滲み出ているところに着目すべき句なのである。最後に異常な飛躍を示した芭蕉の作風の展開を「軽みの昇華」と呼ぶ山本氏の説は、特に注目されよう。

*868*

## 秋近き心のよりや四疊半 （蕉翁句集草稿）――蕉翁句集

木節亭にて

穐ちかき心のよるや四疊半 （初蝉）――ゆずり物・鳥の道・泊船集・雪の薄

夏季（秋近き）。

**語釈** ○**秋近き心のより** 「秋近き心の寄り」。「より」は、人の寄り合うことで、「寄り合ひ」「集ひ」に同じ。「より」の名詞であるのに対して、「よる」という本文に従えば動詞になる。寄り合うのは人であるが、それを無形の「心」とし、季節感と一体にして「秋近き心」とした特色ある表現である。「一条禅閤の御説に云、春秋の鄰といふ事は、ちかしと云心なり。夏の鄰共云也。△此説、皆秋ちかきと云心也。又、秋を待と云も、末夏の詞なり」（『滑稽雑談』）「六月尽／変化めく雲や一夜の秋ちかし 浪化」（『白扇集』）「掘おこすつゝじの株や蟻のより 雪芝」（『続猿蓑』下）。○**四畳半** 「ヨデフハン」。茶室など、畳を四枚半敷いた小さい部屋。「河内の国へかよふ飛石 桃青 四畳半くづやの里も浦ちかく 信章」（『桃青三百韻附両吟二百韻』）「Ichigiô.」（『日葡辞書』）。

**大意** この四畳半の俳席は、秋の近いことをしみじみ感ずる心を持つ人々の寄り合いであることよ。

**考** 「元禄七年六月廿一日／大津木節庵にて」（『鳥の道』）「大津木節亭」（『泊船集』）等の前書があり、『鳥の道』の年記は拠る所あるものと思われる。『鳥の道』『ゆずり物』『雪の薄』には、この句を発句とした芭蕉・木節・惟然・支考ら一座の歌仙一巻が収められている。この直後の六月廿四日付杉風宛書簡には、

二良兵へ其元へ下候へ共、盤子・素牛と申両人一所に付添為申候而、不自由成事無御座候間、御気遣被成間敷候。

とあり、芭蕉は恐らく六月十五日以降は義仲寺の無名庵に盤子（支考）・素牛（惟然）両人と共に滞在していたのであろう。その一日、二人を伴なって大津の木節亭を訪れて、歌仙を巻いたのであった。木節は望月氏、大津で医を業とし、医名を是好といった。大坂での芭蕉最後の病床に主治医として侍した人である。

『蕉翁句集草稿』で土芳は、中七をはじめ「心のよるや」と書き、「る」を見せ消ちして「り」と改めて、

是直に聞句也。初蟬には、心のよるやと有。木節亭と題を付て出す。

と記している。「よるや」の方が普通の言い方ではあろうが、土芳が芭蕉からじかに聞いたところが「よりや」であったという所伝は、やはり尊重しなければなるまい。「より」という名詞形は、［語釈］に挙げたように『続猿蓑』にも例があり、決して無理な語法ではない。歌仙の懐紙に「寄や」などと書かれていたのを、門人達の判断で「よるや」と訓んだのかも知れず、土芳の所伝を否定するに足る根拠は今のところ無いので、私は「よりや」を信ずべき句形と認める。なお、廿二日付野水宛書簡に「秋ちかき心よするや四畳半」とあるが、これは真簡とは認め難く、問題にならない。標掲した出典のうち、『ゆずり物』は「よるや」と仮名書きであるが、『鳥の道』と『泊船集』は「寄や」で、「ヨリ」「ヨル」何れにも訓める。

四畳半の茶室に集うた師弟四人は、何れも近づく秋の気配を感じ取っている。しんみりと寂かな気分に浸ろうとする同じ思いが、この俳席を支配しているのである。それを「秋近き心のよりや」と直截に表現したところがこの句の生命であろう。「心」といったのは一見観念的なようであるが、四人同心の思いが伝わって来て、「秋近きを感ずる心を持つ人々」の意であることは直ぐに分る。半田良平氏が、

見方によつては、多少観念的に思はれる弊がないでもないが、かういふ情景を、自分がいま現はすと考へて見れば、この句は、凡手には到底及び難いものだといふ気がする。矢張り芭蕉にして初めて作り得られる佳句である。（『新釈』）

と述べられた通りである。「秋近き」については、

> 「秋近し」を柔らげて余情を出す手法。「近き」で半ば切れる。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

という見方があるが、「秋近き心」と直ちに続いてこそ表現の力が生きるのであって、「近き」で半ば切れたのでは良くない。その点は、「秋深き隣は何をする人ぞ」（V 909）が、「秋深し」では駄目なのと同断である。「より」の語も、同じ思いに相寄る俳魂を感じさせる佳い表現と言えよう。それが挨拶の心にも適うのである。加藤楸邨氏と山本健吉氏の鑑賞を引いておく。

> まだ暑さの名残は去りきつてゐないが、折々風のひやりとする感じに秋が近づいてゐることを感じてゐた。誰も感じてゐて、そして黙つてその秋近い感に浸つてゐたのであらう。さういふお互の感じは、四畳半といふ小じんまりとした簡素な菴の中であるだけに相寄るといふ感じを深めたのである。秋の近いことを感じてゐる心は言ひかへてみれば、俗の人情ではなく、ひえびえと細い一筋を通して物の微に感ずる心であり、風雅のまことを感ずる心でもある。さういふまことの中にあはれを感じてゐる心と心とが自づと相寄る感がしたのである。「寄る」は「寄り集る」だけでなく、「寄りあふ」のである。……庭前の草木も秋近きさまであり、座中の四人も秋近き感じに浸つてゐる。それが、「秋近き心の寄るや」と把握せられたものであった。物の気配を感得し、その真情に感合してゆくところのたしかな把握である。さういふ心が語の中にしづかに滲透してゐる。日常の用語と何の奇もない素材の中に、味へば味ふほど言ひやうのない微妙な味が滲み出してくる作である。
>
> かういふ句になると、発想の契機は外のものではなくなつて来てゐる。内奥の気分がそのまゝ契機となつてにほひ出て来てゐるのである。軽みといふことも発想の契機の面から見れば、かうした内なるゆらめきが直に句に匂ひ出るところをいふものと見てよからう。よく味ふと近づいてゐる身の秋を通してひそかに死の跫音が感ぜられてゐるやうな作である。（『芭蕉講座』発句篇(下)）

……この句自身が何か近づく身の秋を感じさせるような、寂寥の気が濃くみなぎっているのである。表現はきわめて平俗であり、「軽み」の実践であって、「四畳半」と突き放して言い切ったところも、「冷し物」の句に似ている。いずれも心のねばりを去った直接的で平明な表現法を取りながら、この句はいっそう心の深い層に達している。

……「軽み」の特質の一つとして、これまでに詩法として駆使されたメタファーによる表現の不透明性を去って、言葉がじかに事物の核心へ迫るような透明性への方向を取るに到ったことが挙げられると思う。だが『炭俵』時代の、……ひたすらに平明な句と違って、この句などは、同じ平明さのなかから、深い心の奥を思わせるような別の声が響いてくるようである。そしてその声は、死までの四箇月あまりのあいだに、ますます心の深所からの声となる。メタファーを拒否した「軽み」への志向が、在来のメタファーとは別のもっと高次のもの、人生の寓意に参ずるような響きを、新しく生み出してくる。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

納　涼二句

去年の夏又此ほとりに遊吟して、游刀亭にあそぶとて

869　さゞ波や風の薫の相拍子　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

夏季（風の薫）。

**語釈**　○**去年の夏**　「去年」は元禄七年を指すのが『笈日記』の例である。以下の前書は支考の文。○**此ほとりに遊吟して**　「此のほとりに遊吟（いうぎん）して」。この句文は『笈日記』湖南部にあり、「此ほとり」は大津・膳所辺を指す。「遊吟」は、その辺を歩いて句など作ること。「ほとり」は既出（Ⅰ126前書等）。「八瀬・おはらに遊吟して」（『猿蓑』巻三、凡兆発句「まねき〳〵」前書）。○**游刀亭にあ**

**そぶとて** 「游刀亭に遊ぶとて」。「游刀」は膳所の蕉門俳人で、能太夫だったとも伝えられる。姓氏生歿年等未詳。その家に一寸立寄ったのであろう。○**納涼二句** 「納涼」は、暑中物蔭で涼むこと。既出（Ⅱ*401*前書等）。「二句」は、当面の句と次の「湖や」の句とを指す。この順序で『笈日記』に二句並んでいるのである。○**さゞ波** 琵琶湖に立つ波。もともと湖国近江（現滋賀県）に縁の深い語である。（Ⅰ*77*）参照。○**風の薫の相拍子** 「風の薫りの相拍子」。「風の薫」は、夏の季語「風薫る」と同じ。青葉若葉の香を乗せて吹く南風の形容である。（Ⅲ*512*等）参照。「相拍子」は、風と波の拍子が合うことをいうか。「中の拍子」（Ⅲ*593*）と同じく、中間に挿入される音とも取れる。

**大意** 湖にさざ波が立っている。その波の音が、吹き渡る薫風と拍子を合わせたようで、如何にも快い。

**考** 『笈日記』の前書によって、元禄七年夏湖南滞在中の吟と推定される。嵯峨へ赴く前か後か、徴すべき資料はないが、先ずは落柿舎逗留の後であろう。『蕉翁句集』は「游刀亭納涼二句」と題して、『笈日記』と同じく次の句と共に出しているが、元禄四年としているのは信じ難い。

ざぶりざぶりと湖岸を洗う波の音。それが吹き渡る薫風と拍子を合わせたようだと興じて、さわやかな湖畔の趣を賞した句で、游刀が能太夫であったとすれば、「拍子」という能楽用語を用いて挨拶の意を籠めたことになる。「謡曲「東岸居士」の波と風、ささらと鼓の合奏の一節などが思い寄せられているかもしれない」（『松尾芭蕉集1』井本農一博士）という指摘にも留意したい。

*870* 湖やあつさをおしむ雲のみね　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

夏季（あつさ・雲のみね）。

**語釈** ○**湖** 「ミヅウミ」。琵琶湖を指す。「湖水」（Ⅱ*397*）参照。「湖の水まさりけり五月雨　去来」（『あら野』巻七）「Mizzuvmi.」（『日葡辞書』）。○**あつさをおしむ雲のみね** 「暑さを惜しむ雲の峰」。「雲のみね」は、夏空に立つ入道雲。既出（Ⅲ*500*）。夕方の入道

雲を、日中の暑さを惜しんでいるかのように言い做したのであろう。「おしむ」は「をしむ」の仮名ちがい。

**大意** 琵琶湖に臨む此処は、夕方になるとさすがに涼しい。空には昼の暑さを惜しむように、入道雲がまだ立っているが。

**考** 『笈日記』湖南部に前の「さゞ波や」の句と共に、游刀亭納涼の二句のうちとして収められており、元禄七年夏の句と定めてよい。

名にしおふ八ツの眺めは更に、大湖をめぐる雲の峰の影水底にしづみて、その涼しさ浮世の外の心地せらるゝなるべし。かゝる楽みも此暑中ににずと、暑のいぬるをおしみ給ふの意ならん。所詮は湖中の涼しさを称せんとて、厭ふべき暑さをかくいへる滑稽の手段、感ぜざらんや。（杜哉『蒙引』）

湖上一面は涼風が吹き向ふに雲の峯が立つてゐるといふ客観の景色に過ぎぬが、それを修辞上雲の峯を擬人的にして、湖面には水も天も涼気みち〳〵て殆んど夏の暑さを打消してしまつてゐる、斯く暑さのなくなつてゐるのに独り雲の峯のみが暑さうにむら立つて暑さのなくなるのを惜んでゐるかのやうに見える、といつたのである。（内藤鳴雪『評釈』）

といった解で、大体よいであろう。夏の去るのを惜しむ意に取る説も多いけれども、「あつさ」を特に言い立てているから、日中の暑さと対照的に、夕方の涼しさを含みとしたものと見たい。雲の峰に暑さの名残がありながら、湖畔は涼しくなっているのだ。日中の暑さから夕方の涼しさへの移行を技巧的にあらわそうとして、雲の峰が暑さを惜しんでいるかのように擬人的に表現したのであるが、半田良平氏が、

芭蕉の眼のつけどころはいゝ。情景としても、いかにもストライキングで面白い。しかし『暑さを惜しむ』は、あまりに意想を出し過ぎて居る。そして意想を出すに急なる結果、対象の具象的表現を忘れたかの観がある。（『新釈』）

と指摘されたような欠点は覆い難く、成功した句とは成っていない。「あつさをおしむ」を「湖水の涼風に打消されて暑さを出し惜しみしているかのように見える」（山本健吉氏『全発句』）という説もあるが、誤解というべきであろう。

曲翠亭にあそぶとて、田家といへる題を置て

871 飯あふぐかゝが（ママ）馳走や夕涼　（笈日記）

木枯・泊船集・蕉翁句集・きまかせ

夏季（夕涼）。

**語釈** ○**曲翠亭にあそぶとて**　「曲翠亭に遊ぶとて」。「曲翠」は元禄六年頃からの菅沼外記定常の俳号。初号曲水。（Ⅴ865前書）参照。○**田家といへる題を置て**　「田家といへる題を置きて」。「田家」（農家の意）を題として句を詠んだことをいう。「題を探る」（Ⅱ438前書）参照。「田家」も既出（Ⅱ302前書）。○**飯あふぐかゝが馳走**　「飯煽ぐ嬶が馳走」。「飯あふぐ」は、炊き立ての飯を団扇などであおいで冷ます所作。「かゝ」は、主婦の卑称。「馳走」は、色々心遣いして奔走すること。ここは、飯を冷まそうとする行為が主婦の心遣いだというので、「飯」「あふぐ」「かゝ」「馳走」の語は、凡て日常語である。「飯」（Ⅰ161等）「あふぐ」（Ⅰ241）は既出。「才覚な隣のかゝや煤見舞　馬莧」（『続猿蓑』下）「冬空のあれに成たる北颪　凡兆　旅の馳走に有明しをく　芭蕉」（『猿蓑』巻五）「Caca, i, Faua.」「Chisô. Vaxiru.」（『日葡辞書』）。○**夕涼**　「夕涼み」。夕方の納涼をいう夏の季語。既出（Ⅱ293等）。

**大意** 炊き立ての飯をあおいで冷ます内儀さんのサービスに満足して、野良帰りの御亭主は夕涼みをしているよ。

**考** 『蕉翁句集』には「曲翠に遊て、田家ト云る題を置て」と前書があり、ずっと後年の『きまかせ』（閑空撰、寛政七年成）には、暁台・閑空両吟の蕉翁百年追福歌仙の立句となっている。『笈日記』湖南部のこの句を収めた前後は、「さゞ波や」「湖や」「夏の夜や」「ひら〳〵と」「蓮の香に」等、元禄七年夏に成った句ばかりが収められているので、この句も七年夏曲翠亭での作と推定される。

「田家」の夏の夕方の情景を想った題詠の句である。「馳走」の語があるからといって、必ずしも客があった場合と見なくてもよく、

亭主は野良仕事から帰つて、端近くに涼を納れながら夕食の支度を待つて居る。女房は焚きたての飯を渋団扇でバタ〱あふいで居る。熱い飯で又汗を流させるのも気の毒なので、馳走ぶりにあふぎさまして居るのであらう。田家の平和な家庭のさまである。（潁原博士『新講』）

と見るのが穏当であろう。内藤鳴雪が、

嚊と田舎の呼言葉を使用したので田舎の趣が一字の間にあらはれ、且つ冷ました飯が馳走で何のまうけもないといふのも淡泊樸素な田舎の夕納涼に適つてゐる。斯く無雑作に叙して而かも趣を失はず、殊に嬶などの言葉を持つてくる所は流石に芭蕉翁が詩胆の大にして詩境の広い所に敬服せずにはゐられぬ。（『評釈』）

と述べているのもその通りで、語の卑俗さが句柄の卑俗さにならないところが芭蕉なのである。古注に引く「たのしみは夕顔棚の下すゞみ夫はてゝら女はふたのして」（出典未詳）と趣が通うけれども、作としてはこの句の方が上であろう。高く心を悟りて俗に帰る「軽み」の工夫が見える句である。

本間氏主馬宅に遊びて

*872*　閃〱と擧るあふぎやくものみね　（真蹟短冊）

本間氏主馬が亭にまねかれしに、大夫が家名を稱して吟草二句

ひら〱とあぐる扇や雲の峯　（笈日記）

本間丹野が家の舞臺にて

泊船集・篇突・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・宰陀稿本

ひら〳〵とあがる（ママ）扇や雲のみね　（桃舐）
ひら〳〵と上ル扇や雲の峯　（翁草）

夏季（くものみね）。

**語釈** ○**本間氏主馬宅**　「本間氏主馬の宅」。「本間氏主馬」は、大津住の能太夫で、俳号は丹野。生歿年未詳。その宅は大津四の宮（現大津市京町三丁目）にあったという。「洛の惟然が宅」（『続猿蓑』下、丈草発句「鼠ども」前書）「Tacu.」（『日葡辞書』）。○**閃〳〵と挙る扇や**　「閃〳〵と挙る扇や」。本間主馬が舞台に立って演能する時、そのかざした扇がひらひらと高くあがるさま。家名があがる意を籠めた。「あがる」「あぐる」の違いについては［考］参照。「や」は詠嘆の切字。「ひら〳〵とわか葉にとまる故（ママ）蝶哉　竹洞」（『あら野』巻三）「Fataga firafirato suru.」（『日葡辞書』）。○**くものみね**　「雲の峰」。入道雲。

**大意**　太夫が舞台でかざす白扇のひらひらと高くあがるさまは、さながら折柄の夏空に立つ雲の峰のようだ。家名を挙げる至藝の見事さよ。

**考**　「大津丹野亭」（『泊船集』）「本間丹野に一曲を所望して」（『宰陀稿本』）等の前書がある。この句も『笈日記』湖南部の元禄七年夏の作をまとめた中にあり、当時の作と推定される。六月中、下旬頃義仲寺の草庵に居た時、支考を伴なって本間主馬を訪問したのであろう。『桃舐』（長水撰、元禄九年刊）には、この句を発句とした歌仙一巻が見えるが、十三句目までは芭蕉・安世・支考・空芽・吐龍・丹野の顔触れで巻き進められ、十四句目に「通」という略記名が現われて、後の方には「葉文」という名もある。この情況は大谷篤蔵氏が『校本芭蕉全集』第二巻の補注で述べられたように、途中で巻き捨てたものを後に継いで満尾させたものらしく、当日丹野亭での付合は十三句目までであったろう。

『笈日記』の支考の前書に「大夫が家名を称して」とあるところを見ると、本間主馬が舞台でかざす扇に能楽師としての家名が挙る意を籠めているらしい。問題は「あぐる扇」か「あがる扇」かであって、「あぐる」ならば主馬が主体となり、「あがる」ならば扇が主体となる。この点について、先ず潁原退蔵博士の説を見よう。

太夫が手をさしかざして舞ふ扇が、舞台の上高くひら〳〵と翻る。そしてその扇は今にも雲の峯までも、高く〳〵翻つて行きさうである。太夫の妙技をたゝへると共に、その扇の如く家名を挙げることを賀したのである。随つて「あぐる」は太夫を主格とした述格であるべきで、「扇があがる」では太夫を称する意が弱くなる。『師走囊』には「雲の岑の躰をひら〳〵と扇明たる（註、同書はあぐるを扇を開くと解したのである）との見立也。其人によりての作也。殊更奇妙也」と解して居る。その人によつての作意を称して居るのは異論はないが、扇を開いたさまを雲の峰に見立てたといふ解には従ひ難い。近来の解釈にも、「扇のひら〳〵あぐるといふのは、（中略）やがてそれが雲の峰の見立にもならう」（芭蕉句集講義）と説いたのなどを見るが、それは「ひら〳〵と」といふ言葉を全く無視した解にすぎない。軽くひら〳〵翻る扇の何処に、あのむく〳〵と湧き起る雲の峰への見立が連想されるであらう。雲の峰までも届きさうだと言へば、それも言過ぎになつてしまふが、とにかく高く翻る舞扇から、おのづと舞台の軒近く見上げられる雲の峰へと、目がうつつて行つたのである。挨拶の句ではあるが、流石に自然への観照から離れて居ない所に、名匠の作たる事を感じさせられる。『篇突』に「扇のひら〳〵とするは本間か舞台にての作、時に取ての妙言也。惣して雲の峯むつかしき題なり」と言つて居るのは適評であらう。（『新講』）

雲の峰は扇の見立ではないが、高くそば立つ入道雲に主馬の高名を観じたもので、イメージとしても優れている。真蹟短冊には「挙る」とあって「あぐる」「あがる」両様に訓め、他の古い資料の仮名書きも、標掲したように区々である。『笈日記』で「あぐる」とした支考は、付合の座に同席しているから、この形は重視しなければならぬが、一方付合を初めて紹介した『桃舐』が「あがる」としているのも無視し難い。右に引いた潁原説では、「あがる」では太夫を称する意が弱くなるとして「あぐる」を採るけれども、これには異論もある。山本健吉氏は、

舞いぶりを讃えた句としては「あがる」の方が自然と思うが、『笈日記』に「あぐる」とあるのは、家名をあぐる意に懸けての方が形が確かだと見たのか。潁原退蔵が「あぐる」は太夫を主格とした述格であるべきで、「扇

があがる」では太夫を賞する意が弱くなると言っている。……さほどとは思われない。むしろ「あぐる」とした方が一種の臭味が伴ってくる。(『芭蕉全発句』)

と見ておられ、私も「あがる」が挨拶句としての気持が特に弱いとは思えない。ここでは主馬訪問の際染筆したと思われる真蹟短冊の句形を本位句とし、「挙る」を「挙る」と訓む。

873 蓮のかを目にかよはすや面の鼻　(真蹟短冊)

蓮の香に目をかよはすや面の鼻　(笈日記)　——浮世の北・泊船集・蕉翁句集

丹野が(ママ)仕舞の教談に

蓮の香や目より潜て面ンの鼻　(翁草)

夏季(蓮)。

**語釈** ○**蓮のか** 「蓮の香」。「蓮」はスイレン科の水草で、「はちす」(Ⅱ*309*)に同じ。夏に大きな美しい花を開く。(Ⅱ*414*)参照。「蓮の香も行水したる気色哉(野水)」(『あら野』巻六)「Fasu.」(『日葡辞書』)。○**目にかよはすや** 「目に通はすや」。視覚器官の「目」に「香」を通わすといったのが表現の興であろう。[考]参照。「Cayouaxi, su, aita. …… Meuo cayouasu.」(『日葡辞書』)。○**面の鼻** 「面の鼻」。「面」は、演能の時着ける仮面。「猿の面」(Ⅳ*765*)「面」(Ⅳ*800*)参照。「夜神楽や鼻息白し面ンの内　其角」(『猿蓑』巻一)。

**大意** 能面をつけた時は鼻の穴から物を見るとのこと。では、あの馥郁と香る蓮池の花を、面の鼻を通して、嗅ぐのではなく、見るわけですな。

**考** 『浮世の北』(可吟撰、元禄九年刊)には「丹野が舞台にあそびて」と前書がある。『笈日記』は前の「ひら〳〵と」

の句の次に並べて出し、『泊船集』も同じく二句を並べて、「丹野は能太夫なれば、かくは申されし也」と注記している。「ひら〲と」の句と同じ時の吟であろう。真蹟短冊と『笈日記』等との間に異同が見られるが、前者は前の「閃〲と」の短冊と共に、もと本間家に伝蔵されたもので、訪問の際の染筆と思われ、この句形の信憑性に疑いはない。これに対して『笈日記』の句形は、「香を目に通はす」という表現が分らなかったか、うろおぼえであったかして、このような異形が生じたらしく、信じ難いところがある。この句は真蹟短冊の句形で解釈鑑賞すべきであろう。『浮世の北』以下は『笈日記』の句形を踏襲したに過ぎず、『翁草』（里圃撰、元禄九年刊）の異形も、初案かと思われる節もあるが、全面的信頼は措けない。但し、「丹野が仕舞の教談に」という前書は注意を要すると思う。

真蹟短冊が知られる以前は、『笈日記』の句形で解釈されていたのは蓋し当然である。古注では、

> 此大夫の庭に蓮池など有て即興の吟なるべし。芙蓉を称美の挨拶共云べし。目を通すや仮面の鼻とは例の笑味也。誠に舞内にも薫風来らば、自然と芙蕖（ハチス）に目の通ふ趣意を、鼻を以て誉出たる処、一句の手操也。（信天翁『笈の底』）

という説が良くまとまっており、てにをはの違いはあっても、内容の概略はこれでよい。潁原博士の見方は左の如くである。

> 能役者が面を冠つた時には、物を見るのに目の孔よりせず、鼻の孔から見るやうにするのだといふ。丹野の舞台近くに恐らく蓮池があつたのであらう。芳香がしきりに鼻を撲つ。本来ならばそつちの方へすぐ目をやるのだが、面の中だからその鼻の孔の方へ視線を通はすといふのである。
>
> 『翁草』の詞書に「仕舞の教談」とあるのは、思ふにこの面を冠つて物を見る心得を言つたのであらう。「目より潜て」とは、普通なら鼻から匂つて眼を動かすのだが、これは先づ香が目の孔から潜り込んで、視線は鼻の孔から出て行くと興じたのであらう。「目をかよはす」よりもつとふざけた説明になつてゐる。……芭蕉はその変つた物の見方を聞いて、大に面白がつたのである。何だか自分で面を冠つて、鼻の孔からのぞいて見たりとして

居るさまま で思はれる。勿論滑稽即興の句にすぎない。(『新講』)

丹野が舞台で舞いながら、馥郁と薫る花を浮べた庭の蓮池の方へ顔を向けた。その体を、面の中の眼の動きを想像しながら興じた句なのである。加藤楸邨氏の戦後の解では真蹟短冊を本位句として、

「能面の鼻は視線の通り路でもあるとのことだから、あの面の鼻の孔は、いましきりに庭前の蓮の花を見やりながら、蓮の香を目に通わせていることであろう」というほどの意である。

……挨拶を心に置いた即興の句である。「蓮の香」は眼前の景をとり、そのすがすがしさに挨拶の意を託したものであろう。能面をつけた際は、面の鼻の孔を通して下方の物を見るということなので、その点をとらえ、笑いをふくんだ句に仕立てたのである。……『笈日記』以下の「蓮の香に目をかよはすや」というかたちだと、句意は解しやすくなるが、句の中心が人の所作に移行し、「面の鼻」を主にしたユーモアには及ばないようである。(『芭蕉全句』)

となっている。端的には「蓮の香を鼻の穴で嗅ぐのでなく、見ると言ったところがおかしみである」(山本健吉氏『全発句』)と見てよかろう。「貴殿は……お池のすばらしい蓮の香も自分の鼻で嗅がずに、面の鼻を通して目で嗅ぐのですか」(今栄蔵氏『芭蕉句集』)とも解し得る。

おなじ津なりける湖仙亭に行て

*874* 此宿は水鶏もしらぬ扉かな (笈日記)

泊船集・網代笠・蕉翁句集・巾秘抄

夏季(水鶏)。

**語釈** **○おなじ津なりける湖仙亭に行て** 「同じ津なりける湖仙亭に行きて」。『笈日記』では、大津の能太夫本間主馬に招かれた時

の吟「ひら〳〵と」「蓮のかを」の句の次に収められているので、「おなじ津」が大津を指すことは明らかである。「津」は、舟着場、港の意で、琵琶湖に面したこの町の名の由来でもある。「湖仙」は当地の俳人。写本『巾秘抄』（好問堂編、文化十三年成）所収の前書によれば高橋氏で、瓠千（こせん）とも号したらしい（『巾秘抄』には「瓢千」となっているが、『校本芭蕉全集』補遺篇の尾形仂氏の注に「湖仙との音通から推し、「瓠千」の誤写か」とあるのに従う）。生歿年未詳。この前書は文考の文である。「揚州の津も見へそめて雲の峯」（『蕪村句集』）「Tçu. i, Minato.」（『日葡辞書』）。○**此宿**―「此の宿（こ の やど）」。「宿」は宿屋でなく、居宅の意。既出（Ⅱ287等）。○**水鶏もしらぬ扉**「水鶏（くひな）も知（し）らぬ扉（とぼそ）」。戸をたたくように鳴く水鶏も、此処に家があるのを知らずに、扉をたたくこともない、というのである。（Ⅴ856等）参照。「とぼそ」は既出（Ⅱ305前書）。

**大意**　このお宅は、俗人は勿論のこと、あたりに棲む水鶏も知らないで、戸をたたくこともない。まことにひっそりと閑静な良いお住居です。

**考**　「大津湖仙亭／水雞」（『泊船集』）「湖仙亭にて」（『網代笠』）「同じ津成ける湖仙亭にて」（『蕉翁句集』）「さゞ波の音近く、三井の鐘聞ゆるあたり、暫旅の宿を求む。主は高橋瓢千（ママ）といふ。志風雅を好て、身貧のいとはず。風雅は我好所にして、貧は我友也。栖は膝を入るのみにして、狭きうれへ有といへ共、馬車の通ひすぎにあづからざる悦び有。足らざるを楽みて、淋敷を又友とす」（『巾秘抄』）等の前書がある。『巾秘抄』は芭蕉在世時からは遥か後、文化年間の写本であるが、湖南高橋三郎兵衛（恐らくは湖仙の後裔）所持の真蹟によったもので、長い前書も芭蕉の文として信用出来よう。

『笈日記』は湖南部の本間主馬の家での二句の次に収めているが、この部分は元禄七年の夏、膳所・大津辺に遊吟した折の十句（付句を含む。内発句一句は誤伝）をまとめたものとおぼしく、最後の旅中の作と見られる。元禄元年、三、四年の可能性を考える説もあるが、私は七年夏として誤りないものと思う。

湖仙の幽栖の手狭なさまは、『巾秘抄』の前書によく悉されている。湖仙は貞享四年の『ひとつ松』（尚白撰）に三十六句も入集している人で、尚白系の相当有力な俳人だったと思われるが、元禄五年に成った尚白の『忘梅』前後から

句作が全く見えず、俳壇との関わりも疎遠になったようである。恐らく隠逸志向の強い、仙骨を帯びた人柄だったのであろう。たまたまその人を訪ねた芭蕉が、挨拶の句として詠んだのがこの句である。湖辺に近い水郷とあって、水鶏の声も聞ける筈なのに、カタとも声が聞えない。水鶏を機縁にして、ひっそりとした湖仙の閑居を褒めた、機智に富んだ句といえよう。「若し唯だ隠者の世を離れてゐると言へば陳腐になるのを、水鶏もしらぬと詩的に興じた為め新らしい興を起し得たのである」（内藤鳴雪『評釈』）という見方は良い。戸をたたくように鳴く水鶏だから「扉」がよく利いて、閑静さが際立つのである。華雀の『芭蕉句選』に初五を「此宿も」としているのは杜撰に過ぎない。

*875* 皿鉢もほのかに闇の宵涼み　（其便）

木枯・百歌仙

夏季（宵涼み）。

**語釈** **○皿鉢もほのかに**　「皿鉢（さらばち）」は、鉢形の食器の底の浅いもの。それが闇の中に浮き出て見えるさまを「ほのかに」といった。「恨みはあけていわれず、にくさに皿鉢（さらばち）で酒をしんぜふとしたは、こなさんへのつらあて」（『傾城歌三味線』巻三ノ一）。**○闇の宵涼み**　「闇の宵涼み（やみのよひすずみ）」。夕涼みよりは後、日が暮れて暗くなってからの涼みなのである。「「宵闇」は、十五日を過ぎた月が上る前の闇をいう季語なので、この句にも遅い月の出を待つ心があるのかと思われる」（加藤楸邨氏『全句』）という見方もある。

**大意**　膳の上の浅い鉢がほのかに浮き出して見えて、闇の中で宵涼みをすることだ。

**考**　年代不明の句であるが、初出の『其便』（泥足撰）は元禄七年中に刊行されたものと推定されるので、最晩年作の可能性の高いものとして、七年の部に配する。

句の内容は、

今夕食を終つたばかりで、まだ膳の上には皿や鉢が載つたまゝである。月も出ない宵闇の頃で、室内はすでに

全く暗くなつてしまつた。燈火もつけないで縁先あたりに涼んで居ると、その暗い闇の中に、皿や鉢だけが仄かに白く浮き出て見えるのである。又故らに燈火も置かず、涼みながら夕食して居るさまと見てもよからう。とにかく宵闇の中にほのかに浮き出た皿鉢の色が、淡い涼味を誘ふのである。（潁原博士『新講』）

と見れば十全である。昼からの宴席のさまとする説の多いのは、「皿鉢」を「皿や鉢」と取って、多くの食器類を想像した為らしく、必ずしも精確ではない。従って挨拶の意を含めて解する必要もなかろう。また、他人のさまを客観した作でもなく、そのひっそりした雰囲気からして自照の句と見るのが良いと思う。切字というのではないが、「ほのかに」のところに小休止があって、味わいを深めている。

非常にイージーな心持の滲み出て居る印象的の句である。食器のやうな平凡なものを扱つて、これだけ印象的な句を作ることは、余程感覚が鋭敏でないと出来兼ねるものである。その鋭敏な感覚を衷に沈潜せしめて、飽く迄安らかな姿態を与へた点が偉いと思ふ。

印象派以来の画家が静物を題材にして、そこから微妙な主観を打ち出して来たことは、欧洲画壇の一革命だと観ぜられて居るが、この句は、一寸さうした趣をもつて居る佳句である。（半田良平氏『新釈』）

といら見方は、蓋し適評であろう。闇に浮き出た皿鉢の白さで涼感をとらえた軽みの句である。

876

道ほそし相撲とり草の花の露　（笈日記）

泊船集・誹諧曾我・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

そのゝちは武の深川に有しが、去年の秋文月の始、ふたゝび舊草に帰りて

**語釈**　秋季（相撲とり草・露）。○**そのゝち**　「其の後」。『笈日記』にはこの前に元禄三年秋の「草の戸を」（Ⅲ625）、同四年秋の「稲すゞめ」（Ⅳ696）の句を並

べ、それを承けて「そのゝち」といっているので、細道の旅を終えてから約二年間上方に滞在していた後の意であることは明らかである。以下の前書は支考の文。○**武の深川に有しが**　「武の深川に有りしが」。「武」は「武州」即ち武蔵国（今の東京都と、埼玉県・神奈川県の一部を含む旧国名）の略。「深川」は芭蕉庵の所在地。既出（Ⅰ*126*前書等）。「有」は、「在」を用いるべきところである。○**去年の秋文月の始**　「去年の秋文月の始め」。『笈日記』の「去年」は、凡て元禄七年を指すことは前述した。その陰暦七月の初め。「文月」は既出（Ⅲ*513*）。○**ふたゝび旧草に帰りて**　「再び旧草に帰りて。」「旧草」は「旧の草庵」の意。既出（Ⅲ*625*前書）。支考はこの語を木曾塚の無名庵について用いることが多い。これも元禄四年に正秀の手で改築されて新旧の二種があるが、ここはそれとは関係なく、ただ元禄三、四年に使った草庵に七年の折にも帰って来たことをいう。「もと居た草庵」の意である。七年には六月中旬から支考らと共に嵯峨から此処へ移って来たので、ここは「文月の始」に無名庵に帰ったということではなく、「文月の始」は、句の成った時期を示したものであろう。○**道ほそし**　「道細し」。「道細く追はれぬ沢の蛍かな　青江」（『あら野』巻三）「**Fosoi.**」（『日葡辞書』）。○**相撲とり草**　「相撲取り草」。路傍や原野などの日当りの良いところに生えるイネ科の一年草「雄ひじは」の異名。高さ三十から五十センチ。緑色の細い葉をひろげ、稈も根も強くてなかなか引き抜けないので力草の名がある。初秋の頃放射状の分枝の先に多くの緑色の小穂をつける。秋の季語。「白慈草春共云り。不審。古哥に今日にあふ雲井の庭のすまひ草取ても仇にうつる物哉」（『毛吹草』巻二）「相撲草……大和本草云、古歌にすみれと読し物是也。花紫也。又白花あり。京都にてすまふ取と云、筑紫にて殿の馬と云。小児其花にかぎある所を両花相交かけて、引て戯とす。相撲の形に似たり。鄙にて相撲取と云草は別也。若水が云、紫花地丁、別号菫々菜と云。故に国俗菫菜をすみれと誤り称す。菫菜は別也」（『滑稽雑談』）「**Sumôtorigusa. i, Sumire.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　両側に茂った相撲取り草の花がしとどに露を持っている。野道も狭く、足を踏み入れ難いほどだ。

**考**　前書で明らかなように、『笈日記』は元禄七年七月の初め、木曾塚無名庵での作としており、『蕉翁句集草稿』もそれに拠って、「此句木曾塚旧草の句也。元禄戌文月はじめと笈日記に有」と記している。『泊船集』は春の部に収めて、「相撲とり草は菫草の事なるべしと春季ニ入レぬ。秋の句たるや」と注してあるが、「文月の始」の句とあれば秋季でなければならない。支考の『芭蕉翁追善之日記』元禄七年十月廿八日の条に、

この先文月五日の朝木曾塚に別し時、阿叟は洛の桃花坊の方に見立て、……

とあり、芭蕉は七月五日朝まで無名庵にあって、それから京の中長者町堀河東へ入にあった去来の本宅へ移ったことが知られる。従って当面の句は七月初旬、五日までの間に成ったことになろう。

無名庵の庭か、近くの野道の趣をそのまま句にしたものと思われるが、表現には陶淵明の「道狭草木長、夕露沾我衣」（道狭くして草木長じ、夕露我が衣を沾す。「帰園田居」其三）「三径就荒、松菊猶存」（三径荒に就けども、松菊猶存す。「帰去来辞」）や西行歌「いそのかみふるきすみかへ分いれば庭のあさぢに露のこぼるゝ」（『山家集』中）等、古い詩歌の調べがおのずから匂っている。「相撲とり草」の名が俳諧の眼目であって、どの草を指すか古来論はあるものの、

「すもとり草」はすみれでは無い。地しばと云ふが、よく此の辺の子供がさかさに立て倒しあひをする草だ。細い道の景色がそれに見える。（『芭蕉俳句研究』）

という露伴説が確かである。ただ草の名は短く訓まず、「スマフトリグサ」と長く訓む方が、調べとして勝る。朝露か夕露か何れとも取れるが、特に愛でられるわけでもない草に目を留めて、却って草庵の初秋の気分が際立つところが佳い。

七夕　草庵

877　たなばたや秋をさだむる夜のはじめ　（笈日記）
蕉翁句集草稿・蕉翁句集

七夕や秋をさだむるはじめの夜　（有磯海）
泊船集・四山集・三冊子・星会集

秋季（たなばた）。

**語釈**　**○七夕**　「タナバタ」。陰暦七月七日の夜をいう。既出（Ⅰ8、Ⅲ515前書等）。**○草庵**　「サウアン」。『笈日記』では元禄六年江

戸での七夕の句「高水に」（Ⅳ *779*）の句と並べて出しており、深川芭蕉庵での作と受取れる扱い方になっているが、［考］の条で述べるように、この句は京の野童亭での吟と推定されるので、『笈日記』のこの注記は誤りと思われる。○**穐をさだむる夜のはじめ**「穐(あき)を定(さだ)むる夜(よ)の初(はじ)め」。「穐」は、「秋」の古字。既出（Ⅱ *413*）。秋という季節を定着し安定させる初めての夜だというのである。「髪(かみ)置を春に定る柳かな　重供」（『毛吹草』巻五）「**Sadame, uru, eta.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　七夕の日となって、時候も秋らしくなった。この夜こそ秋という季節を定着させる初めなのだ。

**考**　『泊船集』と『蕉翁句集』に「野童亭」と前書があり、『蕉翁句集草稿』も「是笈日記の句也。野童亭にての吟也」と注している。前述したように、『笈日記』には深川の芭蕉庵での句のように書かれているが、恐らく誤伝であろう。野童は出自等未詳ながら、仙洞御所に仕えていた京の人で、俳諧は去来の指導を受けていた。同じく去来系の風国の編した『泊船集』の前書は信憑性のあるものと見られる。後述するように、この句には二つの句案があって、芭蕉はその取捨の決定を伊賀で行ったらしい。京の野童亭で最初の句案を得たのも、それから余り隔らない時であったろう。七夕の頃京都辺に居て、直後に伊賀へ赴いた時といえば、元禄七年秋しか考えられない。従って句は七年の七夕の夜の吟と推定される。この年芭蕉は七月五日に木曾塚の無名庵を出て、京の去来宅に移っていた。
　標掲の如く、『笈日記』と『有磯海』では句形が異なっている。これについて『蕉翁句集草稿』には下五を「夜のはじめ」とした句形を掲げて、

　浪化集（注、『有磯海』を指す）に、はじめの夜と有。後、夜のはじめに定る。

と伝えている。『三冊子』にもこの句の推敲についての記述があり、猿雖本系には、

　此句、夜のはじめ、初の夜、この二ッに心を止て、折〳〵吟じしらべて、数日の後に、夜のはじめと極り侍る。（赤雙紙）

と見える。石馬本には右の終りの部分が、「……数日の後に、はじめの夜とは究り侍る也」と全く逆になっているが、

これは土芳直筆の『句集草稿』の記述に照らして、猿雖本系の方が正しいものとしなければならない。土芳は恐らく伊賀で芭蕉の推敲の情況を目睹していたのである。「夜のはじめ」「はじめの夜」の両案は、「折〱吟じしらべて」と土芳が伝えているように、純粋に「調べ」の問題であったろう。「夜のはじめ」の二三調と「はじめの夜」の四一調と、どちらが安定度が高いかといえば、どうしても前者が優る。舌頭に千転してその取捨を決するのに、数日の日子を要したのであった。

句の言わんとするところは初秋の季節感である。即ち、

　秋来てもいまだ残暑ありて秋とも定がたかりしに、はや七夕になれば、空の気色、風の音、誠に秋を定むる夜となれるとなり。（東海呑吐『句解』）

　文月に至ると云共、未ダ残暑有り、秋月も唯人の心にのみ立て、身に冷(シム)程の夜寒にもなきを、早宵月と成て、銀河の光り何時(イツ)となく露冷(ヒヤ)かに、誠に七夕の夜などより取分て秋情を催す気色あり。殊に稀なる逢瀬に、秋の哀も今宵こそ身に知るべし。（信天翁『笈の底』）

といったことを、主観的に「穐をさだむる」といったので、写生的な描写ではないが、きっぱり断定したところに一種の力が感ぜられる。この年の立秋は六月十六日で、二十日以上経って七夕になったのだから、この表現は実感でもあったであろう。

　野童亭での作とすれば、この家にあって、七夕の夜の秋の気分を、十分に味わいえたという挨拶がこめられていることになろう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

という説も、確かなところである。

878

# ひや〳〵と壁をふまへて晝寐哉（芭蕉翁行状記）

笈日記・泊船集・三冊子・蕉翁句集

秋季（ひや〳〵）。

**語釈** **○ひや〳〵と** 「冷や冷やと」。初秋に感ずる冷気をいう季語。ここでは壁の冷たさも含まれる。「ひやゝか　初秋の事なり。暮秌にはかなはず。ひゆる　ひや〳〵　などのことば、ひやゝかとおなじ。冷の字也、秌なり」（『御傘』）「**Fiyai.**」（『日葡辞書』）。**○壁をふまへて** 「壁を踏まへて」。壁に足の裏を当てているさまの表現。「さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉　莚ふまへて蕎麦あふつみゆ　松芳」（『あら野』員外）「**Fumaye, uru eta.**」（『日葡辞書』）。**○昼寐** 「昼寐」。既出（Ⅱ*399*）。芭蕉の時代には雑の扱いであった。「ヒル」は底本の振仮名。

**大意** まだ暑さの残る頃、壁に足の裏を当てて、冷んやりした感触を楽しみながら昼寝をするのは、まことに快い。

**考** 『笈日記』雲水部には、「去年の夏阿叟の桃花坊におはす時、人々よりいて物語し侍るに」として、「梅が香に」（Ⅴ*831*）「なまぐさし」（Ⅳ*782*）等の句の趣意を論じた続きに、「その後大津の木節亭にあそぶとて」として当面の句を挙げている。また、路通の『芭蕉翁行状記』には、最後の旅の記事の中に、「玉祭といふ文月十日も過て、……又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば此かへるさにも粟津の庵に立より、しばらくやすらひ給。残暑の心を」として句を掲げている。何れも元禄七年初夏の吟であることをいっており、京から伊賀へ向う途次に、数日義仲寺の草庵に滞在していたとすれば、その間に木節亭を訪れる機会はあった筈で、両書の記述は矛盾しないと思う。恐らくは七月十日過ぎの数日間に木節亭で成った句であろう。『泊船集』が夏の部に入れたのは「昼寐」を夏季と見たからで、誤解に過ぎない。

支考は『笈日記』でこの句を挙げた後に、

此句はいかにきゝ侍らんと申されしを、是もたゞ残暑とこそ承り候へ。かならず蚊屋の釣手など手にからまきながら、思ふべき事をおもひ居ける人ならんと申侍れば、此謎（ナゾ）は支考にとかれ侍るとて、わらひてのみはてぬるかし。

と、芭蕉との問答のあったことを記している。前述したように、芭蕉は七月五日に木曾塚の草庵から京へ移った時支考と別れているから、右の事のあったのは、九月初めに支考が伊賀の上野を訪れた時のことと思われるが、支考の見方はこの句の解説としてまことに恰好と言ってよい。これに、

足を伸ばすと壁にとゞく、其の壁は冷〳〵とつめたくてよい気持ぢや、それをふまへたまゝで昼寝をする事ぢやといふたので、自堕落に心のくつろいだ佗人の様がよくあらはれて居る。且つあついから自然寝ながら足をあげて壁へやつた、其壁は流石に秋の気を帯てつめたかつたといふ残暑の心持もよく画き出されてゐる。（内藤鳴雪『評釈』）

という鑑賞を添えれば、更に十全となる。且つ木節亭での句とすれば、このようにくつろいでいますという挨拶の気持が含まれているであろう。初秋の季節感を壁の冷い感触で言い取った佳句である。『笈日記』の「思ふべき事をおもひ居ける人」という表現から、寿貞尼の事に説き及ぶ説もあるが、私はその方へ余り深入りしたくない。

879

稲づまやかほのところが薄の穂　（続猿蓑）

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛皷をかまへて能する處を畫て、舞臺の壁にかけたり。まことに生前のたはぶれ、などはこのあそびに殊らんや。かの髑髏を枕として、終に夢うつゝをわかたざるも、只この生前をしめさるゝものなり

芭蕉翁行状記・泊船集・蕉翁句集

**語釈** ○**本間主馬が宅**　「本間主馬が宅」。「本間主馬」は、大津四の宮住の能太夫。既出（Ⅴ872前書）。○**骸骨ども**　「骸骨」は、人間の身体を構成する骨。ここは骨組だけの人間を架空に想像した画の趣をいう。それが複数あるわけだ。「骸骨のうへを粧て花見かな」（『鬼貫句選』）「Gaicot. Xigai fone.」（『日葡辞書』）。○**笛鼓をかまへて能する処を画て**　「笛鼓を構へて能する処を画て」。管楽器の笛、打楽器の鼓は、演能に必須のもの。「骸骨ども」が舞台でそれらの楽器を携え構えて能を演ずる情景を画いてあったのである。「皷」は「鼓」の俗字。「さればこそひなの拍子のあなる哉神田祭の鼓うつ音」（『猿蓑』巻三、嵐雪発句「花すゝき」前書）「たちなぎなたをかまへてまちかけたり」（『義経記』巻五）「女郎共に能をさせて、御目に懸るのよし」（『好色一代男』巻八）「Tçuzzumi.」「Yari, catana nadouo camayete iru.」「Nôuo suru.」（『日葡辞書』）。○**舞台の壁にかけたり**　「舞台の壁に掛けたり」。主馬の家にある能舞台の壁に、右の画が掛けてあったというのである。（Ⅱ433後書）参照。「ぶたいの定ありといへど、所によりてならぬ事あり」（『わらんべ草』巻一）「Butai. Maino vtena.」（『日葡辞書』）。○**生前のたはぶれ**　「生前の戯れ」。「生前」には、この世に生をうける前の意もあるが、ここは人間の生きている間の意に用いられている。人間の生きている間のさまざまな行為を「たはぶれ」と観じた表現。「生前に遊女を目に見ざれば、其味をしらず」（『色道大鏡』巻十五）「とひこぬものを夢のたはぶれ　植ていにし一本すゝき霜枯て」（『春夢草』上）「Xǒjen. Vmarenu maye.」（『日葡辞書』）。○**などはこのあそびに殊らんや**　「などは此の遊びに殊ならんや」。どうしてこの遊び（骸骨どもの演能を指す）に異なろうか、同じである、の意。「などは」の「は」は、強調する為に添えた語。「などしも」という言い方もある。「や」は反語である。「殊」は、ここのように「異」と同じ意味に用いることがある。「えぼし子やなど白菊の玉牡丹　濁子」（『続猿蓑』下）「ソノアルジトスミカト、無常ヲアラソフサマ、イハヾアサガホノ露ニコトナラズ」（『方丈記』）「Nado. l, nadoca, i, Najoni.」「Cotonaranu.」（『日葡辞書』）。○**かの**　「彼の」。よく知られた事を述べる場合に冠する表現。既出（Ⅰ87、Ⅲ557前書）。○**髑髏を枕として終に夢うつゝをわかたざる**　「髑髏を枕として終に夢現を分たざる」。『荘子』至楽篇に「援二髑髏一枕而臥」（髑髏を援いて枕として臥す）とあるのに拠る。荘子が楚に行った時髑髏（しゃれこうべ）を見、これを枕にして睡ると、夢に髑髏が現われて、死の楽しみを述べたという話である。「終に夢うつゝをわかたざる」といったのは、夢うつつの間に髑髏の死の説を聞いたことを斯う表現したのであろう。「狐火や髑髏に雨のたまる夜に」（『蕪村句集』）「雨にも風にもかよはふよなふ　宗因　夢うつゝ女姿のちみどろに　幽山」（『談林俳諧』）「いづれか是いづれか非ならんと侍しに、

此間わかつべからず」(『続猿蓑』下、芭蕉「名月」発句支考評)「Docuro. Xaricôbe.」「Iefiuo vacatçu.」(『日葡辞書』)。○**只この生前をしめさるゝものなり**　「只此の生前を示さるゝものなり」。ただ人間の生きている間のはかないことを示して戒しめとされたものなのである、の意。「しめす」には、示して戒しめとする意がある。「法然上人と申大とこの世に出まして、六字の御名をだにしんじちにとなへ申さば、極楽にいたる事やすしと示し玉へるに」(『春雨物語』宮木が塚)「Ximexi, su, eita.」(『日葡辞書』)。○**稲づま**　「稲妻」。秋の夜空に走る電光。既出(Ⅱ*306*等)。○**かほのところが薄の穂**　「顔の処が薄の穂」。骸骨の顔のところが薄の穂になっている、の意。小野小町の髑髏伝説を踏まえた表現である。[考]参照。「薄の穂」は秋の季語。(Ⅲ*646*)参照。「穂の出たるを、花すゝきとも尾花ともいへり。穂の出ざるをいふべからず。師説」(『滑稽雑談』)「秋風に露や落武者薄のほ　作者不知」(『毛吹草』巻六)「Foni izzuru, I, Arauaruru.」(『日葡辞書』)。

**大意**　稲妻がピカリと光って闇を一瞬照らし出すと、骸骨の顔のところが、小野小町の髑髏の話のように、薄の穂になっていることだ。

**考**　「丹-野がこのめるにまかせて、骸骨の絵賛に骨相観の心を前に書て」(『芭蕉翁行状記』)「骸骨絵賛に」(『泊船集』)等の前書がある。路通の『芭蕉翁行状記』には、元禄七年七月に伊賀へ帰る前のこととして左のような記述が見える。

玉祭といふ文月十日も過て、しきりに父母のむかしもおもはるゝにや、殊に此秋は気短かに身の骨もとがりぬれば、桃尻のみせむ方なきなどうち笑ひ、又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば此かへるさにも粟津の庵に立より、しばらくやすらひ給ひ、残暑の心を、

ひやく〳〵と壁をふまへて昼寝哉

この後に右の「丹-野がこのめるにまかせて」云々の文と句が載るのである。この書き方では、七月五日以来京の去来宅に居た芭蕉が、伊賀へ帰る途中また粟津の無名庵に立寄って暫く逗留していた時に、丹野(本間主馬)の家を訪い、主の懇望に答えてこの賛句を成したと見られよう。六月にも丹野亭を訪うているけれども、当面の句は秋季であり、『行状記』の記述と矛盾する資料も今の処見当らない。七月十日過に無名庵に数日居た間に、近くの丹野亭をま

た訪ねたものと思われる。画賛はもとより当季に限らぬ場合もあるが、当面の骸骨演能の図には季として採るべき素材は無かったであろう。それを秋季の句としたのは、やはり七月という時節を考慮した結果なのである。

『行状記』にいう「骨相観」とは、人間死後の遺体の成行を観じて悟道に入ろうとする九想観の第八に当り、身肉の離れ去った白骨をまざまざと思い描くことである。それを画にしたのが骸骨演能の図で、『続猿蓑』の前書では、『荘子』を援用しつつ、人間生前のさまざまの行為も、骸骨の演ずる能のように、はかないものだと述べている。句ではその無常観を承けて、薄原の中に横たわる人の骸(むくろ)を描いたのであるが、「かほのところが薄の穂」という表現は、小野小町にまつはる伝説を踏まえたのであった。たとえば鴨長明の『無名抄』には次のような話が見える。

或人曰、業平朝臣……哥枕ども見んとて、すきによせてあづまのかたへ行けり。みちの国に至て、やそしまと云所にやどりたりける夜、野の中に哥の上句を詠ずるこゑ有。そのことばにいはく、

　秋風のふくにつけてもあなめ〳〵

と云。あやしくおぼえて、こゑを尋つゝ是をもとむるに、さらに人なし。只死人の頭一あり。あくる朝猶これを見るに、彼どくろのめのあなより、すゝきなん一本おひ出たりける。その薄風になびくおとのかく聞えければ、あやしくおぼえてあたりの人に此事を問。或人語て云、小野小町この国に至りて、此所にして命終りにけり。則、彼頭是なりと云。こゝに業平、哀にかなしく覚えければ、涙をゝさへて下句つけゝり。

　小野とはいはじ薄生けり

とぞつけたる。その野をば玉つくりの小野といひけるとぞ侍る。

これは『古事談』や『袋草紙』にも類話の載る古い話であるが、謡曲「通小町」にも、或る人市原野を通りしに、薄一村生ひたる蔭よりも、秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはいはじ薄生ひけりとあり。これ小野の小町の歌なり。

とあって、場所が京の市原野に変り、連歌ではなくて小町作の一首の歌になっている。この話に関する芭蕉の知識も、恐らく謡曲あたりがもとになったのであろう。小町伝説を趣向にして無常観を具象化したのがこの句であった。加藤楸邨氏はこの句を左のように鑑賞しておられる。

この句は眼前の絵から、生前もろもろのいとなみも観ずればこの髑髏の舞のやうなものであるといふことになるのである。さうすると、顔のところが薄の穂といふのは、稲妻の一閃によつて、今まで姿美しく舞つてゐた人の顔も忽ち髑髏と変じ、そこに薄の穂が凄く戦いでゐるといふことになると思ふ。この句には解がさまざまにある。吾々人間も草むらに棄てられた骸骨のやうに感ぜられ、眼前に薄の穂が戦いでゐるやうに感ぜられるととつたり、人は闇中に薄の穂が迫つてゐることを知らずに居るが、稲妻がさして始めてその穂を知りうるとしたり、今まで舞つてゐた美人の顔が稲妻のさすや忽ち薄の穂になつたと解したりしてゐるが、これはやはり拙解のやうにとつた方が絵賛の心に合ふものであると思ふ。

稲妻といふ季語はこの句では、この人生の観相に、一瞬物の変ずる勢を点じて頗る妙機を把んでゐる。この凄烈な稲妻を提出して、その下に、「顔のところが薄の穂」と投げ出した手法は、一切闇なる中に薄の戦ぐ感じが浮き上つて凄味がある。一種の妖怪味であるが、これは古くから芭蕉にあらはれてゐるところで、ここにも芭蕉の非凡な才を看取することが出来る。（『芭蕉講座』発句篇(下)）

よく行き届いた見方で、今でもこれを継承した説が多い。ただ、「今まで姿美しく舞っていた人」ということを付加する必要はあるまい。画そのものが骸骨の演能なのだから、その骸骨を句では薄原の中に置いて、稲妻の光に髑髏の目の穴から薄の穂が生える凄惨な情景をあらわしたと見た方が良いと思う。抑々「稲妻」は、「よのなかをなににたとへむあきのたをほのかにてらすよひのいなづま」（『後拾遺集』巻十七、源順）という歌もあって、無常の観相には恰好の配合なのである。この句を「重くれ」と見る説もあるが、画賛を求められた場合であり、その上画題が骨相観の図と

あっては、趣向が無常に結び付くのは自然の勢いであろう。趣向よりも、この句では「かほのところが薄の穂」とずばりと言ってのけたところに力があり、その活き活きとしたイメージは評価出来よう。しかもそれが軽みの時代だけに、極く日常的な言い方になっているところに注目したい。

*880*　家はみな杖にしら髪の墓参り　（芭蕉翁追善之日記）

笈日記・続猿蓑・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

其日先祖の廟にて

一家みな白髪に杖や墓参り　（芭蕉翁行状記）

陸奥衛

甲戌の秋大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなむとて

家はみな杖にしら髪や墓参　（宇陀法師）

秋季（墓参り）。

**語釈**　**○家はみな杖にしら髪**　「家は皆杖に白髪」。ここは松尾家の一家とその血縁の人、縁戚も含めて皆年老い、杖をついて白髪頭を並べているさまをいう。「姐の鱸に水をかけながし　里圃　目利で家はよい暮しなり　馬莧」（『続猿蓑』上）。**○墓参り**　「墓参り」。先祖の墓に詣でることに本来季節の限定はないが、盂蘭盆会が代表的な先祖供養の行事であるところから、盆の墓参の含みで古くから「墓参り」が秋の季語となっている。「墓まいり俳。七月初先祖の墓にまうづる、これもうらぼんの心ばへとかや。もろこしにも、七月十五日に先祖の墳の城外にある所をはき清め、供養するよし、夢華録にみゆ」（『増山井』）「七月／初一日……墓参　自今日至二十四日良賤各詣祖考之墳墓。俗謂墓参。正同中華清明日上墳祭掃之礼也」（『日次紀事』）「和俗七月に入て先祖の墳墓を祭る事、釈氏の教に拠あるか。然ば当月十三日より十五日に至て墓詣をなすべし。京都には朔日比より是を行ふ。是盆前に至て、商賈の世業に暇をおしみて、前広に墓へ参るならし。東西の余国は、武家町人によらず十四日五日六日

に勤る也。古来は、墓詣と計は秋に成がたし。当世は、盆供に通じ用ゆ。作者心得べし」（『滑稽雑談』）「長さき盆会に／見し人も今は孫子や墓参り（去来）」（『泊船集』）「Mairi.」（『日葡辞書』）。

**大意**　松尾の家につながる縁者達は、皆杖をつき白髪頭を並べて、盆の墓参りをすることだ。

**考**　「甲戌の夏大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、旧里に帰りて盆会をいとなむとて」（『続猿蓑』）「古郷墓」（『陸奥衛』）等の前書があり、支考の『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』では七月十五日の作として挙げてある。「甲戌」の年は元禄七年で、その七月十日過ぎに京を立ち、木曾塚の無名庵を経て故郷の盆会に参じたのであった。「このかみ」即ち家兄松尾半左衛門が手紙で招いたのである。

句形については『三冊子』に、

家はみな、初は、一家みなと有。……後なしかへられ侍るか。（赤雙紙）

とあり、『蕉翁句集草稿』にも、

此句はじめは、一家みなと有。

と見える。『芭蕉翁行状記』に伝えられた句形が初案とおぼしく、『続猿蓑』に入れる際に「家はみな杖にしら髪の」と改めたのであろう。「白髪に杖や」と明確な切字を入れた形に対して、「杖にしら髪の」は調べが淡々としており、それだけ下五の「墓参り」の語が重量感を持つようである。『宇陀法師』（李由・許六共撰、元禄十五年刊）の句形は杜撰な誤伝と思われる。また、支考の『和漢文操』（享保十二年刊）には、「白髪ノ吟并序」と題した文章の中に「一家みな杖にしら髪の墓まいりまいるこゝろのかたみながらに」という俳諧歌にして収めてあるが、この序は『野ざらし紀行』の「手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜」（Ⅰ195）の条の文と大同小異であって、支考の手が加わっているらしく、芭蕉の作とは思えないものである。

古注には「墓参り」の季語について彼是の論があり、無季とするような説まであるが、［語釈］に引用したように、

この語は古くから盆会に関わる季語と認められており、これらの諸説はそれを知らない人々の空論といわざるを得ない。芭蕉は昔からの語の沿革を心得て句中に使っているのである。二十九で故郷を離れて以来、上野の兄の家で芭蕉が盆会に列するのは初めてのことで、やがて十月に歿することを思えば、郷関を出てからは唯一度の機会だったことになる。たださえ昔の事が思われる魂祭に久々で際会して、往時を懐い今を偲び、死別した知友の誰彼に思いを馳せて、彼の胸懐は無量の感慨に満たされていた。この句ではそれが徒らに感傷に流れず、自分を含めた縁者達の老いの姿を、「杖」と「しら髪」によって描き、特に後案に於いて淡々とした調べのうちに、言い難い寂寥感を印象づけるのに成功している。普通の「軽み」の句とは又別の、巧まない佳句として、記憶に留めるべき作であろう。

尼壽貞が身まかりけるときゝて

*881* 數ならぬ身となおもひそ玉祭り　（有磯海）

泊船集・蕉翁句集

秋季（玉祭り）。

**語釈**　○**尼寿貞が身まかりける**　「尼寿貞（あまじゅてい）」は、芭蕉の若い時の妾と伝えられる女性で、出自未詳。「身（み）まかる」は、人が亡くなること。既出（Ⅱ*310*前書等）。寿貞の歿したのは、元禄七年閏五月下旬と推定される。［考］参照。○**きゝて**　「聞（き）きて」。○**数ならぬ身となおもひそ**　「数（かず）ならぬ身（み）とな思（おも）ひそ」。一人前の数にもならない、つまらない身と思うなよ、の意。「数ならぬ」は、「数に入る」（Ⅰ*252*）の対に当る。「な……そ」は禁止の語法。寿貞の霊への呼び掛けである。「下戸は皆いく月のおぼろげ　落梧　耳や歯やようても花の数ならず　野水」（『あら野』員外）「力なき事なり。かくな恨給そ」（『徒然草』六十九段）「Misaina cotouo na voxerareso.」（『日葡辞書』）。○**玉祭り**　「玉祭（たままつ）り」。「玉」は「魂」の宛字。盂蘭盆に先祖の霊を供養する法事をいう。既出（Ⅱ*414*等）。

**大意**　幸せ薄い生涯ではあったが、一人前の数にもならない、つまらない身と思うなよ。魂祭には、こうして家の先

祖と共に供養して上げるのだから。

**考** 寿貞尼が亡くなってから、盂蘭盆の法事でその霊を供養した時の句であることは、『有磯海』の前書によって明らかである。寿貞は芭蕉の身近にあった女性として、その出自や身分について不明な点が多く、いまだに様々の議論が絶えない。それらについては又後で触れるとして、芭蕉関係の資料にこの人の名が登場するのは、元禄七年最後の旅に出てからである。その最初は島田から出した五月十六日付の曾良宛書簡であって、その末尾に、

宗波師・紅斎老・近所衆へ皆〴〵よろしく頼存候。寿貞も定而移り居可申候。御申きかせ、乍慮外奉頼候。

と見える。その後閏五月二十一日に書かれたとおぼしい杉風宛に、

折〻深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候。され共寿貞病人之事に候へば、しか〴〵茶をまいるほどの事も得致まじくと存候。これらが事共などは、必御事しげき中、万御苦労に被成被下まじく候。猪兵衛・桃隣指図に而、ともかくも留守相守り、火の用心能仕候様に被仰付可被下候。

とあるのを参照すれば、寿貞は芭蕉が江戸を立ってから深川の草庵に留守番として移り住み、病を養っていたことが知られる。猪兵衛は山城加茂出身で、芭蕉の甥と伝えられる人、杉風の魚問屋鯉屋の手代をしていた。桃隣と共に芭蕉とは血縁があり、この二人や杉風が後見して草庵の留守を守っていたのである。六月三日付の猪兵衛宛には、

一、理兵衛細工無之時分、せめて煩不申候様に御気を可被付候。右之通寿貞にも御申きかせ可被下候。おふう夏かけて無事に候哉。様子具に御申越可被成候。

一、宗波老・庄兵衛殿へも御心得可被成候。定而好斎老たへず御見舞可被下と存事に候。追而以書状可得御意候。

という文言があり、草庵には寿貞と共に理兵衛・おふうという人物も同居していたと見られる。理兵衛は不明の人物であるが、恐らくは寿貞と血縁につながる人。おふうは後出のまさと共に寿貞の娘であろう。芭蕉はこれらの人々の消息を案じ、宗波以下の深川近隣の人々に世話を頼んでいるのである。

寿貞が病歿したことを芭蕉が知ったのは、それから間もなくであった。訃報を得た直後に書いたと思われる六月八日付の猪兵衛宛書簡には、芭蕉の受けた衝撃の強さとその衷情を窺わせる切々たる文言が記されている。

> 寿貞無仕合（ぶしあはせ）もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく難申尽候。好斎老へ別紙可申上候へ共、急便に而此書状一所に御覧被下候様に頼存候。万事御肝煎、御精御出しの段〻、先書にも申来、扨〻辱、誠のふしぎの縁にて此御人頼置候も、ヶ様に可有端（あるべきはし）と被存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理くつは無之候。ともかくも能様（よきやう）に御はからひ可被成候。理兵衛もうろたへ可申候間、とくと気をしづめさせ、取乱し不申様に御しめし可被成候。以上

「寿貞無仕合もの」という端的な追悼の語は、「数ならぬ身となおもひそ」の句の表現と関連して理解さるべく、終にこの女性を幸せにすることを得なかった芭蕉の痛恨の情をあらわして余りある。当時の通信事情からして、寿貞の死は閏五月下旬と推定されている。同じ六月八日に認めた杉風宛書状には、

> 二郎兵衛も暇乞致度よし申候故、早〻下し候。様子は直面に御聞可被成候。

ともあり、芭蕉は訃報を得た即日次郎兵衛を江戸に遣したことが知られる。次郎兵衛は前々から述べて来たように、今度の旅に同伴した人物で、寿貞の子（恐らくまさ・おふうの兄）であった。右に「暇乞致度よし申候」とあるのも、実の母ならば当然の情と理解出来よう。六月廿四日付の杉風宛には、

> 二郎兵衛其元へ下候へ共、盤子・素牛と申両人一所に付添為申候而、不自由成事無御座候間、御気遣被成間敷候。
> 盤子は……伊勢下りかゝり為申候へ共、先修行の為、且は二郎兵衛帰り候迄は、木曾塚無名庵に一所に相勤申候。

と、木曾塚の草庵での情況に触れている。その後、六月廿八日付芭蕉宛杉風書簡には、

> 一、素龍事取持成かね申候。存候とは様子相違御座候。……委桃鄰先日二郎兵へに申遣候様に被申候。

と見えるから、二十八日より数日前に次郎兵衛は江戸を立って再び西上したのであった。江戸には十日とは滞在して

いなかった筈で、七月初旬には芭蕉の許に帰ったであろう。或いは七月五日の木曾塚から京の去来宅への移動は、次郎兵衛の帰来を機に行われたのかも知れない。以後彼は芭蕉の歿するまで、伊賀から大坂へと随行することになる。

寿貞の子次郎兵衛は、このように芭蕉の最後の旅には大変縁の深い存在であるが、その名が芭蕉周辺の資料に現われるのはもっと早かった。元禄三年と推定される九月廿六日付の芭蕉宛曾良書簡に、

　桃印・勘兵へ無事、次郎事等委伊兵へ申上候由故、略之申候。

と見えるのが、現在知られている資料の内では最も早い言及である。当時芭蕉は細道の旅を終えた後なお上方にあり、それに江戸の様子を報じた曾良の書状の中に次郎兵衛の名が見えるのであって、次郎兵衛の様子等のことは猪兵衛（「伊」は宛字）が手紙で委しく申し上げたそうだから、この手紙には書かないというのである。恐らく次郎兵衛は細道の旅に出る前から深川辺に住み、猪兵衛が世話を見ていたのであろう。次郎兵衛の年齢は元禄七年当時十七、八と推定され、それより五年前の細道の旅の頃は十二、三なので、まだ独立出来る齢ではなかった。その後元禄六年の霜月八日付曲翠宛芭蕉書簡には、

　当夏暑気つよく諸縁音信を断、初秋ゟ閉関、二郎兵へは小料理に慰罷有候。

という文言があり、『韻塞』（元禄十年刊）所収の許六の文に同年夏の江戸出発に触れて、

　おなじく五月六日の頃旅だゝむと申つかはしけるにおどろき、例の次郎兵衛を使として、……こまやかに文して色紙・短尺・絵讃の類もたせ給はる。

とも見える。六年当時は芭蕉庵に同居して、使走り等を勤めていたのである。

ところで、元禄の初めから次郎兵衛が芭蕉の身辺に現われる事実からして、その背後には当然母たる寿貞の存在が考えられなければならない。寿貞と次郎兵衛の母子関係は、芭蕉歿時の追善集『枯尾花』に載せた其角の「芭蕉翁終焉記」に、遺骸を大坂から義仲寺まで運ぶ川舟に同乗した十人の名を記した中に「寿貞が子次良兵衛」とあるのによ

って明らかである。寿貞と芭蕉との関係については、芭蕉自身何も述べておらず、野坡門風律の著『小ばなし』に野坡の談として、

寿貞は翁の若き時の妾にて、とく尼になりしなり。其子次郎兵衛もつかい被申し由。

と見えるのが唯一の資料である。それでは次郎兵衛は芭蕉の子であったかというに、弟子達の次郎兵衛に関する記述態度からして、到底そうは考えられない。たとえば支考の『芭蕉翁追善之日記』元禄七年十月二十六日の条には、

正秀が方によりて新式・遺言状を封じ、従者二郎兵衛をとゝのえて武江にくだらしむ。この者はみな月の頃母を失ひ、此度は主の別をして、又百里の霜雪をしのぎ行のあはれさに、おの〳〵はなむけをなして泣けるなり。

とある。右の「母」が寿貞を指すことは勿論として、芭蕉のことは「主」といい、次郎兵衛はその「従者」なのである。これらの関係を余り公けにするのは遠慮すべき事情を考えるにしても、芭蕉の実子に対するにしては随分見下した書き方であって、『韻塞』の許六の文にしても同じことがいえよう。次郎兵衛は芭蕉の実子ではなかったのである。『小ばなし』の記事にもあるように、芭蕉と寿貞との関係は「若き時」のことで、寿貞はその後に別人との間に次郎兵衛・まさ・おふうらの子を儲けたとすれば、その辺に芭蕉が「寿貞無仕合もの」と言わねばならなかった不幸な事情が伏在しているのであろう。兎に角かなりの時を隔てて、寿貞や次郎兵衛が再び芭蕉の身辺に現われた時、もう妾とか内妻とかいった関係ではなかったろうが、芭蕉は杉風らの援助を得て、これらの人々を庇護するようになったのである。

芭蕉と寿貞との関係については、近時『小ばなし』の伝えを否定して、彼女を芭蕉の甥桃印の妻とする新説が出ている。しかし、その説の主な支えとなる芭蕉書簡の内容のとり方に問題があり、『小ばなし』の伝えを否定する根拠も薄弱である。且つ、前記其角の「寿貞が子次良兵衛」という書き方も、寿貞が芭蕉にとって或る意味を持った女性だからこそであって、それが桃印の妻では、芭蕉をめぐる人々の中で二義的な位置でしかなくなる。これらの点から、

私は新説を信じ得ないし、それを前提にして展開された種々の見方にも賛同出来ない。興味のある方は今栄蔵氏著『芭蕉伝記の諸問題』（新典社刊）と拙稿「寿貞私考」（『専修国文』五〇号）を御覧頂きたい。

『小ばなし』に見える野坡談にあるように、寿貞が芭蕉の「若き時の妾」だったことは、略々信じてよかろう。二人の関係は、表立って世間に披露出来るものではなかったから、寿貞は全く日蔭の身であって、当時の女性としては自ら「数ならぬ身」と卑下して片隅に引込んでいなければならぬ立場であったろう。

寿貞には、次郎兵衛・まさ・おふうという三人の子があったことは、確認されている。また、「寿貞」はしばしば「寿貞尼」とも書かれて、それは法名である。ということは、彼女は夫に先立たれ、三人の子供を抱えた未亡人で、法名を名乗る在家の尼であったことが知られる。因に、彼女は全く俳諧をたしなまず、俳号も持っていない。俗称も不明である。かかる女性が、「数ならぬ身とな思ひそ」と呼びかけられるような、芭蕉にとって唯一絶対の存在となったところに、深刻な意味がある。夫婦でもない斯かる男女関係を、世俗は内縁関係とか妾とか呼ぶ。『小ばなし』に「妾」の語を用いている所以である。（富山奏博士『俳句に見る芭蕉の藝境』）という説にも留意すべきものがある。芭蕉との縁が次郎兵衛の生まれる前か後かは、徴すべき資料がなくて不明確であるが、寿貞が尼になったのが夫を失った為であることは確かであろう。勿論晩年にあっては、芭蕉と寿貞の縁は若い頃とは異なるものだった筈だが、そういう身の上の子連れの女性として、寿貞は遠慮勝ちにしていなければならなかったのである。それを思い遣ったのが「数ならぬ身となおもひそ」という句中の表現であった。それは彼女の訃報を得て「寿貞無仕合もの」云々と嘆じた猪兵衛宛書簡の文言にも通ずる心情といえよう。

寿貞を幸せにしてやれなかった芭蕉の悔恨——彼女に対する無限の同情が、この一句に結晶したのである。「数ならぬ身」といい、「な……そ」と古風な表現を用いたことといい、凡てこの人への思い遣りに満ちている。

……しみじみと相対う者によびかけるような、他の誰をもこの場に入れさせずに、ひそかに一人告げているよう

なひびきが籠っている。「数ならぬ身とな思ひそ」は、黙っていると、相手が自ら退いて「数ならぬ身」と思ってしまいそうなところを、呼びとめ、力づけているようなひそかなひびきが感ぜられる。……解きがたい謎を秘めたまま芭蕉は世を去っているので、この謎を抱いたまま、この悼句に向わねばならないが、寿貞を悼む切実なるひびきだけははっきり生きている。(『芭蕉全句』)

という加藤楸邨氏の見方は、名鑑賞というべきであろう。

882 稲妻や闇の方行五位の聲 (真蹟懐紙)

続猿蓑・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季(稲妻)。

**語釈** ○**稲妻**「イナヅマ」。夜空に走る電光。秋の季語である。○**闇の方行**「闇の方行く」。稲妻に照らされない闇の方を飛んで行くこと。「五位」にかかる。○**五位**「ゴヰ」。「五位鷺」の略称。六十センチ程の中形のサギ科の鳥。嘴が強大で尾は短く、頭頂から背面まで蒼黒色、翼・腰・尾は灰色、体の下部は白く、後頭部に二、三本の白い飾り羽がある。昼は杉・松などの林に群棲して眠り、夜水田や湖沼で魚類・蛙・蟹などを捕食する。声は烏に似て飛びながら鳴く。「五位」の名は、醍醐天皇が神泉苑の御宴で、この鳥に五位の位を授けられた故事に基づくという。「崎風はすぐれて涼し五位の声　智月」(『炭俵』上)「Goisagui.」(『日葡辞書』)。

**大意** 稲妻がピカリピカリと閃き、光に照らされない闇の中を飛んで行く五位鷺の声が聞える。

**考** 土芳の『蕉翁全伝』元禄七年の条にこの句を引いて、

此句ハ文月ノ頃雖子が方ニ土芳ト一夜カリ寐セラレテ、稲妻の題ヲ置、寐入ル迄ニ句ヲセヨトアリシ時ノ吟也。

土芳モ　いなづまもどる雲のはしと云句アリ。

と見え、竹人の『全伝』にも「文月の頃猿雖宅に土芳と二人稲妻の題にて」として句を載せている。これらの記事は疑うべき点がなく、成立について問題はない。盆後七月後半の作であろう。猿雖は俗名窪田惣七郎。内神屋といった上野の富裕な商家で、芭蕉とは若い頃からの親友であった。元禄二年出家して法号を意専という。『蕉翁句集草稿』には、

　此句初は、宵やみくらし五位の声と有。後直る。

と、他に所見のない初案の句形を伝えている。この時の土芳の句は「明ぼのや稲づま戻る雲の端」で、これまた『続猿蓑』に収められた。

　並木の松のおぐらき方に傍て、五位鷺の啼行さびしさ、稲妻の光にさだかならざる広野のさま、誠に暮がたの景色風情おもしろし。（東海呑吐『句解』）

という解で、句の情景はよく分る。「闇の方行」は、闇の方へ行くのではなく、稲妻の照らさない所を飛び行くものと見るべきであろう。雷鳴を伴なわない稲妻がひらめくさまは、ただでさえ不気味なものである。それに、姿の見えない五位鷺のギャアギャア鳴く声を配し、落着かない初秋の夜のすさまじい気分を出すのに成功している。

　叙景の句である、稲妻に調和する適切なる取材は如何なるものであらうかと言ふに、凄い物、淋しい物二つはのがれない、それには五位鷺の耳を劈んざく如き声が凄寥閒寂最も恰当であらう、稲妻の光の達せぬ或は漏らされし闇に其の声が消え去るといふのは非常によい、……勿論闇の方をとして、我目前には稲妻し、淋しき闇中には五位の鳴き過ぐる声が消え失せるといふのである。（『芭蕉句集講義』角田竹冷）

　この句で注意すべきは、閃めく稲妻を見たといふ視覚上の意識が、真暗な中を飛んで行く五位鷺の声をきいたといふ聴覚上の意識に、突然に、然も何等の無理なく、移つてゆくその心理過程である。歌のやうな格律を重んずる藝術にあつては、さまで異とするに足りぬが、刹那の印象を極度に重んずる俳句にあつてかういふ表現は、

余程珍らしいと言はねばならぬ。佳句である。（平田良平氏『新釈』）

右の鑑賞をよく玩味したい。初五の視覚から中七以下の聴覚へ移る過程を円滑にしているのが、切字「や」の働きであろう。

*883*　里ふりて柿の木もたぬ家もなし　（蕉翁句集）

---

蕉翁句集草稿

里ふかく柿の木もたぬ家もなし　（芭蕉句選拾遺）

秋季（柿）。

**語釈**　**○里ふりて**　「里古りて」。この「里」は、伊賀上野の町を指す。年代を経た古い町なのである。「里ふりて江の鳥白し冬木立」（『蕪村自筆句帳』）「Furi, ita, furite. ……i, Furù natta.」（『日葡辞書』）。**○柿の木もたぬ家もなし**　「柿の木持たぬ家も無し」。凡ての家に柿の木がある。「柿の木のいたり過たる若葉哉　越人」（『あら野』巻三）「Caqinoqi.」（『日葡辞書』）。

**大意**　このあたりはもう随分年代を経た古い人里で、どの家にも柿の木が枝もたわわに身をつけていますね。

**考**　土芳の『蕉翁全伝』元禄七年の条にこの句を挙げて、「此句ハ□望翠方ニ八月七日ノ夜会アリテ、云出ラレシ也。かせん有」とあり、竹人の『全伝』にも同趣の記事が見える。『蕉翁句集草稿』にも「此句にて望翠にて巻有」とあるから、これらの伊賀所伝は信じてよい。但し『句集草稿』に句形を「里ふりて柿もたぬ家もなし」とするのは、杜撰な脱字である。『句選拾遺』の句形は他に所見がなく、誤伝と思われる。望翠は片野氏、通称新蔵。井筒屋といった上野の商家で、芭蕉の妹の嫁した片野氏の縁続きであろう。この年十月家兄松尾半左衛門に宛てた芭蕉の遺状にも、「新蔵」の名が見える。この句の時の歌仙は今伝わらない。

赤く色づいた柿の実は田園の趣に相応しく、その里の豊かさと落着きを思わせる。山に囲まれた古い上野の町は、

どの家も年古りて皆柿の木を持っているのは、その里の古さと、地味ながら豊かな暮しを象徴するものなのだ。句は淡々と事を叙しただけであるが、おのずから望翠への挨拶の意が籠り、故郷の良さに浸っている作者の気分が想われる。

*884*

名月の花かと見へて棉畠　（続猿蓑）

泊船集・東西夜話・蕉翁句集

名月に花かと見えて綿畠　（真蹟懐紙）

伊賀山中にありて

名月や花かと見えて綿ばたけ　（有磯海）

秋季（名月）。

**語釈**　○**名月の**　「名月」は、八月十五夜の月。「の」の所に小休止がある。「や」程にはっきりとは切れない俳諧独得の措辞である。別案の「名月に」「名月や」に照らしても、此処に休止を設ける意識が一貫していることは明らかであろう。○**花かと見へて棉畠**　「棉畠（わたばたけ）」の綿の実がはじけて白い綿毛を吹き出しているさまが、花のように見えるというのである。「見へて」は「見えて」の仮名ちがい。「棉」は「綿」に同じ。「Vata.」（『日葡辞書』）。

**大意**　名月の光のもと、実の熟した綿畠が、花かと疑われる程に白々と見えることだ。

**考**　『続猿蓑』には、次の「名月に麓の霧や田のくもり」の句と共に掲げ、それに付した支考評の冒頭に、「ことしは伊賀の山中にして名月の夜この二句をなし出して」とある。天和以降中秋の名月を故郷の伊賀で賞したのは元禄七年だけであって、『有磯海』の前書に徴しても、支考のいう「ことし」が元禄七年を指すことは疑いない。名月の夜には右の二句と今一句、『笈日記』所収の「今宵誰よし野の月も十六里」が成ったのである。この日は予て計画が進

められていた郷里の無名庵が新築成って、その披露を兼ねた観月の宴が張られた。これよりさき六月廿四日付の杉風宛書簡には、

伊賀にて同名屋鋪の内に庵造候とて、当月四日ゟ門人共普請初、盆前に伊賀へむかへ可申由、段〻申越候間、

……

とあるから、この庵は兄松尾半左衛門の屋敷内にあり、六月四日から普請に掛ったことが知られる。八月十五夜の宴に出した料理を記した左の如き芭蕉自筆の献立表も伝わっていて、当夜の模様を偲ぶことが出来るのである。

八月十五夜

一、芋煮〆

酒

のつぺいせうが　　ゆ

一、煮物　ふ　　吸物　つかみだうふ

こんにやく　　しめじ

ごぼう　　めうが

木くらげ

里いも

中ちよく

もみふり　　くるみ

からの物

肴　にんじん

焼初茸
しぼり汁　すり山ノいも
す
しやうゆ
くわし　かき
吸物　松茸
冷めし
とりざかな

この献立表には左隅に小さく「○献立懸物　是ハ赤坂庵ノワタマシ、折節名月カケテ門人ヲマネキモテナサレシ亡師自筆ノ献立ノ破古也」という土芳の添書もある。

句形については、名月後間もなく伊賀での染筆とおぼしい真蹟懐紙の「名月に」が最初の案であることは論があるまい。この「に」は「ほうらいに」(V 827)と同類の助詞で、名月の光被する句の世界を先ず提示するような働きをする。「名月の」の場合と同様に、はっきりした切字ではないが、ここに小休止のある語法である。『続猿蓑』の「名月の」も同様の措辞で、「に」から「の」へ推敲されたものと見てよかろう。さしたる根拠もなしに「の」を杜撰とすることは妥当ではない。これらに比べると『有磯海』の「名月や」は、中間案とも見られる一方、信ずべき「に」や「の」がやや漠然とした措辞であるだけに、誤伝の可能性も大きいと思う。華雀の『芭蕉句選』に「名月の花かとばかり綿畠」とある句形は拠る所を知らない。

綿の木は夏に花を開き、秋には実がはじける。この句の解としては、

綿の実が熟すると莢が弾じけて綿が白く顔を出す、折柄の名月に綿畠を見やると、宛も白花が咲き誇つて居る如

きであるといふので、山中の実景としては其場所も頷かれるのである。（『芭蕉句集講義』文屋菱花）

という説が簡潔に要を悉している。『続猿蓑』の支考評では、「名月に麓の霧や」の句と並べて、

……名月の夜この二句をなし出して、いづれか是、いづれか非ならんと侍しに、此間わかつべからず。……その次の棉ばたけは、言葉麁にして心はなやかなり。いはゞ今のこのむ所の一筋に便あらん。月のかつらのみやはなるひかりを花とちらす斗にとおもひやりたれば、花に清香あり月に陰ありて、是も詩哥の間をもれず。しからば……後は風興をもつぱらにす。吾こゝろ何ぞ是非をはかる事をなさむ。たゞ後の人なをあるべし。

と評していて、綿毛のはじけた綿畠の白さを花かと疑ったのを「風興をもつぱらに」したものと見、それが「今のこのむ所の一筋」に縁のあるものとした。「今のこのむ所」とは、最晩年のこの時期、芭蕉が「軽み」と「興」を門人達にしきりに説いていたことを思えば、「興」を意味することは明らかであろう。実際は花でないものを花であるかのように表現するところに、興じた気持が動いていると見てよい。その点は正確な見方であるとして、問題は引歌である。「秋くれど月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを」（『古今集』巻十、源忠）の歌に拠ると見ているのだが、この歌は物名歌として「桂の宮（かつらのみや）」という言葉が伏せられており、歌の内容は「秋が来ても月の桂に実は生りはしない。精々その光を花として散らすだけだ」というのである。この歌を引いたところを見ると、支考は当面の句を、名月の光を花に見立てて「名月の花」といったと見ているらしい。しかしそれでは見立ての興に偏して、この時期の句に相応しくあるまい。この句は「名月の」で小休止することによって、地上を遍く照らす名月の光を思わせ、さて次に「花かと見へて棉畠」と地上の即景を面白く表現して一まとまりになると見るべきである。兎に角この引歌に関する限り、支考の説は芭蕉の本意から遠いものと考えざるを得ない。『続猿蓑』刊行以前の『笈日記』伊賀部に於いて支考は、

名月の佳章は三句侍りけるに、外の二章は評をくはへて後猿蓑に入集す。爰には記し侍らず。

と「今宵誰」の句の後注に記しているけれども、この支考評は芭蕉の意に適ったものとして、元から『続猿蓑』に入れられたものかどうか疑わしい。安東次男氏も支考の説を非として、この句を西行歌「よしの山ふもとにふらぬ雪ならばはなかとみてやたづねいらまし」(『山家集』上)の翻転と見ておられる。句の典拠としては、この歌の方が相応しいであろう。土芳の『三冊子』には、

名月に莽の霧や田のくもりといふ姿は不易也。花かと見へてわた畠とありしは新み也。(赤雙紙)

と、やはり二句を並べて述べている。句の見所は、中七の「花かと見へて」と興じた表現の曲折にあるのだ。

885　明月に麓のきりや田のくもり　(有磯海)

続猿蓑・泊船集・三冊子・蕉翁句集

名月に麓の霧か田の曇　(篇突)

秋季(明月・きり)。

**語釈**　**○明月に**　「明月(めいげつ)」は明るく照らす十五夜の月をいう。元禄三年の木曾塚に於ける名月の句(Ⅲ*614*〜*616*)の推敲過程を録した『初蟬』(風国撰、元禄九年刊)が「名月」「明月」を混用しているように、当面の句の『有磯海』の表記も、「名月」と同じと見てよい(漢語としては「明月」が一般で、「名月」は日本で生じた語である)。「に」の所に小休止があり、月光の照らす句の場を印象づける働きをする措辞である。**○麓のきりや**　「麓の霧(ふもとのきり)」。彼方に見遣る山の麓あたりに立ち籠める霧。「きり」は秋季である。既出(Ⅰ*125*等)。「や」を並列の助詞ではなく、切字と見る安東次男氏の『芭蕉発句新注』の見方は確説であろう。**○田のくもり**　「田(た)の曇り」。「麓のきり」の遠景に対して、それより手前の田面は、うっすらと曇って見えるさまである。(Ⅲ*590*)参照。「菊畑おくある霧のくもり哉　杉風」(『炭俵』下)「Cumori.」(『日葡辞書』)。

**大意**　明るく照らす十五夜の月のもと、彼方の山の麓あたりには濃い霧が立ち籠め、手前の田面はうっすらと曇って見える。

考　『泊船集』には「いが山中にありて二句」と前書して、「名月の花かと見えて棉畠」の句の前に出しており、『有磯海』には綿畠の句の次に見える。何れも二句同時の吟であることを示すものであろう。『続猿蓑』では名月の句の冒頭にこの句を掲げ、綿畠の句と並べている。『篇突』（李由・許六撰、元禄十一年刊）の句形は誤伝とおぼしく、信じ難い。

「麓」の語がある為か、高みから見下したとする解釈があるのは良くあるまい。芭蕉は伊賀盆地の中の台地にある上野の町に居るので、見下すといえば見下すのではあるが、町の周囲に山が見渡せる。従って「麓のきり」は遠景、「田のくもり」は近景と見るべきで、遠くの山麓の方は濃い霧が立ち籠め、その余波が手前の田面に及んでいる景色なのである。「上野赤坂は台地の突端、北に伊賀盆地を見はるかす位置にある」（『日本古典文学大系・芭蕉句集』大谷篤蔵氏）ので、皎々たる月の光と対照的な地上の霧の流れを、こういう形で把握したわけだ。

……月は明々（ホノ〴〵）と出て映（サエ）たるに、秋霧立登りて麓は闇く、田面は薄曇る風情、其景色眼前也。（信天翁『笈の底』）

というのが確説である。

綿畠の句の条に引いた『続猿蓑』の支考評では、この句について左のように記している。

月をまつ高根の雲ははれにけりこゝろあるべき初時雨かなと円位ほうしのたどり申されし麓は、霧横り水ながれて平田渺〳〵と曇りたるは、老杜が唯雲水のみなりといへるにもかなへるなるべし。……しからば前は寂寞をむねとし、後は風興をもつぱらにす。……

前掲の如く、支考はこの句と綿畠の句とを並べて、是非の評価を避けているのであるが、当面の句が西行の「月をまつ」の歌を踏まえ、杜甫の詩句の俤を持つものと見ている（杜甫のは「昏昏阻二雲水一」（昏昏として雲水を阻つ。「奉送二十七舅下一二邵桂一」）の詩句を指すか）。しかし「月をまつ」（『御裳濯川歌合』所収）の歌は初時雨との取合わせで、ここの場合に余り相応しくなく、安東次男氏が『新注』で指摘された「たつた山月すむみねのかひぞなきふもとにきりのはれ

ぬかぎりは」（『山家集』上）の歌の方が適合しているであろう。この時芭蕉の脳裏に古歌があったとすれば、西行の「たつた山」の歌だったのではあるまいか。ともあれこの句は、取り立てて目立つ技巧もなしに、山里の特色ある夜景を描き得ている点、土芳の「不易」（『三冊子』）という評語が当っているといってよい。

山間などでよく眼にする景色であるが、容易く（たやす）は中心の摑まれさうもないぱつとした景色を、これだけ的確に、且つ鮮かに生かして来た芭蕉の手腕は敬服に値（あたひ）する。特にこの句で注意すべきは、動詞や副詞を一切用ゐずに、体言を助辞だけでつないで、然もそれに一種のねばりをもたせて居る点である。（半田良平氏『新釈』）

という鑑賞も、玩味すべきところがある。

886　今宵誰よし野の月も十六里　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集

秋季（月今宵）。

**語釈**　○**今宵誰**　「今宵（こよひ）誰（たれ）か月を見るらむ」の略。ここで切れる。「今宵」は下の「月」と呼応して、中秋名月の夜を意味する。「月今宵」または「今宵の月」（Ⅰ81）は、中秋の名月のこと。○**よし野の月も十六里**　歌枕の吉野の月も、此処伊賀の上野から十六里を隔てるだけだ、の意。吉野は月花の名所である。

**大意**　此処から歌枕の吉野は十六里を隔てるばかり。十五夜の今宵はどんな風流人が、其処の月を眺めていることだろうか。

**考**　『笈日記』伊賀部に八月十五日の作として出し、

名月の佳章は三句侍りけるに、外の二章は評をくはへて後猿蓑に入集す。爰には記し侍らず。

と注してあるのによって、「棉畠」や「麓のきり」の句と同日の作と推定される。伊賀無名庵落成の披露を兼ねた月

見の催しのあった時である。

「今宵誰」の表現からして、この句が「こよひたれすゞふく風を身にしめてよしのゝたけの月をみるらん」（『新古今集』巻四、頼政）の歌を踏まえたことは確かである。また、「十六里」には白楽天の有名な詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」（「八月十五夜禁中独直、対レ月憶二元九一」、『和漢朗詠集』上）を翻転した感じがあろう。「十六里」が伊賀の上野と吉野との間の距離であることは勿論として、「よし野の月も十六里」という表現のあらわす気持については、「近きわたりにあらざれば空しく思ひやるのみとの歎息」（杜哉『蒙引』）とか、「吾は此処にありて十六里を隔てることゝて、如何に其境を慕ひ其景を侘ぶるも是非なき事である」（『芭蕉句集講義』星野麦人）という取り方が多いけれども、これは寧ろ近いといっているのではあるまいか。僅々二日路ほどの距離であるといって、その吉野でも月を賞する風流人があろうと思い遣っているのだと思う。「川上とこの川しもや月の友」（Ⅳ795）と似た、興じた気持なのである。こうした興のあらわれはさることながら、同日に成った他の二句に比べると、新しみが乏しいので、『続猿蓑』には入集しなかったのであろう。

887　蕎麥はまだ花でもてなす山路哉（笈日記）

芭蕉翁追善之日記・続猿蓑・泊船集

いせの斗従に山家をとはれて

蕎麥はまだ花に翫す山路哉（蕉翁句集）

秋季（蕎麦の花）。

語釈　○**蕎麦はまだ花でもてなす**　「蕎麦（そば）」には夏蕎麦と秋蕎麦の二種があり、前者は夏の初めに蒔いて末には花をつけ、後者は夏の終りに蒔いて秋に開花する。葉腋から出た枝の先に密生する白又は淡紅色五弁の小花で、俳諧では徳元の『俳諧初学抄』以来、

八月の季語とされている。「もてなす」は、『芭蕉翁追善之日記』に「饗応」の字が宛ててあるように、客をもてなす意。まだ取入れには時季が早過ぎて、実ではなく花で客をもてなしているというのである。「蕎麦……植る七月、花八月、刈る九月」（『誹諧通俗志』）「ながめやる秋の夕ぞだゞびろき　荷兮　蕎麦真白に山の胴中　越人」（『ひさご』）「Soba.」（『日葡辞書』）。〇**山路**　「ヤマヂ」。伊勢から伊賀の上野へやって来た客に対する句なので、伊賀越えの山路を案じた表現と思われる。（Ⅲ565）参照。

**大意**　途中の山路では、蕎麦はまだ実の取入れには時季が早く、花でもてなすといったところでしょう。山家のことで何のおもてなしも出来なくて恐縮です。

**考**　『泊船集』には「伊賀山中二句」と前書して「松茸やしらぬ木の葉のへばり付」（Ⅴ888）の句の前に掲げてあり、『続猿蓑』の前書は『蕉翁句集』と同じである。『笈日記』伊賀部には元禄七年のこととして、

九月二日

支考はいせの国より斗従をいざなひて伊賀の山中におもむく。是は難波津の抖擻の後、かならず伊勢にもむかへむと也。三日の夜かしこにいたる。草庵のもうけも、いとゞこゝろさびて

として「蕎麦はまだ」の句と「松茸や」の句を並べて出しており、その礎稿となった『芭蕉翁追善之日記』でも右の「三日の夜かしこにいたる」までは同文、その次に「斗従が篤実の志ざしをよみして」として「蕎麦はまだ」の句に続けている。当面の句が九月三日の夜伊勢から来た斗従への挨拶として詠まれたことは確かであろう。斗従は出自生歿年等未詳の人である。『蕉翁句集』の「花に」という異形は誤写と思われる。

斗従という珍客を迎えた心のはずみが、折柄の蕎麦の花に託され、「花でもてなす」と擬人化した、機智的即興の挨拶句である。

世専新蕎麦を夕月の饗応とす。いまだ稀なるを以て也。山谷などは殊に其熟す事遅し。
此吟、花饗(モテナ)すと云詞、哀にして余情あり。妙計と云べし。山家の物佗しく事足らざるの風情、味べき也。

赤蕎麦は小白花を開きて、山畑等に多く植て一面に白く、遠く望みて美観也。是を以て花で饗す共称美したる詞、其意深し。（信天翁『笈の底』）

という説は、観察がよく行き届いている。「軽み」と「興」を唱道した最晩年の作らしい、成功した句である。

*888* 松茸やしらぬ木の葉のへばり付　（忘梅）

芭蕉翁追善之日記・笈日記・陸奥鵆・続猿蓑・泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季（松茸）。

**語釈** ○**松茸**「マツダケ」。秋季主として赤松林に生えるマツダケ科の茸。香気が高く、日本では茸の中で最も好まれる。「松茸は和産殊外甘味にして賞レ之。往々産すといへども、殊に洛山に生ずる者を地松茸と称す。香味厚し。就中洛東の稲荷山、洛西の龍安寺山の者第一とす。嵯峨・北山の産亜レ之。是中土地気の然らしむる所也」（『滑稽雑談』）「松茸や都にちかき山の形　惟然」（『続猿蓑』下）「**Matçudaqe.**」（『日葡辞書』）。○**しらぬ木の葉のへばり付**「知らぬ木の葉のへばり付く」。何の木の葉か名を知らない葉が、べったりと付いているさま。「へばり付」は「付き」とも訓めるが、『続猿蓑』に「へばりつく」と仮名書きになっているのに従うべきである。「木の葉」は冬の季語になることがある（Ⅰ*126*等）が、ここは添え物に過ぎず、「松茸」で秋季になる。「松茸は山林幽谷に生ず。依て見も不レ知深山木の葉相交、菌に纏ひ附き、或は名も知れぬ草苔等は褁て里に持出る也。誠に此句に云るが如し。……惣て菌類は湿に生ずるが故に滑り有り。然ば朽葉の類能附て有る物也」（信天翁『笈の底』）。

**大意** 取り立ての松茸の笠に、何の木の葉か知らない朽葉が、べったりと貼りついているよ。

**考** 支考の『芭蕉翁追善之日記』（元禄七年稿）には、

九月二日

支考は伊勢の国より斗従をいざなひて伊賀の山中におもむく。是は難波津の抖擻の後、かならず伊勢にもむかへむとなり。三日の夜かしこに至る。……

其夜は殊の外につかれて宵より臥す。次の日何某の方より松茸を一籠饋りけるに、支考も斗従も珍しくてならべ見けるに、

松茸やしらぬ木の葉のへばり付　翁

此松茸を今宵の巻頭に乞うけて一歌仙満ぬ。爰にしるさず。(岡山市立図書館蔵西村燕々写本による)

と見え、これによれば句は元禄七年九月四日の作で、これを発句として歌仙一巻が巻かれたのである(歌仙は後年蝶夢の『芭蕉翁俳諧集』にはじめて紹介された)。『追善之日記』の右の文中、「何某の方より松茸を一籠饋りけるに」の「何某」が、柿衛文庫本では「阿叟」(支考が芭蕉に対して用いる敬称)となっているが、この時支考らは芭蕉の上野無名庵に居た筈だから、芭蕉から松茸が贈られる筈はなく、岡山市立図書館本の「何某の方より」の方が良い。上野住の誰かから芭蕉の許に松茸一籠が贈られたのであろう。

この句は元禄五年正月に成った『忘梅』(尚白撰)に載っている為に、同四年秋までに成っていた句と見られることが多く、七年九月の伊賀では旧作を歌仙の立句としたものと考えられていた。しかし、赤羽学博士は雄山閣版『総合芭蕉事典』の「忘梅」の項で、『元禄七年甲戌歳旦帳』の其角の句「年たつや家中の礼は星月夜」や、芭蕉一周忌追善集『翁草』(里圃撰)所収の木因の句「初春や管絃の鉾のたて所」が本書に入集しているところから、元禄五年初頭に一応の成稿を見て後も増補があったと見て、当面の「松茸や」の句も、元禄七年九月四日の作が『忘梅』に追加されたものと考えておられる。さきに掲げた『追善之日記』の記事のような場合に旧作を利用し、且つそれを立句として歌仙を巻くというのも随分不自然な話であって、『忘梅』の成稿時期にこだわる要がなければ、支考の記事をそのまま受け入れるのに何の支障もない。この句の成立時期に関しては、赤羽説に従うべきものと思う。『続猿蓑』所収のこの句には、「い勢の斗従に山家をとはれて」という前書が抹消されているが、この数句後の「蕎麦はまだ花でもてなす山路かな」の句に同文の前書があり、後者の前書に用意されたものを誤って「まつ茸や」の句に付した為に、

抹消したもののようである。

句はただ何事もなくあるがままを述べたように見えるが、取り立ての松茸の感じがよくとらえられている。

……吾々なども茸狩の時に於てよく見る事実で一寸興があるのみならず、松茸其物をもよく面白く現はして居る。殊にへばりつくなどゝ俗語を思ひ切つて使用したので松茸が目に入るやうぢや。（『芭蕉俳句評釈』）

と内藤鳴雪が説く通りであろう。俗語の使用が単なる思いつきや新奇をねらうということではなく、それによって対象の実態が生き生きと現前する点に注目したい。「軽み」というものが、「写生」と紙一重の一面を持つ例ともいえる。

『忘梅』の後年の増補の可能性から、この句の「しらぬ木の葉」を斗従を含みとする表現と見る佐藤和夫氏の説（『春雷』昭和五十八年一月号）を踏まえて、最近では、

（よく見知っている支考に、ぴったりとくっついて見知らぬ男がやって来た）ちょうど一つの松茸に何の木の葉か知らぬが、べったりとへばりついているようだよ。（井本博士『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と解する説も出ている。しかし、ユーモアにしても初見の人に対して「知らぬ」と露骨に言い、支考に「へばりついてやって来たとするのは、挨拶の礼に叶うかどうか。「蕎麦はまだ花でもてなす山路哉」の句に見えた斗従へのねぎらいと、客を愛する気持の温かさとは随分ちがいがあろう。右の新説は所詮考え過ぎではあるまいか。

*889* 行秋や手をひろげたる栗のいが　（芭蕉翁追善之日記）

笈日記・陸奥鵆・続猿蓑・泊船集・蕉翁句集

秋季（行秋・栗のいが）。

**語釈** ○**行秋**　「行く秋」。暮秋の季語。既出（Ⅲ559等）。○**手をひろげたる栗のいが**　栗の実は外側にとげの密生した毬に包まれている。成熟するにつれて毬は固くなり、やがて裂け目が出来て実が落ちるのである。実をとる時は棹竹などで毬をたたき落すこと

が多い。ここは「栗のいが」が大きく裂けて梢に残っているさまを、「手をひろげたる」と形容した。掌を一ぱいにひろげて「行秋」を押し止めようとするかのような感じを出し、秋を惜しむ気持を託している。（Ⅳ701）参照。「時珍云、栗毬、栗外刺包也。……和訓義解云、……其外刺おそるべき様也。△今按に、罅発は俗ニ云栗のはじけ也」（『滑稽雑談』）「御ぐしもたげて御手をひろげ給へるに」（『竹取物語』）「Vódeuo firoguete vodosu.」（『日葡辞書』）。

**大意**　秋も末だなあ。行く秋を惜しんで栗のいがが、手を一ぱいにひろげて秋を押し止めるかのように、大きく割れて梢に残っている。

**考**　『陸奥鵆』に「対伊陽門人」と前書があるのは、句の動機を考える上で重要である。支考の『芭蕉翁追善之日記』では元禄七年九月伊賀でのこととして、

五日の夜なにがしの亭に会あり。

行秋や手をひろげたる栗のいが　翁

此こゝろは、伊賀の人〻のかたくとゞむれば忍びてこの境を出んに、後にはおもひ合すべきよし申されしが、永きわかれとはぬしだにもいのり給はじを、……

という記事が見える。同じ支考の『笈日記』は、伊賀部の同年九月八日の記事の直前に、「行秋や」の句だけが掲げられ、何時何処で成ったのか分らない形であった。土芳の『蕉翁全伝』には、やはり元禄七年の条にこの句を挙げて、

此句ハ元説所ニテ一折有。此巻ヲ此里俳諧ノ終リ也。

とあり、元説なる上野の俳人宅での会だったことと、これを発句に半歌仙が成ったことを知り得る（竹人の『全伝』も同旨）。但し、この半歌仙は今伝わらない。当面の句は九月五日に元説亭で成り、伊賀を去るに当って門人達への留別の意が籠められているのである。

句の表面は他奇のない晩秋の景色である。即ち、

ことぐ〳〵くゑみ落たるあとの毛毬は手をひろげたるやう也。行秋の容躰、他人の趣向とはおもひよらぬ所有り。味ふべし。（東海呑吐『芭蕉句解』）

山家の秋の末の荒涼を極めたる景色がいかにもよく写されてある。秋の末になると栗の毬は大かた割れて、実は皆落ち尽し空しき毬のみが枝に残るのである。きのふもけふも吹きすさぶ風に木の葉は大かた落ち果て、寂しい木々の梢を薄い夕日の影が照してゐる。その中に空しき栗の毬がさながら手を拡げたやうな形をして、ところぐ〳〵に残つて居るさまは、まことに哀れに見ゆるのである。枯尾花などの弱々しい姿を借りて秋のあはれを写すのは普通のことである。いかめしい栗の毬を捉へたところが翁の着眼の凡ならぬ所であらう。（小林一郎氏『芭蕉翁句集評釈』）

などと見てよい。「手をひろげたる」という譬喩的形容は、栗の毬の形からいっても大手をひろげた感じではなく、掌を前に出して行こうとする者を押し止める仕草を考えるべきであろう。いうまでもなく擬人化の手法である。

「手をひろげたる」がこの句の眼目であるが、これは栗の毬が笑みわれたさまの形容で、楸邨が説くように、両手をひろげる意でなく、掌をひろげる意である。固く握りしめていた掌を開いたさまが、あたかも行く秋を惜しみ、止めようとするかの素振に見えるのである。そのいくつも手をひろげたさまが、去って行く自分を門人たちが惜しむ気配に通じるのだ。作者の立場から言えば、後髪を引かれるような気持が表現されていることになる。……「手をひろげたる」が無造作なような表現でいながら、そのさりげなさのなかに、かえって豊かな感性を秘めている。「軽み」の真髄は、このような俗語的表現を生かしたところに生まれてくるものであろう。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

という山本健吉氏の見方が確説で、晩秋の自然に留別の思いを託したところは、「行春や鳥啼魚の目は泪」（Ⅲ457）の句に似、木の実の類に暮秋の季を観じているところは、「行穐のなをたのもしや青蜜柑」（Ⅳ753）の句にも似ている。

尤も、「手をひろげたる」については、

……当座の景物につけて即興の挨拶をのべるという俳諧の約束からいえば、栗の枝はおそらく元説亭の俳席の床に活けられたものであったかも知れない。二肢に分かれた枝の先についたいがが、ちょうど握りこぶしを開いたようにえみ割れて、枝全体としては大手をひろげたように見える。「行く秋や」の初五が、そうした童心めいた把握で受けとめられるとき、読者の心は現実の分別知から解放され、晩秋の夜の俳席の実景を離れて、幻想的な山国のメルヘンの世界へと導かれてゆく。（尾形仂氏『松尾芭蕉』）

という取り方も一説ではあろう。

この句に籠められた留別の寓意は、「貴方がたが引止めてくれるのは有難いが、私は行かなければならないのだ」ということである。門人達には黙って出掛けるので、「後にはおもひ合すべき」（『追善之日記』）即ち、後でそういう意味だったかと合点が行くだろうと言ったのである。「手をひろげたる栗のいが」のイメージを、尾形氏は「幻想的な山国のメルヘンの世界」とし、加藤楸邨氏は「端的な童心的把握」（『芭蕉全句』）と見ておられる。しかし、床の飾りと場を限定するならば兎も角、普通にこの句に対すれば、先ず眼に浮ぶのは野外の景色であろう。秋も終ろうとする野外に、実を落し尽した栗の毬が枝頭に残る景色は寂寥の極みである。芭蕉の意図がどうだったかは分らぬが、こんな寂しい句を残して故郷を後にした彼は、「永きわかれ」（『追善之日記』）を予感していたのかも知れない。

*890*　皃に似ぬ發句も出よ初ざくら　（初蟬）

続猿蓑・泊船集・記念題・四山集・三冊子・蕉翁句集

春季（初ざくら）。

**語釈**　**○皃に似ぬ発句も出よ**　「皃に似ぬ発句も出でよ」。「初ざくら」の趣から、それを見る自身のぱっとしない顔とはちがった、

若々しく華やいだ発句が出来るように、という願望を、呼び掛けの形にした。「発句」は、俳諧の発句。既出（Ⅰ103等）。「皃」は「貌」の略体である。「小海老の句は珍しといへど、其物を案じたる時は、予が口にもいでん」（『去来抄』先師評）。○初ざくら　「初(はつ)桜(ざくら)」。咲きはじめの桜の花を賞美していう。既出（Ⅱ356）。

**大意**　桜が咲き始めた。この初々しい花を見ては、年老いた者も、その顔に似ない華やかな発句が出来るとよいなあ。

**考**　土芳の『蕉翁全伝』元禄七年の条にこの句を引いて、

此句ハ此庵ニ後猿蓑草案取扱ハレシ時、句ノシカタ人ノ情ナド土芳ト云出テ、フトヲモヒヨラレテ書付句也。

とあり、竹人の『全伝』同年の条にも、

同じ秋新庵にて続猿蓑草稿吟味のころ、句の仕かた人の情などの事共土芳と云ひ出て、

としてこの句を挙げてある。これらは何れも信ずべき所伝であって、『続猿蓑』の編纂にたずさわっていた時といえば、七年秋の伊賀滞在中に相違なく、兄半左衛門宅の敷地内に新たに成った無名庵で土芳と対談中にふと思いついた句なのであった。『三冊子』にも、

此句は下のさくらいろ〳〵置かへ侍りて、風与(ふと)はつ桜に当り、是初の字の位よろしとて究る也。（赤雙紙）

とあって、土芳自身その席で句の成った次第を見聞していたことを思わせる。季節ちがいの春の句を思いつくままにまとめて『続猿蓑』に入れたわけで、芭蕉としては珍しい出来方の句である。

『三冊子』の伝えるところによれば、この句は中七までが先ず成っていて、それに配合するものとして色々の「桜」を案ずるうちに、ふと「初ざくら」に思い当って、「初の字の位よろし」とそれに決したのである。桜は風騒の人の最も愛するもの、殊に咲き始めのそれは賞翫の気持が強い。「初の字の位よろし」といった所以であろう。それが中七までの諧謔と好対照をなすのである。「発句も出よ」という呼び掛けは、芭蕉自身に対してか、同席の数人或いは世間一般の人々に対してか、説が分れるけれども、余り呼び掛けの対象がひろがっては、却って詩情を損う。

……初さくらは誠に愛らしく美くしくして年も取らぬ乙女のやうである。此様な花に対してゐる自分も花相応にやさしき美しい発句をも吐きたいものぢや、我貌は皺だらけの武骨者で此の花には似てもつかない形ちであるが、せめて発句だけは自分の貌に似ず花に似よつたのが出てくれよ、と滑稽に言つた……（内藤鳴雪『評釈』）

という風に、作者自身に重点を置く解が良いと思う。「月見する座にうつくしき貞もなし」（Ⅲ *616*）と似通った発想ともいえる。この句の時「句ノシカタ人ノ情」を話題にしていたという『全伝』の記事に関連させていえば、「句ノシカタ」は、配合として位の良き物を選ぶことであろうし、「人ノ情」は、華やかに若やいだ物に対した時の老情の動きと見てよかろう。白楽天の詩句「巫女廟花紅似レ粉、昭君村柳翠二於眉一、誠知老去風情少、見レ此争無二一句詩一」（巫女廟の花は紅にして粉に似たり。昭君村の柳は眉よりも翠なり。誠に知んぬ老いもて去(い)んで風情の少きことを。此れを見ては争(いか)でか一句の詩無からむ。「題峡中石上」）を踏まえたとする説もあるが、句の出来方から見て古詩を踏まえたものではあるまい。「興」を中心にして、「初ざくら」の若やいだ趣を生かそうとしたのである。

## *891*　冬瓜やたがいにかはる顔の形　（西華集）

秋季（冬瓜）。

**語釈**　○**冬瓜**　「トウグワン」。「トウグワ」の音転。「カモウリ」とも訓める。ウリ科の蔓性一年草。夏糸瓜(へちま)に似た黄色い花をつける。果実は長さ三、四十センチに及ぶ球状または楕円状で白い粉をかぶっており、果肉は煮物漬物にする。『誹諧初学抄』『毛吹草』に秋八月の季語としている。「冬瓜　かもうり　とうがん防州　とんが伊州……方言江戸とうがんと云」（『重訂本草綱目啓蒙』巻二十四）「冬瓜ンの花をちらすに茶屋こまり」（『柳多留』三十五編）「**Tôgua.**」（『日葡辞書』）。○**たがいにかはる顔の形**　「互(たが)ひに変(かは)る顔(かほ)の形(なり)」。久しぶりに顔を合わせた二人が、互いに年老いて面変りしてしまったさまをいう。「たがいに」は「たがひに」の仮名ちが

い。「形（なり）」は「かたち、有様」をいう。「杉なり」（Ｉ61）「窓形」（Ｖ844）参照。「年のくれ互にこすき銭づかひ　野坡」（『炭俵』下）「それぐの朧のなりやむめ柳　千那」（『続猿蓑』下）「Tagaini.」「Nari.」（『日葡辞書』）。

**大意**　久しぶりに出逢って見ると、お互いに顔つきも変って年をとってしまった。冬瓜のような可愛気のない様子だなあ。

**考**　古い資料としては支考の撰した『西華集』に見えるだけで、それには「此句は伊賀に居給へる時の作也。是には老女に逢ふなどいへる題もあらばやと申されしか」とある。支考が芭蕉の直話を伊賀で聞いたとすれば、元禄七年九月初めの時しか考えられないので、同年秋伊賀滞在中の作と推定される。「題もあらばや」という話しぶりからして、そういう場合を想定して作ったらしく、後年の『一葉集』に「故人に逢て」と前書があるのは、右の芭蕉の語によって作り設けたものであろう。

今案、互の顔色を冬瓜に喩へ出たる、其形と云ひ妙術と云べし。秋も更行比の冬瓜は、実（ミ）入て形も瘤立（コブタチ）、今を盛の色も幾等失（イツラウセ）て黒く青ざめたるは、人に興（たと）へば、五十年良過（ヤヽ）たる顔共云べし。誠に花の枝を扱（コキ）たる幹（カラ）の如し。（信天翁『笈の底』）

この句で冬瓜を引合に出した動機は右の解で分る。作り設けたといっても、長年会わなかった幼馴染などに郷里で出逢って、面変りしたさまを熟々眺めた体験が根本の動機としてあることは勿論で、折柄出盛りの冬瓜を以て比興したのである。ユーモラスに興じているが、底には寂しい老懐が感ぜられる。

*892*　風色やしどろに植し庭の［秋］（土芳蕉翁全伝）

風色やしどろに植し庭の秋（三冊子）

秋季（萩）。

**語釈**　**○風色**　「カゼイロ」。「カザイロ」と訓む説もある。草木を吹きなびかす風の様子、その趣をいう。「風の色」に同じ。「さうぶ懸てみばやさつきの風の色大坂洒堂」（『炭俵』上）。**○しどろに植し庭の**萩　「しどろに植ゑし庭の萩」。「しどろに」は、秩序もなく雑然としたさま。「しどろもどろ」（Ⅱ271）参照。「萩」については、［考］で述べるように、この部分の信ずべき句形が伝えられていない。土芳系の所伝は「秋」または「荻」であるが、何れも納得の行かない語である。芭蕉の句案では「萩」とあったものと見て、ここでは竹人『全伝』の下五によって底本を改めた。「萩」は既出（Ⅰ12等）。「ものごとのしどろにあとさきなるも、中〳〵におかしき事のみ多し」（『更科紀行』）。

**大意**　無造作に植えられたお庭の萩に風の吹きわたる有様は、なかなか趣がありますな。

**考**　土芳の『全伝』元禄七年の条にこの句を挙げて、

此句玄虎子ニ遊バレシ時、庭ノ半ニ作ラレタルヲ云リ。表六句有。

とあり、竹人の『全伝』も、玄虎亭での表六句の発句と伝えている。何れも信ずべき記事である。藤堂玄虎とは既に江戸で風交があり（Ⅳ811、Ⅴ836）、この秋の上野滞在中にも招かれたのであった。これに続く表六句は今伝わらない。

この句は所伝の句形に問題が多く、信ずべきものがない。『三冊子』の諸本では、石馬本・芭蕉翁記念館本が「庭の秋」、梅主本が「庭の荻」とあり、土芳の『蕉翁句集草稿』と『蕉翁句集』も「庭の秋」であって、どうやら土芳は「庭の秋」と覚えていたらしい。しかし、「植し」を承ける語としては何か草木の名でありたく、「秋」では漠然としていて落着かない。土芳の『全伝』曰人写本では、「庭の荻ヲギ」と態々振仮名がしてあるが、庭の飾りに植えるものとしては、「荻」より「萩」の方が相応しいであろう。そう考えると、竹人の『全伝』に「庭の萩」とあるのが最も信ずべきものに思われて来る。但し、これは中七が「しどろに植る」となっていて、他に所見のない誤伝形である。ともあれ芭蕉の句案では、下五が「庭の萩」だったと考えるのが真を得ているであろう。

土芳はこの句の推敲について左の如く伝えており、その席に居合わせたものと思われる。

この句、ある方之庭をみての句也。風吹とも一たび有り。風色やともいへり。度〳〵吟じていはく、色といふ字も過たる様なれ共、いろといふかたに先すべしと也。（『三冊子』赤雙紙）

此句五文字、風吹やか、風色やかと吟じ、さて後、風色に成る。（『蕉翁句集草稿』）

即ち、初五に「風吹くや」と「風色や」の両案があり、度々吟じ返して、十分ではないが一応「風色や」に決したという。「色」という語が際立ち過ぎるのを不満として「色といふ字も過たる様なれ共」といったのであろうが、他に適当な表現も思いつかず、「風吹くや」よりは優るとして「風色や」に決めたのである。

土芳『全伝』の記事によれば、まだ作りかけの庭に萩が無造作に植え込まれていたのを句にして挨拶としたもので、まだ整わない庭の、却って自然の趣に富むのを賞したのである。特に「風色」といったのは、風が草木を吹く中でも、萩の花の紅が特に目立ったからであろう。露伴も「風色と云ふからには花は紅である。白は素色であって色とはいはない」（『芭蕉俳句研究』）といっている。尾形仂氏は「庭の秋」の句形を採り、次のように述べておられる。

……「庭の萩」とあるよりも、一見漠として具象性に欠けるかの感のある「庭の秋」のほうが、実は庭全体の秋色を伝えて、いっそう句がらを大きくしていることに気がつく。「しどろに」は、……和歌にも「踏みしだき朝行く鹿や過ぎぬらむしどろに見ゆる後の刈萱（かるかや）　藤原道経」（『千載集』秋上）などとよまれているが、また一方、「朝寝髪乱れて恋ぞしどろなる逢ふよしもがな元結にせむ　良暹法師」（『後拾遺集』恋）などとも用いられているような、どこか艶な連想も伴って、「萩」「女郎花」などと一々名をあげずとも、それら草の花のしどけなく秋風に吹きそよぐ感じは十分浮かんでくる。

………

芭蕉の「風色」は、……この場合には、春の「風光る」と同じように、風自体に季節の色を感じとっているわ

けで、「風の色」は木草の色からは独立した意味をになっていることになる。感覚的にはこのほうが、伝統的な使いざまよりもいっそう進んでいるともいえるかもしれない。

芭蕉が「〝色〟といふ字も過ぎたるやうなれども」といって、「風色や」と置くことに躊躇したのは、「色」に重い比重をかけたそうした元禄俳人たちの新しい使いざまを考慮したからであろうか。それとも、「しどろに植ゑし庭の秋」という無造作な嘱目の〝かるみ〟と、「風の色」という歌語のになっている伝統の〝重み〟との均衡を勘案したからであろうか。いずれにしても、作家が新しい造語を用いようとする場合の、一方で既成の詩語との共鳴を期待しながら、他方それに引き寄せられまいと留意する、そうした慎重な姿勢のほうかがえるのもおもしろいし、また、その効果を測定するのに「たびたび（声に出して）吟」ずるという手段によっているのも見落とせない。（『松尾芭蕉』）

*893*

## 新わらの出そめて早き時雨哉　（蕉翁句集）

秋季（新わら）。

**語釈**　**○新わらの出そめて**　「新藁（しんわら）の出初（でそ）めて」。「新わら」は、稲刈りをした後、干し上って間もない稲の茎葉。稲扱（こ）きが終ると、藁は田圃に藁塚として積んで蓄えられ、屋根裏などにも詰込まれて、俵を編む外、敷物・草履・草鞋・蓑・笠・縄など種々の生活用具の材料となる。農家には不可欠の必需品である。取入れ後にその新藁がぼつぼつ出始めることをいった。「新わら」は『誹諧初学抄』『毛吹草』に「わせわら」として八月の季語とされて以来、俳諧での秋の季語とされている。この句は「時雨」（冬）が季語とも見られるが、秋のうちの吟と伝えられるので、「新わら」の方を季語とするのがよいであろう。「新藁の屋ねの雫や初しぐれ　許六」（『韻塞』十月）「Vara.」「Some, uru.」（『日葡辞書』）。**○早き時雨**　「時雨（しぐれ）」は秋の末から初冬のもの。その時期が少し早く訪れたことをいう。

【大意】 稲刈りが済み、新藁が出始める頃となって、聊か時期の早い時雨が訪れて来たことよ。

【考】 土芳の『蕉翁全伝』元禄七年の条にこの句を挙げて、「此句ハ秋ノ内猿雖ニ遊ビシ夜、山家ノケシキ云イ出シ次手、フト言テヲカシガラレシ句也」と述べてあり、竹人の『全伝』も同年猿雖宅での吟と伝えている。これらによって元禄七年秋の伊賀滞在中猿雖亭で成ったことは信じてよく、更に『蕉翁句集』の注記に、「此句は暮秋の頃いがにてはやく云出されし吟也」とあるのによれば、九月の初め、七日までに詠まれたことになる。

「早き」を「新わら」のこととして、「既に稲を刈つて此頃既に新らしい藁が出初めた、如何にも早く出た事ぢやと感じた」（内藤鳴雪『評釈』）と解しては良くない。「早き」は「時雨」にかけるべきで、「新藁が出初めたと思ふとはや時雨が来た」（『芭蕉句集講義』角田竹冷）とするのが至当である。本来なら新藁の出初める頃には、まだ時雨は降らない筈なのに、早くも時雨がばらつく空あいになった。其処に冬の到来の早い伊賀の「山家ノケシキ」（土芳『全伝』）を看て取ったのであって、おのずから冬のわびしさが感ぜられる。「早き時雨」の理由を明かす為に「新わらの出そめて」という表現があるとすると、態とらしい感じになるが、これは「新わら」という人事が、たまたま「早き時雨」に会したのに興じたので、後者の理由づけとして前者があるのではない。山国の伊賀では時雨の到るのも早いのが常という見方もあるが、九月初めの時季では伊賀と雖も早い時雨だったと見るべきであろう。

　藁は賤が屋をふく物にて、しぐれに因みあり。此懸合せ古轍を追はず、俗中の寂をいへり。（杜哉『蒙引』）

という古注の鑑賞がよく、加藤楸邨氏が「早き時雨」を常態と見る立場ながら、

　新藁の真新しい匂いと、時雨のひえびえした感じとが伊賀の山国の感をしみじみと湛えている。伊賀の季節のあわただしさ侘びしさをかみしめ、故郷のそれとして懐しむ心のさまである。「ふと言ひてをかしがられし句」というのは即興の句の意味であろうが、目にうかぶような言い方である。（『芭蕉全句』）

と述べておられるのも良い。「しぐるゝや田のあらかぶの黒む程」（Ⅲ627）と対を成す佳吟であって、前の句ほど表現

の緊密性はないけれども、「新わらの出そめて」に最晩年の句らしい興が見える。

894 びいと啼尻聲悲し夜ルの鹿（九月十日付杉風宛書簡）

芭蕉翁追善之日記・芭蕉翁行状記・笈日記・陸奥鵆・喪の名残・泊船集・金毘羅会・西の詞・蕉翁句集

秋季（鹿）。

語釈 ○びいと啼尻声 「びいと啼く尻声」。「びいと」は、鹿の鳴き声の擬音的形容。底本の書簡には「び」と濁点が付してある。「尻声」は、長く引いた鳴き声の余響。「尻」は「屍」の異体字である。「尾もなくてしり声長きうづら哉　貞継」（『鷹筑波』巻三）。○夜ルの鹿 「夜ルの鹿」。「夜ル」は、訓みが「ヨ」でないことをはっきりさせた一種の送り仮名である。

大意 びいと長く尾を引く夜の鹿の鳴き声が、闇に悲しげに響くことよ。

考 「ならにて」（『泊船集』）「さる沢の池のほとりにて」（『金毘羅会』）等の前書がある。芭蕉が伊賀の故郷を出て大坂へ向ったのは、元禄七年の九月八日であった。支考の『芭蕉翁追善之日記』から、奈良までの行程の大略を左に抄する。

八日

難波の旅行この日さだまる事は、奈良の旧都の重陽をかけんとなり。人々のおくりむかえいとむつかしとて、朝霧を籠て旅立出るに、阿叟の兄も送見給ひて、かねては引わかれたる身なれば、あはじく〳〵とこそはあきらめつれ、互におとろへ行程は、別も浅猿しうおもほゆるとて、具せられつるもの共に介抱の事などかへす〴〵たのみて、背影の見ゆるかぎりはい給ひぬ。阿叟も跡は見むき給はずして、おもひ出もなき古里の山なれど、別れ行はたあはれなりけりと幾度も吟じて、そこらの山をのみおしみ申されし。其日は必ず奈良迄といそぎて、笠置より河舟にのりて、出洲といふ所を過るに、山の腰すべて蜜柑の畑なり。……かさぎのいたゞきは、誠に惜しむべき秋の名残なり。かもといふ所より船をあがりて行に、一里ばかり日暮て、月の影にたどる。十余町の間にして殊

の外につかれて、青芝の上にいきつき給へるを、とかくにいたはりて宿をさだめけるに、這入て宵のほどをまどろみぬ。されば曲翠子の大和路の行にくみすべきよし、しゐて申されしが、かゝる衰老のむつかしさを、旅にてしり給はぬ故なりと、みづからも口惜しきやうに申されしが、まして今年は殊の外によはり給へるなり。其夜はすぐれて月もあきらかに、名に逢(ママ)へる鹿は声〴〵に啼乱てあはれなれば、いつしか風情の動き出て、かの池のほとりに吟行。

…………

びいと啼尻声かなし夜の鹿　翁

此声はその夜其所にありて古き都の哀れさをしらば、いづれの人か涙をおとさゞらん。支考は鈴鹿の山中にも住て、鹿の音のあはれも聞おぼへ侍るに、此五文字のかなしみ、今宵此所ならずば、いかで承り候半と感じけるに、阿叟も此句はやすき筋をいひ得たるよし申され侍りし。

鹿の音や糸引はえてつゞら山　支考

『笈日記』の文も右と大体同趣であって、『追善之日記』を所々省略した形であるが、奈良の旅宿の所在を「さる沢のほとりに宿をさだむるに」と明記したところや、「月の三更なる比かの池のほとりに吟行す」とあるのは、『追善之日記』より精しくなっている。この時の随行者は、支考・惟然・次郎兵衛と、兄半左衛門の後嗣の又右衛門の都合四人で、奈良の旅宿に着いてから宵のうち暫く睡って疲れをいやし、夜が更けてから猿沢の池のほとりに吟行したことが知られる。「びいと啼」の句はこの時成ったのである。「び」の濁点は杉風宛書簡の外、『陸奥鵆』にも付いている。華雀の『芭蕉句選』に中七が「尻声寒し」とあるのは、根拠が明らかでなく信じ難い。

『篇突』(李由・許六撰)に、

鹿と云物も哥の題にて俳諧のかたち少し。びいとなく尻声の悲しさは、哥にも及がたくや侍らん。

とあるように、鹿の声のあわれは和歌に言い古されて、従来の俳諧に新味のあるものは少かった。この句の新味は、「ぴいと」「尻声」等の擬音語日常語によって、和歌にはない表現の自由を発揮し、まざまざとした現実感を盛ったところにある。

今案、鹿は唯妻恋ふ声の悲しき事を歌にも詠み尽せり。故に句を案るに、本歌に心引れて歌の事損じたる物にのみなる也。

此吟、其意は歌にゆづりて、始終俳言を以て云下して、唯悲の一字を以て鹿の性を述たる余情、妙術と云べし。誠に比伊と啼く尻声と云詞、名誉也。笑し味有て亦哀也。鹿の声は至て遠く聞ゆる音にして、長く末の声を引く、殊に感情也。山里など、夜更・暁は取分て啼く。其音声実に袖濡す共云べし。（信天翁『笈の底』）

とある解の通りで、

鹿のかなしさは、翁此一句にいゝ尽して此上はなし。山を借り紅葉をかりて余情を求る事、鹿の句のあらましなるを、他の一物を添へず、そのまゝに言下して、猶哀ふかし。（東海呑吐『句解』）

という鑑賞も良い。まことに他の配合を借りることとなく、ただ声そのものを追求したところに、芭蕉の表現力を感ずる。俗語の効果的な使用は、「軽み」の時代の特色をよくあらわしているといえよう。『追善之日記』に記された芭蕉の語に「やすき筋をいひ得たる」とあるのも、「軽み」を指したものと見られる。「悲し」も、「平凡的な主観的語句でありながら、この句全体が直叙法で行つて居る為め、決して浅薄に響かない」（平田良平氏『新釈』）のである。

俳諧が、いかにして和歌・連歌のマンネリズムから脱け出すか。芭蕉はそのために「ぴいと啼尻声」を工夫した。ことに「ぴい」という擬声語の使用である。この「ぴい」によって、句はまざまざとした現実感を持ち得た。夜の闇に消えてゆく鹿の鳴声を、さながら聞くような思いがする。鹿の声にあわれを感ずるという和歌は古来たくさんあるが、それらの、きれいごとの和歌を読んでも、鹿の声そのものは、なかなか読者の耳に聞えてこない。

この芭蕉の句は、鹿の鳴声そのものを的確につかみ、読者の耳に声を聞かせる。そうして、読者はまた、闇に消える哀切な鳴声を、黙って聞いている芭蕉のさびしい心に触れることができるであろう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

という井本農一博士の所説も、よく肯綮に中っている。『芭蕉翁追善之日記』九月十一日の条には、

十一日夜

去来方よりならの鹿殊の外に感じて、その文の奥に

北嵯峨や町を打越す鹿の声　丈艸
露草や朝日に光る鹿の角　野明
猿の後聞出しけり鹿の声　荒雀
棹鹿の爪に紅葉（ママ）さす紅葉哉　為有
ふり分て尾花に見せよ鹿の角　風国
啼鹿を椎の木の間に見付たり　去来

とあって、この句についての門下の反響を知ることが出来る。

*895* 菊の香やならには古き佛達　（九月十日付杉風宛書簡）

芭蕉翁追善之日記・芭蕉翁行状記・笈日記・陸奥鵆・菊の香・泊船集・蕉翁句集

秋季（菊の香）。

**語釈** ○**菊の香**　「菊の香」。重陽の節供にちなむ表現である。既出（Ⅳ*799*）。○**ならには古き仏達**　「奈良には古き仏達」。八世紀の古都奈良にある古代の多くの仏像を指す。「ならには古き仏達います」の意。「仏」は既出（Ⅱ*297*）。

**大意**　重陽の佳節に菊の香が漂う。この奈良には古代の貴い仏達がおわすのだ。

**考**　「重陽南都に一宿」（『陸奥衛』）「ならの重陽」（『泊船集』）等の前書がある。『芭蕉翁追善之日記』『芭蕉翁行状記』『笈日記』等が、凡て元禄七年九月九日奈良での作としており、成立の年時に疑いはない。

古注にはこの句の趣を解し得たものが殆んど無いのはどういうわけか。読めば直ちに感ぜられる筈のものを逸して、『万葉』の時代に菊が無かった等、あらぬ事を喋々している。近代以降はさすがに斯うした見当ちがいはなくなって、

奈良へ行つた時に折ふし菊の花咲く季節であつたから菊の香やとうたひ起し、其の菊の香のする奈良には古い仏達が沢山御座ると言つたのである。奈良は古都にして古刹多き地なれば、其地と菊の香の配合に趣を感じて此句を成したので、頗るよい感じのする句ぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

と正解に達した。この句は「古き仏達」の傍に菊の花が薫っているというような景色を写生的に扱ったものではなく、また菊と仏との単なる配合でもない。この点は夙く半田良平氏が左のように述べておられる。

この句は、菊の花の発する清楚で崇高な香気と、奈良に昔から残つて居る古仏(ふるぼとけ)の壮厳で物寂びた姿とを、芭蕉の心持の上で生かして（即ち一つ聯想で貫いて）表現したものであるから、眼前写実の句でないこと勿論である。そしてこの心持は、菊の花と古仏とを通じて、その背後に無限に展(ひろ)がつて居る『寂(さ)び』の世界を指(ゆびさ)して居るのである。それ故、菊の花と古仏とを一の取合(とりあは)せと見るやうな錯覚は、まだ浅いものだと言はねばならぬ。……芭蕉は、まづ初めに『菊の香』を捉へ来つて一種の氛囲気を醸(かも)し、つぎに『奈良には』と言つて、その背景(ヒンテルグルンド)となる古都の天地を展開し、（この場合の『には』といふテニハの微妙な味ひは、ちよつと言葉で現はし難い。）最後に、その間から『古き仏達』をほのかに浮び出させて来て、それを菊の花の発する香気と渾一体に融合せしめたのである。そこに取合せなどに興味を寄する人々の到底思ひもつかない独自の世界が暗指されて居るので、芭蕉の句中にあつても、勝(すぐ)れた作といつてよい。（『新釈』）

この句の地色としてひろがるものは、右のように「寂び」と把握してもよいけれども、「菊の香」と「古き仏達」の二つの間に流れているものは、付合の方でいう「匂ひ」を当嵌めるのが最も相応しい。これを指摘したのは穎原博士で、即ち、

菊の芳ばしい香と、古都に年経る仏達との取合せである。高雅・蒼古のにほひが互に映発して、渾然たる一つの詩の世界を作つて居る。これは連句に於ける二句の間の句の調和が、そのまゝ発句に於ける配合として味はは るべき事を示すもので、菊の香と古い仏の一つ一つについて現実的に感ぜられるものから、更に高次の浪曼的な精神の支配へはひつて行つた作である。（『新講』）

と述べておられる。「取合せ」「配合」の語を用いながらも、句の「菊」と「仏」の間に通いあうものが「高雅・蒼古のにほひ」であるのは、動かぬところであろう。山本健吉氏は配合とする見方を否定し、『古今集』の「さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする」（巻三、よみ人しらず）の歌が句の発想に影を落していると見て、次のように見ておられる。

重陽の日に奈良へ行こうと芭蕉が思い立ったとき、彼はやはり懐古趣味のなかに在ったのである。菊の香をたよりに、古い都のさまを偲ぼうというのである。……もちろん重陽の日であるから、菊は芭蕉の目にいやというほど触れたであろうが、それよりも、とくに重陽の日を選んでやって来た芭蕉の脳裏が、「菊の香」でいっぱいだったと見ていい。その脳裏の「菊の香」が、昔の京の回顧の媒体となるとともに、回顧の地色となり、ひいてはこの句全体の地色となり、「古き仏達」を呼び出すのだ。ただの「菊の香」でなく、重陽という古雅な節句の気分の象徴としての「菊の香」なのである。言わばそれは、この句の主題であって、取合せものではない。眼前の菊と取れば、取合せ物になるが、句の解釈としては浅い。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

右にいう脳裏の菊の香がこの句の主題であることは、詠嘆の切字を伴なって初五に置かれていることからも首肯出来

よう。次に「ならには」と古都の場を定め、その「古き仏達」が提示される。「菊の香」が重陽の節の象徴ならば、「古き仏達」は古都奈良の象徴であろう。こうしてこの句は、写生的な味からは遠く離れた、浪曼的懐古の象徴句となるのである。中七以下の流れるような快い諧調は、これだけの句が恐らくは一気に成ったことを思わせる。また、「仏達」という言い方が、「宗教的信仰の対象としての畏敬すべき仏の感じよりは、もっと親しい、暖い血のながれた仏が把握せられてゐる」（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇㊦）点も見逃してはならない。

*896*　菊の香やならは幾代の男ぶり（ママ）　（九月十日付杉風宛書簡）

泊船集・男風流・蕉翁句集

秋季（菊の香）。

**語釈**　○**ならは幾代の男ぶり**　「奈良（なら）は幾代（いくよ）の男（をとこ）ぶり」。「男ぶり」は、美しい男性の容姿。底本には「ぶ」に濁点を付してある。古都奈良を擬人化して、幾代の長い年月を経た男ぶりだといった。『伊勢物語』初段の趣から、美男在原業平の俤が背景にあるであろう。［考］参照。「肩付はいくよになりぬ長閑也　冬文」（『あら野』巻八）「越人にあふて／おとこぶり水のむ顔や秋の月　凡兆」（『曠野後集』）。

**大意**　重陽の佳節に菊の香が漂う。古都奈良の趣は、あの業平のように、幾代の長い年月を経た男前といったところだ。

**考**　『泊船集』と『蕉翁句集』に「ならにて」と前書がある。九月十日付の杉風宛書簡には、「菊の香やならには古き」「菊の香やならは幾代の」「びいと啼尻声悲し」の順序で三句を披露して、「いまだ句躰難定候。他見被成まじく候」とあり、前の「古き仏達」と同じ元禄七年九月九日の吟と思われる。

重陽の節に因んで「菊の香や」とうたい出したところは「古き仏達」の句と同じであるが、中七以下は趣を異にし

ている。「男ぶり」と俗語を用いて古都を擬人化しており、その背景には業平を介して『伊勢物語』の俤があろう。

……『伊勢物語』の「昔男」は利かしてありませう。……昔男の業平は幾代も古りた男である。その幾代の男ぶりにかけて奈良の物古りた面影を述べ、それに菊の香の……「奈良には古き仏達」に調和する様な、古い落ち着いた心持を配したものだと思ひます。古き仏達と表現はむしろ反対だが、大体、ねらつてゐる所は矢張り同じ辺だと思ふ。男ぶりと云ふ俗語をもつて来て業平の男ぶりをも連想せしめる所に、一種の技巧があります。……昔男によつて奈良を人格化して居るのです。（『続々芭蕉俳句研究』安倍能成氏）

と見てよい。古注以来、「あれにけりあはれいく世のやどなれやすみけんひとのおとづれもせぬ」（『伊勢物語』五十八段）の歌が引かれることがあるが、このような荒廃の趣は相応しく思えない。それよりは、

むかし、をとこうひかうぶりして、ならの京かすがのさとに、しるよししてかりにいにけり。そのさとに、いとなまめいたるをんなはらからすみけり。このをとこ、かいまみてけり。おもほえずふるさとに、いとはしたなくてありければ、こゝちまどひにけり。……（初段）

とある冒頭の一節を思わせたと見られる。古都の重陽の古雅な趣を、擬人化して俗語を用いたところは、紛れもない最晩年の風調であるが、古典を背景にした趣向からして、「軽み」よりは「興」の句というべきであろう。加藤楸邨氏は、

奈良には古雅な仏達が古ながらの男ぶりでましします。その町々は今菊のさかりで匂ひわたつてゐる、との意。

（『芭蕉講座』発句篇㊦）

と解して、

勿論「伊勢物語」の「昔男ありけり」の聯想もあらうが、さういふ昔の男ぶりが、奈良の町そのものに寄せられたと見るよりも、その奈良に慈眼うるはしく幾代にわたつてましますところの仏達の御姿から感得せられたとと

る方が、心のたどりとしては自然であると思ふのだ。（同右）

と見ておられ、後の『芭蕉全句』も同様の考え方である。「古き仏達」と同時の作であるから、一連の作という意識は当然あったろうが、当面の句に「仏達」を思わせる表現がない以上、別の句の事を持ち込んでは、句の独立性が失われる。この句はこの句として、「古き仏達」とは別の趣向によって古都の気分をあらわそうとしたものと見たい。ただ、この形では表現が完璧とは言い難く、書簡で「いまだ句躰難定候」といったのは、主にこの句のことを指したのではないかと思われる。

くらがり峠にて

*897*　菊の香にくらがり登る節句かな（菊の香）

泊船集・蕉翁句集

秋季（菊の香・菊の節句）。

**語釈**　○**くらがり峠**　「暗峠（くらがりたうげ）」。今奈良県生駒市のうち生駒山の南方にあり、標高四百五十メートル。奈良からこの峠を越え、枚岡（ひらおか）（現東大阪市）を経て大坂へ出る道を暗越（くらがりごえ）大坂街道といい、奈良と大坂を結ぶ最短距離にある為、物資輸送路として、また西からする初瀬・伊勢参詣道としても賑わった。今は近鉄奈良線の開通によって寂びれている。「誰より花を先へ見てとる　落梧　春雨のくらがり峠こえすまし　野水」（『あら野』員外）。○**くらがり登る**　「暗登（くらがりのぼ）る」。「くらがり」は、峠の名にかけて暗を思わせた。「姨捨を闇にのぼるやけふの月　沾圃」（『続猿蓑』下）。○**節句**　「セック」。ここは九月九日の菊の節句、重陽の日を指す。「節句」は「節供」とも書き、一年の節目毎にある式日、所謂「五節句」をいう。即ち、人日（一月七日）・上巳（三月三日）・端午（五月五日）・七夕（七月七日）・重陽（九月九日）で、これらの日には仕事を休んだ。「九日／人心しづかに菊の節句かな」（『春泥句集』）「Xeccu.」（『日葡辞書』）。

**大意**　あたかも菊の節句の今日、菊の香をたよりに暗峠の峠路を登ることだ。何となく暗の中に菊の香の漂う思いが

する。

**考** 初出の『菊の香』（風国撰、元禄十年刊）に、

此句、菊の香やならにはふるき仏達といへる同日の吟なり。

と注してあり、九月九日に奈良を出て大坂へ向う途中、暗峠で詠んだ句と推定される。『泊船集』『蕉翁句集』の前書も『菊の香』に同じ。

句意については古注に要領を得たものがなく、「暗き縁にて香をしたひ登るといへり」（東海呑吐『句解』）「菊の香の床しきにひかれて登れるなるべし」（蚕臥『芭蕉新巻』）等というのが僅かに採るべき指摘で、穎原博士も、「恰かも重陽の節供に際して、山路の菊の香に浸りながら暗峠を登る事よといふだけの意」（『新講』）としておられるに過ぎない。「菊の香に」を「菊の香に浸りながら」と取るのは、「ほうらいに」（Ｖ827）「むめがゝに」（Ｖ831）等と同種の「に」と見ているのだが、ここは「香のゆかしきにひかれて登れる」（『新巻』）という風に、もっと下に密接にしたいところである。私は、

峠の名がクラガリ故、菊の香を栞に道を辿つたといふので、畢竟するに菊の匂ひを言ひたい為の仕立方である。

（『芭蕉句集講義』角田竹冷）

という見方が穏当と思う。加藤楸邨氏の左の解が的確である。

「重陽の節句の今日、菊の香に導かれて、その名も暗峠のくらがりを分け登る。かの重陽の『登高』の故事にもかない、感興深いことだ」の意。

……暗峠はくらがりの中を越えたわけではなかったが、地名を利かせてあたかも暗中菊の香をたよりに登るような発想になっている。「高きに登る」が季語となるのはもう少し下るが（歳時記では『滑稽雑談』（正徳三年）に初めて出る）、杜甫の詩にも見えるこの故事が、芭蕉の念頭にあったことはまず確かであろう。暗峠という地名

を契機とした即興的な軽い発想で『笈日記』や書簡中に収録されなかったのもそのためであろう。（『芭蕉全句』）
重陽の節に山に登って菊酒を飲めば禍を消すことが出来るという中国の習俗は、古仙費長房の教えに基づくことが『続斉諧記』に見えるといい、杜甫にも「登高」の詩などがある。重陽の佳節に暗峠を登ったことを登高に擬したことは疑いを容れない。近来は、
峠越えは実際には昼過ぎだったろうが、峠の名をきかせて未明の山路に菊の香をきくさわやかさを演出した。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）
とか、「未明の暗いうちに越えたような虚構をあえてした。暗い中のほうが菊の香が生きる」（『松尾芭蕉集1』井本博士）といった説も見えるが、演出とか虚構とまでいうのはどうか。私は［大意］に述べた程度に考えている。

898　菊に出て奈良と難波は宵月夜　（九月廿五日付正秀宛書簡）

芭蕉翁追善之日記・笈日記・今日の昔・梟日記・東華集・柴橋・蕉翁句集草稿・蟋蟀巻・枇杷園随筆

きくにいでゝ奈良と難波は薄月夜　（芭蕉翁行状記）
　　生玉の邊より日をくらして
きくに出ル南良と難波は宵月夜　（蕉翁句集）

秋季（菊・宵月夜）。

**語釈**　○**菊に出て**　底本の正秀宛書簡には、句の前に「重陽之朝奈良を出て大坂に至候故」とあり、重陽の佳節に菊の香の漂う中で出発した意であろう。「出て」は、『芭蕉翁行状記』の仮名書きに従えば「出(い)でて」とよむことになるが、下五が信憑性に欠けるので絶対的ではない。「出(で)て」と口語調によんでよいと思う。○**奈良と難波**　「難波(なには)」は大坂の地の古称。既出（I75）。出発地と到着地を挙げたのである。○**宵月夜**　「ヨヒヅキヨ」。宵のうち出ている月。陰暦の月の上旬である。ここは、その月の出ている夜

の意。既出（Ⅰ46）。「霄」に「良い」が掛けてある。

**大意** 菊薫る重陽の日の朝奈良を出て、難波に着いた時は、美しい宵月夜だった。昨夜の奈良も良い月夜だったが、菊と月とに満ち足りた趣は何ともいえない。

**考** 支考の『梟日記』（元禄十二年刊）には「重陽の朝奈良を出て難波にいたる」と前書があるが、これは九月廿五日付正秀（推定）宛書簡の一部を紹介したもので、伝存の原簡と照合すると、引用の態度は忠実ではない。句の前の書簡の文は［語釈］に引いた通りである。『芭蕉翁追善之日記』には、元禄七年九月九日の記事として、

　此日くらがりを越て大坂にいたる。生玉の辺に日を暮らして

とあって、この句を出しており、『笈日記』は「難波部前後日記」の冒頭に、

　去年元禄の秋九月九日、奈良より難波津にいたる。生玉の辺より日を暮して

としてこの句を掲げている。芭蕉の書いたものでは、

　重陽の日南都を立、則其暮大坂へ至候而、洒堂方に旅宿、仮に足をとゞめ候。（九月十日付杉風宛）

　九日大坂へ到着致候。洒堂亭を仮の旅宿相定候。（九月十日付去来宛）

等の書簡が右の支考の記事と一致するので、九日夜の作と決してよい。洒堂亭は大坂の高津（こうづ）（現大阪市南区）にあったという。句自体は九月十日付の杉風宛書簡には見えず、「追付爰元逗留之句共可懸御目候」とあるだけである。書簡に於ける句の初出は、廿三日（九月）付意専・土芳宛（真蹟写しが伝わり、『枇杷園随筆』に紹介）で、本書で底本とした九月廿五日付正秀（推定）宛にも見える。九月十日頃はまだ句形が確定していなかったとおぼしく、かなり時日を経て人に披露するに至ったのである。芭蕉の最後の病床に侍した舎羅が後援した集といわれる『柴橋』（正興撰、元禄十五年刊）には、これを発句とした歌仙が収められているが、脇が諷竹（之道）、第三が洒堂で、正興・天垂・舎羅の三吟となる四句目以下は、後に巻き継いだものらしい。芭蕉のこの度の大坂行は、地元の之道・洒堂両人の対立を

調停する為だったが、十四日以降この両門の俳人達を集めて何度か俳席が設けられている。それに先立って頭目の二人を招いて三句の付合をしたのだとすれば、十二、三日頃までには「菊に出て」の句形が定まったと見てよかろう（拙著『新修芭蕉伝記考説』作品篇参照）。『行状記』や『蕉翁句集』の異伝句形は何れも信じ難いものばかりである。

句意については、前記正秀宛書簡の文言の外に、廿三日付意専・土芳宛（『枇杷園随筆』所収。原簡は伝わらない）にも「九日南都をたちける心を」とあるのが参考になる。「九日」は単なる日付ではなく、重陽の節を意味する「九日」（Ⅲ555）であろう。この日の奈良での二句や暗峠での句が凡て「菊の香」に始まるのを見ても、この時の芭蕉の脳裏が重陽の日の象徴たる「菊の香」で一杯だったことは想像に難くない。そこで「菊に出て」とうたい出し、それに重陽の朝奈良を出た気持を託したのだと注を付けた所以も分るというものである。大坂に着いて見ると、其処は美しい宵月夜であった。八日の晩の奈良でも宵月夜の趣が良かったのを回想して、「奈良と難波は宵月夜」という中七以下を得たのであろう。其処にはまた、自分の視野には入らない重陽の夜の奈良の宵月夜も含めて、何れも古い都の地たる難波と奈良を照らす月のイメージも重なる。それによって、二つの古都の重陽に寄せる風雅の懐いをあらわそうとしたのだと思う。ただ、初五と中七以下とのつながりに未熟の点があり、句作りはなお工夫の余地を残している。そういう表現の欠点の為に、この句の解は従来諸説紛々の観があるが、右の私解は、

……この句はその前書に言うがごとく、九月九日の重陽の節句に奈良の旧都を旅立って来た折の心懐を、その日の夕方に難波に在って追想した吟詠であって、一句の意味は、「菊の香に包まれて旅立ち、奈良から難波に来たが、到着した頃には宵月夜となった。あの宵月は、奈良と難波とを、ともども照らしていることであろう」、というのである。……一句の主題は、旧都奈良に対する慕情であるが、「奈良と難波は宵月夜」とは、現実には肉眼で眺めえない大景を、心象風景として藝術的に虚構したものである。……この句は一見、素朴に事実を言っているだけのように見えるが、その実、縹渺たる心象の神韻を表白しているのである。しかも、その心象風景とし

て描かれた縹渺たる神韻には、何か「永遠の悲哀」とでも言ったような、やるせない人生の黄昏のイメージがある。……そうした深刻な思いを託しておりながら、さりげなく叙景句のごとく表現して、主題の正確な理解は見る者の能力に委ねているところが、晩年の芭蕉が専心探究していった「軽み」の藝境の特色である。（『俳句に見る芭蕉の藝境』）

という富山奏博士の説に近い。中七以下の「ナラトナニハハヨヒヅキヨ」という軽快な音調にも「軽み」は現われている。句作りになお未成の点があると見る立場からは、「神韻縹渺」という見方には首を傾げざるを得ない。

この句の解釈に大きな影響を与えたのは、『東華集』（元禄十三年刊）に見える支考の所説であった。即ち、「影略互見之法」の例としてこの句を挙げて、

是は菊に奈良を出て、宵月夜に難波に入といふべきを、出といふ字に入といふ字を略したる也。此句は諸抄にあやまりおほし。……此法は詩歌にはまれ也。たゞ文章のあつかひなるべし。

といっている。これに基づいて古注には事々しい論もあるが、抑々支考の説自体、どれだけ芭蕉の考えが反映したものかに問題があり、例の支考の鬼面人をおどす底の所論という臭いが強い。近来の注でも、

「奈良は菊に出て難波入りは宵月夜のころ」の意を、中七に「奈良と難波」と二つの古都を並べて曲折もつけ、拍子面白く詠みなした。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

というのは支考系の説であり、他にも同様の説が見える。その外では、

……菊を賞する為めに出遊して所々の眺めもしたが、奈良でも宵月夜を賞し、浪花でも亦宵月夜を賞することになつた、といふのを態と言葉を錯綜させて斯様に叙したのぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

……重陽の日、古都南都を出て大阪に入つたことが心に深くかゝつてゐるのであるから、それで「菊」が呼び出されてゐるものと思ふ。……「菊に出て」はやはり「宵月夜」にかゝるのであらう。……難波に入る頃生玉あた

りで日が暮れて、宵月の昇るのを見た。折しも菊の節句であるから菊の上に出た感じがする。今日発つて来た奈良、あの「菊の香」の句を詠んで感銘ふかかつた南都も、今頃は菊の上に宵月がかゝつてゐる筈である。……といふ心のたどりであらうと思はれる。「菊に出て」は自分が出るのではなく、宵月が出るのであらう。かう解すると、単なる事実ではなく、菊の上に宵月をかけた古き都奈良と難波が幽韻をたゞよはせてうかび出てくるのである。（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇(下)）

等の説も注意を要する。心象風景として宵月かかる古都奈良と難波の重陽の趣をいう説が多く、この点は読む者が誰しも感得するところであろう。

十三日は住よしの市に詣でゝ

*899*　舛かふて分別替る月見哉　（九月廿五日付正秀宛書簡）

住吉物語・芭蕉翁追善之日記・芭蕉翁行状記・笈日記・喪の名残・泊船集・梟日記・橋南・宝の市・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・六行会

秋季（月見）。

**語釈**　**○十三日**　元禄七年九月。**○住よしの市**　「住吉の市」。和歌の神として知られる住吉大社（現大阪市住吉区住吉二丁目）で陰暦九月十三日（現在は十月十七、八日）に行われる神事。夜になって境内に市が立ち、升が売られた。「升の市」ともいう。「住吉相撲会　十三日。拾芥。／住吉の市　同日。宝の市と云これ也。神輿をかきつれ、神官供奉し、神宝をとりつゞくる作法あり。宝幢をたて、倚子をたてつゝ法事なども侍り。けふ舛を買もとむる事も侍り」（『増山井』）「住吉宝市　十三日　拾芥抄曰、九月十三日、住吉相撲会。△社家者流説云、往昔は神前へ黄金の枡を作りて新穀の稲を奉りけるに因て、農事に用る枡を此所に持来て売ける也。是によて種ゝの市人羣集する故に、宝の市と申すにや。只当社の新嘗会と知るべし。近世は只神輿を別殿に移して、五穀新嘗の神膳など奉る。枡を売買する事も今に絶ず侍る。拾芥抄にいふ相撲会などは、昔は有けるにぞ（ママ）。今は沙汰侍らず。又、住吉市といふも秋也」（『滑稽雑談』）。**○詣でゝ**　「詣でて」。**○舛かふて**　「舛買うて」。「舛」は前記の宝の市で売っていた升のこと。習慣に従っ

てそれを買ったのである。「舛」は、物の分量をはかる「ます」を意味する国字「桝」の略体。「枡」「升」に同じ。「かふて」はウ音便の慣用表記である。「升の市塩屋長次が月見かな　菊阿」（『正風彦根躰』第一）「Masu.」（『日葡辞書』）。○**分別替る**　「分別替る」。「分別」は、「考え」を意味する俗語。既出（Ⅳ*817*）。「替」は「変」の宛字。「考えが変った」の意である。○**月見**　この夜は九月十三夜、「後の月見」であった。（Ⅱ*433*、Ⅳ*695*）参照。

**大意**　十三夜の月見に出て来たのですが、住吉の市で升を買ったら、急に世帯くさい考えに変って、風流はよすことにしました。

**考**　「住吉の市に立て、そのもどり長谷川畦止亭におの〳〵月を見侍るに」（『住吉物語』）「住吉にて」（『芭蕉翁行状記』）「住吉の市にて」（『喪の名残』）「住よしの市」（『泊船集』）「又十三日住よしの市に詣て、壱合升ひとつ買申候て、かく申捨候」（『梟日記』）「九月十三夜たからの市にて」（『宝の市』）「住吉の市に立て」（『蕉翁句集』）「九月十三日住よしの市に壱合升を求て」（『六行会』）等の前書があり、このうち『梟日記』の前書は、現存正秀宛書簡の句の前後の文を恣意に連結したものである。

この日の事は、左の如き当時の文考の記録に明らかである。

十三日

住吉の市とは名のみ聞て、宗因のさらば〳〵となへられし跡のなつかしくて詣けるに、其日は雨もそほ降て、吟行静かならず。殊になやみ申されしが、けふもわづらはしとて、かいくれ帰りける也。

十四日

畦止亭にして、前夜の月の名残をつぐなふ。すみよしの市に立てといへる前書ありて、

舛買て分別かはる月見哉　翁

世をはかる神のこゝろや市の舛　文考（『芭蕉翁追善之日記』）

今宵は十三夜の月をかけてすみよしの市に詣けるに、昼のほどより雨ふりて、吟行しづかならず。殊に暮〳〵は悪寒になやみ申されしが、その日もわづらはしとて、かいくれ帰りける也。次の夜は、いと心地よしとて、畦止亭に行て、前夜の月の名残をつぐなふ。住吉の市に立てといへる前書ありて、

升買て分別かはる月見かな　翁（『笈日記』）

大坂に入ってからの芭蕉の健康状態は余り芳しくなかった。この頃の書簡を見ると、

大坂へ参候而、十日之晩ゟふるひ付申、毎晩七つ時ゟ夜五つまで、さむけ・熱・頭痛参候而、もしはおこりに成可申かと薬給（たべ）候へば、廿日比ゟすきとやみ申候。就其心むつかしく、早〻御案内も不申上、……（九月廿三日付松尾半左衛門宛）

拙者も其元なまかべ指出候処、参着已後毎晩〳〵ふるひ付申候而、漸頃日常の通に罷成候。……子細に御報に申度候へ共、いまだ気分も不勝、……右之気分故、発句もしか〳〵得不仕候。（廿三日付意専・土芳宛）

先伊州にて山気にあたり、当着の明る日より、さむき熱晩〳〵におそひ、漸頃日常の持病計に罷成候。……伊賀ゟ大坂まで十七八里、所〳〵あゆみ候而、貴様行脚の心だめしにと奉存候へ共、中〳〵二里とはつゞきかね、あはれ成物にくづをれ候……（九月廿五日付曲翠宛）

等の文言が見える。芭蕉は伊賀滞在中から山気に当って吹出物（なまかべ）に悩まされており、大坂へ向う途中も歩行は二里とは続き兼ねるような状態であった。大坂到着の翌十日から毎晩、悪寒・熱・頭痛に襲われるようになったが、服薬によって二十日頃からこの症状は止んだものの、なお気分が勝れずにいたという。十三日頃は体調の良くない最中で、雨中の吟行に悪寒が兆して早々に引き揚げたのである。文考の記述によれば、「升買て」の句は十四日長谷川畦止亭での歌仙興行に際して発句として詠まれたものであった。青流（後の祇空）の撰した『住吉物語』（元禄八年成）所収の芭蕉・畦止・惟然・洒堂・文考・之道・青流らの七吟歌仙はこの時のものである。その前書に「住吉の

市に立て、そのもどり長谷川畦止亭に」云々とあるのによると、十三日の吟のようであるが、支考の著の記事に従えば十四日に成ったものと考えざるを得ない。しかも、支考の文に「前夜の月の名残をつぐなふ」とあるのや句の内容に徴して、恐らく最初は月見の十三日に畦止亭を訪う筈であったのが、芭蕉の体調不良の為に取り止めになり、翌日気分が直ったので改めて俳席が催されることになったようである。桜井武次郎氏の『元禄の大坂俳壇』によれば、畦止は談林派の闘将惟中門の敬止と同一人物で、洒堂の大坂移住後これに近づき、この時芭蕉を招くに至ったという。『住吉物語』に「亡人畦止」と見えるところからして、この人はこれから間もなく歿したのである。

句は、十三日の月見の会に出なかった言いわけを諧謔に託した挨拶であって、そういう立場から見れば解釈はおのずから限定されて来る。

……月を見ようと思つて出かけたのであるが、途中で宝の市に立寄つて小升を買つたら、急に世間並の世帯気が出て帰つてしまつたといふのである。昨夜畦止を訪はないで引返した言訳にもなつて居て面白い。（潁原博士『新講』）

……此句の主眼は「分別替る」にある。升の市にと志して悪寒の為め中途に分別が替つて戻つたといふ事を、月見の途すがら世俗に倣ふて升の市の升を買ふたら、心も俗化して家に帰りてまづ米でも量らん気となつたと作為したのである。（『芭蕉句集講義』浅井瓢緑）

と見るのが穏当であり、

その夜、後（のち）の月見の句会を畦止亭でする約束になっていたところ、悪寒が起ったのでそのまま宿へ帰った。そのことの断りをこの一句に仕立てたので、升のような物を買ったため急に欲っ気が出て分別がかわった、とはそれをユーモラスに言い替えたのである。師の健康を気づかう弟子たちに諧謔を言ってみせたのである。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

といった諸説も良い。「舛かふて」は「本より虚也」（杜哉『蒙引』）という考え方もあるが、正秀宛書簡の句の後に「壱合斗一つ買申候間、かく申候」とあるから、実際に一合升を買ったのである。支考の『梟日記』には、

分別かはるといふ中の七文字見がたし。発句は殊更その人の身にあてゝ見るべし。升といふ物は所帯の道具なるに、此升かふて後は鍋もほしく桶もほしく、世の中の隠者此筋よりあやまる事を、人の鏡には申されし也。

と諷諫の意を見る説があり、

荘子、斗斛成而天下人始争、これらにかなへり。升買てはものはかる事を思ひ、隠士の分別のかはり所も、かゝる所より出べしとぞ。誠に句情尊むべし。（蓼太『芭蕉句解』）

というのも教訓説であるが、これらは正解とは言えない。『荘子』を引く説も、これ以後続いているが、この句に関する限り無用の贅説であろう。また、

是世人は住吉の市にて升を買て世渡りを計る習也。我も世に連て升を買けるが、月の面白きを見て、升買たる時の分別とはかはり、一入月を見る心に成たりとなり。升買しは世間気、月見るは風雅只、ふり替りたる翁の風情推て計るべし。（正月堂『師走嚢』）

と取れば、初めの世間気が風雅の情に変ったことになり、両者の関係が逆転する。こうした解釈は近代に至るまであるけれども、「舛かふて……替る」という文脈からしても無理で、且つ風雅を衒った気持が露わになるのも感心しない。

*900*　秋もはやばらつく雨に月の形　（芭蕉翁追善之日記）

笈日記・泊船集・宇陀法師・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・画兄弟

昨日からちよつ〳〵と秋も時雨哉　（芭蕉翁追善之日記）

笈日記・三冊子・蕉翁句集草稿

昨日からちょつちよと秋もしぐれけり（六行会）

秋季（月）。

**語釈** ○**はや**　はやくももう、の意の副詞。既出（Ⅲ511）。「春もはや山吹しろく苣苦し　素堂」（『続虚栗』）。○**ばらつく雨**　降っては止む時雨（しぐれ）の形容。「ばらつく」は俗語である。「ばらつく」と表記しているものが多いが、『宇陀法師』（李由・許六共撰、元禄十五年刊）に「ばらつく雨」と濁点を付しているのを尊重して、「は」を濁音によむ。○**月の形**　「形」は「ナリ」。既出（Ⅴ857）。夜毎に細くなる月の形を提示した。

**大意** 秋ももはや終りに近く、ばらついては止む雨の降りざまにも、夜毎に細くなる月の形にも、そぞろ寂しさが感ぜられる。

**考** 『笈日記』には「其柳亭」と前書がある。『芭蕉翁追善之日記』には九月十九日の条に見え、

是はキ柳亭の夜会なり。此句の先、〽昨日からちよつ〳〵と秋も時雨哉といふ句なりけるを、いかにおもはれけむ、月の形にはなしかえ申されし。

とあって、『笈日記』も略々同文であるが、日付を明記していない。『追善之日記』に疑わしい点はなく、十九日の作と認められよう。遥か後年の書ながら、『画兄弟』（蛙方撰、享和元年刊）にこの時の歌仙が収められ、連衆は芭蕉・其柳・支考・洒堂・游刀・惟然・車庸・之道らで、洒堂・之道の仲を取り持つ俳席だったと思われる。其柳は亀柳とも書く大坂の俳人であるが、出自経歴等は詳らかでない。

この句の初案については、土芳も、

此句はじめは、きのふからちよつ〳〵と秋も時雨哉と句作り有。いかにおもひ玉ひ侍るにや、色〳〵句作りして心見らるゝ反古の筆すさみ有。終に、月の形と自筆のものにも残しおかれ侍る也。（『三冊子』赤雙紙）

此句いろ〳〵に仕かへられたる句故反（ママ）有。もとは、昨日からちよつ〳〵と秋も時雨哉と云句の直り也。（『蕉翁句集

草稿』）と、支考と同趣旨のことを伝えている。「昨日から」の句を推敲して「秋もはや」の句としたことは疑いなく、『六行会』（野坡ら撰、元文三年刊）の句形は誤伝と思われる。いろいろ句作りを変えて見た反古があったと伝えられるところを見ると、成案を得たのは後日のことであったかとも思われるが、廿三日付の意専・土芳宛書簡にこの句がないことを以て、成案に達したのは同日以後とするのは、なお確かな推定とはいえないと思う。書簡に書くかどうかは、その時の気分によるからである。また、『画兄弟』所収の歌仙発句が成案形であることを重視すれば、いろいろ推敲したのは十九日以前の事で、それを発句として出したとも考えられる。

「空しぐれ月とがりて、晩秋のすさまじき風情」（杜哉『蒙引』）を述べた句である。「月の形」は、細いとも丸いとも言っているわけではないが、「秋もはや」という闌け行く秋のさびしさとの照応を考えれば、これから満月に赴く月とは思えず、おのずから細くなり行く月であることが領得されよう。折柄十九日で、九月も下旬にかかろうとする頃であった。

初案は、ばらばらと来ては止む時雨のさまを「ちよつ〳〵（ちよ）と」と俗語を用いて表現した即興吟で、興じた調子に亭主其柳への挨拶の意を籠めた趣向である。これと定案との句柄の相違については、山本健吉氏の説く所が精しい。即ち、

初案から、俗語をそのまま用いた「軽み」の句作りである。「軽み」も過ぎると、このような口拍子の軽い即興頓作となる。……改作によって、この句は全然面目を改めながら、しかも「軽み」たる実を失なっていない。「ちよつちよと」が「はらつく」に改められたが、いずれも俗語ながら、口拍子を脱して、表現が熟してきた。行く秋の深い寂寥感が、「軽み」のなかに生かされているのである。「軽み」のむずかしさを、この初案と決定稿との対比ほど、如実に現しているものはない。……あえて言えば、『猿蓑』風よりも入りやすくして、はるかに

到りがたいのが「軽み」なのである。

秋も終りに近づき、ときどき時雨が音を立てて過ぎるが、月も下り月となって、だんだん細くいびつになって行く、というのである。月の終りの痩せ細った織月を言うのではない。少しずつ欠けて行く心細さである。「秋もはや」で小休止して、「はらつく雨に月の形」と、切字を用いないで、淡々と叙している。この技巧の跡を残さない、さりげない措辞は、いろいろ推敲して反故の山をつくった苦吟の作とは、全く見られない。なだらかな自然の叙法であり、無技巧の技巧なのである。しかも「秋もはや」で秋の終りの意を籠め、そのことが「月の形」のイメージに限定を与えるという、行きとどいた心遣いを示している。時雨の雲に見えかくれながら、冴えた光を投げかける、いびつな月の形である。言い課（おお）さないで、情景の眼目を描きつくし、さらにそれによって、心のくまぐままでまざまざと照らし出す。……昇華した「軽み」の代表句とすべきであろう。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

とあって、推敲過程や表現の細部にわたって余す所なく考察されている。楸邨氏も、「『ばらつく』という俗語も内奥の心の色調を帯びたものとなっている。真の軽みとはこうした句の世界をさすものであろう」（『芭蕉全句』）と絶賛しておられ、最晩年の注目すべき作であることは、衆目の一致するところである。この句にみなぎる寂寥感は、間近に迫った死の予兆でもあろうか。

菊月廿一日　潮江車庸亭

*901*　秌の夜を打崩したる咄かな　（松の濤）

九月廿五日付曲翠宛書簡・芭蕉翁追善之日記・笈日記・木枯・浪化日記・染川集・泊船集・四山集・蕉翁句集・枇杷園随筆

秋季（秌の夜）。

**語釈** ○**菊月**　「キクヅキ」。陰暦九月の異称。「キクゲツ」ともいう。菊の咲く時節に当るからである。「秋の来て暖め酒と菊月の頃もはや紅葉のはや色付くか一重山」（謡曲「大瓶猩々」）「Qicuguet. Qicuzzuqi. i, Cuguat.」（『日葡辞書』）。○**潮江車庸亭**　「潮江車庸」は大坂の俳人で、通称長兵衛。元禄四年秋芭蕉に入門し、之道と親しかったが、後には洒堂に近づいた。『己が光』『松の濤』等の撰著がある。生歿年未詳。その家で俳席が催されたのである。○**秌の夜**　「秌の夜」。「秌」は「秋」の俗字。「⿱禾火」とも書く。「秋の夜　物哀れなる余情に作るべし」（『俳諧歳事記栞草』）「秋の夜や夢と鼾ときりぐくす　水鷗」（『続猿蓑』下）。○**打崩したる**　「打ち崩したる」。秋の夜の寂しさを「咄」が打ち崩し、打破する意。下へかかって、うちとけた気の置けないという含みもある。「国々ノ大社伽藍ヲ焼ハラヒ、或ウチクヅシ」（『大友記』）「Vchicuzzuxi, su.」（『日葡辞書』）。○**咄**　「ハナシ」。既出（Ⅲ 580）。

**大意** 秋の夜の寂しさを、此処に集うた人々の話が打ち崩してしまいます。気の置けない、くつろいだ席は良いものですな。

**考** 『枇杷園随筆』（士朗著、文化七年刊）に紹介された廿三日（元禄七年九月）付意専・土芳宛書簡（一部。別に全簡の写しが伝わる）には「秋夜」と前書がある。支考の『芭蕉翁追善之日記』には、十九日の其柳亭での句「秋もはや」に関する記事の後に、

　廿一日、二日の夜は、雨も降てしづかなりけるに、

　　秋の夜を打崩したる咄かな　　翁

　此句は寂寞枯槁の場をふみやぶりたる老後の活計、なにものかおよび候半と、おのく感じ申あひぬ。

とあり（『笈日記』も略々同文）、ここには日付をはっきり書いていないが、車庸の撰した『松の濤』（元禄十五年刊）に紹介された半歌仙の前書によって、二十一日の作と確定する。付合の連衆は、芭蕉・車庸・洒堂・游刀・諷竹（之道）・惟然・支考らであった。

芭蕉は大坂へ来てから、洒堂と之道の気まずい対立感情を融和しようと、両人及びその取り巻きの人々を会して度度俳席を重ねた。大坂から出した当時の書簡を見ると、

……九日大坂へ到着致候。洒堂亭を仮の旅宿相定候。少〻作夜ゟ今日かけて近付罷成候。何とぞ目にたゝぬやうに、おとなしきあしらへかしと存事に候。（九月十日付去来宛）

いまだ逗留もしれ不申候へ共、長逗留は無益之様に奉存候間、二三日中にはせ・名張越にて参宮可申と奉存候。（九月廿三日付松尾半左衛門宛）

爰元追付立可申候。長居無益がましく存候而、早〳〵看板破り可申候。随分人しれずひそかに罷有候へども、何角と事やかましく候而、もはやあきはて候。（廿三日付意専・土芳宛）

爰元衆俳諧もあら〳〵承候。之道・洒堂両門の連衆打込之会相勤候。是ゟ外に拙者働とても無御座候。（九月廿五日付正秀宛）

さて洒堂一家衆、其元御衆、達而御すゝめ候に付、わりなく杖を曳候。おもしろからぬ旅寝の躰、無益之歩行、悔申計に御座候。（九月廿五日付曲翠宛）

等とあって、洒堂一門や膳所連衆のすすめで大坂に来て「両門の連衆打込之会」（「打込」は、誰彼の差別なく出座すること、合同句会）をやっては見たものの、兎角雑音が多くて嫌気がさしている様子が明らかに看て取れる。車庸亭の俳席も、こうした融和活動の一環だったのである。

当時車庸は、もとから親しかった之道よりも新来の洒堂寄りの姿勢を示していて、両門間の問題も、この車庸の動きが原因になったのではないかと見られているが、この席に集うた連衆は何れも芭蕉とは馴染み深かったから、師翁を迎えては渋い顔で居るわけはなく、いろいろな話に打ちとけて、座の雰囲気は和気靄々たるものであったろう。一同のドッと湧いた笑い声に、雨が降ってしんみりと寂しい秋の夜のしじまが破られることもあったかも知れない。それが「炑の夜を打崩したる咄」というこの句の表現になったのではあるまいか。幸田露伴はこの句の表現を次のように見ている。

「秋の夜を……」のを文字肝要である。俳諧のてにはは種々の意味を出して来て複雑なものである。ここもにでなくをであるところ粉骨の場である。打崩すをば、秋夜の清寂を打崩すとまで解するのは深入りし過ぎて却ておもしろみを失ふ。遠慮の無い打解けた話をすると安倍君の云はれたのが甚だ当を得て居る。今の語で云へば「砕けた話」をするのを、それを語法から云へば異なるが、打崩したる話と云つて、上に「を」文字を置いたところが、実に軽くて、自然で、そして太田君の云ふやうなところ（引用者注、「一鳥啼いて山更に幽なりの趣です。話がくづれて、四辺の静寂が一層ひき立つので、そこに照応の妙がある様に思ひます」という太田水穂の発言を指す）までを響かせ出してゐる微妙のところです。（『続々芭蕉俳句研究』）

句の「打崩したる咄」に「砕けた話」の意が感ぜられるのは事実である。右の説に従えば、「秌の夜を」は詠嘆の間投助詞で、切字とはちがうが此処に小休止があり、微妙な余情を醸し出す働きをするものとなる。また、穎原博士の説には、

秋の夜……の静けさを破つて一座の話が賑やかに聞えるのである。それを「秋の夜を打崩す」と言ったのが面白い。語法的には話が秋の夜を打崩すのであるが、実は軽やかな談笑の声に凝ったやうな夜の寂かさがおのづから崩れて行くのだ。……『笈日記』には

此句は寂莫枯稿の場をふみやふりたる老後の活計なにものかおよひ候半と、おのく感し中あひぬ。

と附記してあるが、誠に寂寞の中に歓笑の趣を見出した俳諧の新しみといふべきであらう。所謂軽みである。（『新講』）

とあって、「秌の夜を打崩す」に重点が置かれ、「打崩したる咄」の方には触れられていない。私見を挿めば、露伴のように初五に小休止を見るのも一説ながら、この句を誦してみると、一般に言われているように、「秋の夜を打ち崩す、打ち崩したる咄かな」と受け取れるのである。つまり、中七が上下に働いている「中の七双関」（梅丸『茜堀』）と

聞えるのだ。この二重の働きを認める山本健吉氏は、右の頴原・露伴両説を引いた後、後者を支持して次のように自説を展開しておられる。

事実この「を」は、含蓄の多いテニヲハの使いざまで、「秋の夜を打崩す」と目的格に用いられながら、しかも同時に「秋の夜を」で小休止を持ち、感嘆詞的な感じを持ち、それによって下の句を「打崩したる話かな」と続かせて、砕けた話、打解けた話という意味をそれに与え、座の雰囲気を如実に描き出す。「秋の夜に」「秋の夜の」では、これだけ複雑なニュアンスは出ないのである。これも平易な日常語を用いた「軽み」の句であるが、意味の含蓄によって、心の深層からの声を響かせている。安倍は「秋の夜をくづして自分達の世界を別に作った様な」と言っているが、的確な享受と言うべきで、そのことは逆に、秋燈の下の一座の賑かなさざめきの背後に、すだく虫の音などが聞える深い静かな闇の世界が在ることを、感じさせないでは置かないのである。「軽みの昇華」である。……洒堂・之道の二人が顔を合せた会は、……芭蕉が大坂に在ったあいだに、幾度も催されている。こういう事情を考えて、楸邨は「当夜席上でも、凝(しこ)りがちな話を打崩すやうに、砕けた話ぶりを促したのだらう」と想像している。そうだとすれば、この句に一種の明るさを詠みこんだということが、挨拶の意に叶っているわけだ。だが私は、……芭蕉が大坂へ来る前から気にかけていた問題が解決し、両者の手打ちが成立して、和やかな雰囲気が生じたことを、この俳席で祝福する気持を籠めているのだと見た方がよいと思う。仲間うちとは言え、これは公的な席での発句であり、そういう私事にわたる危惧や不興さの感情を、発句の中にすべりこませるはずはないのである。(『芭蕉その鑑賞と批評』)

前述の如く、芭蕉の書簡に徴して、大坂蕉門の対立感情が師翁滞在中に氷解したわけではなかったが、この席で中心にある芭蕉が、句中に態とらしく裏面の事情を仄めかしたり、強いて仲介の身ぶりを示したりする筈はない。この山本氏の所説によって、この句は定解に達したといってよかろう。秋の夜の寂寥の中にあるこの座の一団の和気を、

「軽み」の表現を以て定着させた傑作である。

あるじは夜あそぶことをこのみて、朝寐せらるゝ人なり。宵寐はいやしく、朝起はせはし

902　おもしろき秌の朝寐や亭主ぶり　（松の濤）

笈日記・初蟬・泊船集・四山集・蕉翁句集・六行会

秋季。

**語釈**　○**あるじ**　「主」。大坂の蕉門俳人車庸を指す。前の「秌の夜を」の句の条参照。○**夜あそぶことをこのみて**　「夜遊ぶ事を好みて」。「夜あそぶこと」は、この場合、人を会して宴楽し、俳諧を作るようなことを指す。○**朝寐せらるゝ人**　「朝寐せらるゝ人」。「朝寐」は、朝おそくまで寝ていること。「らるゝ」は尊敬である。「朝寐する人のさはりや鉢鼓　文潤」（『あら野』巻八）。○**宵寐はいやしく**　「宵寐は卑しく」。「宵寐」は、晩早いうちから寝ること。燈火用の油の節約とか、朝早く起きる為といった余裕の無さが感ぜられるので、「いやし」といったのであろう。「宵寐がちに朝をきしたるね覚の分別、なに事をかむさぼる」（『閉関之説』）。○**朝起はせはし**　「朝起は忙し」。「朝起」は、朝早く起きること。仕事を控えた感じなので、「せはし」といった。「やはらかにたけよことしの手作麦　如舟　田植とゝもにたびの朝起　ばせを」（芭蕉真蹟懐紙）「綿をぬく旅ねはせはし衣更　九節」（『炭俵』上）「Asauoqi.」「Xeuaxij.」（『日葡辞書』）。○**亭主ぶり**　「亭主振り」。客をもてなす主人の心遣い。「こゝろのある亭主ぶり」（『好色一代男』巻八）「Teixu. i, Iyeno nuxi.」（『日葡辞書』）。

**大意**　快い秋の朝寝に堪能した。ここの御亭主の朝寝は、客をもてなす心遣いなのだ。

**考**　『笈日記』『泊船集』『蕉翁句集』『六行会』に「車庸亭」と前書がある。『笈日記』では、「秋の夜を打崩したる咄かな」の句の次にこの句があり、二十一日夜の俳席の後車庸亭に一泊した翌朝の吟と推定される（『追善之日記』には「おもしろき」の句に関する記事は全く無い）。車庸の撰した『松の濤』に所収の句文は、当日芭蕉が書き残し

たものであろう。

前書から続けて読めば、「おもしろき」は車庸の「亭主ぶり」を褒める挨拶の意が主となっていると見られよう。それと共に、季を読み込む必要あってのことではあるが、「秌の朝寐」とあるからには、「おもしろき」は季節の面白さ快さでもある筈である。秋も末とはいえ寒さもそう厳しくはない時節に、蒲団の中でぬくぬくと朝寝をしているのは気持の良いものだ。だから中七までは、そういう芭蕉の感覚を中心に鑑賞したい。

想ふに宿つた翌朝芭蕉翁は既に起出たのに主人は尚ほ寝てゐたので一寸斯様にからかつたのであらう。如何にも面白い事ぢや秋の朝に長寝をしてゐる亭主ぶりは、客に構はぬ処が却つて客も心配がなく、よい亭主ぶりであるといふ位の事ぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

と解しただけでは、その点が欠落している。

今案に、面白しと置詞、余情有て名誉也。秋も半(ナカバ)に至て、残暑に寝そびれたる事も忘れて、夜も良冷(ヤヽヒヤヽ)かに、襖引纏ひ臥たるも快し。亭主は思へらく、我庵ならば熟(ウマ)く朝寝せんに、止宿の心遣ひも可有と弁へて、共に朝寝したる志の哀を顕したる句意也。（信天翁『笈の底』）

昨夜は句会で夜を更かし、客も労れて居るだらうと思つて、朝は主人もゆつくりと寝込んで居る。芭蕉はもう目をさましながらも、さうした主人の心づかひをおしはかつて、これもゆつくり朝寝して居る。その気分がまことに面白いのである。（穎原博士『新講』）

等と見れば良い。句はただ即興の挨拶までであるが、主人の人柄が思われる前書も付いていて、車庸には忘れ難い記念だったのであろう。『松の濤』にはこの句文を巻頭に掲げている。

903

此道や行人なしに秋の暮（芭蕉翁追善之日記）

此道を行人なしに秋の暮（九月廿五日付曲翠宛書簡）

人聲や此道歸る秋の暮（芭蕉翁追善之日記）

　所思

此道を行人なしや秋のくれ（淡路島）

其便・笈日記・篇突・泊船集・金毘羅会・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・六行会

枯尾花・枇杷園随筆

笈日記・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿・露沾集

秋季（秋の暮）。

**語釈** **此道**「此の道」。情景としては、芭蕉の目の前にある一筋の道。自らの俳諧の道をいう寓意がある。〇**行人なしに**「行く人無しに」。行く人無くして、の意。「に」に小休止がある。「行人の蓑をはなれぬ霞かな　冬文」（『あら野』巻二）「花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉　余のくさなしに菫たんぽゝ　岱水」（『炭俵』上）。〇**秋の暮**　晩秋の意と秋の夕暮の意とを兼ねる。

**大意** 晩秋の夕暮、目の前に続くこの道には、行く人の影もない。我が俳諧の道も、所詮はひとりで行く外ないのだなあ。

**考** 「所思」（『其便』）「秋暮」（『枇杷園随筆』）「膳所へ文通するとて」（『六行会』）等の前書があり、このうち『枇杷園随筆』の前書は、廿三日付意専・土芳宛書簡の一部を紹介したもので、伝存する同書簡の真蹟写しにも同様に見える。この書簡に初五「此道を」の形で載るのが、時期として最も早い所見であって、その二日後の九月廿五日付曲翠宛にも同じ句形で挙げて、後に「人声や此道かへる共、句作申候」と記している。これら両簡は、何れも元禄七年九月筆として疑いのないものである。『芭蕉翁追善之日記』には九月二十六日の条に、

　清水の茶店に遊吟して、泥足が集の俳諧あり。連衆十二人。

人声や此道帰る秋の暮　翁
此道や行人なしに秋の暮　仝

此二句の間いづれかと申されしに、此道や行人なしにと独歩し給へる所、誰か其しりへにしたがひ候半と申ければ、阿叟も吾心にもさる事侍りとて、是に所恩（ママ）といふ題をつけて、半歌仙とゝのほり侍る。爰に記さず。

とあり、『笈日記』の同日の記事もこれと字句に小異があるに過ぎない。泥足は長崎勤務の江戸会所商人だったといわれ、この時偶々江戸へ帰る途次大坂にあって『其便』の撰著を企てていた。その集に入れる為の俳諧の席を、大坂天王寺の西、新清水の料理茶屋浮瀬（うかむせ）（現大阪市天王寺区伶人町にその跡が残る）で催したのである。その席の発句として芭蕉の示したのが、曲翠宛書簡にも触れられていた二案で、『追善之日記』や『笈日記』によって「人声や」の句案の全体が知られ、二十六日には「此道を」の句も「此道や」と推敲されて、結局「此道や」の句を採ることに決したのであった。「此道を」が初案、「人声や」が別案で、「此道や」が治定形なのである。この時成った半歌仙は『其便』に収められ、連衆は芭蕉・泥足・支考・游刀・之道・車庸・洒堂・畦之・惟然・亀柳の十人であった。『追善之日記』等に「連衆十二人」とあるが、あとの二人は誰であったか詳らかでない。『淡路島』（諷竹撰、元禄十一年刊）所載の句形は誤りであろう。

この句を最初に披露した廿三日付意専・土芳宛には「秋暮」と前書がある（書簡の真蹟写しに「暮暮」とあるのは誤り。『枇杷園随筆』に拠る）。即ち一句は、目の前に続く一筋の道に行く人とては一人も見えない、寂寥を極めた秋の夕暮の情景を描いた叙景句であった。「行人なしに」のところに小休止はあるものの、中間にはっきりした切字を置かない句作りは、叙景的な内容とも関わりがあろう。二十五日の曲翠宛までは、なお「此道を」の形であったが、翌二十六日の俳席には「此道や」と切字を置いた形に推敲して出し、「所思」という前書まで付けた。自らの思いを託した句というのだから、もはや単なる叙景句ではなく、心境句に変質したことは明らかである。この内容の変化は、

「や」とはっきり切字を置いた句作りと密接な関係があると思う。「や」によって「道」には、芭蕉の辿っている俳諧道、ひろく言って彼の人生行路といった意味が濃くなり、孤独なひとりの道を辿って人生の黄昏を迎えた寂寥感が、ひしひしと人の胸を打つ作となっている。確かにそれを踏まえたとはいえないが、「返照入閭巷、憂来誰共語、古道人行少、秋風動禾黍」（返照閭巷に入り、憂ひ来つて誰と共にか語らん。古道人行少なり。秋風禾黍を動かす。耿湋「秋日」、『唐詩選』）の詩の趣も見える句柄なのである。この「道」については、

> ……芭蕉自身の心持では、……一切を包含する観念上の道である。……さらばといつて、彼が一生奉仕して来た俳諧道といふやうな狭い名のつけらるべき道では固よりない。さういふ道を、この秋の暮に誰も行く人がない、といふところに、芭蕉の主観があるのである。芭蕉は、普通の言葉に絶した自己心内の寂しさを、少なくも句の表面だけでは、空間的に現実の道に托し、時間的に、万人が寂しく感ずる秋の暮に寄せて表現したのである。（『新釈』）

という半田良平氏の見方が大筋に於いて正しい。但し、私はやはり「道」を俳諧道を中心に考えたい。芭蕉の人生は俳諧の一筋に繋がれていたのであり、俳諧は芭蕉の人生そのものだったからである。多くの同行と共に歩んではいても、藝術家の道は究極の所孤独なものである。特に「軽み」を唱道するようになった最晩年には、それに対して無理解な門人達の離反を招き、師の歩みに追随して来る者も、なかなか芭蕉の考える水準には到達し得ないで、歯がゆい思いを募らせていた折柄であった。孤独な寂寥感の究極の表現とも見えるこの句の背景に、そのような芭蕉の「所思」があったことは疑いを容れない。ただ、そういう内容の句を、連衆の和を尊ぶ俳席に出すことを問題視する考え方もあり、山本健吉氏の左のような説は、その代表的なものである。

> 門人たちへの愛憎づかしが、この一句には籠められているというのか。だが、この句は独詠でなく、十人もの俳諧の座における発句であることを考慮に入れれば、このことはあまり強調するわけにもゆかぬ。連衆に興ざめ

な思いをさせるような発句を、芭蕉が用意して行くはずもないからである。……芭蕉の孤独な心の寂寥感が発した人生詠歎が「此道や」なのである。具体的には晩秋の、夕暮につつまれた、冷やかな一本の道がある。……それが芭蕉の、五十年の生涯の象徴として、涯知らぬ地点にまで通っているのである。「終の枝折をしられた」という其角の言葉（引用者注、『枯尾花』所収、其角「芭蕉翁終焉記」の一節）も、死の予感を汲み取ることのできるこのころの芭蕉の句として、当然の解釈であって、牽強でも歪曲でもないのである。

「此の」とはっきり指示したところに、芭蕉は来し方の一本の道に印した、自分の確かな足跡を振りかえっていた。……詩人の道が、けっきょくは孤独者の道であることを、忘れたことはないはずである。門弟どもが自分について来ないといった女々しい愚痴が、芭蕉に詩の動機を与えるはずがない。……楸邨は、初案の「此道を」は「行く人なしや」が中心になっているが、「此道や」は、「此道」が眼目になっていると言っている。これはいい着眼で、初案の方は、その点でまだ女々しい私情からふっ切れていないのである。……「此道」は明るい未来に通じている道ではない。人生の暮秋ともいうべき地点に立って、芭蕉の心は一筋の過去を振り返る。これまでも独りだった。これからも独りであろう。それが自分に与えられた運命だと思うのだ。この句は、具象的な秋の暮の風景もあるが、それよりも、芭蕉の観想の中の風景の方が、イメーヂとしては鮮かなのである。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

右のうち、「此道や」の形での句の内容の分析は、私も概ね賛成である。「此道を」がまだ私情を引きずっているとあるが、私見では、初案の段階では叙景句の要素が強いと思うことは前述の通りだ。それが自然の風景から心象風景に転じ、「所思」を寓意するに及んで、この句はすぐれた象徴句となったのである。なお、山本説は「一筋の過去を振り返る」といって、芭蕉のこれまで経て来た半生にかなり重点を置いた見方になっているけれども、これは過現未にわたる俳諧人生の道なのである。回顧にのみ主眼があるのでないことは、おのずから明らかであろう。多数の連衆の

集う俳席での発句として相応しいかどうかの問題は、加藤楸邨氏に説がある。

「此の道や」を立句としようとしたとき、芭蕉はこの句に、そのさびしい「一筋」をたどりあう同志としての、連衆の連帯感を読み取ることを期待したのではなかったか。そう読むことによってはじめてこの句は挨拶となりえたであろうと考えられるからである。（『芭蕉全句』）

連句の妙手であり、連衆の連帯感が一座の興の基盤であることをよく知っていた芭蕉である。この句を発句として提示した時の気持は、右のように理解するのが最も穏当であろう。但し、この句柄は何としても独詠的な味わいが著しい。洒堂・之道両派の対立融和工作に疲れた芭蕉の心境が、こうした句を作らしめたとも言えようか。

「人声や」という別案については、九月廿五日付の曲翠宛に初めて触れてあり、二十六日の会にも披露されたが、「人声や」とある通り、「行人なしに」とは対照的な内容である。しかも「此道帰る」の主語を、「声の主」とするか芭蕉とするかによって説が分れる。前者としては、

……「人声や此の道かへる秋のくれ」の作には、寂寥な秋暮の野径の中で、ふと人声を聞きつけた時の何となき人懐しさの感じが盛られて居り、さうした感じを「所思」の題に引合せると、これは思ひもかけぬ俳諧の知己を得た喜びを示すものと見るべきではあるまいかと、説かれてゐる。「人声や」の句にかうした感じが感じられることも事実であるが、又前の「此道や」と同じ意味に取るべきでなからうかとも思はれる。同時に出来た二つの句案であるから、別箇な解釈でなく取ることも可能であると思はれる故である。さすれば自分が果もない道を秋暮に一人、とぼ〱とたどる時、人声が聞えてふと懐しくは思ったが、其の人々は自分の行く手に向つて共に進む人々でなくて、自分とはちがつた方へと、何か楽しげに語りながら帰つて行くといふ句意になり、一しほのさびしさがせまるやうにも思はれるのである。（能勢朝次博士『三冊子評釈』）

という説があり、後者としては、

「人声や」の句であると、題のとほり秋暮の寂寥を詠んだものであると思はれるので、秋暮の道を帰つてくると人声がきこえる、寂しさの折柄であるから、人懐しさがこみあげてきたといふやうな、寂寥に根を据ゑたほのかななつかしさを詠じたものと思はれる。（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇㊦）

という見方が代表的である。楸邨説は「人声や」の切字を重視して、中七以下を「人声」とは別の、芭蕉自身の行動と取るのであるが、切字を重視するのは良いとして、「芭蕉が帰る」ということに必然性が感ぜられない。そうとすれば、「帰る」のはやはり「声の主」の方であろう。この「や」は山本健吉氏の所謂「不完全切字」で、「人声や、（それが）此道帰る」という文脈と解すべきである。その限りでは能勢説の方が正しく、楸邨氏も後年の『芭蕉全句』では、

「秋の暮のものしずかなけはいの中に、人の交し合う声がしずかに透りつつ、この道を帰って来る、それが何か人懐しい思いを感じさせることだ」という意。

という見方に変っている。一方、能勢説の問題点は、山本氏の指摘されたように、帰って行く人声を「自分とはちがつた方へ」と取った点であろう。同氏は「人声や」の句の内容と余情を左のように見ておられる。

秋暮の道を帰る人は、部落の方へ、家のある方へ、人々の円居（まどい）のある方へ、帰ってくるに決まっている。それが「此道帰る」が描き出す具象的イメージである。孤独な自分に、人々の歓語が接近して来る。そのとき彼は、一日の勤労を終えて、三々五々歓語しながら帰ってくる人たちを暖く迎える村人の円座（まどい）の中に、仮想的に身を置くのである。自分に向って帰って来るのであって、自分と反対に帰って行くのではない、少くとも芭蕉の願望の上では——。……

「此道や」で孤独者の心情を表現した芭蕉は、「人声や」で人々との心の交通の場の回復を、強く願望として打ち出した。そこに孤独における交わりが、他者への真の愛が成立する。芭蕉には、そのような相互交通への要求

が、自分の孤独を意識すればするほど強く存在した。そしてそのような交通への可能性が、近づく「人声」をきいたとき、強く意識に上ってきた。……「かへる」の語に、私は日常的な交わりへの願望を見るのである。……この二句のあいだを、芭蕉の心は行ったり帰ったり、振子のように揺れていた。……そのことが、この二句を同時的に胸裡に胚胎させ、彼を「此道や」の、一句としては完璧な表現の中に落着かせず、あえて若干不完全な表現の「人声や」の句を、並べて人々の前に提出させたのだ。「秋近き心の寄るや四畳半」にしろ「秋の夜を打崩したる咄かな」にしろ、一つの円座（まどい）への心の惹かれであり、その延長に、いっそう広やかで暖かな共同社会への願望を籠めたのが、この「人声や」なのだ。「人声や」と冒頭にすえた叙法から言って、この句のアクセントは「人声」にかかっている。感覚的には、秋の大気の中の爽やかな人語の響きであるが、それだけではなく、もっとメタフィジックな意味を籠めている。だからこの句は、芭蕉がも少し余命を保ったら実現したかも知れない、孤独の意識の底から、他者に対してうち開かれた詩の世界を予想させるのである。唐木順三が言う「開存」としての詩の実現を、私はここに見る。「軽み」による挨拶の昇華とも言える。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

これは「人声や」の句の鑑賞として正に完璧である。この時の芭蕉は常にも増して孤独を感じていたけれども、我独りのみ高しとして孤絶の境に安住する人ではなかった。一方で人々との心の交流を願う気持が常にあって、その心の揺れが両案を作らせ、俳席に二句を提示させることにもなったのである。支考のすすめ等もあり、芭蕉自身も「吾心にもさる事侍り」といって、その席の発句としては「此道や」の句を採ったと『追善之日記』に見える。この芭蕉の言葉は『笈日記』にはなく、支考の文によくある不得要領な言い方ではあるが、要するに「此道や」を良しとする支考の意見に同感の意を表した言葉であろう。二十六日より前の手紙でも、全形を示しているのは常に「此道を」の句の方であるから、前から作者の心は「此道」の方に傾いていたと見られるが、さればと言って「人声や」の句案を全く捨てたわけではあるまい。この選択は飽く迄も俳席の発句としてである。また、内容が対照的である点を重視すれ

ば、別の句として扱うのも一つの態度であるが、ここでは一句の推敲過程に於ける別案と見るにとどめておく。

904 猪の床にもいるやきりぐくす（三冊子）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・蟋蟀巻

又洒堂が予が枕もとにていびきをかき候を

床に來て鼾に入るやきりぐくす（九月廿五日付正秀宛書簡）

木枯・浪化日記・泊船集・記念題・梟日記・三冊子・蕉翁句集草稿・蟋蟀巻

秋季（きりぐくす）。

**語釈** ○**猪の床にもいるや** 「猪の床にも入るや」。「猪の床」は、和歌などで用いる雅語「臥猪の床」の俳諧化で、猪のねぐらのこと。いびきをかいて寝込んでいる洒堂を「猪」にたとえた諧謔である。「猪」は既出（Ⅲ613）。○**きりぐくす** こおろぎを指す雅語。

**大意** 洒堂のかく大鼾の合間に、こおろぎのか細い声が聞える。猪の寝床にこおろぎが紛れ込んだといったところだ。

**考** 『蟋蟀巻』（駝岳撰、寛政五年刊）には、「又、洒堂が予が枕もとにて鼾をかきしをとありて」として「床に来て」の句を挙げ、続いて「其後文水と当名ありて」として「猪の」の句を記して、「右二句を書たる文を見たる事あり」と見える。前者が現存の正秀（推定）宛書簡（元禄七年筆）に相当することは確かであるが、文水宛の方はなお詳らかでない。

土芳の『三冊子』には「猪の」の句形を挙げて、

この句自筆に有。初は、床に来て鼾に入るやきりぐくすといふ句在。なしかへられ侍るか。（赤雙紙）

と述べてあり、同じ人の『蕉翁句集草稿』にも、「床に来て」の句形を出して、

自筆物に、猪の床にもいるやきりぐくすと云句有。此句の直りか。

と見える。土芳が芭蕉の自筆を見たといっている以上、「猪の」の句形は信憑性が高く、この方が表現が単純化され

ているだけ、内容も解しやすい。「床に来て」から「猪の」へ推敲されたものとおぼしく、恐らく九月二十五日に正秀宛の書簡を認めた後、数日中に改案したのであろう。なお正秀宛には、「床に来て」の句の前に九日大坂入りの際の「菊に出て」（V *898*）の句を書き、「床に来て」の句の次に十四日作の「舛かふて」（V *899*）の句を披露している。若しこれが句の成った順に並べたものとすれば、当面の句の初案は九日から十三日までの間に成った可能性が高いが、ここでは書簡の日付によって、この位置に配しておく。

前に述べたように、芭蕉は大坂に入った当座は高津の酒堂亭に止宿していた。その後西横堀東入ル本町（現大阪市東区本町）の薬種商だったという之道の家に移って二十九日に発病するのであるが、酒堂亭から其処へ移った時期は明らかでない。しかし、正秀宛に手紙を書いた二十五日には、恐らく之道亭に移っていたであろう。それは兎も角、「床に来て」の句案は酒堂亭に滞在していた間に得たものと思われる。同じ部屋の隣の床で酒堂が大鼾をかいて寝ている。その鼾に悩まされながら、まじまじと睡れずにいる芭蕉の耳に、こおろぎの鳴く音が聞えて来た。「床に来て鼾に入るや」はその時の即興で、睡れない悩みを「鼾」のおかしみに転じ、風雅な「きりぐ〱す」の音をそういう場に置いてみた俳諧でもある。古注以来よく引かれる古詩「七月在レ野、八月在レ宇、九月在レ戸、十月蟋蟀入二我牀下一」（七月野に在り、八月宇に在り、九月戸に在り、十月蟋蟀我が牀下に入る。『詩経』豳風、「七月」）も意識されていたであろう。それが定案では全く面目を改めて別趣の句になった。

詩経ニ十月蟋蟀入ル二我牀下ニ一。此詩をすり上げて鼾に入るの俳諧は、最上の新しみ也。謂く、聞く人は翁なり。傍に鼾かく人あり。鳴蛬あり。きりぐ〱すの音の細さが大鼾に折〻鳴りけさるゝを興じ給ふなり。後章（引用者注、「猪の」の句案を指す）も亦、前章の上を一段すりあげたるなり。前章の家の内は、尚格式の郭也。おどろ〱敷伏猪のあたりにも住むらんと、其場を認めたるは、郭外の新しみなればなり。（梅丸『茜堀』）

という古注の説は現代にも受け継がれている。尾形仂氏は「猪も」の句案によって句は全く思いがけない展開を示し

たと見て、次のように説いておられる。

「猪」は、洒堂の大鼾の機知的な見立てに発想したものにはちがいないが、同時に「猪の床」は和歌の「臥す猪の床」の俳諧化でもあった。……作例に徴しても晩秋・初冬の季感が濃い。したがって「猪の床にも」の「も」は、場所とともに、季節の推移をも示すものとなり、同時に「きりぎりす」にも、秋を鳴き尽くした忘れ音のあわれが添いまさる。

七月に鳴きはじめたきりぎりすが、秋も末になった今、夜寒を侘び、わずかなぬくもりを慕って恐ろしい猪の床のあたりにまで尋ね寄り、あらあらしい猪の鼾の合い間に、行く秋を忘れ音に鳴いている。その両者の取り合わせの中には、和歌の伝統を大きく俳諧の世界のものに変えたユーモアとともに、……芭蕉自身の老残の嘆きに裏打ちされたペーソスがただよって、一種人生的な吐息を感じさせるものさえある。

「床に来て」が、まだ現実の鼾に悩まされているナマの世界を脱しきっていないのに対して、「猪の床」は、現実の日常性をはるかに超脱した別個の詩境を作りあげている。この〝俳諧〟の〝かるみ〟の一句を推敲し終えたとき、芭蕉にはすでにはっきりと「枯野」の死が予感されていた。（『松尾芭蕉』）

加藤楸邨氏は、「猪の」の定案形も洒堂の大鼾と関連づけて解しておられる。即ち、

初案の「床に来て鼾に入るや」は、「鼾に入る」ところにおもしろさはあるが、興じた味わいには乏しい。「猪の床にも入るや」になると、意想外な着想のおもしろさが浮き出て来るし、蟋蟀のあわれさを詠み取った句としての味わいも生きてくるであろう。殊に洒堂は人柄が樸野だったらしいから……この大袈裟なとりなしようもおもしろ味が出てくるのである。晩年における笑いを持った軽みのあらわれといえよう。（『芭蕉全句』）

とある。また、山本健吉氏は「猪の床」の句に大した価値を認めず、この前後芭蕉と洒堂の間に何か気まずいことがあったと見て、

……芭蕉は洒堂宅から之道宅へ移った以後のある日、「軒」の句を改めて「猪」の句に直したことも想像される。それによって洒堂への親しみの気持を打消し、「猪」の句に仕立て直したのである。そうするとこの句は、むくつけき猪のところに優しい蟋蟀が入ってきたという、想像の景気の句となる。だがそれによって原句のウィットも消えうせてしまう。発句はその成立の事情によって生き、それによってウィットも生動するものであることを、まざまざと見せている。（『芭蕉全発句』）

と述べておられる。これは内容の見方は尾形氏と同じながら、評価は全く逆の低いものになっており、これと同様の説は今に到るまで見られるのである。

按うに、「猪の床にも」の句は、やはり洒堂の軒と関係があるのであろう。初案の「床に来て軒に入る」という表現が聊かまわりくどいので、単純化をはかったのではあるまいか。だから「猪の床」の句にも、正秀宛書簡に見られるような前書があるべきであって、それが所伝を失したのかも知れない。私には楸邨氏の説が最も穏当に思われる。その場合にも、氏がいわれるように「猪」と「きりぐ〱す」の取合わせに意表をつく面白さは認められないではないが、機智的な興は、山本氏の所説の如く寧ろ初案の方に著しい。抑々が即興句なので、改案形もそれ程の意図を持っていたとは思えず、尾形氏の表現の分析は傾聴に値するけれども、評価に至っては聊か過大であると思う。

905

旅懐

此秋は何で年よる雲に鳥　（芭蕉翁追善之日記）

芭蕉翁行状記・笈日記・住吉物語・喪の名残・泊船集・三冊子・庭の巻・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季。

**語釈**　〇**旅懐**　「リョクワイ」。旅の懐（おも）い。「旅懐の心うくて物おもひするにやと推量し」（『更科紀行』）。〇**此秋**　「此（こ）の秋（あき）」。作者が

現在身を置いている秋の季節。今年の秋。○**何で年よる**「何(なん)で年寄(としよ)る」。何で年寄るのか、即ち、どうしてこのように老いが身にしみるのかと、自らに問う表現である。口語調。疑問の「か」は無くても、「何で」で意は通ずる。『芭蕉翁行状記』は「なむで(濁ママ)としよる」と表記している。「年よる」は既出（Ⅳ*755*）。「なんで秋の来たとも見えず心から　鬼貫」（『梅鏡』）。○**雲に鳥**　雲の彼方に消えて行く鳥の影。実景のように見えるが、作者の心象風景であろう。

**大意**　今年の秋は何で斯うまで老いが身にしみるのか。雲の彼方に消えて行く鳥の影を、寂しく見送ることだ。

**考**　『喪の名残』（北枝撰、元禄十年刊）に「題しらず」と前書があり、「旅懐」という前書は『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』の外、『住吉物語』『三冊子』『蕉翁句集草稿』『蕉翁句集』にも見える。『追善之日記』には、九月二十六日の「清水の茶店」での泥足の集の為の俳席のことを記した後に、標掲の前書と句を挙げて、

此句は其朝より心に籠てねんじ申されしに、下の五文字にて寸々の腸をさかれけるにや。是はやむごとなき世に、何をして身のいたづらに老ぬらん。年のおもはん事ぞやさしきを切に思はれけるか。されば此秋はいかなる事の心に叶はざるにかあらん、伊賀を出て後は心知(ママ)すこやかならず。明暮になやみ申されしが、京・大津の間を経て伊勢路にやおもむくべき。それも人々のふさがりてとゞめなば、わりなき心もいできぬべし。とかくしてちからつきなば、ひたぶるの長谷赴(ママ)すべきよし、しのびとる(ママ)時はふくめられ侍りしに、唯羽をのみかいつくろいて、音もなくなり給へるぞ、くやしき事いはんかたなし。殊に支考は伊勢の国にかりの住所求ければ、我方の人々とて一目見せ申さゞる事の、わきてかなしうはおぼゆるかし。

と記してあり、『笈日記』の文はこれとかなり異同があるが、趣旨に変りはない。二十六日の朝から苦心の句案を重ねて、この日の俳席で披露されたのであろう。土芳の『蕉翁句集草稿』に「此句にて天王寺大会ありと聞伝」とあるのは、二十六日の俳席を指すらしいが、これを発句に付合があったような書き方は「此道や」の付合と紛らわしく、不正確な記事である。華雀の『芭蕉句選』に中七が「何にとしよる」となっているが、他に所見のない句形なので信

じ難い。なお、右の『追善之日記』の文の後段に見える、初瀬経由で伊勢へ赴く計画は、九月廿三日付の松尾半左衛門宛書簡にも、

いまだ逗留もしれ不申候へ共、長逗留は無益之様に奉存候間、二三日中にはせ・名張越にて参宮可申と奉存候。

とあるのによって、そういう心算があったことは事実と思われる。

支考の記すところによれば、この句は下五文字の表現に「すゝの腸」を裂く苦心をしたという。「此秋は何で年よる」は、それに比べればすらすらとまとまったのであろう。口頭の言葉そのままの呟きのような趣の中に、この時の芭蕉の感慨が籠められている。支考の引く「何をして」の歌は、『古今集』巻十九所収のよみ人しらずの俳諧歌であるが、世に無用の俳諧に執心して歳月を過した芭蕉の自省があろうかというのである。それは何れにもせよ、芭蕉が此処で自らの漂泊の生涯を回顧していることは確かである。自ら志して旅から旅へ無所住の生活を続けて来たが、今度の旅では殊に身の弱りを感じていた。大坂に来て以来は悪寒発熱に苦しんでいただけに、「此秋は何で年よる」という呟きには実感がある。しかし、そういう主情的な表現だけでは句になるものではなく、それを支える客観的形象がなければならない。それを探求する苦心が並々なものでなかったわけだ。

もともと「鳥雲に入る」或いは「雲に入る鳥」は連歌以来の季語であって、連歌書『産衣』（混空編、元禄十一年刊）には「雲に入鳥、春也」とあり、俳諧歳時記『華実年浪草』（鹿文編、天明三年刊）には「雲に入る鳥は雁を云ふなり」とも見える。つまり春になって北へ帰って行く雁を思った語で、当面の蕉句について「旅に雁を身に比して感情したまひし姿情、雲鳥は雁也」（鷗沙『過去種』）と見る古注があるのも、こういう知識を背景にしているのであろう。この春の季語としての用法が芭蕉の脳裏にあったことは勿論であるが、ここは秋季の句に用いているので、季語の用法そのままではない。この表現の典拠としては、「雲無㆑心以出㆑岫、鳥倦㆑飛而知㆑還」（雲は心無くして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦んで還るを知る。陶淵明「帰去来辞」）や「倦鳥孤雲豈有㆑期」（倦鳥孤雲豈期有らんや。蘇東坡「四家絶句」）等の

漢詩文が古注以来指摘されており、杜甫の詩句「孤雁不ニ飲啄一、飛鳴声念レ群、誰憐一片影、相ニ失万重雲一、望尽猶似レ見、哀多更如レ聞」（孤雁飲啄せず。飛鳴して声は群を念ふ。誰か憐れむ一片の影、万重の雲に相失するを。望尽くるも猶見るに似たり。哀多くして更に聞くが如し）も、この句の情に似る。「雲に鳥」が実景ならば、「寸々の腸」を裂くまでの苦心をする筈はなく、芭蕉は句の世界を支える客観的形象を求めて、この表現にたどりついたのであろう。結局これは、作者の詩嚢の中にあった古今の表現が渾然一体となって現われたものなのである。山本健吉氏はいう。

　この日、朝から心魂をくだいたのは、下五に置くべき具体的な語句の選択であり、その結晶が「雲に鳥」なのである。……

　上の五・七は、老の感慨である。この結びの五文字は、雲間にかすかに消えて行く鳥という具象物であり、「雲」にも「鳥」にも、芭蕉の「旅懐」は托されている。この五文字に、老の感慨が加わって、人生逆旅の感情が浮彫にされている。「雲に鳥」の句については、いろいろの詩句が引合に出されている。……それらの詩句の堆積が、意識のどこかにあったとしても、それによって発想されたものではない。必ずしもその時の属目であることを要しないが、何時か雲間に消え去る鳥を見た経験が下地にあって、それを遥かに想い出すような形で、しぼり出された詩句にちがいない。「雲に鳥に遥かな心細い気持を寄せたのだ」と言い、「自分の存在は、あの雲の中に消えて行く鳥の影のように、まことに渺たる存在に過ぎない」という自分の存在の意味の反省を籠めたものとする小宮豊隆の説が、当っているであろう。小宮はこの鳥を一羽と見ているが、芭蕉の脳裡のイメーヂとしては、それは孤影であり、しかも雲の中に吸いこまれて行くような一点として映っているのであろう。群をなした渡り鳥や塒へ帰る鳥と見ることはない。

　上の五・七に対して、「雲に鳥」と結んだのは、一種の衝撃的手法である。「雲に鳥」に至って、読者ははっと驚き、立ち直ってこの詩句を反芻する。衝撃とは、配合よりももっと強度な、火花の散るような手法であって、

しばしば強引さの印象を与えられるが、この句は目を覚まさせるような鮮やかな印象を残す。たった五文字で、これほど深い意味を彫り出した例は乏しい。快心の五文字であり、単なる属目でなく、長く経験のなかで暖められ、象徴化した心象風景であることが分かる。この句は、きわめて陰微な心の表現であり、現実と仮象とのあわいが、微かで捕捉しがたいのである。

「衰ひや歯に喰あてし海苔の砂」においては、それはまだ単なる老衰の感慨でしかなかったが、ここに至ると、そのような私の感慨を超えて、普遍的な世界観に到達している。仏教的な生々流転の思想は、芭蕉の句の下地としてつねに存在するが、この句の如きは、自由無礙の流れてやまぬ生命の実存に参入しているものと言うべきだろう。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

「雲に鳥」という表現の背後に、作者の古典体験と共に、実地の体験も踏まえられていることは確かであろう。右の説は、この表現について間然するところのない、行き届いた鑑賞と言うべきである。加藤楸邨氏も、

芸道上のはるかな憧れ、はてしない漂泊への誘い、迫り来る衰老の自覚、こうしたさまざまな思いを一気に吐き出したのが上十二であったが、それが、「雲に鳥」という、あくまで具象的で、しかも、無限の虚しさの中に吸いこまれるような寂寥に満ちた詩句と浸透しあうことによって、一句としての全き世界は形づくられているのである。こうして形を与えられたその孤独感は、特定の事や物から来たものではなく、もっと深く人生の根源的なかなしみにかかわるものであって、もはや如何なるものをもってしても覆いがたいひとりごころである。（『芭蕉全句』）

と述べておられる。身の衰老と引替えに、この一期の絶唱を得たことは、生涯を俳諧に執心して過して来た芭蕉にとって本懐であったろうが、「雲に鳥」のイメージには、死の予感が既に色濃く漂っている。

906

松風や軒をめぐつて秋暮ぬ（芭蕉翁追善之日記）

笈日記・木枯・浪化日記・蕉翁句集草稿

大坂清水茶店四郎左衛門にて

松の風軒を廻ッて穐暮ぬ（翁草）

夵風の軒をめぐつて秋くれぬ（泊船集）

蕉翁句集・六行会

夵風の軒をめぐりて秋くれぬ（誹諧曾我）

秋季（秋暮ぬ）。

**語釈** ○**松風**「マツカゼ」。松の梢を吹く風。さわやかで気品のあるものとされる。「綿脱は松かぜ聞に行ころか（野水）」（『あら野』巻六）「Matçucaje.」（『日葡辞書』）。○**軒をめぐつて**「軒を巡つて」。風が軒端を吹き巡るのである。○**秋暮ぬ**「秋暮れぬ」。

**大意** 松風が寂しく軒端を吹き巡って、秋もいよいよ末になったことだ。

**考** 「大坂茶店四良左衛門亭にて秋をおしむ」（『木枯』）「清水寺の茶店に遊吟して、あるじの男のふかく望けるに」（『蕉翁句集』）「四郎右衛門（ママ）亭にあそび、秋をおしむ」（『六行会』）等の前書がある。『芭蕉翁追善之日記』では、九月二十六日新清水の料亭浮瀬での俳席（「此道や」〈V903〉の句の条一八六頁参照）の記事の次、「此秋は」〈V905〉の句文の前に句を掲げて、

是はあるじの男のふかく望みけるにより、書てとゞめ申されし。

とあり、『笈日記』も同様である。この日浮瀬の主人四郎左衛門に与えた即興吟であった。さまざまの異形が伝えられるが、これらは潁原博士の『新講』の所説のように、「……や……ぬ」と切字が二つあるような、やや整わない形を、私意によって正した結果ではないかと思う。するとこれらは芭蕉の関知しない可能性が高く、確かな改案の証が

ない限り、『追善之日記』や『笈日記』の所伝に従うべきであろう。

「松風や、」は一応の切字ながら、ここですっぱり切れるのではなく、「その松風が軒をめぐって」と下に続いて行く文脈である。古注には、

大坂清水茶店四郎左衛門にてと有。此松風は実は松風に有まじ。茶店とあれば、釜のたぎる音の松風のごときを、常住軒をめぐると聞なして、生涯茶を楽しみて秋を経たりと也。（正月堂『師走嚢』）

といった説が見えるが、この「茶店」は料理茶屋、即ち料理屋の意に用いたものだから、茶釜のたぎる松籟の音と取るのは見当ちがいである。山本健吉氏も、「茶店に松風の連想は、棄てたものではない」と『芭蕉その鑑賞と批評』で賛意を表されたが、従い難い。

大坂の清水也。繁花の地ながら、折から淋しさをいへり。めぐりて暮るゝとの作、見つべし。（杜哉『蒙引』）

と見るのが良く、実の松風を秋も末とあって寂しい趣に聞きなしたのである。大坂の新清水は、四天王寺に近い台地で、寛永十七（一六四〇）年に京の清水寺を勧請したところであった。亭主の求めによって、繁華の地にも寂しい秋風を聞くと即興にいった俳諧であろう。潁原博士は、

「松風や」のやは言ふまでもなく松風に対する感動を強く現はしたのである。「松風の」の方が形は整ふかも知れないが、芭蕉の意はやはり「松風や」でなければならなかつた。「軒をめぐつて」で浮瀬の閑亭に坐して耳を傾ける芭蕉の姿が浮んで来る。さうして「秋暮れぬ」の感に堪へなかつたのである。叙して緊密といふべきである。（『新講』）

と述べておられる。家讃めの即興吟とはいえ、松風を聞き留めた芭蕉の感性は澄んでおり、しかも暮れ行く秋の寂寥が、句全体に遍満している。

*907* しら菊の目にたてゝ見る塵もなし　（芭蕉翁追善之日記）

木枯・笈日記・浪化日記・俳諧問答・泊船集・後れ馳・去来抄・菊の塵・蕉翁句集草稿・蕉翁句集・桃の杖・六行会・春と秋

白菊やめにたてゝみる塵もなし　（真蹟句切）

矢矧堤

秋季（しら菊）。

**語釈** **○しら菊**　「白菊（しらぎく）」。既出（I *173*）。**○目にたてゝ見る塵もなし**　「目（め）に立（た）てゝ見（み）る塵（ちり）も無（な）し」。「目にたてゝ見る」は、目をこらしてよく見る意。凝視しても塵一つないというのである。西行歌「曇りなきかゞみのうへにゐるちりをめにたててみるよとおもはばや」（『山家集』中）を踏まえた。但し、歌意が句と関わるところはない。

**大意** 白菊の花はまことに清らかで美しく、目をこらしてよく見ても、塵一つない。

**考** 『泊船集』に「難波その亭」と前書があり、後に「此句にて哥仙あり」と注してある。『芭蕉翁追善之日記』元禄七年九月の条に、

廿七日

園女が方にひさしくまねきおもふよし聞へければ、此日とゝのへて其家に会す。

しら菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

殊に其一巻ははなやかにして哥仙みちたり。是を生前の会の名残とおもへば、其時の面影も見るやうにおもはるゝ也。されば此会の宿世や深かりけむ。

とあって、二十七日の作と知られる。『笈日記』には「白菊」の句の次に、

是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日の一会を生前の名残とおもへば、その時の面影も見るやうにおもはるゝ也。

とあるだけで、月日を明記していないが、初案と思われる「白菊や」の句を記した真蹟句切に添えた元禄十四年筆の支考の極めにも、

此一章は先師難波におはし、園女が招請にとらせ申されし句也。されば甲戌の秋なり。月の末なるべし。是を生前の筆の名残とおもへば、殊更になつかしく、今この事をこゝにかき添たる也。

とあって、『追善之日記』の記事を裏付けている。『後れ馳』(朱拙撰、元禄十一年刊)『菊の塵』(園女撰、宝永三年頃刊)『春と秋』(桃鏡撰、宝暦十二年刊)等にこの席での歌仙が収められたが、連衆は芭蕉・園女・之道・一有・支考・惟然・洒堂・舎羅・荷中らであった。真蹟句切は恐らく草案として初めに記されたもので、その場で「白菊の」に改めて歌仙の発句としたのであろう。句切は荻原井泉水氏が昭和三十五年に沢井儀左衛門氏所蔵として紹介されたが、『芭蕉全図譜』によれば、現在は所在不明だそうである。

園女は伊勢山田の俳人で、嘗て貞享五年春芭蕉もその家を訪ねたことがあった(「暖簾の」(Ⅱ350)の句の条参照)が、元禄五年八月夫の一有と共に大坂に移り、この日に芭蕉を迎え得たのである。支考も記しているように、この席が芭蕉が一座して付合の行われた最後になった。

句は、俳席の床に生けられていた白菊を契機として成ったものと思われる。「園女が風雅の美」(『笈日記』)をいう挨拶の意が籠るが、白菊が直ちに園女の譬喩になるといった単純なものではない。

……一句はあくまでも白菊の清さを賞したのである。園女の清さを言ふために菊を仮りたのではない。しかも菊を賞する芭蕉の意中に、園女の姿がなかつたのでは勿論ない。言はばこの時菊と園女とは全く同じものとして、芭蕉の心には映つたのである。菊は園女の象徴であり、園女は菊の象徴であつた。さうして二者が互に譬喩と見られない所に芭蕉の観照の純一さがあつた。句の姿もまた清らかである。(『新講』)

と頴原博士が説かれたのが精確である。其処に山本健吉氏の左のような鑑賞が胚胎する基盤があろう。

一点の塵をも止めぬ白菊の清浄さを賞するというこの句の内容だけでなく、この句の姿そのものが清浄さを現している。黄金を延べたような一本に通った表現で、少しも凝滞がない。「白菊の」で小休止を置くべきことは、俳句的表現として当然であるが、この句は白菊の清さそのものが詠まれていて、ずばりと竹を割ったような明快な表現である。……この句の一種冷たい感触を持った清浄感は、句のリズムが凛然として張り切っているところに由来する。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

「白菊の」のところに小休止があることは、初案が「白菊や」だったことからも、容易に納得出来る。まとめとして、加藤楸邨氏の鑑賞を引いて置こう。

……純白清浄な白菊の美が純粋に生かされた結果がおのずと主への挨拶になっているのである。一息に詠み下した表現は清浄感にあふれ、ひたすら菊の白さに深まり、白菊以外の何ものでもないという美しさを確かな量感をもって把握している。「目に立てて見る塵もなし」というのは、その無垢の白さをつかみとった断言と言えよう。この「目に立てて見る」は西行の「曇りなき鏡の上にゐる塵を目にたててみる世と思はばや」を踏まえたものとされているが、それが全く質を異にして生かされている点がたいせつなところである。……「白菊」そのものの本情が踏まえられて、それがそのまま挨拶になっている発想である。（『芭蕉全句』）

この句もまた、逝去直前の絶唱の一である。

*908* 月澄や狐こはがる児の供（其便）

月下送児

芭蕉翁追善之日記・泊船集・橋南・蕉翁句集

秋季（月）。

**語釈**　**○月下送児**　「月下(げっか)に児(ちご)を送(おく)る」。「児」は、寺院などに召使われる少年。既出（Ⅲ*614*）。それを月の照らすもとで送って行く人のさまを材とした句であることをいう。「月下」も既出（Ⅰ*119*）。**○月澄や**　「月澄(つきす)むや」。（Ⅰ*9*）参照。**○狐こはがる児の供**　「狐(きつね)恐(こは)がる児(ちご)の供(とも)」。人を化かす狐が現われはしないかと恐がる稚児の供をして行く男のさま。「こはがる」は日常語である。「狐」は既出（Ⅰ*141*）。「たゞとひやうしに長き脇指　去来　草村に蛙こはがる夕まぐれ　凡兆」（『猿蓑』巻五）「刀さす供もつれたし今朝の春　膳所正秀」（『炭俵』上）「Tomono xǔ.」（『日葡辞書』）。

**大意**　月の澄んだ光のもと、稚児の供をして行く。人を化かす狐が出はしないかと、稚児はしきりに恐がることだ。

**考**　「大坂畦止亭／月下に送児」（『泊船集』）「月下に児送ルといふ題を置」（『蕉翁句集』）等の前書がある。『芭蕉翁追善之日記』元禄七年九月の条には、

　廿八日

　畦止亭にうつり行。その夜は秋の名残をおしむとて、七種の恋を結題にしておの〳〵発句しける。

　　其一　月下ニ送レ児

　　月すむや狐こはがる児の供　　翁

とあり、『笈日記』にも、

　　畦止亭

　今宵は九月廿八日の夜なれば、秋の名残をおしむとて、七種の恋を結題にして、おの〳〵ほつ句あり。是は泥足が其便集に出し侍れば、爰にしるさず。

とあるのによって、当面の句は二十八日夜畦止亭で成ったと見られる。『其便』には巻末近くに「畦止亭におゐて即興」として標掲の芭蕉の発句を前書と共に挙げ、以下、

　　寄鹿憶壻

篠越て来ル人床し鹿の脛　洒堂

寄薄恋老女

花薄嫗が懐寐て行かん　支考

寄稲妻妬人

いなづまや暗がりにさす酒の論　惟然

深窓荻

双六の荻の葉越や窓の奥　畦止

寄紅葉恨遊女

逢ぬ日は禿に見する紅葉哉　泥足

聴砧悲離別

洗濯の中に別るゝ小夜碪　之道

とあって、当夜の席に会した人々とその作句を知ることが出来る。「結題（むすびだい）」とは題詠の際に出される題の一種で、二つ又はそれ以上の事柄を結び付けた題をいう。畦止については「舛かふて」（V899）の句の条を参照されたい。

句の解釈については、狐を恐がるのを誰とするか諸説がある。

月澄む夜はことに物すごく、狐をこそ恐るべきに、還て狐こはがると変転の所おもふべし。本より狐の人を恐るこそ誠ならん。児の魂を誉たる心も有べし。（東海呑吐『句解』）

というのは、豪胆な稚児のさまに狐が恐がると見るのであるが、これは如何にも無理であろう。「狐をこはがる」とするうちにも、「こはがる」のが「児」か「供」かによって説が分れる。

秋の月至て晴たる影、或は深夜に及て澄昇る気色は凄き物也。冬月の冷（スサマ）じきに限るべからず。其凄く冷（スサマ）じく、亦

夜の更たる風情を云んとて、澄とは云出たり。是言外に不レ謂して夫と顕る、可レ味也。殊に供と云、滑稽也。児童より己が大きなる形をして、強(コワ)がると笑し味、名誉と云べし。児などには、顔優(ヤサシ)くして思の外物に惶(オヂ)ざる、有る物也。亦小者、多くは頑(カタクナ)にして臆病(オクビヤウ)者間々あり。一笑と云べし。（信天翁『笈の底』）

とあるのは「供」が恐がると見る説で、明治期の『芭蕉句集講義』では、

麦人曰……いづれも恋の句なれば此児は夜郎であらう。其児が念者と別れ、供を倶して月澄む路を家に辿つて行く、送らるゝ者よりも供人が狐や出づると驚怖(ママ)の念に堪え(ママ)で行くといふので、月の皎々たる様や、其道の淋しさが現はれて面白いと思ふ。

竹冷曰　此怖がるは児も供も等しくであらうが、送らるるもの(ママ)は問題にならぬので、其人に附随し守護すべき任にある供が却て怖れるといふので、一倍興を引立せるのである。

瓢緑曰　僕は念者自身が情人たる夜郎の夜道を怖るゝより家路に伴ひ送るものと解する。なぜなれば恋の頭(題)下に詠んだ句故此方が一層情が厚く且愛の濃かなることに取れる。つまり「月澄むや狐怖がる児の供をして」と供の下に「をして」を附して解せばよい。

無黄曰　供といふと従者である。念者即ち客人をさして供とはいへぬ。やはり前説の解がよいと思はれる。

と諸説が併記され、内藤鳴雪の『評釈』にも、

月は空にかゝつて皎々と澄み渡つてゐる、其処をば狐が出るかく〱と恐れ乍ら児のお供をして行く事ぢやといつたのである。野原の広広として狐でも出さうな所を或山寺などへ帰る児を送る事に見立てたので怖がるは供の人に重にかゝり児も亦た怖がる、主従共に怖がり乍ら淋しく月下を行くてふ心持と其の景色とが充分に現はれて感のよい句ぢや。

と見える。このうち「児」と「供」と両者が恐がるという見方は、その意であれば、「児と供」とあるべきだから、

良くあるまい。稚児を材にした恋の句だから男色の恋であることは確かだけれども、この「供」が念者自身か或いはその人の付けた者か何れにもせよ、この場合余り「供」に重点を置いた解釈は採りたくない。「こはがる」のはやはり「児」自身であってこそ、その優婉な風情が生きるのではあるまいか。其処におのずから恋の意も籠るのである。「月澄や」が夜更けの趣であることは言うまでもない。題詠による空想の世界であって、作者の心境を窺うべき境涯の句とは異なり、後の蕪村の作に多く見られるような浪曼的な美しい情趣を漂わせている。

月の澄んだ光の下では、目に触れる草や木がすべて凄みを帯びてきて、いかにも狐でも出そうな感じがしてくるものだ。遠い狐の声が耳に入ってきた感じととってもよい。とにかくこの狐をこわがるさまを寄りすがってくる少年の恋のしぐさのきっかけとしたところがすこぶる微妙で、老境の人の作とは思われぬくらい濃艶な匂いが漂っている。これは芭蕉の発句には珍しいゆき方で、発句よりはその連句に多く見られた空想の世界であった。連句はその文芸上の性格からこうした仮構の世界がうちひろげられる性格を持つものなので、それがこの発句にあらわれたのは、……題詠であったためである。こうした方向はやはり芭蕉の発想の上で注目すべきもので、後年蕪村などによって大きく発展させられるはずのものだと考えられる。（『芭蕉全句』）

と加藤楸邨氏の述べられた通りである。

*909* 秋深き隣は何をする人ぞ　（笈日記）

陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集

ある人に対し

秋ふかし隣は何をする人ぞ　（六行会）

秋季（秋深き）。

**語釈**　**○秋深き隣**　「秋深き隣」。「秋深き」は、秋も末に近く、冬を間近に控えて冷気も寂寥感もいや増す時候の表現。そういう季節の中にある隣家なのである。（Ⅱ255）参照。「秋ふかき 同浅は初秋。如此詞、春・冬にも」（『毛吹草』巻二、連歌四季之詞、暮秋）「秋ふかし昼も馴たる小夜着哉　浪化」（『白扇集』）。**○何をする人ぞ**　何を生業として暮している人なのだろうか、の意。

**大意**　秋も末近く、しんと静まった隣家は、一体何を生業として暮している人なのだろうか。何がなし心惹かれることだ。

**考**　『陸奥衛』には「大坂芝柏興行」と前書がある。『笈日記』には、前掲の九月二十八日夜の畦止亭の記事の続きに、

明日の夜は芝柏が方にまねきおもふよしにて、ほつ句つかはし申されし。

として当面の句を挙げてあり、この記事は『芭蕉翁追善之日記』には見えないけれども、二十八日夜の作と認めてよかろう。芭蕉は二十九日の夜から泄痢の病を発して、終に再び起たなかったので、芝柏亭の興行は実現しなかったのである。芭蕉がこの時前以て発句を芝柏の許に送った動機については、何か体調に違和を覚えて、明晩は出座し得ないと感じた為であろうと推測されている（志田義秀博士『問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究』参照）。芝柏は堺の産で、根来氏。号は「之白」とも書き、宗雲・無量坊とも称した。鬼貫・百丸らと親しく、句も惟然や伊丹風を思わせる口語調が多い。正徳三（一七一四）年六月三日歿、享年七十。「秋ふかし」と初五で切れる『六行会』（野坡ら撰、元文三年刊）の句形は孤立した所伝である上に、時代もかなり降るので、問題にならぬ。

この句、古注には要領を得た解釈がない。

秋のくれの淋しさにくらしかねたり。隣の人よき遊びあらば友とせんといふて、更行く秋に暮し佗たるをいへり。

（東海呑吐『句解』）

という説は、隣人を友としようというところは採るべきであるが、余りに膚浅であろう。

……秋深き隣といへば即冬の事にして、四時の果也。はた人界にとりては老衰至極の今の時也。もはや何をかなす人ならんと、覚悟の思ひを述給ふなるべし。（杜哉『蒙引』）

という説は見当ちがいである。志田博士の『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』が指摘した如く、この句は芝柏に贈られたものだから、芝柏への挨拶の意がなければならず、「隣」には当然芝柏亭の寓意があったであろう。「何をする人ぞ」には、これまで馴染のなかった芝柏に対する問い掛けの気持があると見たい。しかし、この語は相手の生業を尋ねているわけではなく、そのような形で芝柏への親しみを表しているのである。その点から見れば、

之れは隣の閑寂をゆかしんでゐるのです。自分も寂しい秋に居る。隣りも寂しい秋に居る。その寂しさを隣りの寂しさへ抛りかからせたいほど、隣りの閑寂をゆかしく思つてゐるのです。……この隣りは一昨日も昨日も今日もひつそりしてゐる、一体どんな人が住んでゐるのだらうとの心があります。（『続芭蕉俳句研究』太田水穂）

という鑑賞が正鵠を得ていると思う。そして、その基盤には、大坂の賑やかな町中にある小さな商家だったという之道亭に滞在した芭蕉の体験が裏付けとして存在するのだ。自分が之道亭の一間にひっそりと居て、隣家の気配に注意を向けている。隣家は同じくひっそりとして、時折人の気配が物音などで伝わって来る時、一体何をして暮している家なのだろうと、ふと思う。そういう折の心の揺ぎ、人なつかしさが表現されているのである。山本健吉氏は、挨拶性を一応認めた上で、心境吐露の独白性に重点を置いて、左のように解しておられる。

「此道や」が「所思」であり、「此秋は」が「旅懐」であるように、この句も同様の心境吐露であり、「此道や」が泥足興行の俳席の発句に流用されたように、この句も芝柏亭での俳席に流用されたと見るのである。……モノローグの句に、ダイアローグとしての性格を与えることは、当時の俳諧の座では、ありきたりなことであった。

……出席していたら、「隣」では挨拶にならないのである。だからこの句の動機には、元来公的なものは含まれていなかった。「寓感」とでも言うべき句である。ただし「秋深き隣は」という言い方には、「人声や」の句と

同じような、隣人と自分とのあいだの、それぞれ孤独でありながら、その孤独を通してつながり合うという共通の場への意識がある。だからこの句は、……太田的になつかしがっていると取る方が正しいと思う。ことりとも音しない隣人のひそやかな在り方は、また自分の在り方でもあり、自分の存在の寂寞さを意識することが、隣人の存在の寂寞さへの共感となるのだ。その共感を具象化するものが、「秋深き」という季節感情である。どちらも「寂しい秋に居る」（太田）ことから開かれる、人と人との心の交通の場である。

　孤独でありながら、隣人を通して他者へ拡がろうとする心の動きが、この場合この句を芝柏亭の俳席に相応しいものとするのだ。心のなかで自分に呟きながら、同時に他へ呼びかけているような声——そういった二重の声を響かせていることが、芝柏等俳席の人々をも包摂するこの句の拡がりとなるのである。……その意味でこの句は、芭蕉があらゆる隣人へ、あるいは万人へ挨拶を送っている句と解してもよい。（『芭蕉その鑑賞と批評』）

心境吐露の独白句を俳席用の挨拶句に流用したのかどうかは兎も角、孤独を寂しむ声と、隣人の寂しさへの共感から他への呼び掛けともなる二重の声が、この句に響いていることは確かである。こういう鑑賞の上に立って、山本氏はこの句を、「「此の秋は」とともに、芭蕉の生涯の発句の頂点をなす」と評価されたのである。加藤楸邨氏も、この句が心境独白句であった可能性を認め、挨拶の意は淡いとして、次のように述べられた。

　……それにしても、この句に挨拶の心をどう読むかは一つの問題点である。「隣」を芝柏に当てる読み方は、その点では適切であるが、一句のもつ微妙なふくよかさは失われるようである。やはり、この句のもつある人懐しさの感情、他者をほのぼのとつつんでゆく心の動きに注目すべきであろう。最晩年の芭蕉は挨拶もあらわなものにせず、形なきより出ずる性格のものをもって足れりとしたのだと思う。その意味でも、この句に孤独感だけを感じ取る読み方は十分ではない。相知ることもなくひそかに隣りあって生きることに深い寂寥を感じつつも、隣人に対してひそかに人間同士のつながりの思いがひろがってゆき、それが「何をする人ぞ」という心の傾きに結

晶してゆくのである。隣人のひそやかな生きざまに、己の在り方を省みる心でもある。この句では描写という要素はほとんど切り棄てられ、ただ「秋深き」という季節感に集約されている。そしてそれは、自分も彼もあらゆるものが、秋深き底にある、その中の「秋深き隣」という把握なのである。「秋深き」で切れるのではない。いわんや「秋深し」では詠嘆に流れ、全く平板になってしまうであろう。（『芭蕉全句』）

挨拶句としての私の見方は前述の通りで、「隣」を芝柏に当てながら、その基盤に之道亭にあっての芭蕉の体験があると考えている。其処に対話性と独白性の二重構造が生まれ、単なる挨拶句にとどまらない句の世界のひろがりをもたらすのである。「秋深き」に小休止を置く解釈は、最近に至るまであるけれども、私は楸邨氏と同じく「隣」にかけて解すべきものと思うし、この点は山本氏も同説である。ここで休止しては、内容面でも調べの上でも、句の世界の完全な理解は覚束ない。

病中吟

*910* 旅に病で夢は枯野をかけ廻る（芭蕉翁追善之日記）

枯尾花・笈日記・木枯・泊船集・三冊子・蕉翁句集

旅にやんで（ママ）夢は枯野をかけまはる（芭蕉翁行状記）

旅宿の病中

旅病んで夢は枯野をかけ廻る（花膾）

旅に寐て夢はかれ野をかけめぐる（梅主本三冊子）

旅にやみて夢は枯野をかけめぐる（和漢文操）

冬季（枯野）。

**語釈**　○**病中吟**　「ビヤウチユウギン」。病中に作った句であることを示す。「辞世」とはちがうことに留意したい。（Ⅲ576前書）参照。「病中のあまりすゝるや冬ごもり　去来」（『枯尾花』）「Biŏchŭ. Vazzuraino vchi.」（『日葡辞書』）。○**旅に病で**　「病で」の「で」は底本に濁点がなく、「病みて」とも訓めるが、『木枯』（壺中・芦角撰、元禄八年刊）に「やんて」、『泊船集』にも「やんて」と表記してあるので、撥音便に訓むべきである。○**枯野をかけ廻る**　「枯野を駈け廻る」。「枯野」は、満目の草木が枯れ果てた冬野のさまをいう季語。「かけ廻る」を『芭蕉翁行状記』のように「かけまはる」と訓むのは、あわただしい滑稽感が強く、この場合に相応しくない。「かけめぐる」と訓むべきである。「枯野　冬也。くだら野といふも冬野の名なり。……枯野の露、秋也。かれのゝ露氷るといひ、又雪などむすびたらば冬成べし。露にかぎらず、枯野に虫・霧・色など結入ても秋也」（『御傘』）「牛の行道は枯野のはじめかな　桃酔」（『続猿蓑』下）「狼これをば事ともせず、……かしこにかけめぐるほどに」（『伊曾保物語』下ノ七）「Careno.」「Caqemeguri, uru, utta.」（『日葡辞書』）。

**大意**　旅中、病に臥しながらも、見る夢はひたすら冬枯の野を駈けめぐっている。

**考**　「病中の吟」（『泊船集』）「十月八日病中吟」（『蕉翁句集』）等の前書があり、『笈日記』の前書は『追善之日記』と同じく、なお『泊船集』は句の後に「死前之事は枯野花（ママ）に見えたり」と注している。

芭蕉の死病となった泄痢が始まったのは、九月二十九日の夜であった。この年の九月は小の月だったから、この日で秋も終るという日だったのである。支考の『芭蕉翁追善之日記』によって、以後の概略の経過を辿って見よう。

廿九日

此夜より泄痢のいたわりありて、神無月朔日の朝にいたる。しかるを此叟はよのつね腹のあしかりければ、是も其儘にてやみなんとおもひいけるに、二日三日よりやゝつのりて、終に百世の愁とはなしけるなり。……

十月五日朝

南の御堂の前静かなる方に病床を移して、膳所・大津の間、伊勢・尾張のしたしき人々に、ふみ認めつかはす。

芭蕉が発病したのは之道の家に滞在中だったと思われる。芭蕉は普段胃腸を害することが屢々で、下痢や吐瀉は常の

事だったので、今度もいつもの違和と我も人も考えていたのであるが、日を経るにつれて病勢は募り、容易ならぬ事態に立ち到った。貧しくて手狭だったという之道亭では療養に何かと不都合だったからであろう、十月五日に南の御堂前の閑静な場所に病床を移すことになった。『追善之日記』にいう「静かなる方」は、南久太郎町（現大阪市東区南久太郎町四丁目。真宗大谷派難波別院（南御堂）に近い）の花屋仁右衛門方の貸座敷だったという。其処に落着いてから、随侍していた支考らが、親しい各地の門人に師翁の重態を報じたのである。

七日

此朝湖南の正秀、夜舟より来る。直に病床にめされて、何ともいふことはなくて涙を落し給りけるが、いかなる心かありけん、しらず。其程も過ざるに、去来入来る。其暮つかた、乙州・木節・丈草、おの〳〵きたりつどふ。平田の李由きたる。……

七日になると、急を聞いて京・湖南の門人達が続々と集まって来た。医師だった大津の木節は、これ以後主治医として最期まで病床に侍することになる。

八日

之道すみよしの三社に詣ふでゝ、此度の延い（マヽ）のる。所願の句あり、しるさず。此夜深更におよびて、介抱に侍りける呑舟をめされ、硯のおとから〳〵と聞えければ、いかなる消息にやと思ふに、

病中吟

旅に病で夢は枯野をかけ廻る　　翁

其後支考をめして、へなをかけ廻る夢心といふ句づくりあり。いづれをかと申されけるに、其五文字はいかに承り候半と申さば、いとむつかしき御事に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとり候半と答へけるなり。いかなる微妙の五文字か侍らん。今はほいなし。（『追善之日記』）

右の記事によって、「旅に病で」の句は十月八日深更の作と知られる。浪化の日記、この年十二月四日の条に見える去来の書簡に、

同八日之夜八ッに、病中ノ唫の由にて、旅に病ンでの発句を書せ候ぬ。

とあるのによれば、実際には九日の未明午前二時頃の作であったろう。句を筆録した呑舟は、大津の産と伝えられる之道門の俳人で、看護人として側近くに居たのであった。別案については、『枯尾花』所収の「芭蕉翁終焉記」(其角稿)には、「枯野を廻るゆめ心」とも伝えられ、何れも初五を欠いた形である。其角はこの日にはまだ芭蕉の病床に侍していなかったから、その記事は伝聞の誤りかとも思われるが、支考にも粗漏の可能性はあるので断定は出来ない。古俳書に見える異形は凡て信じ難く、本位句とした句形が唯一の信ずべき所伝と思われる。

「病中吟」が書き取られた後、芭蕉は支考に対して「なをかけ廻る夢心」という別案があることを語った。しかし、初五が「旅に病で」のままでは季語が無くなるので、支考は初五がどういう表現なのか質問したかったが、重篤の病中に師翁がまた心を労されることを憚って、「夢は枯野をかけ廻る」にまさる表現はありませんと答えたのである。そうは言っても、別案の初五にどんな「微妙の五文字」(『笈日記』には「不思議の五文字」とある)があったか知りたくもあるが、亡くなった今となっては聞く術もないと述べている。其角の所伝には「枯野」の語があるので季語の問題は解消するけれども、支考が斯う考えたところを見ると、「なをかけ廻る」の句案の方が信憑性が高いようである。それは何れにもせよ、「夢心」と名詞止めにした常識的な句作りでは、動きの乏しい静的な印象が強く、本位句とは異なった趣を呈する。この句の力は、何といっても「夢は枯野をかけ廻る」と動的な表現にした点にかかっているであろう。凄まじいばかりの気迫が、きっぱりと言い切ったところに感ぜられる(「なをかけ廻る」の句案については、富山奏博士の『俳句に見る芭蕉の藝境』に、初五はやはり「旅に病んで」で、無季の句案とする説が見えるが、定説とはし難いと思う)。

『追善之日記』には、前掲の記事の後、更に左の如き文がある。

みづから申されけるは、是をさへ妄執の一方とおもふに、よのつね此道を心に籠て、としもやゝ半白（百）に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声に驚く。仏は執着をいましめ給へる、たゞち（ママ）は身の上にこそおぼえ侍れとて、かへす〴〵くやみ申されし。されば一機截断の成仏は、理をせめて己が胸におかぬものゝ見るべき事か。

『笈日記』も大体右と同じながら、「みづから申されけるは」の次に「はた生死の転変を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど」の一節が入り、芭蕉の言葉の最後には、「此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふは」という語が加えられ、「されば……見るべき事か」の代りに、「さばかりの叟の辞世はなどなかりけると思ふ人も世にはあるべし」と書かれている。また、其角の「芭蕉翁終焉記」には、この時の述懐として、

……是さえ妄執ながら、風雅の上に死ん身の、道を切に思ふ也と悔まれし。

と伝えている。支考は妄執執着としての俳諧を放下する方に重点を置き、其角は風雅の道を思う情を主とした書き方になっているが、芭蕉の胸中には、風雅に執着する気持と、それを捨てようとする気持とが、常にせめぎ合っていたことは事実であった。「幻住庵記」に、

……一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を労して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。

と述べられているのを見ても明らかであろう。無常を身にしみて感じていた芭蕉には、悟道を得ようとする思いも強かったろうが、捨てようとして捨て得ないのが俳諧の道で、其処に生き甲斐を見出していたのである。病に臥して頼み少くなってもなお残る「妄執」が一挙に噴出したのがこの句であって、その象徴が「枯野」である。もはや起つことも叶わぬ病床で見る夢の中の「枯野」を彷徨する旅姿は、如何にもこの人に相応しい。執着を放下して悟ってしま

っては、芭蕉は俳人でなくなるのである。山本健吉氏は言う。
いつからか漂泊の思い止まず、ある時は曠野に野ざらしになることをさえ決意したのも、彼の言う「妄執」――言いかえれば藝術への絶ちがたい執着からであった。五十年の生涯も、言わば「枯野の旅」の如きものであったのであり、何を求めて歩きつづけたのか、それはけっきょく文学一途の無償の旅であったのだ。彼は夢においてさえ、何かを求めつづけ、歩きつづけている自分の妄執の深さを見る。何か知らないが、目茶苦茶に駈けめぐっている、思いつめた自分の姿を見る。一生の歩みがパノラマのように、高熱の幻想の中をかけめぐる。死を真近かに予期した彼の、その網膜に映る圧縮された一生は、枯野の旅人というイメージの中に、象徴的表現を見出だす。芭蕉はそれを「夢は枯野をかけ廻る」という荒々しい筆致で、単刀直入に描き出すのだ。……芭蕉の一生を振りかえってみれば、けっきょくは自分を異常の境涯に置いた一つの道であり、その一生の回顧としての圧縮的表現がこの句だと見れば、それが切迫した異体の表現を取ったとしても、不自然ではない。……とくに辞世の句だとは言わなかったが、自分の生涯にピリオッドを打つつもりで、この句を作ったことは確かだと思われる。
（『芭蕉その鑑賞と批評』）

それにしても「枯野」とは、寂しい極みを案じたものである。それが衰残の気分でなく、なお沸り立つ荒々しいまでの激しい気息を感じさせるのは、詩魂の逞しさ故であろう。蕪村が死の床に在って、
……かうやうの病に触つゝも、好る道のわりなくて、句案にわたらんとするに、夢は枯野をかけ廻るなどいへる妙境、及べしとも覚えず。されば蕉翁の豪桀（ママ）なる事、今はた感に堪ざるは……（几董「夜半翁終焉記」―『から檜葉』―）

と語ったというのも、肯ける気がする。

*911*

## 清瀧や波に散込青松葉 （芭蕉翁追善之日記）

正月廿九日付許六宛去来書簡・笈日記・浪化日記・翁草・泊船集・旅寝論・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（松葉散る）。

**語釈** ○**清滝** 京の西郊嵯峨あたりを流れる保津川を指す。既出（∨*861*・*866*）。○**波に散込青松葉** 「波に散り込む青松葉」。「青松葉」は、緑あざやかな松の葉。それが川波に散り込んで行くさまである。松は初夏の頃「みどり」の新芽を立て、それがやや長じた頃から古葉を落す。『毛吹草』の連歌四季之詞と『増山井』夏に「常盤木の落葉」の語が見えている。『御傘』落葉の条には、「松竹の落葉は雑也。ときは木の落葉は夏也」ともあるが、ここは細かい点には拘わらずに、松葉の散るのを常盤木の落葉に準じて夏季としたものであろう。常盤木の落葉は古葉の落ちることで、「青松葉」ではないという見方もあるが、私は「古葉の落ちるのが松落葉であるという本来の規定を外したヴァリエーションの句として、これは季語の条件を充たしている」（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）という説が穏当と思う。「土はこぶ籠にちり込椿かな　孤屋」（『炭俵』上）「二畳半、青松葉ニテ壁ヲシトミ、上苫ブキ也」（『宗湛日記』天正十五年六月十四日条）「Matçuba.」（『日葡辞書』）。

**大意** 清滝川の清流は如何にも快い。岸の松が枝から、青松葉がはらはらと川波に散り込んで行く。

**考** 「清滝眺望」（『翁草』）「清滝」（『泊船集』）等の前書がある。これよりさき暑中嵯峨の落柿舎に滞在していた時、「清滝や波に塵なき夏の月」（∨*861*）の吟があったが、その表現が大坂園女亭での句「しら菊の目にたてゝ見る塵もなし」（∨*907*）と紛らわしいといって、十月九日花屋の病床で「波に散込青松葉」と改案したことは、「波に塵なき」の句の条に引用した『追善之日記』の記事によって明らかである。なお、元禄八年正月廿九日付許六宛去来書簡にも、

去夏古翁さがにて、

清滝や浪にちりなき夏の月

と中御句御座候。此度大坂にて御病床に拙者を御呼、此句人に咄し申たるやと御尋候故、未外人にさた不仕候と

中候へば、此句少こゝろがゝり候。右直し候。

清滝や浪にちり込青松葉

と書留候而、必失念仕まじきよし被仰候。重而此事承候に、大坂にて、花にちりなき菊と中事の御座候故、御直し被成たると、支考が咄しに承候。

とあり、「此事は去来にもかたりをきけるが」（『追善之日記』）と芭蕉が言ったことも裏付けられる。また、去来の『旅寝論』（元禄十二年成）には、

清滝や浪にちりなき夏の月　　先師

此句は清たきの初の吟也。先師易簀し給ふ砌、我を呼て曰、此比園女かたにて、

白菊の目に立て見るちりもなし

と云句を作すれば、清たきの句を吟じかへたる。忘れず書とゞめ、野明が方に残し置草稿を破捨べしとて、

清滝や波にちり込青松葉　　先師

の句をかたり給ふ。

と見え、初案の草稿が野明の許に残されていたことが知られる（『去来抄』先師評にも同旨の記事所載）。野明は嵯峨住の蕉門俳人である。『泊船集』の「青松葉」の句の左注に、「清滝の水くませてやところてん」（V 866）の句を破棄させたように伝えているのは誤りである。野明との関係から混同したもので、前述の如く「ところてん」の句と関わる所はない。

此句はじめは、大井川浪にちりなし夏の月と有。その女が方にての、白菊のちりにまぎらはしとて、なしかへられ侍るか。（『三冊子』赤雙紙）

此句は遺言の直り句也。大井川浪にちりなし夏の月と云句、その女が白菊の塵にまぎらはしとて改る也。（『蕉翁句集草稿』）

という土芳の所伝は、『笈日記』の支考の記事に拠ったものであろう。「波に塵なき」(V 861)の句の条で述べたように、「大井川」という初五は支考の誤伝と推定される。去来に改案のことを語ったのが何時か、確かには分らず、八日以前の可能性もないではないが、先ずは九日のことと見てよいと思う。

初案は夏の月を川波に映して流れる清滝川の静寂な夜景を描いた句であった。園女亭での白菊の句とは句境が全く異なるので、本来そうこだわる程のことはない筈だが、芭蕉は「塵なし」という形容語が共通する点を気にしたのであろう。改案によって、句は題材も背景も一変した。

……原句の「波に塵なき」は静的であつたが、この句の「波に散り込む」は動的になつてゐる。その為飛散する滝しぶきまでをも感受せしめると共に、奔騰する白波に青松葉のこぼれ込む光景をも髣髴せしめる。それと共に一句として爽快雄勁といふ如き感を与へ、それには用語語感も手伝つてゐることを思はせる。(志田義秀博士『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』)

「塵」から「散り」に、同音でありながら意味を一転せしめ、ことに「散り込む」の「込む」は強い表現で、青いままちぎれ飛ぶ情景を現じ出している。さらにまた「夏の月」という夜景が、昼間の爽快な景色に飜転された。芭蕉が遊んだのが、実際には夜分だったとしても、それは詩的真実にとっては、どうでもよいことだ。それに「夏の月」が、古典的境地に惹かれすぎて、非即物的な空虚さがあったのに対して、改作句はかえって生ま生ましいまでに実体的である。芭蕉が「波に散り込む青松葉」を発見したことが、原句の矛盾を抹消しながら、はるかにそれとは隔たった地点に、高度の詩的世界をうち樹てているのだ。(山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』)

といった鑑賞が、両句案の差を穿ち得て精しいものである。更に最近では、改案句の内容を心象風景と考える説が現われている。

……この清滝の句の改案・改作の情況を見るに、旧作の姿を温存しているのは清滝の波だけであって、「夏の月」

は捨てて夜景を昼間の景に転じてしまっている。更に、旧作に於ける「浪に塵なし」「浪に塵なき」とは、清滝の清澄感が主題であるが、改案の「波に散り込む青松葉」とは、松の青葉が激しい青嵐に吹き切られて清滝の波に突き刺さるように散り込む情景であって、その主題は鮮烈で迫力に溢れた青嵐の爽快な情景である。そして、この主題まで改めてしまった全面的な改案は、他界を三日の後に控えた十月九日の、病床に於てのことであるから、改案の主題とする鮮烈な青嵐の情景は、全く芭蕉胸中の心象風景である。従って、この改案の句は、旧作の推敲の結果到達した境地ではあるが、作品としては、全く旧作を脱皮して別個の作品に変容した独立の存在、と考えなければならないことになる。（富山奏博士『俳句に見る芭蕉の藝境』）

この句を写生句として解する説が多く、「写生の妙境」（半田良平『芭蕉俳句新釈』）とする説もあるが、初案・再案からの改作過程を考えても、客観写生句というより、川の清涼感を盛りこもうとした主観句であろう。風もないのに、清滝川の流れの響きで、青い松葉がはらはら落ちるなどということは実際にはあり得ないことである。もしまた仮に一本か二本の青松葉が散りこんだとしても、激流の中に一本か二本の細い青松葉の散りこむさまがどうして肉眼で見分けられよう。作者の心象風景というほかはない。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』井本農一博士）

改案の場が病床であったことを考えれば、これが尋常の写生句とは異なり、嘗ての体験に基づくにもせよ、胸中の心象風景であることは認められよう。なお、青松葉が散り込むといえば、当然其処に風——青嵐——を考えるのが自然であって、風が吹いていないわけではないと思う。原案とちがって、動的で印象鮮明な風景が、的確に表現されているのである。

この決定稿では、事象そのものに深まることによって、作者の感動としてあった清爽感にかたちを与え、生新雄勁な動的世界を築きあげている点が注目されるのである。……嵯峨の夏をとらえて、愛惜したその風土への挨拶

としようとする作家的願望に支えられていたものと考えられ、その意味で、最晩年の芭蕉が異常な執心を示した作であったわけである。（『芭蕉全句』）

と加藤楸邨氏が述べられた通りで、「旅に病で」の句と共に、死を間近に控えた芭蕉の詩人的力量には瞠目せざるを得ない。この句の季語については議論が多く、名所の雑の句とする説もあるが、この場合芭蕉が意識して無季の句を案じたとは思えない。句の内容全体から夏季という見方も成り立ち得るが、私は前述したように、「常盤木の落葉」に準じて「松の落葉」で夏としたものと考えている。

# 年代不明

*912*

かげきよも花見のざには七兵衛　（真蹟扇面）

かげ清も花見の座では七兵衛　（きれぐ）

景清は花見の座にも七兵衛　（泊船集書入）

翁草・芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・をだまき綱目・泊船集・聞書七日草・蕉翁句集・俳諧古今抄

春季（花見）。

**語釈** ○**かげきよ**　「景清（かげきよ）」。平安末期平氏に属した武士。本姓は藤原ながら、平氏と俗称される。平家一門の西走に従って一ノ谷・屋島・壇ノ浦で奮戦した。壇ノ浦から逃れたといわれるが、その後の動静ははっきりしない。幕府方に降って後に出家したとか、伊賀に赴いて建久年間に挙兵したともいわれ、謡曲「景清」や近松の『出世景清』等に脚色されて伝説化した。生歿年未詳。○**花見のざ**　「花見（はなみ）の座（ざ）」。花見をしている席。酒肴などが並べられているさまが思われる。「月見する座」（Ⅲ*616*）参照。○**七兵衛**　「シチビヤウヱ」。景清は伯父大日坊能忍を殺して「悪七兵衛」と呼ばれたというが、「悪（あく）」は剛強の意であろう。「景清」が格式張った侍の顔を思わせるのに対して、通称で呼べば日常の取り繕わない感じが出る。

**大意**　さすが豪勇で鳴る景清も、春闌（たけな）わの花見の席ではただの七兵衛になって、相好（そうごう）を崩しているわい。

**考**　この句は芭蕉生前の板本類には収められず、前書等もないので、年代を知るべき手掛りが存しない。『蕉翁句

集』に貞享五年の部に入れているが、根拠不明である。

異形のうち、『きれぐ』（白雪撰、元禄十四年刊）のものは、より砕けた言い方になっているが小異に過ぎず、許六の『泊船集書入』の所伝は、意を解しないもので従い難い。

句の解としては、

其座にものゝふ有て、打くつろぎ遊べるを興じ給ふなるべし。はた七兵衛の名の常なるより、さすがの英雄をおかしくいひなせる滑稽、感ぜざらんや。（杜哉『蒙引』）

というのが良く、句意を解し得て徹したものと言えよう。普段謹直な感じの武士が、花見の席では打って変ってくつろいでいるのを、景清を引合に出して興じたので、

これ景清を武張たる名とし、七兵衛を通俗の名に極め、にはの手爾波に引分て、花の艶なるをさとしたり。（亦夢『俳諧一串抄』）

という説も確かなところである。同じ人でも、正式の諱で呼べば固苦しく、通称で呼べば上下を脱いだ感じになる。花見の宴楽には、後者の方が相応しいのである。即興の機智を見るべき句で、談林風の洗礼を受けた芭蕉には、こうした一面もあるのだ。これが極端に走ると江戸座の俳諧になる。

*913* ちるはなや鳥も驚く琴の麈 （真蹟画賛）

末若葉・菊の香・泊船集・三冊子・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

春季（ちるはな）。

**語釈** ○**ちるはな** 「散る花」。桜花の散る趣をいう。「ちる花にたぶさはづかし奥の院　万菊」（『笈の小文』）。○**鳥も驚く琴の麈** 「鳥も驚く琴の麈」。「麈」は「塵」に通用した字。既出（Ⅲ *550*）。音楽の名家魯の人虞公の清越な歌声が梁の塵を動かしたという故

事に基づき、琴の妙音に感じて動く塵を「琴の塵」といった。また、『源氏物語』若紫の巻で、北山の僧都が源氏に琴の奏楽をすすめて、「たゞ御てひとつあそばして、山の鳥もおどろかし侍らん」といった言葉を踏まえ、「鳥も驚く」と趣向したのである。「おどろくや門もてありく施餓鬼棚　荷兮」(『あら野』巻八)「酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然」(『続猿蓑』下)「Vodoroqi, qu, oita.」「Coto.」(『日葡辞書』)。

**大意** 妙音を奏でる琴の音の響きに花が散りかかる。梁の塵かと、鳥も驚くことだろう。

**考** 『末若葉』(其角撰、元禄十年刊)に「粛山子のもとめ、画は探雪なり。琴ト笙ト太鼓ト讃のぞまれしに」と前書があり、後に「みてひとつあそばして、山の鳥をも驚かし給へ」と『源氏』の一節を注して典拠を明らかにしており、なお続けて、

左

青海や太鼓ゆるまる春の声　素堂

右

けしからぬ桐の一葉や笙の声　其角

という二句を録している。これによると、其角門の俳人、伊予松山藩家老の久松粛山に狩野探雪筆の三つの楽器の画の賛を求められて、素堂・其角と共に作った賛句だったことが分る。『泊船集』にも「この句、琴ト大皷ト笙ト かきし絵の賛也」と注があり、土芳も、

探雪が琴の絵の賛也。(『三冊子』赤雙紙)

左絵に素堂、青海や太皷ゆるまる春の声、右絵キ角、けしからぬ桐の一葉や笙の声(『蕉翁句集草稿』)

此句ニ双て杉風・其角が笙・皷の句有り。(『蕉翁句集』)

等と伝えている。『句集草稿』が『末若葉』に拠ったことは確かであるが、『句集』に杉風の名があるのは、素堂の誤

りであろう。この三幅対は今も伝存し、『芭蕉翁遺芳』に写真が見える。『蕉翁句集』は元禄六年の部に収めるが、その根拠は明らかでない。

この句は琴の画の賛として梁塵の故事を思い、落花を梁塵に見立てたところが俳諧の作意である。また、「鳥も驚く」に『源氏』若紫の一節を踏まえたことは、『末若葉』の左注によって明らかで、『三冊子』にも、

この句、若紫の巻によりて詞を用られし句なるべし。（赤雙紙）

と指摘している。「琴の塵」を琴が弾かれずに塵が積っているさまと取る説は、梁塵の故事を逸しており、琴が妙音を奏でないのでは賛句としても良くない。句はただ故事や古典の本文を踏まえた趣向表現の巧緻を見るべきまでである。

*914*　ふくかぜの中をうを飛御祓かな　（真蹟画賛）

夏季（御祓）。

**語釈**　**○ふくかぜの中をうを飛**　「吹く風の中を魚飛ぶ」。川面を風が吹き渡る中で魚が跳ねるさま。**○御祓**　「ミソギ」。六月末日に宮中を始め一般の神社で行われる神事。夕方に川などの水辺で催され、「茅の輪」をくぐり、また紙を人形に切って息を吹きかけ、麻の葉と共に川に流して穢れを払う。「御祓にはらふ、付てもくるしからず。水辺なり、夏なり。なごしのはらひ、あらにこはらひ、皆同事也」（『御傘』）「大祓　卅日　御祓。川はらへ。夏ばらへ。夕はらへ。祓草。なごしのはらへ。あらにこのはらへ。／むかしは百官ことぐく朱雀門に出て、はらへをし侍と也。荒ぶる神をはらへ和むる心にて、なごしのはらへとも、あらにこはらへともいへり。麻の葉をきりて、ぬさとしてはらへするゆへ、麻をはらへぐさとはいへり」（『増山井』夏、六月条）「破扇一度ながす御祓かな　未学」（『あら野』巻八）「Misogui.」（『日葡辞書』）。

**大意**　御祓の神事が執り行われる川面には、風の吹き渡る中、魚が跳ねて如何にも涼しげだ。

**考**　頴原博士の『新校芭蕉俳句全集』所収の句で、底本の真蹟画賛は紀重就筆の御祓川の図の賛という。「桃青」の署名があり、貞享頃の書風とあるが、写真等未紹介なので、姑く年代不明とする。
「うを飛」は画中の景色で、「ふくかぜ」は想像であろうが、夏の終りの季節感や水辺の涼しさ、穢れを払う神事の清浄感は出ており、百人一首にも見える家隆の名歌「風そよぐならのをがはのゆふぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける」(『新勅撰集』巻三)を思わせる。

915　み所のあれや野分の後の菊　(真蹟扇面)

みどころもあれや野分の後の菊　(真蹟自画賛)

芭蕉庵小文庫・陸奥鵆・泊船集・蕉翁句集・蕉門録・月見崎

秋季(野分・菊)。

**語釈**　**○み所のあれや**　「見所(みどころ)の有(あ)れや」。趣があり、風情の多いことよ、の意。「み所」は、見るべき所、採るべき点をいい、前の「名月の見所」(Ⅲ534)とは場合が異なる。「あれや」は、「なれや」(Ⅰ75等)と同様に、もとは「あればや」と下へ続く語法が固定化して、詠嘆の意に転じたものである。「まちがほならむゆふぐれなどのこそ、み所はあらめ」(『源氏物語』帚木)。**○野分の後の菊**　「野分(のわき)の後(のち)の菊(きく)」。「野分」は、秋に吹く大風。(既出Ⅰ144等)。台風が吹き荒れた後の、萎れた菊のさまである。「後」は「アト」とも訓める。

**大意**　野分の吹き荒れた後の萎れた菊の有様は、それでもなかなか風情のあるものだ。

**考**　真蹟扇面は金地に極彩色の菊の図、「みどころも」の真蹟自画賛は、竹と小菊の水墨画で、何れも晩年の筆蹟である。『蕉翁句集』は元禄四年の部に出しているが、その根拠を知らず、年代については徴すべき資料がない。
「みどころも」は詠嘆の意が更に強調されるが、何れにしても大差はなく、板本類に多い「の」の方を本位句とす

る。なお『月見崎』（立国撰、元文二年刊）には、須賀川の晋流宅の床に掛っていた翁の菊の自画賛としてこの句を紹介し、下五を「後の朝」として「菊」と書き添えてある。

台風一過の後、庭の草木の乱雑に臥し乱れている中に、菊の風情を見出した趣で、

終に風雨のあらきを凌残り、爰かしこに打みだれたるは、尚あはれふかしと也。（東海呑吐『句解』）

と解してよい。

……此吟、菊に対して野分の後と云、其意深し。其故は、菊は不ㇾ散の花也。然ば、終夜吹れて露にそぼち宛打(つゝ)撓(タワ)み臥たる風情、実(ジツ)に見るがごとし。散花は嵐に散失て、其見所も不ㇾ可ㇾ有也。（信天翁『笈の底』）

というのも確かなところで、「起あがる菊ほのか也水のあと」（Ⅱ307）と風情の通い合う句柄である。加藤楸邨氏は「み所のあれや」について、「ややあらわな言い方になっているのは、画賛としての発想だからである」（『芭蕉全句』）と見ておられる。「野分のあしたこそをかしけれ」（『徒然草』十九段）は古注以来引かれるが、基本的には「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」（同上、百三十七段）の美学が底流しているといってよい。このような見地に立てば、

後世の句に「枯菊と言ひ捨てんには風情あり」（松本たかし）「枯菊に尚ほ或物をとどめずや」（高浜虚子）「枯菊の色をたづねて虻(あぶ)来たる」（同）等がある。そのような枯れ衰えた菊になお残る風情を見出だした句に、芭蕉の句は遠く先駆しているものとも言えよう。（『芭蕉全発句』）

と山本健吉氏がいわれたのも頷けるわけであって、伝統的美意識の流れを、この句からも窺うことが出来よう。

916　折くは酢になるきくのさかなかな　（真蹟自画賛）

菊苍の讃

折ふしは酢になる菊のさかな哉　（泊船集）　――蕉翁句集草稿

秋季（きく）。

**語釈** **○折〱は**「折〱は」。**○酢になる**「酢に成る」。調味料として酢が用いられる意。連体格として下へかかる。**○きくのさかな**「菊の肴」。菊の花を材料にした料理。菊の花をゆでて、酢の物にするのである。「菊のすあへ」（Ⅳ704）参照。「奥の世並は近年の作　芭蕉　酒よりも肴のやすき月見して　支考」（『続猿蓑』上）「Taru, sacanauo torisoroyuru.」（『日葡辞書』）。

**大意** 高雅な菊の花も、時にはこのように酢和えにされて、酒の肴になることです。

**考** 『蕉翁句集草稿』には「てふも来て酢をすふ菊のなます哉」（Ⅳ704参照）の句に注して、「白船（ママ）には、菊花讃、折節は酢に成菊のさかな哉と有。此句の直しか」と述べ、両句を関係あるものと見ている。しかし表現はそれぞれかなり異なっており、同時の吟とする確証はないので、年代不明とする。句形の異同について、「折ふしは」の方が措辞として良いという見方もあるが、人によって受取り方は一つではあるまい。杜撰の多い『泊船集』の句形よりも、真蹟の方が信頼出来ることは勿論である。筆蹟は晩年のものと見られる。積翠の『芭蕉句選年考』には、『鳩の水』なる書に画賛としてこの句が見えるとあるが、伝来を聞かない俳書である。

菊が清雅な花の趣を賞されて眼を楽しませるばかりでなく、時には酢和えとなって舌をも楽しませるといったのが、俳諧の趣向である。隠逸の雅致ある花の、料理にもなることに興じたまでの画賛句に過ぎない。

*917*　夜すがらや竹こほらするけさのしも　（真蹟短冊）

冬季（こほる・しも）。

**語釈** **○夜すがら**「夜すがら」。一晩中。既出（Ⅲ*617*前書）。**○竹こほらするけさのしも**「竹氷らする今朝の霜」。「こほらする」は、

「こほる」（I 148）の他動態。前夜からの霜で竹が氷ったようになったさまを、霜がそうしたように言いなしたのである。

大意 今朝は庭の竹の葉に真白く霜が置いている。この竹は一晩中きびしい寒さに堪えて、氷るように立っていたのだ。

考 古俳書に見えない句であるが、真蹟短冊は最晩年の筆蹟と見られ、桃鏡の『芭蕉翁真跡集』に摸刻された自画賛も、同じ特色を持つ。但し年代は特定出来ない。

画賛として案ぜられた句であろうが、まざまざとした厳寒の現実感を持っている。「こほらせし」とあるべしとする文法説は窮屈過ぎて、古典の語法には適合しない。「こほらする」と現在表現であってこそ、霜をまとって氷るように立つ竹のさまが、効果的に思い描かれるのである。

918 咲亂す桃の中より初櫻 （芳里岱）

最中の桃の中よりはつざくら （泊船集）



春季（桃・初桜）。

語釈 ○**咲乱す桃の中より** 「咲き乱す桃の中より」。「咲乱す」は、桃の花の咲き乱れているさまをいうのであるが、「咲き乱るゝ」或いは「咲き乱る」では、字余りになったり、終止形を連体格に用いる不自然を考慮して、このようにしたのであろう。しかし、「咲乱す」と他動態にするのも、言い方としておかしいのに変りはない。加藤楸邨氏は、「ほしいままに咲き誇っている趣を強く言ったもの」（『芭蕉全句』）と見ておられる。「Midaxi, su, aita.」（『日葡辞書』）。○**初桜** 咲きはじめの桜を賞美していう。既出（II 356）。

大意 今を盛りと咲き乱れる桃の花にまじって、桜の花が咲き始めた。如何にもういういしい。

**考**　『蕉翁句集』は貞享五年の部に入れているが、根拠は明らかでなく、年代不明の句である。『泊船集』には「いづれの集か、咲みだすとありぬ」に左注があり、「最中の」という句形にも何か根拠があったのかも知れないが、孤立した所伝なので、『芭蕉庵小文庫』などより信憑性があるとは言えない。

満開の桃の花の間に、咲きそめた桜のういういしい趣を、こうした形で表現したもので、「桃」「桜」何れも春季のものながら、賞美の中心はもとより「桜」の方にある。中間に切字を置かず、「初桜」と据えたところにも、その意は現われているのである。堀信夫氏は、

> 花暦に従えば、花は梅・桃・桜の順に開く。「初」の字に賞美の意味を込める芭蕉の語法からすれば、心待ちする桜のシーズンが到来したよろこびを、こういう形で表現するのも、一興であると考えたのである。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と述べておられる。

奈良にて故人に別る

*919*　二俣にわかれ初けり鹿の角　（韻塞）

泊船集・蕉翁句集

夏季（鹿の若角）。

**語釈**　**○奈良にて故人に別る**　「奈良にて故人に別る」。「故人」は、昔からの友達。貞享五年四月、奈良で伊賀上野の猿雖らと出会い、十一日に別れた時のことを思わせる前書であるが、句の内容とは必ずしも合致しないようである。[考]参照。「彼陽関を出て故人に逢なるべし」（『葱摺』、芭蕉発句「風流の」前書）。**○二俣にわかれ初けり**　「二俣に分れ初めけり」。鹿の角が伸びて分岐し始めたさまをいう。「二またに細るあはれや秋の水」（蕪村『落日庵句集』）「くすの木は……千えにわかれて、恋する人のためしにいはれ

たるこそ」（『枕草子』四十段）「Vacare, ruru, eta.」（『日葡辞書』）。○鹿の角　鹿の袋角が段々生長するさまを扱っているので、夏の季語として用いたものと思われる。既出（Ⅱ377）。

**大意**　鹿の袋角が漸く伸びて、二またに分岐し始めたことだ。

**考**　『蕉翁句集』には「奈良にて故人に別て」と前書があり、元禄四年の部に収めて、春の句と見ているらしい。『泊船集』の前書は『韻塞』（李由・許六撰、元禄九年刊）と同じで、これまた春の部に収めている。しかし句の季は夏とすべきもので、『笈の小文』貞享五年四月の条に「旧友に奈良にてわかる」と前書して見える「鹿の角先一節のわかれかな」（Ⅱ377）の句との関連が考えられなければならない。また、『大芭蕉全集』第四巻の口絵に、

ひさしくみやこにありて東にくだらむとせし時、ならにて人に別はじめて

と前書して当面の句を書いた鹿の画賛が載っている。「風羅翁芭蕉」と署してあり、筆蹟も元禄初頭よりは後のものと見える。久しく都に在って東下する時といえば元禄四年秋のことであるが、それでは句の季節と矛盾しよう。結局この画賛は筆蹟はかなり良いけれども、内容面で信憑性に欠けると考えざるを得ない。『笈の小文』の句との関連は重視しなければならず、その後案かとも考えられないではないが、諸注にいうように、人との別離の寓意が稀薄になっているのも気になる。姑く年代不明としたい。句は、鹿の写生としても多く言うを要しない平凡な作である。

竹畫讃

920　木枯やたけにかくれてしづまりぬ（鳥の道）　　蕉翁句集

冬之竹

木がらしは竹にかくれてしづまりぬ（住吉物語）

# 凩の竹にかくれてしづまりぬ（百歌仙）

冬季（木枯）。

**語釈**　○**画讃**　画に添えた讃める意味の詩歌の類をいう。この場合は、竹の画に讃した句である。（Ⅳ656）参照。○**木枯**「コガラシ」。既出（Ⅰ138等）。○**たけにかくれてしづまりぬ**「竹（たけ）に隠（かく）れて静（しづ）まりぬ」。木枯しの風が竹藪に吹き入って止んださまを表現したもの。「竹林の七賢の例をひくまでもなく、中国では竹の陰に隠れた高士の話は多い。「竹にかくれて」に、そのことに縁を求めた軽いユーモアがあることを認めなければ、一句に俳諧性がなくなる」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏）「鳶の羽も刷（カイツクロヒ）ぬはつしぐれ　去来　一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉」（『猿蓑』巻五）「Xizzumari, u, atta.」（『日葡辞書』）。

**大意**　竹の葉をざわつかせて一しきり吹いていた木枯しが、急に吹き止んだ。まるで竹藪の中に姿を隠したかのように。

**考**　『蕉翁句集』には「竹絵ニ讃」と前書して貞享二年の部に収めているが、年代の根拠は明らかでない。板本としては青流の撰した『住吉物語』（元禄八年刊）が最も古いけれども、青流（後の祇空）は他派の人であり、去来が後援したとおぼしい『鳥の道』（玄梅撰、元禄十年刊）の句形の方が信憑性が高い。旨原の『百歌仙』（宝暦六年刊）は、ずっと時代が降るので問題にならぬ。

「たけにかくれて」は木枯しの擬人化表現として巧みであり、「しづまりぬ」に続いて、風の動きをよく把握し得ている。和辻哲郎博士が、

兎に角此句はいい句です。時間的の経過が大変微妙に出て居るし、木枯に吹かれる竹の葉の響などが耳に聞えるやうです。殊にその響がさらさらとだんだん微かになつて、おしまひにはたと止む、その止んだ刹那の感じが何とも云へずよく出てゐます。（『芭蕉俳句研究』）

と述べておられる通りで、

「寒巌疎竹」の画である。その画を見てゐて、感が木枯に動いて行つたのである。（同右）

という露伴説も、確かな鑑賞眼の所産であった。なお、諸家の説を引用する。

破墨の竹葉に対してこの感をなす、画中の神直ちに、句裡に応ずるの響ありとも評すべきか。菜根譚の「風来疎竹、風過而竹不留声」の一句がおのづから思ひ出される。（頴原博士『新講』）

画讃とは思へぬ実感の籠つた句である。恐らく、画もよかつたであらうが、画に対して、芭蕉は自分の過去の体験を呼び起してゐるのであらう。芭蕉胸中に蓄へられたこの寒林の音は、画によつてその流出口を与へられたと見るべきものである。……木枯に聴き入り、竹を見尽くして、その真実に感合してゐなくては、これだけの境は詠み出でることは不可能である。木枯は、や、凩の、では駄目だと思ふ。それでは、木枯だけが、小さく説明されてゐるに過ぎなくなる。木枯や、と言つて始めて、寂寞中に起つて、万相を攄り去り、しかも耳底に消え去つて、竹林の葉のさやぎのみが残るといふ、時間的な経過を孕んだ深さが出て来る。このや、には、聴き澄ましてゐる一瞬の長さが、実に的確に摑まれてゐるのである。

……突然思ひがけなく自然によつて触発されることの多い旅中の自然感合の句と違つて、かういふ風な句は胸中に蓄へられてゐる間に純化され、美化されてゆくので、その結果美し過ぎたり情趣が勝つて真実味に乏しくなつたりしがちなものであるが、この句は美しい句であるが決して美し過ぎるといふことのない句である。この句の調が芭蕉の、木枯や、とたかまり、しづまりぬ、と落ちつく静かな息づきをしつかり生かしてゐるからである。私は、この句は、画讃としては最も注目すべき作であると思つてゐる。（加藤楸邨氏『芭蕉講座』発句篇(上)）

画讃の句でここまで詩想を純化しえたことは珍しい。写生の句とはどこか違った味わいがある。抽象化された風景句だ。画讃とは、いわば画に対する附句であり、その画家への挨拶である。画の余韻を捕えて、一つの見事な心象風景句を作り出した。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

画中の景を動機としながら、自然の真実に観入した表現力の高さを、何れも絶賛したものばかりである。

此筋にのぞまれて茅屋の繪讃有

*921* むぐらさへ若葉はやさし破レ家 （後の旅）

茅舎の畫賛に

葎さへ若葉やさしや破レ家 （泊船集）

茅舎の畫讃に

むぐらさへ若葉やさしき破レ家 （蕉翁句集）

春季（むぐら若葉）。

語釈 **○此筋にのぞまれて** 「此筋に望まれて」。「此筋」は宮崎氏、通称太左衛門。美濃大垣藩士。父荊口、弟の千川・文鳥と共に俳諧を嗜み、芭蕉の指導を受けた。享保二十（一七三五）年五月十五日歿、享年六十三。この人に賛句を書くように望まれたのである。（Ⅲ*454*前書）参照。**○茅屋の絵讃有** 「茅屋の絵讃有り」。「茅屋」は、萱葺きの粗末な家。句中の「破レ家」に相当する。「茅舎」（Ⅰ*144*前書等）に同じ。「絵讃」は「画讃」に同じ。「茅屋竹椽纔数間」（向井震軒「題芭蕉翁国分山幻住菴記之後」―『猿蓑』巻六）「ゐさん天目打かふす。泣ひてゐる」（狂言「附子砂糖」）「**Bŏuocu. Caya iye.**」「**Bonuocu. Aretaru iye.**」「**Yesan.**」（『日葡辞書』）。**○むぐらさへ若葉はやさし** 「葎さへ若葉は優し」。乱雑な感じのかなむぐらさえも、若葉には風流な趣がある、の意。「むぐら若葉」は春季である。既出（Ⅱ*346*）。「独は小姫にて、名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ」（『おくのほそ道』）。**○破レ家** 「破レ家」。あばら家をいう。

大意 荒れ果てたあばら家ながら、乱雑に生えたかなむぐらさえも、若葉には風流な趣がある。

考 初出の『後の旅』（如行撰、元禄八年刊）では、この句の前後に奥の細道の旅を終えて美濃の大垣に滞在していた折

の作が多く、一応元禄二年秋の作とするのが有力と思われる。画賛句なので、当季にこだわる必要はないが、『蕉翁句集』は細道の旅の出発前、元禄二年春の所に配しており、これに従う向きもかなり多い。此筋は細道の旅の送別歌仙にも出座しており、この春も江戸に在ったことは確かである。また、『後の旅』のこの句の前には、元禄二年とは確定し難い「凩に匂ひやつけし帰花」(Ⅳ716)の句があって、細道の頃のみに限定出来ないとも考えられよう。更には、此筋との交遊は大垣のみと限らないのであって、二年春のみならず、元禄六年春から夏にかけても、江戸在府中に此筋は芭蕉と俳席を共にしている。こうして見ると、当面の句の年代は確定し難く、今のところ年代不明とすべきであろう。句形の異同については、大垣の地元の集で年代も最も早い『後の旅』に拠るべく、他は何れも信憑性に欠ける。あばら家の庭に葎のはびこったさまが描かれていたのであろう。それを若葉の趣と見て「やさし」と賛めたところに、賛句らしい心づかいが見える。

野中の日影

922 蝶の飛ばかり野中の日かげ哉 (笈日記)

泊船集・蕉翁句集

春季(蝶)。

**語釈** ○**野中の日影** 「野中の日影」。「日影」は、陽光の意。「野中」(Ⅳ676)「日影」(Ⅰ156)何れも既出。○**蝶の飛ばかり** 「蝶の飛ぶばかり」。「ばかり」は、限定の意。ここに文脈の屈折がある。

**大意** 動く物とては蝶が飛んでいるばかり、見渡す限りの野中には陽光が満ちて、しんと静まっていることよ。

**考** 『笈日記』尾張部に「題二句」として「永き日を囀りたらぬ雲雀かな」(Ⅱ279)の句と共に収められている。支考は恐らく尾張で二句の芭蕉真蹟を見て、此処に録したのであろうが、「永き日を」の句が貞享三、四年頃江戸での作

と推定されるように、真蹟が尾張にあっても必ずその地での作とは限らない。貞享二年の部に収める『蕉翁句集』も、その根拠は明らかでなく、姑く年代不明としておく。

杜哉の『蒙引』に、

青氈を敷わたしたるごとくいと美しき野づらを、日影のくまなく照せるに、蝶の影のみひら〳〵と見ゆるなるべし。閑かにしてかつ麗なる風色、いふべからず。

とある解が、古注では最も精確である。素丸の『説叢大全』に、

句意は唯、野中にあそぶ蝶也。幽閑なる春の日なかの野づらの霞みわたりたるのみにして、なに一ッ目にとまるものもなきに、蝶の折〻飛びかふ羽かげのみ、わづかに野中の日陰也と見込ての句也。……照り渡りたる春の真昼の風情、言外の余情は尽ざるべし。

とある句境の把握はよいけれども、「日かげ」を「日陰」と取るのは、小技を利かせ過ぎて句柄を小さくするもので面白くない。古注にはこの外にも「日陰」と取るものがあるし、蝶を我が身に比して人への挨拶と見る『師走嚢』の説などと共に、何れも論外であろう。近代の説では、

この句は『蝶のとぶばかり』に軽い休止（ポーズ）をおいて読むので、意味も、そこで一寸（ちよつと）切れるのである。座五の『日影』は、雅語の日かげ月かげの『日かげ』であつて、陽光（ひかり）の意である。これを俗語の『日蔭』の意に解すると間違ふ。

春も央（なかば）すぎの、野原の趣を詠んだ句である。もう余程蒸暑（むしあつ）く感ぜられる春の日光（ひかり）が、野原一面に明るく降りそゝいで居る。あたりはしんと静まり返つて、そよ吹く風もない。さういふところへ蝶々が地からでも湧いたかのやうにひら〳〵と飛び出して来た。その為め、あたりの静けさ、日光の明るさが、一層強く意識されたのである。

（半田良平氏『新釈』）

というのが、早い時期に出た完璧な解釈鑑賞として注目される。この句境は早春ではなく、春闌けた頃の趣で、僅かな動く物によって、寂と静まった句中の世界が強く意識されるのである。

小倉ノ山院

**923** 松杉をほめてや風のかほる音　（笈日記）

泊船集・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

夏季（風かほる）。

**語釈** ○**小倉ノ山院**　「小倉ノ山院」。「山院」は、山中の寺。「院」は、ここでは仏寺を指していう。嵯峨にある小倉山の東山腹、二尊院の南に位置する常寂光寺（現京都市右京区嵯峨小倉山小倉町）のこと。もと真言宗、近世以降法華宗となった。定家の小倉山荘の跡と伝えられ、境内の老松は定家の歌に詠まれた「時雨の松」として有名だった。「山院人とゞまらねば、楼門は荆棘おひかゝり、経閣もむなしく苔蒸ぬ」（『雨月物語』青頭巾）。○**松杉をほめてや**　「松杉を賞めてや」。松や杉の趣を賞してなのかなあ。「ほめてや」は、「五月雨の降のこしてや」（Ⅲ489）と同じ語法で、「や」は疑問に詠嘆を含む切字である。○**風のかほる音**　「風の薫る音」。夏の緑陰を吹き渡る薫風の音。「かほる」は「かをる」の仮名ちがいである。「薫る」とあれば「香」と言いそうなところを「音」としたのが珍しい。「風薫る」は既出（Ⅲ512等）。「風の香」（Ⅲ497）参照。

**大意**　薫風が梢を渡ってしきりに吹く音は、このお寺の庭の松や杉の趣を賞めてのことなのかなあ。

**考**　「小倉山」（『泊船集』）「小倉山常寂寺にて」（『蕉翁句集草稿』『蕉翁句集』）等の前書があり、『句集草稿』には「此自筆の物の句・前書也」と見える。「小倉ノ山院」については、これを二尊院とする説もあるけれども、土芳の伝える真蹟前書を信ずる限り、そのように見るのは無理であろう。『笈日記』では「嵯峨　五句」としてまとめられた句群の中に見え、前後は元禄七年夏の句なので七年夏の作と定めてよさそうではあるが、その外に元禄四年夏落柿舎滞在中の句も混っており、表現の趣向も考え合わせれば、四年か七年か確かには決し難い。一応年代不明とする所以である。

定家ゆかりの山荘跡と伝えられる常寂光寺をたずねて、定家の歌「たのむ哉その名もしらぬみ山木にしる人えたる松と杉とを」を踏まえ、折柄の薫風を擬人化してまとめられた句である。句の表現は、薫風が松杉の趣を賞めて吹くのであって、定家の霊が松杉を愛するように解しては良くない。こういう形で境内の趣を述べ、謂わば定家への挨拶としているのである。技巧が表に出てわざとらしい感じがあり、「かほる音」としたところも、今少し推敲があって然るべきであろう。

菊花ノ蝶

*924*　秋をへて蝶もなめるや菊の露　（笈日記）　　蕉翁句集草稿

あきをへてふもなめるやきくのしも　（真蹟句稿断簡）　　芭蕉庵小文庫

菊花の蝶

秋を経て蝶もまめる（ママ）や草の露　（蕉翁句集）

秋季（菊）。

**語釈**　○**菊花ノ蝶**　「菊花ノ蝶（きくくわてふ）」。菊の花に蝶を配した図柄であることをいう。［考］で述べるようにこの句は画賛句で、前書は支考の付した説明である。○**秋をへて**　「秋（あき）を経（へ）て」。秋の日々を経て。既出（Ⅲ *551*）。○**なめるや**　「嘗（な）めるや」。「なめる」は口語調。「や」は詠嘆の切字。「いはけなやとそなめ初る人次第（荷兮）」（『あら野』巻六）「Name, uru, eta. …… Canrouo namuru.」（『日葡辞書』）。○**菊の露**　菊の花心にたまった蜜を露に見立てた表現。菊水の故事（Ⅲ *526* 等）の連想がある。「八専の雨やあつまる菊の露　沾圃」（『続猿蓑』下）。

**大意**　秋の日々を経て老いた蝶も、慈童の話ではないが、菊の露を嘗めて齢を延べることよ。

考

『笈日記』尾張部、巴丈亭の「画讃 四幅」の中に見える。四句のうちには野ざらし旅中の吟もあり、『蕉翁句集』も貞享二年の部に収めているけれども、今一つ確かな根拠に欠けるので、姑く年代不明としたい。

句形について、末の「つゆ」を「霜」とした『芭蕉庵小文庫』の所伝は、近時岡田彰子氏の紹介された真蹟句稿断簡（『連歌俳諧研究』第九十二号参照）によって信憑性が裏付けられた。「しも」という句案があったことは確実視され、この形ならば「枯菊」に準じて冬季の句と考えられる。この句案については、「菊の露は歌にも詠尽したれば、霜と云て俳諧とする所成べし。亦、秋を経てと云に露は如何也。霜にて趣意相叶ふ」（信天翁『笈の底』）という説もあるが、必ずしも従い難い。恐らくは「しも」が初案で、それを「露」に推敲したのであろう。『蕉翁句集』の「草の露」は、伝写の間に生じた杜撰と思われる。

菊花の露に延齢の徳を讃せり。ひそかに老情の哀をもよせ給ふや。（杜哉『蒙引』）

とある説で解は尽されている。画中の蝶を秋まで生き延びた蝶として、南陽菊水の故事を思い寄せたところが趣向であって、如何にも画賛の句らしい。「しも」では「露」の場合ほど菊水の故事が印象強く生かされない嫌いがある。「なめるや」を疑問の意と取れば、興じた調子が強く出るが、必然の説ではなく、普通の詠嘆の「や」と見てよかろう。「なめる」とあるところから、「菊の酒」を露に見立てたとする説も、「菊の酒」は花を浸してあるのだから、画趣に相応しくない。画はやはり咲いている菊であってこそ映えると思う。

*925* 榎の實ちるむくの羽音や朝あらし（笈日記）

榎の實ちるむくの羽音や初あらし（泊船集）

秋季（榎の実・むく）。

**語釈**　○**榎の実ちる**　「榎の実散る」。「榎の実」は、榎木の実。小粒の小豆ほどの大きさで、秋には熟して橙色になり、子供が取って食べたりする。「ちる」は、形式的には「羽音」にかかる。「ゑの木　雑也。ゑの実は秌也。すべてかやうの木の実は皆秌なり」（『御傘』）「つぶ〳〵と箒をもるゝ榎み哉　望翠」（『続猿蓑』下）「Yenomi.」（『日葡辞書』）。○**むくの羽音**　「椋の羽音」。「むく」は、椋鳥のこと。燕雀目ムクドリ科の鳥で、東北地方や北海道で繁殖したものが、秋には大挙して本州中部以西の地へ移って越冬する。何万とも知れぬこの鳥の大群が空を渡る光景はすこぶる壮観、大樹の梢を埋めて塒をとる。椋の木の実を好んで食べるので名とされた。「大和本草云、椋鳥、大さつぐみほどあり。形鵯に似て、音鶫に似たり。羣飛す。其味佳也。……△按に、此鳥本名未レ知。秋に至りて椋の実を羣はむ。故に名レ之。諸所難レ有レ之。洛北賀茂の森の種、至て味佳也。都俗秋に入て、此所には椋鳥狩をなして、是を賞翫する也」（『滑稽雑談』）「籬の菊の名乗さま〲　里圃　むれて来て栗も榎もむくの声　沾圃」（『続猿蓑』上）「飛蝶の羽音やかましと云句有り。高くいひて其心俗也」（『三冊子』赤雙紙）「Mucudori.」「Fauoto.」（『日葡辞書』）。○**朝あらし**　「朝嵐」。朝吹く激しい風。「鶯も竹屋どまりや朝あらし　聖（李由）」（李由・許六「南行ノ紀」—『本朝文選』巻五）「Asaaraxi.」（『日葡辞書』）。

**大意**　朝嵐の吹く中、むく鳥の群れ立つ羽音が響き、榎の実がはらはらと散りこぼれることよ。

**考**　『笈日記』雲水部初出。『蕉翁句集』は元禄六年の部に入れているが、年代についての根拠を知らない。『泊船集』の下五「初あらし」は秋の季語であるが、それでは句中に季語が三つもあることになって余りにうるさい。この句形は恐らく誤伝であろう。

古注には、

椋鳥は群集て、ことに榎の木にあつまるもの也。あまたの羽風は、あらく風の吹ごとくなりと也。（東海呑吐『句解』）

というように、「朝あらし」を「むくの羽音」の見立てと見るものが多く、現代の注にまで及んでいる。しかし、そういう見立てはわざとらしく、「朝あらし」は句全体の背景とする方が、解釈として勝るであろう。

この句は、多少嵐もよひの秋の朝に、大きな榎の木に群がつて、折々実を啄み零しながら、榎の実をあさつて

居る椋鳥が、さつと一際強く吹いて来た嵐に驚いて一斉に飛び立つたが、その羽音がいかにも爽やかにきこえたといふ景情を詠んだものである。

初五の『榎の実ちる』は、本来ならば『榎の実ちらす』とあるべきところであらうが、芭蕉の気持では、自分が現在眼にし耳にして居るところの、はら〳〵音立てゝ散り来る榎の実の、生々した視覚的乃至聴覚的印象を如実に現はさうとした為め、殊更かういふ表現に出たのであらうと思ふ。また実際に、この表現は、それだけの効果をもつて居るのである。従つてこの初五を句切れと見るは謬りで、句法乃至心持の上で、多少時間的休止はおいて居るものゝ、我々がこの句を読んでゆく際には、直ちに中七に続けて読み下した方がいゝと思ふ。それから座五の『朝あらし』は、この句全体が示唆する気分の基調をなすものである。

この句は全体として、表現の上に多少ゴタ〳〵したところがある。といふのは、『榎の実ちる』といふ視覚的若しくは聴覚的印象が、かなり鮮やかに現はれて居る上に、椋鳥の羽音と朝嵐との二つの音が取り入れられて居る為めでなからうか。……しかし、さういふ難はありながら、あらし催ひの秋の朝の爽やかな感じは、相応に出て居る句である。(半田良平氏『新釈』)

という説は、よく行き届いている。初五が中七へ続くという見方は、中七に切字があるところからしても穏当であり、その場合「榎の実ちらす」という散文的論理を超越するのは自然の勢いであった。余りに多くの物を取り込んだ為に、ごたついた感じは免れないが、秋の早朝の澄んだ空気を感得することが出来るところが取柄である。解釈については、椋鳥の羽音を朝あらしに見立てるのか、朝あらしに驚いて椋鳥が飛び立つと解釈するのか、意見の分れるところであるが、椋鳥の羽音と朝あらしの二つの音を詠みこむのは、「榎の実ちる」イメージにうるさすぎる……(『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏)

として、見立説をとる向きも、いまだにある。

926　花と實と一度に瓜のさかりかな　（木枯）

泊船集・浪化日記・蕉翁句集

夏季（瓜）。

**語釈**　○**花と実と**　「花と実と」。○**一度に瓜のさかり**　「一度に瓜の盛り」。真桑瓜の夏の間に花が咲き実を結ぶ特性をいったのである。「一度に」は日常語。「玉真桑」（Ⅰ *141*）「瓜の花」（Ⅱ *296*）等参照。「そこらたちどまりてみける者共、一度にはつとわらひけるとか」（『宇治拾遺物語』巻一）「Ichido.」（『日葡辞書』）。

**大意**　普通の植物とちがって、真桑瓜は夏の間に花も咲けば実も結ぶ。正に一度に盛りを迎える趣だ。

**考**　『木枯』（壺中・芦角撰、元禄八年刊）初出の句で、『蕉翁句集』は元禄二年の部に入れているが、何に拠った推定か明らかでない。『浪化日記』に見えるので、晩年の作かと思われるだけである。

句の内容は、

蓏類は花実同時に花発実生る物也。其意は、花をも眄め、亦実をも同時に賞観するを誉たる也。（信天翁『笈の底』）

本生りの実は完熟し、末生りの花もなお勢いが衰えない瓜の特性を踏まえた句。（堀信夫氏『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と見ればよい。軽い興であるが、何か人に対する挨拶の寓意がありそうな句柄であって、

たとえば、ある親と子と一度に身の栄えにあったような時にそれを祝って詠んだ句かもしれない。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

……親子ともども揃って豊かに栄える家族への挨拶など、眼前の瓜に託して何らかの寓意をこめた作であろう。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

といった見方が首肯される。但し、背後の事情を知るべき資料は何もない。

## 927 座頭かと人に見られて月見哉 (木枯)

泊船集・蕉翁句集

秋季（月見）。

**語釈** ○**座頭** 「ザトウ」。剃髪して僧形となり、琵琶・三味線等を弾いて歌をうたい、語り物を語り、また按摩・鍼等を業とする盲人をいう。もとは琵琶法師の当道座に設けられた四官（検校・別当・勾当・座頭）の最下位の称であった。「たそがれは船幽霊の泣やらん　珍碩　連も力も皆座頭なり　里東」（『ひさご』）「Zatô.」（『日葡辞書』）。

**大意** 人々の座から独り離れて、あれは座頭かと人に見られながら月見をする。これもまた一興か。

**考** 『木枯』初出。『蕉翁句集』に貞享三年とする根拠は明らかでない。

膝を立、からべを傾けて月にむかへば、他人見て座頭かとあやしむと也。月に対して哀を催し、そこはかとなく物おもふさま、いひがたし。(東海呑吐『句解』)

といった場合であろう。「座頭の月見」はあり得ないが、それに見立てられたおかしさを、即興の一句に仕立てたものと思われる。花見の場合では、「四つごきの」(V835)の句に明らかなように、さんざめく花見の騒ぎからは離れて、「かたはらの松かげをたのむ」芭蕉であった。月見の賑やかな席から離れて、ひとり句を沈吟する体を、酔漢などから座頭かとからかわれたことがあったのかも知れない。そうした体験を句の形にしたまでで、淡如とした風懐を酌めばよいのである。富山奏博士は、かなり大真面目に、「「座頭の月見」なんてことは絶対にありえないのであるから、これは決して現実に見間違い疑われたのではない。即ち芭蕉が剃髪姿で僧形であっても、月見の場で「座頭か」と疑われるようなことは、ありえない。人々は、出家・僧侶の月見の体と見るのが自然である」とする立場から、

にもかかわらず、明白に「座頭かと人に見られて」と言うのであるから、これは、この折の芭蕉の月見の態度が、本当に「座頭の月見か」と疑われるほど異常であったことを表明しているのである。とすると、この時の芭蕉の目は、折角の明月をも仰ぎ見ることなく、専ら自己の胸中の思念に沈潜していたのである。そして、そうした自己の異常な姿を顧みた彼は、これは言うなれば、まるで「座頭の月見」だなと感じ、他人の目にもそのように見えるに相違ない、と思った。かくして、「座頭かと人に見られて」なる表現となった。

この……表現には、自己を戯画化したユーモアがある。（『俳句に見る芭蕉の藝境』）

と述べておられる。「自己を戯画化したユーモア」には違いあるまいが、「座頭の月見」があり得ないから、人から見間違われたのではないというのは、窮屈過ぎるのではないか。前述したような場合はあり得ると思うし、余り真面目一方にとるのは、軽淡な句の印象から遠ざかって、却って真を失う嫌いがあろう。最近では、狂言「月見座頭」を引合に出して、

月見の仲間と少し離れて、句案にふけっていたところ、座頭の月見ではないかと噂（うわさ）する声が聞えてきた。よしよし、折からすだく虫の音も美しい今宵のこと、「月見座頭」を気取るのも、また一興である。円頂僧衣の芭蕉の風体は、夜目には座頭と映ることもありえたであろう。はからずも今宵は月見座頭を地でいったと、それを自ら面白がっているのである。（堀信夫氏『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と見る説も現われている。

*928*　古川にこびて（ママ）目を張柳かな　（矢矧堤）

春季（柳）。

**語釈**　○**古川**　「フルカハ」。古くからある川。「ふる川にみづたえず」（『毛吹草』巻二）。○**こびて目を張柳**　「媚（こ）びて目（め）を張（は）る柳（やなぎ）」。「目を張る」に「芽を張る」を言い掛け、擬人化して、柳が古川の気を引くような態度を示して流し目を使うとした。「こびて」に「古（こ）びて」（こましゃくれる意）を掛けたとする説もある。「露に媚（こび）たる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もかゝやくばかり也」（『平家物語』巻十）「目はり柳」（『毛吹草』巻二、誹諧四季之詞、二月）「めばり柳（やなぎ）　早春芽（め）のまさに出んとする柳なり。犬子柳を、めはり柳と云人あれど別種なりといへり」（『俳諧歳事記栞草』）「Cobi, uru, ita.」「Fitotabi yemeba momono cobi naru.」「Meuo fatte miru.」（『日葡辞書』）。

**大意**　古川のほとりに、柳が芽をふくらませて、今にも芽吹こうとしている。丁度女が相手の気を引こうとして、色っぽい流し目を送っているようだ。

**考**　『矢矧堤』（睡闇撰、元禄八年成）初出。所載の他の四句は元禄七年の作であるが、この句は句格がひどく見劣りするので、晩年の作とも決められない。

「古川」を「川の流れに冬の趣が未だ充分に取れ尽さぬ処から古川と言ったのであらう」（内藤鳴雪『評釈』）と見る説もあるが、「古川は岸崖などが苔むして、水の色も濁って居る様な川であらう、人に譬へて言へば大人或は老人」（『芭蕉句集講義』牧野望東説）とした方が良い。そういう川辺に芽吹こうとしている早春の柳のさまを擬人化して、女性が男の気を引こうと媚態を示しているように言い做した趣向である。ずっと古い貞門風の句のようにも見え、芭蕉らしくもなく句品が全くないのは、誤伝句でもあろうか。

*929*

圃角扇ニ讃ヲ望テ

**前髪もまだ（ママ）若艸の匂ひかな**　（翁草）

春季（若艸）。

**語釈** ○**圃角**「ホカク」。『翁草』に句が見える人であるが、出自経歴等は明らかでない。山本健吉氏は、「おそらく沾圃或いは里圃の門弟か縁者で、能役者であったろう」（『芭蕉全発句』）と推測しておられる。○**扇ニ讃ヲ望テ**「扇ニ讃ヲ望ミテ」。画をかいた扇に讃句を書いてくれと希望したのである。「讃を望む」は既出（Ⅲ454前書）。○**前髪**「マヘガミ」。額の上の部分の髪。頭頂を中剃りして、額の上は剃らずにおくのが少年の風俗で、元服の時に剃り落す。「花見んとなをる円座にあたゝまり　青山　狂へば梅にさはる前髪　涼葉」（『金蘭集』）「**Mayegami.**」（『日葡辞書』）。○**若艸の匂ひ**「若艸」は、春になって芽を出し伸びて来る草をいう季語で、初々しく新鮮な感じを持つ。「艸」は「草」の古字。「匂ひ」は、漠然とした気分。「わか草　春也」（『御傘』）「わか草はまだはつはるのわかばへなれば、しゐてつめどもかすけなきさま。雪に萌黄のうはじらけしたる気色などもいひなす」（『山之井』）「立臼に若草見たる明屋哉　十一歳　亀助」（『あら野』巻二）「江の字抜て水の上とくつろげたる句の、にほひよろしき方におもひ付べきの条中出候」（卯月廿九日付荊口宛芭蕉書簡）「**Vacacusa.**」（『日葡辞書』）。

**大意** そなたの前髪も、この画の若草さながらに、まだ若々しくて、末頼もしい感じがすることよ。

**考** 芭蕉一周忌追善集たる『翁草』（里圃撰、元禄九年成）初出なので、晩年の作と思われるが、確かな年代は分らない。扇には多分春の若草が描かれていたのであろう。前髪立ちの若衆の画という見方もあるが、芭蕉に賛を乞う図柄としては相応しくない。画の若草を扇の持主の当人に引当てて挨拶にした趣向が軽妙である。前髪立ちの美しい若衆姿を髣髴させて、若者の前途を祝福する気持も籠められている。

*930*　雪間より薄紫の芽獨活哉　（翁草）

春季（雪間・芽独活）。

**語釈** ○**雪間**「ユキマ」。積った雪が春になって群消えして、その隙間から土が顔を出すさまをいう季語。雪間にはもう芽を出す

草などもある。「雪間　雪のひま、雪の絶る、残る雪、皆春也。……雪のひまも、雪の消事も冬にあれ共、皆春に定たる上は、うたがふべからず」(『御傘』)「水はひをけさでけさる〵雪間哉　重供」(『毛吹草』巻五)。○**薄紫の芽独活**「薄紫の芽独活」。「独活」はウコギ科の多年草。春山野に萌え出た若い茎を食用にする。その薄紫色の芽を出したさまである。「うすむらさき　藤色也」(『貞丈雑記』巻三)「独活　うど　西国にて、しかといふ。西国にては土中に有を独活といひ、二三寸地上に生じたるを、うどといふ」(『物類称呼』巻三)「たづぬるにはるけき野べの露ならばうすむらさきやかごとならまし」(『源氏物語』藤袴)「花よりも猶目うどの春の紅は」(『常盤屋の句合』二番)「Vsumurasaqi.」「Vdo.」(『日葡辞書』)。

**大意**　解け出した雪の間から、薄紫色の独活の芽が顔を出している。もう春なのだ。

**考**　『翁草』に初出するが、年代を知るべき古い資料は見当らない。

野生の独活か作り独活かに論があるが、作り独活ではこの句のような生き生きとした自然感に相応しくあるまい。江戸へ出るは多分作りうどなれば、只白々とすくやかなり。山国の独活はむらさきにて、雪間より芽はりたるうれしさ限りなし。(何丸『句解大成』)

という見方が妥当である。故郷伊賀での属目であろうか。ただ淡々と事を叙しただけであるが、黄金を延べたように一気に言い下して、陽気動く早春の自然の相を見事に把握している。「薄紫」の色感が、これぐらい良く生かされた例は稀であろう。単なる写生句にとどまらず、この「芽独活」には、一陽来復の季節の象徴の感さえある。

*931*　春の夜は櫻に明てしまひけり　(翁草)

春の夜はさくらに鳴て仕廻けり　(蕉翁句集)

韻塞・梅桜・泊船集

春季(春の夜・桜)。

**語釈**　○**春の夜**　「春の夜」。既出(Ⅱ*361*)。○**明てしまひけり**　「明けて終ひけり」。「しまふ」は補助動詞的用法ではなく、「終りに

なった」の意。「火ともしに暮れば登る峯の寺　去来　ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　芭蕉」（『猿蓑』巻五）「Ximai, mŏ, ŏta.」（『日葡辞書』）。

**大意** しずかな春の朧夜は、盛りの桜で華やかに明け離れ、それでお終（しま）いになった。もう全くほの暗さは無い。

**考** 『翁草』初出。『蕉翁句集』は元禄四年の部に入れているが、根拠が明らかでなく、「鳴て」の句形も誤りと思われる。

朧月夜の花の詠め、えならずおもしろきに、夜の更るもしらで、終明仕廻たりとなり。けりは、尚名残おしき心ふかし。（東海呑吐『句解』）

というように、夜桜の趣を賞して名残を惜しむとする解が古来多い。しかし、句の印象は曙の花盛りの華やかさが中心であって、夜桜の眺めはそれと矛盾するし、且つ日中の眺めが殊更劣るわけではあるまい。そう考えると、

「桜に明けて」は「桜を賞して居る中に明けた」のではなくて、「これから桜を賞すべく明けた」のである。山の端がボーッと白んで来る。いよいよ夜が明け離れると、万朶の桜は朝日をあびて匂はしく輝く。景色はすでに朧月夜の世界を離れて、桜の暁となつてしまつたのだといふのである。即ちこれは春の夜を惜しんだのではなく、春の暁をたゝへた句である。（潁原博士『新講』）

という説が、首肯されるものになる。句の文脈は、「春の夜は桜で明けて、それでおしまいになった」（今栄蔵氏『芭蕉句集』）と解すればよい。表面上は「春の夜は……しまひけり」で春の夜が中心と見えるが、内実は曙の桜の華やかな趣を表現しているのである。一息に言い下したところに力があり、かなり高く評価出来る句といえよう。但し、

……春の夜の風情を一夜賞した人の、名残（なごり）の味を言い取ろうとした句である。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏）

という見方も、いまだにある。

いかなる事にやありけむ、去来子へつかはすと有

*932* 蒟蒻のさしみもすこし梅の花（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

春季（梅の花）。

**語釈** ○**いかなる事にやありけむ**　「如何なる事にやありけむ」。どういう事情であったか、句の成った動機が不明であることをいう。以下の前書は、『芭蕉庵小文庫』の撰者史邦の文である。○**去来子へつかはすと有**　「去来子へ遣はすと有り」。京の蕉門俳人去来へ言い遣った句である旨の前書が付いていた句なのである。「去来」は既出（Ⅱ*407*等）。「子」は軽い敬称で、史邦の立場からの表現であろう。○**蒟蒻のさしみ**　「蒟蒻の刺身」。蒟蒻を刺身のように薄切りにして、酸味噌などをつけて食べる料理。「蒟蒻」は既出（Ⅳ*766*）。「ふるまひの菜に、みやうがのさしみありしを」（『醒睡笑』巻六）「Saximi.」（『日葡辞書』）。○**すこし**　「少し」。「凄し」と取る説もあるが、恐らくは非。「此すこしは心許りと云ふ意であらうと思ふ、心許りの追善といふ意も含んで居るらしい」（『芭蕉句集講義』中島華兮）「菴の夜もみじかくなりぬすこしづゝ　嵐雪」（『あら野』巻三）「Sucoxi.」（『日葡辞書』）。

**大意**　梅の花の一枝に蒟蒻の刺身も少し添えて、亡き人への手向草としたことだ。

**考**　『蕉翁句集』は「去来え遣ス」と前書し、「此句は、無人のこと抔云ついでと云り」と付記して、元禄六年の部に入れている。去来へ遣わした句であることは、これらの前書によって明らかで、蒟蒻の刺身は精進料理でもあるから、故人を偲ぶ意があることは察せられる。去来縁辺の人とすれば、貞享五年に歿した妹の千子（Ⅱ*407*前書）などであろうか。元禄六年二月、京の去来宅で客死した出羽の呂丸も考えられる（Ⅳ*771*参照）が、その前後の事情はかなり委しく分っており、「いかなる事にやありけむ」などとは書くまいと思う。それらは凡て想像に属し、元禄六年とする根拠も確かではない。上方でも江戸でも、こういう句を作る可能性はある。

許六によれば、「翁は昆-蒻をすかれたり」（『本朝文選』巻五、「麻生ノ後序」）と伝えられており、「蒟蒻のさしみ」は俳

味十分の句材であった。それと「梅の花」を配合して、故人の風雅を偲ぼうとしたもので、しみじみと寂びた趣がある。「梅の花」は庭前の景色でもあろうが、「さしみも」とあるから、供え物とするのが本筋と思う。

……故人の追憶にひとりふけっている侘びしい姿を自ら眺めているおもむきで、余寒の庭前に咲き出でいささか匂うている梅の冷たさが、この心に一脈の明るさとさびしさとを通わせて、幽かな心のゆらぎを誘うのである。
（『芭蕉全句』）

と加藤楸邨氏が鑑賞しておられるのは良い。

*933*　わが宿は蚊のちいさきを馳走也　（芭蕉庵小文庫）

蕉翁句集草稿・誹諧世説

我宿は蚊のちいさきを馳走かな　（泊船集）

我宿は蚊のちいさきも馳走也　（蕉翁句集）

夏季（蚊）。

**語釈**　○**わが宿**「我が宿」。「宿」は、住居の意。○**蚊のちいさきを馳走也**「蚊の小さきを馳走也」。「馳走」は、客へのもてなし。もとは、人の為にいろいろ動き廻って尽すことから出た語である。「蚊の小さいのをもてなしとする」の意。「ちいさき」は、「ちひさき」の仮名ちがい。「蚊柱といひては。墜梨花の湿にもくちやらずとも。涼風のふきたをすともいひ。又山里のかひの煙に。蚊のまつげをしぼり。ふるやの軒の蜘の糸に。蚊のすねまとへるけしき。棒ふり虫の変化てなれるとかやいへば。せゞらき橋の下などにたかるてい。藪蚊とて。森の陰。竹の林のいぶせくこぐらき物のくまになきわめく心ばへをもすべし」（『山之井』）「其蚊羣り集り、梟として窗間檐端にあるを蚊柱と称す。又、夏虫など歌にも読り。但し夏虫は種〻の別侍。……蚋子……和におゐて糠蚊と称す。至てちひさき者也。○藪蚊……此もの余種より大にして、豹文とて斑点あり。是俗に、藪蚊・憲法・小紋などいふ」（『滑稽雑談』）「月に柄をさしたらばよき団哉　蚊のおるばかり夏の夜の疵　越人」（『あら野』員外）「去年の春ちいさかりしが芋頭

元広」(『あら野』巻二)「冬空のあれに成たる北颪　凡兆　旅の馳走に有明しをく　芭蕉」(『猿蓑』巻五)「Ca.」「Chijsai.」「Chisô. Vaxiru.」(『日葡辞書』)。

**大意** 何の風情もない私の住居では、蚊の小さくて刺されても痛くないのが、せめてものおもてなしです。

**考** 闌更の『誹諧世説』(天明五年刊)に、金沢の秋之坊が幻住庵に尋ねて来た時の句と伝えているが、その裏付けとなる古い資料は見当らない。秋之坊に会った時とすれば元禄三年夏であるが、『蕉翁句集』は元禄四年の部に入れており、これまた根拠不明であって、年代不明とする外なかろう。句形については、蝶夢の『芭蕉翁発句集』に「わが宿は蚊の小さきも馳走哉」という形も伝えられて紛らわしいが、最も早い『芭蕉庵小文庫』の句形を本位句とする。

客に対して何のおもてなしも出来ないという挨拶の意をあらわすのに、蚊を持出したのが俳諧である。この辺の蚊は糠蚊ばかりで、大きな藪蚊は居ません。刺されても痛くないのが取柄だと戯れているので、その間におのずから侘びた草庵生活の趣が浮び上るのである。口を衝いて出たままの飾らない率直さが良い。

*934* むかしきけちゝぶ殿さへすまふとり　(芭蕉庵小文庫)

むかし聞ヶ秩父殿さへすまひ取　(翁草)

むかしきん(ママ)ちゝぶどのさへ相撲とり　(蕉翁句集)

泊船集・誹諧曾我・俳諧古今抄

秋季(すまふとり)。

**語釈** ○**むかしきけ**「昔聞け」。「むかし」は、昔話の意。昔話をすることを「昔を語る」という例は、方言に今もある。○**ちゝぶ殿さへすまふとり**「秩父殿さへ相撲取り」。「ちゝぶ殿」は、鎌倉時代初期の武将畠山重忠のこと。頼朝に属して木曽義仲追討や源平の合戦に従軍して名を挙げ、剛勇廉直の鎌倉武士の典型とされる。元久二(一二〇五)年武蔵二俣川合戦で討死した。享年四十

二。「ちゝぶ殿」の称は、彼の祖父が秩父太郎大夫重弘だったことと縁があろう。「すまふとり」は、相撲の力士。重忠が長居（ながい）という強力者と相撲をとって勝った話に拠る。［考］参照。「相撲」（Ⅲ544）は、宮中の相撲の節会が陰暦七月末に行われるので秋季とされ、「すまふとり」もそれに準じて秋の季語となる。「ケ様の異見する者は、ちゝぶ殿か此朝比奈」（『曾我扇八景』紋づくし）「みやこにも住まじりけり相撲取　去来」（『猿蓑』巻三）「Quābacudono.」「Sumōtori.」（『日葡辞書』）。

**大意**　昔話を聞き給え。名だたる御家人の秩父殿さえ、ただの相撲取りだったのだ。

**考**　『蕉翁句集』に元禄四年とする根拠は明らかでなく、その外に年代の手掛りとなる資料は皆無である。句形については、『翁草』も年代の古い書ではあるが孤立した所伝であり、『泊船集』と一致する『芭蕉庵小文庫』の句形が、本位句として相応しい。『蕉翁句集』の初五は誤筆であろう。

重忠が長居という力士と頼朝の前で相撲をとった話は、『古今著聞集』巻十に次のように見えている。

さて寄合たりけるに手合して、ながゐ、畠山がこくびをつよく打て、袴の前腰をとらんとしけるを、畠山、左右の肩をひしとおさへてちかづけず。かくて程へければ、景時、いまは事がら御覧候ぬ。さやうにてや候べからんと申けるを、大将、いかにさるやうはあらん。勝負あるべしとのたまはせはてねば、長居をしり居にへしするてけり。やがて死入て、足をふみそらしければ、人〻よりて、おしかゞめてかき出しにけり。重忠は座に帰着事もなく、一言もいふ事なくて、やがて出にけり。ながゐは、それより肩の骨くだけて、かたわ物になりて、すまゐとる事もなかりけり。骨をとりひしぎにけるにこそ。目おどろきたる事なり。（畠山重忠力士長居と合ひて其肩の骨を折る事）

句意は、

ふるき代の質朴をしたへるの意。又、さすがの大名を、相撲取とこなしたるをかしみ、みるべし。（杜哉『蒙引』）

というに尽きる。今は身分ある者が力競べなどはしないが、昔はあの秩父殿さえも長居と相撲をとって、謂わば相撲

取りだったのだと、おかしみに言い做した俳諧である。支考の『俳諧古今抄』では、「殿の字の慇懃を崩す。こゝを諧語の滑利と知るべし」などと言って、後代の注に影響を及ぼしているが、四角張った言い方におかしみはあるにせよ、それはこの句のユーモアの中心ではない。俳意は飽くまで重忠を「すまふとり」と言いこなした点にある。それと今一つ、「むかしきけ」と、昔話の語り出しのような表現にしたところも注目したい。古くから「きけむかし」を顛倒したとする解が多いが、それは誤解であろう。また、この句を書いた意水宛書簡を引いて、句作の時風邪で臥せっていたことを云々する向きもあるが、この書簡は偽簡であって、解釈の根拠にすることは出来ない。門人達との談笑の席で即興的に成った句と思われ、芭蕉には珍しく磊落な感じがある。

*935* **鬼灯は實も葉もからも紅葉哉**　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

秋季（鬼灯・紅葉）。

**語釈** **○鬼灯**　「ホ、ヅキ」。ナス科の多年草。野生も各地にあるが、普通人家に栽培される。葉には長柄があり、葉身は卵状楕円形、縁に大きな鋸歯がある。初夏に尖が浅く五裂した盃形の小さな淡黄色の花が下向きに咲く。果実は球形、熟すると赤くなり、これを包む卵形の宿存萼も赤く色づく。児童が種子を除いた果実の皮を口に含んで鳴らして遊ぶ。「鬼灯 青ほうづきは夏」（『毛吹草』巻二、誹諧四季之詞八月）「鬼灯（ほゝづき）［和漢三才図会］酸漿（ほゝづき）、五月小花を開く。純白、蕋（しべ）も赤白色にして蔕（へた）は青し。宿根（ふるね）より自ら出す。小児中の白子を鑿去空殻（うがちさりから）として、これを舌上（したのうへ）に含（ふくみ）て圧吹（おさへふく）ときは音あり云々。○今の世に女の童（めのわらは）のほゝづき吹くことは、［栄花物語］初花の巻、寛弘五年の所に「御色白くうるはしうほゝづきなどを吹ふくらめて云々［源氏物語］野分の巻に「ほゝづきとかいふめるやうにふくらかにて云々、みえていとふるき事（わざ）なるべしと醒斎いへり」（『俳諧歳事記栞草』）「鬼灯や清原の女が生写し」（『蕪村句集』）「**Fôzzuqi.**」（『日葡辞書』）。**○実も葉もからも**　「実（み）も葉（は）も殻（から）も」。「から」は、前記の実を包んだ宿存萼をいう。「名月や椽（エン）取まはす黍の虚（カラ）　去来」（『炭俵』下）「**Cara.**」（『日葡辞書』）。**○紅葉**　「モミヂ」。秋になって、葉だけでなく凡てが赤く色づくことをいう。

大意　ほおずきは秋になると、実は勿論のこと、葉も殻も凡てが赤く色づくことだ。

考　『蕉翁句集』に元禄四年とするが、根拠が明らかでなく、外に年代を知るべき資料のないことは、前の句と同様である。

ほおずきが秋になると、実も葉も殻も凡てが赤く色づくことに興じた句で、「実も葉もからも」と拍子に乗せたところに、その気持が出ている。古注以来、『万葉集』巻六所収の聖武御製「橘は実さへ花さへ其の葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹」（葛城王に橘姓を賜わった時、祝意をこめた御歌）が引かれており、芭蕉がこれを意識したかどうか確かではないが、内容と調子に酷似したところは明らかに感ぜられる。若し踏まえたとすれば、古歌の「常葉」を言ったのに対して、「紅葉」を取り上げたところに俳意があることになろう。

*936*

## きくの露落て拾へばぬかごかな　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

秋季（きく・露・ぬかご）。

語釈　○きく　「菊」。○落て拾へば　「落ちて拾へば」。落ちるのは露、拾うのは作者で、ここの曲折が句の興の中心である。○ぬかご　「零余子」。「むかご」ともいう。自然薯・つくね芋・長芋などの葉腋に生ずる珠芽で、種類によって形や大きさは異なるが、多くは緑褐色で長さ数ミリ、自然にこぼれ落ちる。秋に採取して繁殖用にする外、茹でたり飯に炊き込んで食用に供する。「山のいもぬかご」（『毛吹草』巻二、誹諧四季之詞八月）「蔵器曰、零余子、薯蕷子也。大者如二雞子一、小者如二弾丸一、薯蕷有二数種一、此其一」（『滑稽雑談』）「蟷螂にくんで落たるぬかごかなさが為有」（『炭俵』下）「Nucago.」（『日葡辞書』）。

大意　菊の露が落ちたかと、拾ってよく見ると、零余子だったよ。

考　『蕉翁句集』が元禄二年の部に入れているのは、何に基づく推定か明らかでなく、外に年代に関する資料は皆

無である。

句の情景としては、

垣ねに結ひ込らるゝいもの蔓も菊にからみて、露もぬかごもともに落るさま……（東海呑吐『句解』）

山芋の蔓の纏（まと）いつく垣根の傍らに菊のある景。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

と把握すべく、それを面白く言い做して興じたのである。「落て拾へば」のあたりが眼目といってよい。巧みではあるが、その巧みさは厭味や観照の曇りとは異なり、極く自然な軽みを得たものになっていると思う。古注に人生栄落の観相などというのは、余計な詮索である。

*937* わが宿は四角な影を窓の月　（芭蕉庵小文庫）

泊船集・蕉翁句集

秋季（月）。

**語釈** ○**四角な影を窓の月**　「四角（しかく）な影（かげ）」は、窓の形に月光がさしていることをいう。「四角な」は口語調で、「影」は、光と陰影と両者を兼ねたような表現。「扨も〳〵皆四角な文字で、是は一字も読ぬ」（狂言「惣八」）「Xicacu. I, xicacuna. …… Xicacuna mono.」（『日葡辞書』）。

**大意** 我が住居は窓から明るく月光がさし込み、窓の形そのままに四角な影を落している。

**考** 『蕉翁句集』は貞享元年の部に入れているが、その根拠を知らず、外に年代を徴すべき資料がないので、年代不明とする。場所も江戸か上方か、よく分らない。華雀の『芭蕉句選』に、中七を「四角な顔を」としているのは誤伝であろう。

何の飾りも調度もない侘住居の趣といった解釈が多いけれども、これは丸い月に就いて「四角な影」と言い做した

興が中心の句ではあるまいか。加藤楸邨氏が『芭蕉全句』で「月丸し影はすみ入窓の内　道二」（『毛吹草』巻六）という古句を発想の原型として指摘しておられるのが注目される。道二の句は「角入る」と「澄み入る」の洒落で、やはり「四角」と関連があるからである。何時頃の句か知らないが、芭蕉もつまらないことを考えたもので、丸い物が四角に映ったと興じて見ても、それだけのことでしかない。

## 938 雞頭や雁の來る時尚あかし（初蟬）

続猿蓑・泊船集・松の濤・蕉翁句集草稿・蕉翁句集

秋季（雞頭・雁）。

**語釈** ○**雞頭**「ケイトウ」。ヒユ科の一年草。成長と共に茎が太くなり、葉は卵形で互生し、尖がとがっている。夏の終りから茎の先端が鶏のとさかのように変形して小花が密生し、赤・黄・橙など華やかな色を呈する。観賞用に栽培され、色が濃いので妖艶な感じの花であるが、仏花にもなるように、何処か暗い影もある。「雞」は「鶏」に同じ。但し、中七以下の表現からして、この「雞頭」は葉鶏頭を指しているのかも知れない。これもヒユ科の一年草であるが、秋になると頂部の葉が赤や黄に色づいて、美観を呈するのである。「時珍本草云、雞冠。以二花状一命名。三月生レ苗、入レ夏長。高者五六尺、短者纔数寸。……六七月梢間開レ花。有二紅白黄三色一。……花大有二囲一二尺者一、層々巻出可レ愛。……和産又説のごとし。掃箒・扇面・瓔珞等の数品有。皆花形によて名とす」（『滑稽雑談』）「鶏頭の散る支しらぬ日数哉　至暁」（『続猿蓑』下）「Qeitó. Niuatorino atama.」「Qeitôgue.」（『日葡辞書』）。○**雁の来る時尚あかし**「雁の来る時尚赤し」。雁が北からやって来る頃には、花が一層赤くなる、の意。鶏頭と同類の葉鶏頭が、漢名で「雁来紅」とも呼ばれることを背景にしている。「雁」は「カリ」とも訓めるが、ここは「ガン」と音読した方が、俳諧らしくて響きも良い。「病雁」（Ⅲ*621*）参照。

**大意** 鶏頭の花が華やかに咲いている。雁が北からやって来る頃には、花の色が一層赤く鮮やかになるのだ。

**考** 『泊船集』には「画賛」と前書がある。『蕉翁句集』が元禄六年の部に入れてある根拠は明らかでないが、『続

猿蓑』所収の句なので、何れにせよ晩年の作であろう。

写生句として見た場合、中七以下の表現が「雁来紅」の名を直ちに想起させる点が曇りになって、季節を背景にしたさまざまとした実感はあるにも拘らず、余り高くは評価出来ない。しかし、『泊船集』にあるように画賛だったとすれば、同じ表現が機智的発想として、それなりの興を持つのである。「雁来紅」の名を別にすれば、素直な表現と言ってもよい。

939 うぐひすや柳のうしろ藪の前 (浮世の北)

陸奥鵆・続猿蓑・泊船集・放鳥集・亦深川・蕉翁句集・許野消息

春季(うぐひす・柳)。

**語釈** ○**うぐひす** 「鶯(うぐひす)」。○**柳のうしろ** 「柳(やなぎ)の後(うしろ)」。○**藪の前** 「藪(やぶ)の前(まへ)」。「柳の後」と対句になる。「墓の前に桜植置侍るよし、かねぐ母の物がたりつたへて」(『猿蓑』巻四、園風発句「まがはしや」前書)「Maye.」(『日葡辞書』)。

**大意** 柳のうしろ、さては藪の前と、鶯があちこち飛び移っては、しきりに鳴き交わしていることよ。

**考** 『蕉翁句集』に元禄五年の部に入れる外、年代については古い資料がなく、五年とした根拠も明らかでない。『続猿蓑』に見えるので、晩年の作ではあろう。

「柳」「藪」などの語によって、一句が田園の世界であることは言うまでもなく、深川あたりでも、このような景色は見られたであろう。「うしろ」「前」と対句に綾なして、鶯の動きを表現している。

柳があり藪があるといふやうな田舎家の景色を漠然と脳裡に描き、そこに鶯の声を点綴し来つて、春日悠々たる趣が偲ばれる人には、この句の味ひはよく分る筈である。この句には、多少漢詩飜訳趣味がない訣ではないが、本来取りとめのないやうな情景を、これだけに現はし得た芭蕉の手腕は決して常凡でない。(『新釈』)

という半田良平氏の鑑賞は的確である。軽やかな調べが鶯の動きによく叶った軽みの作といえよう。加藤楸邨氏は、今から見ると単純すぎて何の奇もないように見られるところもあるが、貞門・談林以来芭蕉の歩いて来た長い表現工夫の道程を考え合せてくると、この単純への過程に振り落され洗いあげられて来たものが、並々でなかったことを考えなければならない。この削り去ったものへの考慮なしに、この到達点をそのまま学ぼうとすることが、句を浅くしてしまうのだとおもう。（『芭蕉全句』）

と述べておられる。

泊船集・蕉翁句集

## 940　雀子と聲鳴かはす鼠の巣（韻塞）

春季（雀子）。

語釈　○**雀子**　「スヾメゴ」。雀の雛。雀は春から始めて普通は年二回育雛し、支障があった場合は、なお何回も育雛することがある。季語としては春。「すゞめ子」（『誹諧初学抄』四季の詞、末春）「按に、雀の子四時に産するよしなれども、古来より春に許用する所専ら也。彼源氏物語若紫ノ巻に、むらさきのうへ雀の子を飼給ふを、いぬきといふ童にがして、紫の上むづかり給ふなど書けるも、三月晦日の頃にも聞えたり。是は春に拠ある故也」（『滑稽雑談』）「雀子や姉にもらひし雛の櫃　槐市」（『続猿蓑』下）。○**声鳴かはす**　「声鳴き交す」。互いに鳴き声を挙げる。「ゆふされればかやがしげみになきかはすむしのねをさへわけつゝぞゆく」（『千載集』巻四、藤原盛方）。○**鼠の巣**　「鼠の巣」。既出（Ⅳ 741）。

大意　仔雀と仔鼠の居る鼠の巣と、互いに鳴き声を挙げている。長閑な春の日だ。

考　『韻塞』（李由・許六共撰、元禄九年刊）初出で、『蕉翁句集』は元禄四年の部に収めている。
雀と鼠は似た所もないようであるが、鳴き声は似通う。

雀は軒に巣作り、鼠梁に巣作り、異形なれども声似たり。（東海呑吐『句解』）

といったところが、この句の発想の動機であろう。春の日の属目をありのままに句にしたもので、その可憐さを見るべく、未熟な俳人への挨拶などとするのは余計な詮索である。表現面では、

……上に子の字をあらはして巣の字を略し、下に巣の字をあらはして子の字を略せり。是を影略互見ともいはん。（杜哉『蒙引』）

と指摘されている点に注意したい。また、『枕草子』百五十一段に、

うつくしきもの……すゞめのこの、ねずなきするに、をどりくる。

とあるあたりの影響も考えられよう。ただ、それらは句の表に殊更あらわれておらず、ありのままの春の自然のたたずまいが表現されているだけである。

年経ざれば、かゝる句のやさしみ、合点ゆかぬもの也。されば初心の真似るもまた悪し。（東海呑吐『句解』）

とある通りで、恐らくは晩年の軽みの境地から詠み出されたものと思われる。

## *941* 烏賊賣の聲まぎらはし杜宇（韻塞）

泊船集・蕉翁句集

夏季（烏賊・杜宇）。

**語釈** **○烏賊売の声** 「烏賊売りの声」。街で烏賊を売り歩く魚屋の呼び声。「鰹売」（Ⅲ*602*）参照。「烏賊」は夏の季語。「多時産すといへども、初夏の頃風味最厚く、又産する事おほし。彼相感志には満を以て期とす。小満は四月の中也。和産また夏闌て其形ちいさき物、或は塩蔵し、或は又乾して鯗とす。鯗は俗にするめと称す。塩蔵并鯗は、夏には用ひがたき歟。一説、烏賊と計は雑にして、塩烏賊は夏なりといへり。信用しがたし」（『滑稽雑談』）「しらぐ〳〵と砕けしは人の骨か何　杜国　烏賊はゑびすの国のうらか

た　重五」（『冬の日』）「ICa.」（『日葡辞書』）。〇**まぎらはし**　「紛（まぎ）らはし」。烏賊売りの呼び声の為に、鳥の声が紛れて聞えないのである。「その女が方にての、白菊のちりにまぎらはし」（『三冊子』赤雙紙）「**Maguirauaxij.**」（『日葡辞書』）。〇**杜宇**　「ホト、ギス」。「杜宇（とう）」は、その亡魂がこの鳥に化したと伝えられる蜀王望帝の名である。

**大意**　ほととぎすの鳴く時季になったが、烏賊売りの呼び声に紛れて、聞きそこないそうだ。

**考**　『韻塞』初出で、『蕉翁句集』は元禄七年の部に収めている。積翠の『句選年考』に「一書に、声おぼつかな時鳥とも見えたり」とあるが、何に見える異形か明らかでない。

句は、ほととぎすの一声を待ち侘びる情に、市井の「烏賊売りの声」を配して興じた俳諧である。ほととぎすの声は待ちわびるところに、その本情がある。したがって、烏賊売りの声がうるさくてほととぎすの声がよく聞えないと解くのは不可。待ちわびて、うっかり聞き違えた軽いユーモアに俳味があると解釈すべきである。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

として、「いよいよほととぎすのシーズンになったと、その初音を待ちわびていると、どこかでかすかにその鳴き声がした、と思ったのは空耳で、近づくにつれてはっきりしてきたのは、烏賊売りの甲高い売声であったよ」と解く堀信夫氏の説が的確である。つまり、ほととぎすは鳴いていなくてもよいのだ。

卯月の比は、いか多く取れるものなり。頻にいか呼声の喧し。郭公まつ心から、その声も郭公かと紛はしと也。ほとゝぎすは、こと語るなどと歌にもよめば、人の物言にも紛るゝといふ心になるべし。（東海呑吐『句解』）

という古注の説も良い。「二物の疾舌を掛けあはせたるは、をかしみの一体なり」（梅丸『茜堀』）とも言われるところを見ると、烏賊売りの呼び声は相当早口のものだったようである。これまた晩年の軽みの風を窺うべき句といえる。

942

## 行炑や身に引まとふ三布蒲團　（韻塞）

泊船集・蕉翁句集

秋季（行炑）。

**語釈** ○**行炑**　「行く炑」。去り行く秋を惜しむ気持をこめた季語。既出（Ⅲ559）。「炑」は「秋」の本字である。○**身に引まとふ**　「身に引き纏ふ」。体にしっかりと纏いつける。「わが身をともにうちかけに引まとひよせ、とんとねて」（『夕霧阿波鳴渡』上）「Matoi, ô, ôta.」（『日葡辞書』）。○**三布蒲団**　「ミノブトン」。三幅の布で作った蒲団。普通敷蒲団に用いられるが、ここは掛蒲団であろう。「布」は布や織物の幅を数える長さの単位で、曲尺一尺一寸九分、鯨尺九寸五分、三十六センチを一布とする。その幅の布を何本使って出来たものかが分るわけである。「蒲団」は既出（Ⅱ445）。「をみなへしいくのぬへばか藤ばかまひとのにもあらずほころびにけり」（『元永二年内大臣殿歌合』藤原為真）「Fitono.」（『日葡辞書』）。

**大意** 秋も末になって、夜寒がそぞろ身にしみる。三布の蒲団を体にぴったり引き纏って寝ることだ。

**考** 『韻塞』初出の句で、『蕉翁句集』が貞享五年の部に入れた理由は明らかでない。『韻塞』にはこの句の前に、

謝下芭翁被レ訪二艸菴一悦而旧交上

十年もこと葉一つよ暮の秋　　禅桃

という句があり、『句選年考』のようにこれを引いて同時の吟と見ている例もある。また、それと同様の見地から、「行炑や」の句を芭蕉が禅桃を訪うた時の吟とした説もあるけれども、並んでいる二句が必ず同時応酬の作とは限らないし、句の内容も対詠の挨拶吟には相応しくない。この句の成立事情は不明とする外ないであろう。

「三布蒲団」については、左の露伴説が精しい。

ここは三布ぶとんを身にひきまとふので、ゆく秋の感じが出る。ゆく秋の寒さである。芭蕉の例の侘びが出てゐ

て面白い。引まとふのである、引かぶるのでは無い。三布ぶとんは……即ち今日人々の敷いて寝る蒲団が大抵三布ふとんです。かけて寝る蒲団は大抵五布蒲団、又は四布半、四布です。四布蒲団はもう狭くて困ります位です。そこを三布ふとんですから、巧みに引まとうても引まとひかねるのです。……そこに詩趣もあり侘もありをかしみも俳味も有るのです。三布といふところに徹して感じていただきたい。……ここは三布ふとんを独り身に引まとひ行秋に寝るところ、おもしろい。実境です。（『続々芭蕉俳句研究』）

右の説で句の情は悉されているといってよい。旅中の趣と見る向きもあるが、やはり草庵独居の侘びとすべく、狭い掛蒲団を無理に身に纏うているところに、おかしみも感ぜられる。生活と季節感が一枚になった秀吟である。

---

蕉翁句集

*943*

## 紫陽草や帷子時の薄浅黄　（陸奥鵆）

夏季（紫陽草・帷子）。

**語釈**　○**紫陽草**　「アヂサヰ」。既出（V *843*）。○**帷子時**　「カタビラドキ」。「帷子」は、麻などで作る夏着の単物（ひとえもの）。それを着るような時季が「帷子時」である。「帷子」は既出（Ⅱ *291* 前書）。「直のしれた帷子時のもらひ物　里圃　聞て気味よき杉苗の風　馬莧」（『続猿蓑』上）。○**薄浅黄**　「ウスアサギ」。薄い浅黄色。緑がかった薄い藍色をいう。もと、この色は「浅葱（あさぎ）」即ち、ねぎの葉の色の薄いのをいったものであるが、「ぎ」を「黄」と混同して「浅黄」と書くようになった。ここは、あじさいの花の色をいうと共に、それが「帷子」の色にも通ずることに興じたのである。「かたびらは浅黄着て行清水哉　尚白」（『あら野』巻三）「上下コイ浅ギ、中ウスアサギ」（『久政茶会記』天正九年正月廿日条）「Vsu asagui.」（『日葡辞書』）。

**大意**　あじさいは、人が帷子を着る時季に、それと同じような薄浅黄色の花を咲かせていることよ。

**考**　『陸奥鵆』（桃隣撰、元禄十年成）初出の句で、『蕉翁句集』は追加の「年号不知」の部に収めている。

此吟は時節を云出て、……花の色を以ての作意也。今案、五月は染帷子の珍敷気に着初たるも目立比也。諺にも、浅黄衫黒小袖と云り。着服の染色は、其流行有て移り替ると云共、浅葱帷子黒子袖は優き色にして、今に廃らず。殊に翁存生の比は、専此色を好むと聞ゆ也。帷子に興へて薄浅黄と見立たる、時候と云ひ手柄と云べし。此句、涼衫時と云詞、返〻も余情あり。天然の名誉と云べき者也。（信天翁『笈の底』）

とある説で、解も評も尽きていると言ってよい。暦によって生活が律せられていた昔には、端午の節供から帷子を着るようになるが、恰度その頃あじさいの花も空色になる。その「薄浅黄」の色感は、謂わば季節の色なので、帷子の色にも通い、涼味満点である。「帷子時の」という中七がよく働いて、表現の趣向が成功した例であろう。都会的なダンディズムが感ぜられるのも、芭蕉の句としては珍しい。

### *944* 菊の後大根の外更になし （陸奥衙）

泊船集・今日の昔・四山集・土大根・蕉翁句集

冬季（大根）。

**語釈** ○**菊の後** 「菊の後」。菊の花の咲き終った後、の意。○**大根の外更になし** 「大根の外更に無し」。大根の外には賞すべき物が全く無い、というのである。「更に」で「なし」の否定を強調した言い方。「大根」は既出（Ⅱ*429*等）。「膳まはり外に物なし赤柏 伊賀良品」（『猿蓑』巻一）「その老医いまそかりし時も、さらに見しれる人にあらざりければ」（『猿蓑』巻二・其角発句「六尺も」前書）「Cono foca.」「Sarani.」（『日葡辞書』）。

**大意** 菊の花が終ったあと、賞すべき花とては何もなく、ただ風味の佳い大根があるばかりだ。

**考** この句の年代については、『土大根』（季水撰、宝永元年刊）に見える左のような朱拙の語が注意を惹く。即ち、

拙が曰、しかり。ひと〻せ故翁難波の旅店にいまそかる比、文通に此事を問ひたるに、古語本説の句は水に塩入

れたるやうにする事なりといらえられし手沢のもの、今なを拙がもとにあり。

とあって、この句が古詩を踏まえたことを説いているのである。芭蕉が「難波の旅店」に居た時といえば、元禄七年秋のことになろうが、豊後の俳人朱拙が蕉門に近づいたのは、芭蕉歿後の元禄八年以降のことで、蕉門俳書に句が載ったのは、同九年の『初蝉』が最初であった。従って右の『土大根』の記事の信憑性は低く、杉浦正一郎博士の指摘された如く、朱拙の自家宣伝の疑いが濃い（「元禄年間に於ける九州蕉門」—『芭蕉研究』所収—参照）。『蕉翁句集』が元禄四年の部に入れた根拠も明らかではなく、結局この句の成立年代は不明とする外ないのである。

句の内容について、夙く『土大根』には撰者季水が、

此句、表向に古詩をとりたるすがたは見えねど、此花絶後更無レ花といへるをより所にして、俳諧の活法に一等乗越給ふ作と見えたり。

と指摘したように、有名な元稹の詩句「不二是花中偏愛一菊、此花開後更無レ花」（是花の中に偏へに菊を愛するのみにあらず、此の花開けて後更に花の無ければなり）を踏まえて一転した趣向であろう。右の詩句からは「いとせめてうつろふ色のをしきかな菊より後の花しなければ」（慈鎮『拾玉集』）という歌も生まれている。

成程菊花謝して後、詩歌に賞すべき花はないが、我が俳諧にはなほ大根がある。あの洗ひ立てた肌の白い色、風呂吹にした味はひ、菊の隠逸を愛した後、また風雅のさびを味はふべきはこの大根のみといふのである。「さらになし」と否定形で言つてゐるが、実は大根を大いに肯定して居る。菊の高雅に対して大根の平俗を捉へた所が俳諧である。（頴原博士『新講』）

という解、「大根の雅趣を称した点から言えば冬季とすべきである。……すでに大根を主として解すれば、大根の句と見るのが自然である」（同上書）という季に関する所説、何れも確論であろう。

……「菊の後」「更になし」はそのまま元稹の詩句を裁ち入れながら、中七の「大根の外」で独自の俳句的境地

を現出させた。「葱白く洗ひ立てたる」と詠んだ芭蕉は、もちろん大根の洗ひ立て（ママ）た白さをも賞したであろうし、「身にしみて大根からし」と詠んだ彼は、その鄙びた味をも愛したであろう。さらに「鞍壺に小坊主乗るや大根引」とも詠んだ彼は、大根に限りない愛着とユーモアを感じていたに違いない。菊の花のあとに、大根という食味を数え上げたことに、この句の滑稽があり、アイロニーがある。清雅な菊に対して、卑俗な大根を並べ、「さらになし」という否定的表現で、かえって強く肯定的に大根を押し出した、断定の面白さがある。……この元稹の詩は、いっこうにつまらない詩だが、やはり、人口に膾炙した詩句として立てながら、詩の「もどき」としてこの句を提出したのだ。一年中の花の終として菊を賞する詩に対して、大根があるじゃないかと、意想外の伏兵を出したそのウィットを見るべきものである。（山本健吉氏『芭蕉その鑑賞と批評』）

そこには大根の中に庶民的な新しい風趣を見いだした、いわば発見の目が光っており、菊の隠逸に対して、大根という野趣を提出したところに俳諧のユーモアがあるわけである。そして、それは『三冊子』にいう、「詩歌連俳はともに風雅なり。上三つのものには余す所も、その余す所まで、俳はいたらずといふ所なし。」という一つの自覚に支えられていたのでもあった。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

等、大方に異論のない鑑賞といえよう。最近では、「おそらく俳諧仲間に供応する時の亭主の挨拶（あいさつ）として詠まれた句であろう」（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏）という見方も現われている。

*945* 灌佛や皺手合する珠數の音　（三冊子）――蕉翁句集草稿・蕉翁句集

ねはん會や皺手合る珠數の音　（続猿蓑）――泊船集

夏季（灌仏）。

**語釈**　○**灌仏**　「クワンブツ」。釈迦の誕生を記念する法会。既出（Ⅱ*375*）。○**皺手合する珠数の音**　「皺手合はする珠数の音」。老人が皺の寄った手を合わせて珠数を爪繰る音。「珠数」は、仏を拝する時手に掛けて爪繰る仏具で、「ジュズ」ともいい、「数珠」とも書く。既出（Ⅰ*241*前書）。「合する」は、使役の助動詞の連体形。「三人のきんだち、各西に向て手を合せ、礼拝しけるぞ哀なる」（『保元物語』下）「Teuo auasuru.」（『日葡辞書』）。

**大意**　灌仏の法会に集うた老人達が、皺の寄った手を合わせ、殊勝に珠数を爪繰る音が、さらさらと響くことだ。

**考**　『蕉翁句集』には元禄七年の部に入れてあり、同年九月初めの伊賀滞在中に芭蕉自ら編纂を終えた『続猿蓑』に見えるから、晩年の作たることは確かながら、なお七年と確定し得る根拠はない。句形については、

　くわん仏も、はじめは、ねはん会やと聞へし。後なしかへられ侍るか。（『三冊子』赤雙紙）

　此、自筆に出る句也。続猿ニ、ねはん会やと有。後直るか。（『蕉翁句集草稿』）

等、土芳の所伝が注目される。「灌仏や」の句形には真蹟が伝わっていたのであり、「侍るか」「直るか」と疑問形ながらも、土芳は「灌仏」の方を治定形と考えていたわけである。勿論彼にも誤りはあるし、芭蕉親撰の『続猿蓑』を尊重する立場も理はあるけれども、この書も元禄十一年の刊行までに、支考の私意に基づく改訂が全くなかった保証はない。土芳が『続猿蓑』を参照しつつも、なお且つ「灌仏や」を定案と考えた点は、尊重すべきだと思う。土芳の書き振りを見ると、彼は最初「ねはん会や」の形でおぼえていて、後に「灌仏や」とした真蹟を見つけたのであろう。『三冊子』を書いた時には、既に真蹟を見ていた筈である。もとよりそれは、直ちに「灌仏や」を治定形とする根拠にはならないが、土芳の考え方を否定する理由もないわけだから、ここでは「灌仏や」を本位句としたい。

　解釈の傾向として、古注では「ねはん会や」を採るものが多く、新注では「灌仏や」に従うものが多い。両句案について頴原博士が、

　……涅槃会と灌仏と、いづれが適切であるかと論ずれば、人によつて説を異にするであらう。まづ一通りに解す

れば、老翁老媼が爪繰る珠数の音は、誕生よりも仏滅の方にふさはしく聞かれるが、さてまた灌仏に皺手を対照させた方が面白いとも見られる。随つて初案、後案についても、なほ問題を生ずべき余地がある。(『新講』)

と述べられたのは、公平な見方といえよう。能勢朝次博士は、

……「灌仏や」と初五を置きかへたのは、……句境が全然別個のものとなるのである。従つて、改められたのは初五文字に過ぎないが、全然別個の創作と見るべきものと思ふ。句境として両者を比較すれば、私は灌仏の方がすばらしいと感じる。老人が皺手を合せ珠数をすつて礼する対象が、涅槃会である時には、釈尊の涅槃のさまを画いた涅槃像となり、人天草木禽獣までが、愁をあらはし涙をたれて悲しむ入涅槃の気分と、老い衰へた老人の心細い将来とが、一色の色調となつてあまりにも配合の度が強すぎる傾がある。これを、釈尊誕生の灌仏の花祭りとする時は、その周囲の情調には、生誕・春・花等の陽気な明るさが漂ひ、参詣の子供の嘻々と遊戯する姿までが連想せられ、皺手に珠数をすつて拝んでゐる老婆の姿にも、無常感の哀れさの気分はさまで感ぜられないで、豊かなほほゑましい信心のさまが感じられる。即ち気分の色調が、微妙な調和と融合を遂げて、一句を香り高いものたらしめるのである。従つて、「灌仏や」と初五を置きかへたのは、たしかに成功した改作といひ得ると思ふ。(『三冊子評釈』)

と説かれ、「灌仏や」の方が老人とそれとの対照的気分の上から、却って微妙な表現効果を生ずることを強調されたのは、至言と言ってよい。この句は、去来の「涼しくも野山にみつる念仏哉」(『続猿蓑』下)の句にも通ずる季感を持ち、凡作ではないと思う。加藤楸邨氏は、両案の句境の差異について、

「三冊子」の伝える「涅槃会」から「灌仏」への改案がその通りであるとすると、今日の作句態度から見て、事実を無視したゆき方のようにとれよう。ここが今日の作句態度と芭蕉の作句態度との大きな差異の一つであって、今日の写実的態度の尊重に対して芭蕉の場合は風雅の世界を生み出すことが主となるのである。(『芭蕉全句』)

と指摘しておられる点は重要であろう。芭蕉の表現にも体験の裏付けはもとよりあるのだが、それが或る日或る時の特定の体験に限られるのではなく、それまでの複数のものが想起されて、それらを構成して風雅の詩境を打成する場合が多く、句の世界は特定の体験からは自由なのである。其処が近代以降の「写生」を基調にした表現態度とはちがうところで、芭蕉の句が一見写生のように見えても、「雪ちるや穂屋の薄の刈残し」（Ⅲ646）のように、想化の要素が大きく関与した例がある所以であり、紀行に於ける「虚構」の問題にもつながって行くのである。

*946*　猿引は猿の小袖をきぬた哉　（続有磯海）

猿舞師・泊船集・今日の昔・蕉翁句集

秋季（きぬた）。

**語釈**　○**猿引**　「猿引き」。猿に芸を演じさせる大道芸人。猿廻し。「これはらくぐわいにすまゐ致すさる引で御ざる」（狂言「猿座頭」）「Sarufiqi.」（『日葡辞書』）。○**猿の小袖**　「小袖」は本来、袖口を狭く仕立てた絹物の普段着をいう（Ⅱ407）が、ここは猿の衣裳を戯れていったもので、「小」に小型の衣裳であることを利かせている。○**きぬた**　「砧」。織り上げた布を小槌で打ち和らげること。月下に砧を打つ秋夜の情が和漢の伝統的な詩材となっているところから、秋の季語とされる。既出（Ⅰ200等）。

**大意**　砧の音が家々から聞えて来る秋の夜頃、猿廻しは猿に着せる小さな衣裳を、砧で打つことだろうよ。

**考**　『続有磯海』（浪化撰、元禄十一年刊）初出の句で、『蕉翁句集』が元禄四年の部に入れている根拠は不明である。華雀の『芭蕉句選』に、中七を「さるの小袖の」としているのも信じ難い。

月下擣衣の趣は古くから詩歌の類に言い尽された感じであるが、ここに猿の小袖を砧にかけることを採り上げたのは新しい発見といえる。単なるおかしみにとどまらず、しがない「猿引」の生活や「猿」の身の上に対するやさしい眼ざしが感ぜられるのも取柄であって、

さる引の猿と世を経る妹の月　　芭蕉
年に一斗の地子はかる也　　去来

という『猿蓑』市中の巻の付合を、発句で再演した趣がある。同じく『猿蓑』の巻頭句「初しぐれ猿も小簑をほしげ也」の「小簑」と、当面の句の「小袖」とも、猿に対する愛憐の情の表現として、通いあうものがあろう。こうした気分は、やはり俳諧ならではの境地である。

947　奈良七重七堂伽藍八重ざくら　（泊船集）

宇陀法師・蕉翁句集・俳諧古今抄

春季（八重ざくら）。

**語釈**　**○奈良七重**　「七重(なゝへ)」は、幾重もの垣をめぐらした宮居をいう。皇居は「九重(こゝのへ)」というのが普通であるが、ここは「ナラナヽヽへ」と同音を畳ね、且つ奈良が元明天皇の和銅三（七一〇）年以来、元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁の七帝七十余年にわたって都だったことを利かせた表現と思われる。経文に極楽の荘厳を形容する語として屢見するという露伴説もある（『芭蕉俳句研究』）。「九重と有べきを、八重といはんれうに、七重とは置給へるや。即旧都の物ふかき体也」（杜哉『蒙引』）「七重八重こゝのゑとこそ思ひしにとゑさきいづる萩の花かな」（狂言「萩大名」）。**○七堂伽藍**　「シチダウガラン」。「伽藍」は「僧伽藍」の略で、僧院を意味する梵語の音訳。大規模な仏寺の具備すべき七種の堂宇、即ち塔・金堂・講堂・鐘楼・経蔵・僧房・食堂をいい、宗旨によっては堂宇の呼称・用途が異なることがある。ここは前の「七重」から「七堂伽藍」と続けた。「時宗様を御免あらば、七堂伽藍御建立の功徳も是にはよもまさじ」（『俗我扇八景』紋づくし）「**Xichidô garan.**」（『日葡辞書』）。**○八重ざくら**　「八重桜(やへざくら)」。奈良の興福寺境内にあった八重桜を指す。「一里は」（Ⅲ596）の句の条参照。「七重」「七堂」から「八重ざくら」と数を連ねた。「いにしへのならの都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな　伊勢大輔△此歌より八重桜をよみそめたり。又今の都へも此時はじめてわたりける。徒然草云、八重桜は奈良の都にのみ有けるを、此比ぞ世におほくなり侍る也。砂石集云(ママ)、興福寺の東円堂の前にあり。これらの説、皆八重なりしをいへり。八重は遅く咲也」（『滑稽雑談』）「**Yayeno sacura.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　奈良は七重の垣をめぐらした七代にわたる皇居。七堂伽藍の大寺院が多く、古歌に名高い八重桜もある。

**考**　『蕉翁句集』には貞享元年の部に収めているが、芭蕉生前の集には見えず、『泊船集』初出であって、年代を知るべき手掛りはない。

志田義秀博士は『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』に於いて、この句が『大井川集』（維舟撰、延宝二年刊）所収の元好の句「奈良の京や七堂伽藍八重桜」の改作とすべきものとされ、改作者を芭蕉とする確証もないと言われた。初出の『泊船集』の編輯態度が杜撰である上、それ以後この句を出した『宇陀法師』や『俳諧古今抄』の撰者許六・支考らが凡て芭蕉晩年の門人で『泊船集』に拠っての立言かと疑われること等も勘案の上での所説である。しかし、これらは何れも真作に非ずとする確証とは見難く、『泊船集』に収められたことが直ちに信憑性を疑わせる理由にはならない。土芳の『蕉翁句集』に見えることも、この句の信用を高めるものであろう。先行の類作は確かに問題ではあるが、芭蕉には先行作を唯一語差し換えただけの「世にふるも更に宗祇のやどり哉」（Ⅰ147）「ほとゝぎすなくや五尺のあやめ草」（Ⅳ744）等の例があり、当面の句だけ除外するのは穏当ではあるまい。本書でも多くの注書と同様、真作として扱う所以である。なお、根拠は不明ながら、葎甘介我の『俳諧あやめ草』（天保十二年刊）に才麿作者説も見える。

『宇陀法師』は「三段切」の例としてこの句を挙げており、一字もてにをはを用いずに、名詞のみを連ねて成っていることを、多くの古注が説いている。これらは一見して分る句の表現の特色であって、名詞を並べたところは、「梅若菜まりこの宿のとろゝ汁」（Ⅳ649）に類するともいえよう。その内容も、「奈良七重」と同音を畳ねながら「七堂」へつなぎ、更に「八重ざくら」を呼び出したところ、工夫の存するところである。それによって奈良の古い歴史、皇居や大寺院の荘厳さが思い浮び、それらを背景に八重桜が華やかに咲く春爛漫の趣が展開されるのである。『詞花集』巻一に見える前記伊勢大輔の古歌を心に置いていることはいうまでもなく、加藤楸邨氏が、

　上五が柔かく、中七が強く豪壮に、下五が優しく、また母音aが九回も繰り返されて全体が音楽的な諧調を備え

ている。（『芭蕉全句』）

と指摘された点で成功している。ただ、前記の元好の外、『続山井』に「名所や奈良は七堂八重桜」という如貞の句もあり、これらの先蹤作があって見れば、一句の新味は専ら快い諧調を持つ点のみということになろう。

露沾公にて

*948* 西行の菴もあらん花の庭 （泊船集）

春季（花）。

**語釈** ○**露沾公** 「ロセンコウ」。内藤氏、名は義英。岩城平七万石の藩主内藤義泰（俳号風虎）の次男で、世子として下野守を称したが、天和二年二十八歳の時退身し、以後は専ら風月に遊んだ。父子共に俳名高く、芭蕉とも早くから交流がある。『笈の小文』や『おくのほそ道』の旅に餞別吟を贈り、その外にも交渉のあったことが知られている。享保十八（一七三三）年九月十四日岩城で歿した。享年七十九。（Ⅱ*289*）参照。「公」は敬称。「露沾公にて余寒の当座」（『猿蓑』巻四、亀翁発句「春風に」前書）。○**西行の菴** 「西行の菴」「西行」は既出（Ⅰ*190*前書等）。彼は花を愛したのでいう。「菴」は「庵」に同じ。○**花の庭** 「花」は、桜を指す。

**大意** この見事な花のお庭には、桜を愛した西行の庵でもありそうですな。

**考** 蝶夢の『芭蕉翁発句集』に元禄六年作とする外、年代について徴すべき資料はない。江戸で露沾の住んだ内藤藩の屋敷は、麻布六本木にあったという。句は花盛りの大名屋敷の庭をほめた挨拶までであるが、

大名の庭など見て句作、景色悉く誉んと句作すれば、還而いやしく成也。心得有べし。西行法師は、桜に一入名高し。庭に瓦にて作れる西行を居たる、有ものなり。意味自得すべし。（東海呑吐『句解』）

という解は穏当である。古注以来、吉野山の西行庵（Ⅰ201、Ⅱ370参照）と関連づける説が多く、名高い所ゆえ勿論それも考えてよいが、それだけに限定するいわれはなかろう。

　しづかならんと思けるころ、花見に人〻まうできたりければ、
花見にとむれつゝ人のくるのみぞあたらさくらのとがには有ける（『山家集』上）

という歌によって脚色された謡曲「西行桜」も著名であって、これは京の西山にあったことになっており、「都より此御庭の花を見たき由申して、これまでみなく〱御いでにて候」ともある。この句の背景には、「西行桜」の趣も考えて然るべきである。

949　松茸やかぶ(ママ)れた程は松の形（誹諧曾我）　蕉翁句集

秋季（松茸）。

**語釈**　○**松茸**　既出（Ｖ888）。○**かぶれた程は**　「かぶれる」は、他物の影響で茸の表面が変色するような状態をいう。「かぶれた」は口語調である。「程(ほど)」は、この場合「様子」というほどの意。「春の野やいづれの草にかぶれけん尼羽紅」（『続猿蓑』下）。○**松の形**　「形(なり)」は、姿。

**大意**　松茸は、そのかぶれた様子まで、松の姿にそっくりだ。

**考**　『誹諧曾我』（白雪撰、元禄十二年刊）初出で、『蕉翁句集』は元禄五年の部に入れ、許六の『泊船集書入』に「いガ」と頭注があり、『句選年考』には或る行脚僧の言として、「松茸やしらぬ木の葉のへばり付」の句と同じく、伊賀山中の吟と伝えている。これら年代に関する所伝の根拠は、何れも明らかでない。
　句の内容については諸説がある。

松に笠松とて、かさのごとく葉を茂みたるあり。松茸も自然に松のすがたに生れ付たるかとならん。（東海呑吐『句解』）

……松茸のかさのかぶさつたやうになつてゐる所が、松の木の形に似てゐるといふのぢや。彼の松の絵など書くときに傘の如く書いたのがある……（内藤鳴雪『評釈』）

等というのは、松茸の形を笠松に擬したというのであるが、「かぶれた程は」という句の表現に相応しくあるまい。

其露の凝てその形をなす。……かぶれ殊に松皮の色をあらはすもの也。（杜哉『蒙引』）

との説は、かぶれた部分の色が松の幹の皮の色に似ているというのであろうが、「松の形」はどうしても「姿」であって、色とはちがう。また、『続々芭蕉俳句研究』に、

……松茸の傘のところに一寸変色たところがある。それはこぼれ松葉の形であるといふのです。よくきのこの傘に木の葉がへばりついて、そこだけかぶれたやうに、葉の痕跡をのこしてゐるのがあります。（太田水穂）

松だけの傘にいささか松葉の痕跡を印してゐるのです。これは余談であるが、野州の唐沢山は松茸を多年将軍家へ献上するところであつたが、そこでは葵の紋のついた土器をその松茸の生えるところへ置く、すると松茸の傘へその紋形が印せられる。かぶれたほどは葵形である。（幸田露伴）

等とある説は、精しく考えたもので一応首肯し得る。加藤楸邨・山本健吉両氏も、松葉の形にかぶれているとする見方である。しかし、それなら「かぶれたほどは松葉形」（『続々芭蕉俳句研究』和辻哲郎説）とあるべきだというのも一応の理であって、松の葉に限定せずに、

松茸には傘や柄が傷んで変色している部分がよくある。その様子を、松の樹に青黒く苔がついたり、樹皮が剝げたりするさまに思い寄せた。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

とする解は、筋が通っているといえよう。私は「松葉形」の意味を「松の形」といっても、咎め立てする程の瑕瑾で

はないと思うが、［大意］は松全体の姿に擬したものとして解した。

950　此寺は庭一盃のばせを哉　（誹諧曾我）

蕉翁句集

秋季（ばせを）。

**語釈**　○**此寺**　「此の寺」。○**庭一盃のばせを**　「庭一盃の芭蕉」。庭の全面を覆うようにひろがった芭蕉の樹のさまをあらわす。「ばせを」は既出（I 134等）。「蕉」の字音は「セウ」が正しいが、中世以来「せを」という仮名遣が慣用化していた。「しょろ〳〵水に蘭のそよぐらん　凡兆　糸桜腹いっぱひに咲にけり　去来」（『猿蓑』巻五）「**Igrejani fitoga ippai maitta.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　この寺は庭一ぱいに芭蕉の葉が伸びひろがって、珍しい眺めだ。

**考**　前の句と同じく『誹諧曾我』初出で、『蕉翁句集』は元禄五年の部に入れている。
樹は一本でも数本でも、芭蕉の葉蔭に覆われてしまう程の庭は、そう広くはない。大寺の趣ではなく、市中の禅寺などの庭であろう。「庭一盃の」と俗語を用いて誇張した俳諧である。山本健吉氏は、芭蕉号にかけて「自分が芭蕉だから自分が大きな顔でのさばっている、という意味で、ユーモラスなものを感じとっているのだ」（『芭蕉全発句』）と見ておられる。

951　物ほしや布袋のふくろ月と花　（旅袋）

畫　賛

布袋の繪讃

物ほしや袋のうちの月と花（続別座敷）――蕉翁句集草稿・蕉翁句集

雑。

**語釈** ○**物ほしや** 「物欲しや」。「Foxij.」（『日葡辞書』）。○**布袋のふくろ** 「布袋の袋」。「布袋」は、九世紀から十世紀にかけて在世した中国後梁の高僧。太鼓腹の肥満体で、杖を携え、日用品を入れた袋を荷って、市中で吉凶や天候を占なったという。我が国では七福人の一人とされ、画像や彫像で親しまれた。「布袋の伯母見るやう」（『譬喩尽』）。○**月と花** 風雅を代表する季物。秋の月と春の花を連ねて、雑の扱いになる。（Ⅱ416）参照。

**大意** 布袋様の袋に詰まった月や花の風雅の材。それを思うと、そぞろ物欲しい気持になることだ。

**考** 『蕉翁句集草稿』と『蕉翁句集』には「布袋画賛」と前書があり、『蕉翁句集』は元禄七年の部に入れている。句形については、『句集草稿』で土芳が『旅袋』（路健撰、元禄十二年刊）を参照しつつも、『続別座敷』（子珊撰、元禄十三年刊）に従っていることは留意すべきで、『旅袋』の句形は、中七から下五への続きが措辞不束かでもある。しかし、『旅袋』は『続別座敷』より一年早い初出である上に、

　此句古翁の遺稿なり。今見るも懐かしき記念なれば、巻の首に出し侍りぬ。

と注して出しており、一概に杜撰とも言い切れない。布袋の名は出さなくとも分るし、「袋のうち」の方が分りやすいけれども、『旅袋』の句形でも同じ内容のことを理解するのに手間はかからないと思う。私は初出として、『旅袋』の無造作な句形を尊重したいのである。

　蓼太の『芭蕉句解』に、

　烏丸光広卿黄葉集、指月布袋の讃に　大空をさしたる指の先にこそ月雪花も秋の紅葉も。句意よく此哥にかよひて無尽蔵の禅味といふべし。

と指摘されて以来、古注には右の光広の歌を引くものが多い。布袋に風雅の種を結び付ける発想は確かに似ており、

此処から脱化して、袋の中に月と花が詰まっていると興じたと見てよかろう。「無尽蔵の禅味」かどうかは兎も角、俳諧の一興ではある。堀信夫氏は、

清貧をもって知られる芭蕉が、いきなり「物ほしや」と切り出すところに意表をつく悪戯があり、さてその後でやおら「月と花」と数えあげる。その軽妙なトリックに、この句の面白さがある。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』）

と鑑賞しておられる。

952
## まとふど（ママ）な犬ふみつけて猫の戀　（茶の草子）

菊の道・蕉翁句集草稿

春季（猫の恋）。

**語釈**　**○まとふどな犬**　「まとふどな」は、「全人（またうど）な」で、実直・生真面目の意から、愚直・間抜けの意にもなる形容動詞。ここは口語調の俗語表現で、「まとふど」は「またうど」と書くべきところである。「またうどといふは、たはけの唐名成といへり」（『為愚痴物語』巻八）「Matôdo.」（『日葡辞書』）。**○ふみつけて**　「踏（ふ）み付（つ）けて」。犬を踏み付けるのである。「つみすてゝ蹈付がたき若な哉　路通」（『猿蓑』巻四）「Fumitçuqe, ru, eta.」（『日葡辞書』）。**○猫の恋**　発情期の猫のさまをあらわす季語。既出（Ⅳ*739*）。「猫の妻」（Ⅰ*71*、Ⅳ*660*）参照。

**大意**　間抜けな犬を踏み付けて、猫は恋に夢中だ。

**考**　『蕉翁句集草稿』には、

此句、豊前の婦人紫白が菊の道と云集に、翁の句也と有。無覚束。仍而引句。

とあり、『蕉翁句集』にも入っていない。しかし、『菊の道』（元禄十三年刊）より一年早い『茶の草子』（雪丸・桃先撰）に

初めて収められた句なので、強いて疑う理由はないと思う。但し、年代に関する古い資料は皆無である。
　元来犬はひとが善くて真面目、人間には従順であるが、猫は自己本位で勝手なところがある。恋に目のくらんだ猫が、普段は恐れている犬でも、臥(ね)ている上を踏み付けて行ったというこの情景も、そういう犬猫のちがいを背景にして見ると、一層面白い。踏まれて起き返った犬が、ぽかんとして猫の姿を見送っているさままで目に浮ぶようである。自然其処には人の世のさまにも通ずるものがあり、真面目に読もうとする鑑賞もあるが、目立つ俗語を使ったところは、やはり興じた趣が中心であろう。談林期の作としても通ずる句柄である。

あさくさ千里がもとにて

*953*　苔(ママ)汁の手ぎは見せけり浅黄椀　（茶の草子）

春季（のり）。

**語釈**　○**あさくさ**　「浅草(あさくさ)」。東京都台東区東部の地名。江戸の町が拓ける前から、金龍山浅草寺（浅草の観音さま）の門前町があった。○**千里がもとにて**　「千里(ちり)が許(もと)にて」。「千里」は苗村氏。通称は粕屋甚四郎、或いは油屋喜右衛門とも伝えられる。大和葛城郡竹内村（現奈良県北葛城郡当麻町）の出身で、貞享元年秋『野ざらし紀行』の旅では、その故郷の村まで芭蕉に同行した。当面の前書によって、江戸では浅草に住んでいたことが知られる。享保元（一七一六）年七月十八日歿、享年六十九。（I *196*）参照。○**苔汁**　「ノリジル」。海藻の「のり」を実にした汁。『寛永料理集』に「甘苔、ひやじる、あぶりさかな、浅草のり」と見え、のりは地元の名産であった。但し「浅草のり」の名の由来は、浅草辺の隅田川で養殖したからとも、浅草寺境内で売ったからともいわれて確かでない。「のり」は「海苔」の字を宛てるが、省略して「苔」だけでも慣用された。既出（II *280*）。「浅草海苔名物也。……品川海苔を隅田川の水にてさらし、乾しのりにしたる也。然るに近来は、干場は紺屋の張場となり、海苔の乾す場所見えず。されば品川にて仕立たるを取寄るごとくおもふ」（『飛鳥川』）。○**手ぎは見せけり**　「手際(てぎは)見せけり」。「手ぎは」は、技術の上手さ、腕前。

料理の出来を褒めたのである。「かはらけの手ぎは見せばや菊の花　其角」（『あら野』巻四）「Teguiuano yoi, l, varui saicu.」（『日葡辞書』）。○**浅黄椀**　「アサギワン」。黒い漆塗りの上に浅葱色または紅白の漆で花鳥などの模様を描いた椀。「薄浅黄」（V *943*）参照。「二条南北新町所レ製謂二縹椀一。黒漆上以二縹色并赤白之漆一画二花鳥一」（『雍州府志』巻七）「梅が香や客の鼻には浅黄わん　許六」（『記念題』）「**Asagui.**」「**Van. Tamabuchino aruuo yŭ nari.**」（『日葡辞書』）。

**大意**　色合のよい浅黄椀に盛って、浅草に相応しい海苔汁は、まことに結構なおもてなし。料理の腕を見せましたな。

**考**　年代に関する手掛りが全くない句である。貞享元年またはそれ以前とする見方は、千里が野ざらしの旅に同行したことを考慮するのであろうが、それだけでは根拠薄弱であろう。

千里に招かれてもてなしを謝した挨拶の句である。浅草名産の海苔汁を取上げたのは俳味も十分で、賞翫の意は器物にも及んでいる。

外の汁は包丁人の手際を見するが、この汁は浅黄椀が手際をみするとの曲なり。（杜哉『蒙引』）

と解しては良くない。また千里自身が料理したと見るにも及ばぬことで、もてなしに出た料理を褒めれば、それが亭主への挨拶になるのである。『猿蓑』巻五に収める歌仙鳶の羽の巻の付合、

芙蓉のはなのはら〳〵とちる　史邦
吸物は先出来されしすいぜんじ　芭蕉

を想わせる句柄であって、熊本産の水前寺海苔は川海苔であるが、これまた吸物の実として用いられたのを賞した趣向であった。

*954*　なに喰て小家は秋の柳蔭　（茶の草子）

秋季。

**語釈** ○**なに喰て** 「何喰うて」。「喰ひて」ともよめる。「象潟や料理何くふ神祭　曾良」(『おくのほそ道』)。○**小家** 「コイヘ」。「門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆」(『猿蓑』巻一)「Coiye. l, xôqe.」(『日葡辞書』)。○**柳陰** 「ヤナギカゲ」。柳の木蔭。「池に鵜なし仮名書習ふ柳陰　素堂」(『あら野』巻二)。

**大意** 葉の散りそめた秋の柳の木蔭に、ささやかな家が見える。あの家に住む人は、一体何を食べて生きているのだろう。

**考** 年代不明。葉の散りそめた秋の柳には、そこはかとない侘しさが漂う。そういう柳の立つ川のほとりの堤下などに、ひっそりとある小家を見て、其処に住む人の生活を思い遣ったのである。「なに喰うて生くるぞ」という呟きを言い残した形で、取立てて趣向も技巧もないだけに、却ってしみじみとした人生の寂寥感が句の世界をひたしている。

この心のたどりゆく筋には、生きてゆくことのあわれさを深く感じているところが見える。「何喰うて」というこの発想の性格から見て、初期や中期のものではないようである。いうまでもなく、「何喰うて」は決して小家の生活を蔑んだものではない。「秋深き隣は何をする人ぞ」に一脈通うものがあるようだ。因みに蕪村にも「凩や何に世渡る家五軒」の作がある。(『芭蕉全句』)という加藤楸邨氏の所説を玩味したい。

*955* むめが香に追もどさるゝ寒さかな　(荒小田)

春季(むめが香)。

**語釈** ○**むめが香** 「梅が香」。「梅」を「むめ」と表記した例は既出（V 831）。○**追もどさるゝ** 「追ひ戻さるゝ」。ここは、一旦去った寒さが再び戻って来たのを、「むめが香」に追われて戻って来たように言い做したのであろう。「もし腹を立てたならば、売僧でござらうによつて、追戻いてやりませうが」（狂言「腹不立」）「Modoxi, su, oita.」（『日葡辞書』）。○**寒さ** 本来は冬の季語ながら、ここでは「むめが香」との関係や「もどさるゝ」とあるのによって、余寒の意になる。

**大意** 寒の戻りの寒さの中で、梅の花が馥郁と匂っている。まるで梅の香りに寒さが追い戻されて来たようだ。

**考** 『荒小田』（舎羅撰、元禄十四年刊）以外に芭蕉と同時代の書には見えない句である。

「追もどさるゝ寒さ」は余寒を意味するものと見て、一応右のように解したが、「むめが香」が冬の物ならば兎も角、春の物に「追もどさるゝ」とは納得が行かない。その為か、

あるいは、「梅が香にのつと日の出る山路かな」が定着するまでの一過程を示す作と見うるかもしれない。……「梅が香に」は、ここに小休止を置いて読むべきであろう。……梅が香によって追いもどされる、梅が香のところに追いもどされるなどの意ではなく、「追ひもどさるる」は直接「寒さ」を修飾し、寒さが追いもどされるの意であろう。ただし、梅が香に誘い出されたものの、余寒のきびしさのために、追いもどされるように家にもどった、と解されなくはない。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

余寒の厳しい早春、梅の花の香が匂ってくると、さすがに春めいた感覚で、寒さが追戻されるような感じがするというのである。単純すぎて只事に近い。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

余寒の頃は、暖かさも一進一退を繰り返しながらやってくる。その寒さのぶり返すことを、冴え返るという。その逆に寒さが後退することを「追もどさるゝ」と言い立てたものであろう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏）

等、異説が多い。要するに言いおおせない不束かな句であって、芭蕉は捨てたものを、歿後になって拾い上げた句な

のである。

山　家

956　鸛の巣に嵐の外のさくら哉　（焦尾琴）

あくた川

山　家

靏の巣のあらしの外の櫻哉　（蕉翁句集）

靏の巣にあらしの外のさくらかな　（鵲尾冠）

春季（さくら）。

**語釈**　○**山家**「ヤマガ」。山中の家。ここは隠者の住居などであろう。既出（Ⅰ222前書）。○**鸛の巣**「鸛（こふ）」は、こうのとり。その巣は季を持たない。既出（Ⅱ282）。○**嵐の外のさくら**「嵐（あらし）の外（ほか）の桜（さくら）」。荒い風にもさらされずに、その影響の局外に桜があることをいう。

**大意**　この山家のあたりには、高い樹上にこうのとりが巣を作り、荒い風にもさらされずに、桜がひっそりと咲いている。まことに閑静なお住居だ。

**考**　『焦尾琴』（其角撰、元禄十四年刊）初出の句で、『蕉翁句集』が元禄二年の部に入れている根拠は明らかでない。それよりも、貞享四年の『続虚栗』（其角撰）所収の「鸛（コウ）の巣もみらるゝ花の葉越哉」（Ⅱ282）の句が、当面の句と題材・表現が共通しており、右の句の別案とする見方は、かなり有力であろう。「鸛」を「靏（つる）」（鶴）とした異形は明らかな誤写で信ずるに足らず、「巣の」（『蕉翁句集』）も措辞整わないから、問題にならぬ。

古注には句の内容を精確に把握した解が殆んどない。漸く幸田露伴の左の解に至って、定説を得たようである。即

ち、

鸛の巣が空高い梢にある。そこに松風が声を立ててゐる。さくらの花はその嵐をよそにおほどかに咲いてゐる。鸛の巣に吹いてゐる松の嵐の外に……といふのである。「嵐の外」は一句の眼である。おそろしい使ひ方である。何とも云へないよいよい心持の句である。……鸛は鸛づると云つて矢張り鶴に大抵肖たものですが、私は鶴とあつても鸛づると解したい位におもつて居ます。（『続々芭蕉俳句研究』）

とあるが、松は句の表には出ておらず、松に鶴といった画の趣を考えているのであろう。鸛の巣が桜以外の樹上にあるのか、或いは桜の梢にその巣があるのかは、何れでも通ずる。「嵐の外の」という表現によって、世外の隠者への挨拶の気持を籠めているのである。

コウノトリが巣をかけるほどの木といえば桜の大木である。芭蕉はある人を山家に訪ねて、コウノトリが梢に巣くった桜の古木を見た。それが人に知られず静かに咲きみちているさまに、浮世の外に静かな境涯をおくっている主（あるじ）のさまをふくめて「嵐の外の」といった。山家に隠棲している主への挨拶句である。（『芭蕉全発句』）

という山本健吉氏の解も良く、これは鸛の巣が桜の梢頭にあるものと見ている。

957　聲よくばうたはふものをさくら散　（砂燕）

初便

聲よくばうたはむものを櫻ちる　（鹿島紀行附録）

春季（さくら散）。

**語釈**　○**声よくば**　「声良（こあよ）くば」。「ば」は仮定条件をあらわすが、謡曲では「よくは」と濁らないところから、ここもそれに倣って「は」とよむ説もある。しかし「うたはふ」が口語的な言い方だから、「ば」でよいであろう。○**うたはふものを**　「謡（うた）はうものを」。

「うたふ」はこの場合、謡曲の詞章をうたう意。（Ⅱ *442* 前書）参照。「ふ」は、口語の意志の助動詞「う」の慣用表記である。既出（Ⅰ *218*、Ⅱ *360*）。「ものを」は、口語の「のに」に相当する逆接表現で、詠嘆の気持を含み、ここで切れる。既出（Ⅳ *750*）。**○さくら散** 「桜散る」。「ちるはな」（Ⅴ *913*）参照。「春めくや人さまぐ〳〵の伊勢まいり　荷兮　桜ちる中馬ながく連　重五」（『はるの日』）。

**大意** 声が良ければ、謡を一節うたうのになあ。桜が散る風情は何ともいえない。

**考** 幕末期の『芭蕉翁真蹟拾遺』（大虫編）には、『笈の小文』の旅中吟等を十二句列記した小築菴春湖蔵の真蹟中の句として当面の句があり、貞享五年の吉野の花見に際しては、「はなのかげうたひに似たるたび寐哉」（Ⅱ *365*）「扇にて酒くむかげやちる桜」（Ⅱ *369*）等の句もあった。従って貞享五年春の作と見る説は有力ではあるが、真蹟の所在が明らかでないので、原物の出現するまで決定的なことは言えない。『鹿島紀行附録』の句形は、「うたはむ」と標準的な表現にしただけで、内容に変りはないから、『砂燕』（寸虎撰、元禄十四年刊）等、古い資料に見える句形を本位句とすべきである。

花に興ずる趣を口語風の表現に託した即興句で、「胸懐を丸出しに且つ無邪気に叙した所は一寸面白い」（内藤鳴雪『評釈』）と言うまでのものである。芭蕉も花見の席で御機嫌になると、謡曲の一節を謡うことがあった（Ⅴ *832*）。

*958*　春雨や簑吹かえす川柳　（裸麦）　　蕉翁句集

春季（春雨・川柳）。

**語釈** **○簑吹かえす川柳** 「簑吹き返す川柳」。川辺の枝垂柳に風が吹いて、あたりを行く人の着た蓑を、柳の枝が吹き返すように見えるさまである。「かえす」は「かへす」の仮名ちがい。「猪に吹かへさるゝともしかな　正秀」（『猿蓑』巻二）「時〳〵は水にかちけり川やなぎ　意元」（『続猿蓑』下）「Fuqicayexi, su, eita.」（『日葡辞書』）。

**大意**　春雨がしとしとと降る。風に吹かれた川辺の枝垂柳の枝が、道行く人の蓑を吹き返していることよ。

**考**　『裸麦』（曾米撰、元禄十四年刊）初出の句。『蕉翁句集』が元禄七年の部に入れた根拠は詳らかでない。

古注には、

岸根にづいと芽出せる柳の、みの毛さか立に似たるをいへり。雨に蓑、縁あり。猶、蓑立のよそほひも思ひやられぬ。（杜哉『蒙引』）

という風に、柳の芽を蓑毛にたとえたという見方もあるが、無理な解釈であろう。これは春雨に風も加わった荒模様の川辺の景色を描いた句で、

春の雨が降つて居る川端などの景で、川風が吹くので柳の枝が其風の方向に吹かれて居る、そこへ蓑を着て居る人が通ると、此柳の枝が其蓑に触れる、風に吹き返されて居る蓑が、こちらから見ると恰も柳の枝の為に吹返されて居るかの様に見える、換言すれば蓑が柳の枝に吹返されて居ると云ふ事で、作者の客観景に主観を交へて叙したもの……（『芭蕉句集講義』牧野望東）

と解すべきである。宛かも柳の枝が人の着た蓑を吹き返すかのように言い做したのが趣向であって、無理な表現という見方もあるが、風を直接言わずに「吹く」で風を思わせることは珍しくなく、この句にしても、内容を把握するのにさして手間は掛らない。墨絵などに有りそうな景色で、蕪村にも「筏士の蓑やあらしの花ごろも」の句があるように、蓑を着た人は舟上にある船頭であってもよかろう。これはこれでまとまった句と見られ、未成品ではないが、柳の枝が蓑を吹くように言った趣向はやはりわざとらしく、佳句とは言えない。

*959*　葉にそむく椿や花のよそ心（放鳥集）

春季（椿）。

**語釈** **○葉にそむく椿や**　「椿（つばき）」の花が、葉とは別の方向を向いて咲いているさまを「そむく」といった。「や」は詠嘆の切字。「椿」は既出（Ⅲ584）。「腹（はら）いたむとて返事（へんじ）もせず、そむきて寝（ね）入ば」（『好色一代女』巻二）。**○よそ心**　「外心（よそごころ）」。冷淡なよそよそしい気持。男の浮気心などをいう場合が多い。「雨のふる夜にたがぬれてこその、たそとおしやるはよそ心」（『竹斎』上）。

**大意**　葉と別の方向を向いて咲く椿の花よ。さしずめ花がつれない気持を抱いているといったところだ。

**考**　年代不明。『放鳥集』（晩柳撰、元禄十四年刊）には、

此句、武陵のヿ斎が、うらめしやあちら向たる花椿といふ先作ありと門人何某がいひて、捨玉ふとかや承侍れど、そのかみなつかしく、こゝにしるし侍る。

と注して出している。ヿ斎は其角と親しく、芭蕉とも交渉のあった江戸の俳人であるが、その句との等類をさる門人から指摘されたのが何時のことだったか、徴すべき資料がない。

句は、椿の花の咲き具合を「よそ心」と擬人化して興じたまでである。即ち、

一本の椿があつて、花は花で咲いてゐる、葉は葉で茂つてゐる、花と葉が何となく関係を持たずに、互ひに余所々々しく即ち余所心でゐるといふのを修辞上斯く花の方より言葉を立てたので、即ち葉に背く椿の木よ其花は葉に対して全く余所心でゐるといったのである。実際椿には個様な趣があるといへばあるやうぢや。（内藤鳴雪『評釈』）

と解するのが穏当であろう。花の落ちるさまと見る説もあるが、

椿の花を花瓶に入れようとして見ると、此の句はよくわかる。椿の花といふものは葉と花の調子がよく合はないものである。（『続芭蕉俳句研究』幸田露伴）

という説を参照すれば、落ちる時でないことは明らかである。椿の花について一種の発見ではあるが、「よそ心」に

見立てたところは、やはり遊びの気分が強く、物の本質に観入する底の作ではない。

*960*　別ればや笠手に提て夏羽織　（白馬）

夏季（夏羽織）。

**語釈**　**○別ればや**　「ばや」は、一見自己の意志をあらわす助詞の如くであるが、それでは中七以下とのつながりが木に竹を継いだようになってしまう。ここは今栄蔵氏の『芭蕉句集』のように「別れ端や」として、「別れ際」の意にとるのがよい。「別れ端やおもひ出すべき田植哥　傘下」（閏五月廿一日付曾良宛芭蕉書簡）。**○笠手に提て**　「笠手に提げて」。見送りの人々に挨拶する為に、まだ笠をかぶらずにいるのである。「手に提ぐ」は既出（Ⅰ*128*）。**○夏羽織**　「ナツバオリ」。絽・紗など薄地の布を用いた夏用の単の羽織。「羽織」は既出（Ⅰ*116*等）。「柿染の夏羽織、袖の鼠喰を見えぬやうに継を当」（『日本永代蔵』巻五ノ三）。

**大意**　旅立ちの別れ際に、笠は脱いで手に提げ、夏羽織をきちんと身につけて、見送りの人々に挨拶することだ。

**考**　『白馬』（洒堂・正秀撰、元禄十五年刊）初出の句で、年代を知るべき手掛りは何もない。

何丸の『句解大成』に「留別」と前書があるのは、何に拠ったものか明らかではないが、句境は正にそうした場合とすべきであろう。私が初五を「別れ端」と取るのは、中七以下が別れようとする芭蕉自身の姿の客観描写であって、それに対して上に「別ればや」と意志をあらわす表現を冠するのは、ちぐはぐな感じを免れないからである。ここは平凡でも「別れ端」として、客観描写で一貫しないと、仕上りが不束かになると思う。ただ思いつくままの言い捨てであったろうから、出来は平凡でも仕方がない。

之れも人人へ挨拶の句である。それ故に「手にさげて」で無ければならない。此の句が礼儀めいてゐるのも当然のことである。見送りの人人に対して「さあこれで別れよう……」と笠を手にさげて挨拶をしてゐるこくめいな

ところが見える。此の羽織なども今の時代のやうに美麗なものでは勿論無い。「手に持ちて」にすると、だらりとしたものになる。これから夏羽織はぬいでしまひ、笠はいただくのである。（『芭蕉俳句研究』幸田露伴）

という見方は、「ばや」を意志としての説であるが、その点を除いては、よく句情を解し得ている。俗用の「夏羽織」を芭蕉が着るのに疑問を挿む説もあるが、露伴の言うように、必ずしも美麗上等な物とは限らず、旅中何かの時の用意に携えることもあったのであろう。別れ際の礼儀にそれを着込んで、発途の後は脱いで畳み、荷物の中に入れるのである。挨拶の時に羽織を着、被り物を取るところに、律儀実直なこの人の性分が見える。

*961*

## 秋海棠西瓜の色に咲にけり（東西夜話）

正風彦根躰・冬紅葉

秋季（秋海棠・西瓜）。

**語釈** **○秋海棠** 「シウカイダウ」。秋海棠科の多年草。茎は六十センチ位、初秋から花梗を出して淡紅色の美しい花を開く。「大和本草云、寛永年中、中華より初て長崎に来る。其花色海棠に似たり。其葉左に顧る有、右に顧る有。他草に異也。……六七月花を開く。日を畏る。陰地に可レ栽。七月に竹を立、助くべし」（『滑稽雑談』）「手拭に紅のつきてや秋海棠（支考）」（『東西夜話』中）「**Caidó.**」（『日葡辞書』）。**○西瓜の色に咲にけり** 「西瓜の色に咲きにけり」。秋海棠の淡紅色の花を西瓜の実の色に譬えて興じた表現である。「西瓜のたち売は、行燈の朱を奪ふ事を憎」（『根無草』巻四）「**Suiqua.**」（『日葡辞書』）。

**大意** 秋海棠の花が、西瓜の実の色に咲いていることよ。

**考** 『正風彦根躰』（許六撰、正徳二年刊）には「画賛」と前書がある。句の初出する『東西夜話』（支考著、元禄十五年）には、句の成立について、支考の左のような記事が見える。

先師むかし湖南の曲翠亭におはして、是も水鉢のあたりに此花の咲て侍りしを、此もの殊に句のあるまじき花な

りとて、秋海棠西瓜の色に咲にけりといひ捨られしが、誠に花の色は、洗はゞ落ぬべき也。

恐らく支考は芭蕉の句作の時同席していたと思われ、この記事は信じてよいものであろう。支考が入門して以後、芭蕉が初秋に膳所あたりに居たのは、元禄三、四、七の三箇年であって、このうち三年は曲翠が東下在府中だった。従って句の成立年次は元禄四年か七年ということになるが、今何れかに決定し得る資料は見当らないので、姑く年代不明とする。なお、「画賛」という前書は『東西夜話』の記事と矛盾するように見えるが、句が成った後、自画賛などに仕立てたとすれば、問題は解消しよう。

秋海棠と西瓜と、随分感じのちがうものを、ただ色という一点で結び付けて興じている。しかもそれは理窟ではなく、感覚的な連想に拠っており、一息にずばりと言ったところに爽快感がある。即興の佳句といってよかろう。秋海棠は前に引いた記事にあるように、寛永年中長崎に舶載されたといわれ、西瓜については、『本朝世事談綺』（菊岡沾凉著、享保十九年刊）に、

寛永年中琉球より薩摩へわたる。慶安の頃漸長崎にあり。……承応年中藤堂家の呉服所菱屋某、長崎にて此種を求め、勢州津に至て大守にささぐ。則其者の第宅に種さしむ。はなはだ出来たり。此種粗近国にありといへども、いまだ狭し。人又あやしみて食せず。寛文延宝の間、長崎より大坂へつたへ、京江戸に広まりて今さかんなり。

とある。既に慶長の『日葡辞書』に「西瓜」の語が見え、『去来抄』同門評の「猪の鼻ぐすつかす西瓜かな」の句の条には、

去来曰、退ておもふに、この比いまだ上方西瓜珍し。正秀もめづらしとおもふ心より、猪のあやしみたるトは風情聞出せり。予は西国生にて、西瓜も瓜茄子の如し。

とある程だから、九州では珍しくなくとも、上方や江戸では珍しいものだったようである。秋海棠と西瓜は、共に在来種でなく、新渡の珍しさという点で、通い合う感じがあったのかも知れない。西瓜より一足早く秋海棠が花をつけ

る点に着目した見方もある。

## 962 朝なく手習すゝむきりぐす（入日記）

秋季（きりぐす）。

語釈 ○朝なく 「朝な朝な」。朝ごとに、毎朝、の意の副詞。「朝な夕な」（Ⅱ267前書）参照。「野辺ちかくいへゐしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなくきく」（『古今集』巻一、よみ人しらず）「Asana asana.」（『日葡辞書』）。○手習すゝむ 「手習進む」。書蹟稽古の技が進む意であろう。「すゝむ」で切れる。「手習ふ」（Ⅰ127）参照。「手習ひは坂に車を押す如し油断をすればあとにもどるぞ」（『松屋筆記』七十七ノ二十八）「せむるものは、その地に足をすへがたく、一歩自然に進む理也」（『三冊子』赤雙紙）「Tenarai.」「Susumi, u, unda.」（『日葡辞書』）。

大意 毎朝々々手習に励んで技が進んで行く。「筆つ虫」の名のあるこおろぎが鳴く頃にもなったことだ。

考 年代不明の句で、『入日記』（雲鈴撰、元禄十六年刊）には、元禄十三年に撰者が佐渡の俳人汎鶴に与えた芭蕉真蹟として出している。

「すゝむ」を他動にとるか自動にとるかで解釈がちがって来る。他動にとれば、

暁方のきりぐ［す］を味じたので、毎朝々々人に手習をせよと勧むる如く鳴くアノきりぐすよ、といふので、きりぐすの朝の声の清しく引立ちて人の惰眠を破る如き趣は何となく人の業務を励ますかにも思はれるものである。殊に読書と言はず手習と言つたのは頗る朝の心持に善くかなつてゐる。（内藤鳴雪『評釈』）

というような解になろう。但し、右の説は「すゝむ」を直ちに「きりぐす」にかけているようであるが、「すゝむ」で切れると見た方が良い。また他動にとれば、

毎朝毎朝、自分ながら手習に精が出るやうな気候になつた、机のほとりに鳴いてゐるきり〴〵すの声も身に沁みるやうだ。（荻原井泉水『芭蕉読本』）

という意になる。他動説は「きり〴〵す」との関係が論理的ながら、面白さが何もないのに対して、自動説は詩興はまさるが、下五が取って付けたようである。何れも一長一短で決定的なことは言えないが、姑く「すゝむ」を自動と見て解しておく。

---

桃盗人

963　煩へば餅をも喰はず桃の花（夜話狂）

煩へば餅はくはじもゝの花（蕉翁句集）

煩へば餅こそ喰はねもゝの花（芭蕉句選拾遺）

春季（桃の花）。

**語釈**　**○煩へば餅をも喰はず**　「煩へば餅をも喰はず」。病臥しているので、草餅も食べずにいる、の意。「煩ふ」は既出（Ⅴ852）。「ば」は、理由をあらわす言い方である。「餅」は、「桃の花」との関係で、ここでは雛祭に食べる「草餅」（Ⅰ170、Ⅳ738）を指す。「よもぎのあも（注、餅）つく事は。からの文にもあめると見ゆれば、をんぞろか（注、勿論）是もけふの題なり」（『山之井』）。**○桃の花**　三月三日の上巳の節供（雛祭）をいう。春の季語。既出（Ⅰ231）。「昼舟に乗るやふしみの桃の花　桃隣」（『炭俵』上）。

**大意**　桃の花咲く上巳の節供だが、病臥しているので、草餅も食べずに居る。

**考**　『夜話狂』（宇中撰、元禄十六年刊）初出の句で、同書には「是はばせを翁の句なるよし、ある人の仰せられしか」と、伝聞による採録であることをことわっている。しかし、句形を異にしながらも『蕉翁句集』に入っているから、信憑性は十分であろう。『句集』と『芭蕉句選拾遺』が貞享三年の成立としているのは、病み上りの吟とされる「観音の

いらかみやりつ花の雲」(Ⅱ256)と同じ頃と見た故か。それだけでは根拠薄弱であって、外に年代を知るべき手掛りはない。

病臥中の即興句で、草餅も食べずに、ただ桃の花を眺め暮らしているというまでであろう。餅を食べないのは、食欲がないのか、不消化だからか、その辺は余り詮索したくない。ただうつらうつらと花を眺めているさまに、病中のけだるい気分が感ぜられ、「花より団子」の諺の連想が、ほのかな笑いを誘う。それを、

句面はをかしくいひ給へれど、死すとも風雅は休せじとの素志みゆ。(杜哉『蒙引』)

病に沈て餅は咽へ通らねども、桃の花を水に浸して服す。是又飲食の差別はなしと見破り玉ふ。(何丸『句解大成』)

などと解しては、ひいきの引き倒しである。潁原博士が『夜話狂』等の句形に拠りつつ、

折からわづらつて居るので草の餅も食へない。だが桃の花だけはゆつくり眺められるといふのであらう。それだと「餅こそ食はね」と言つた方が、句意がはつきりする。(『新講』)

と言われたのも尤もではあるが、『句選拾遺』の形では余りに露骨であろう。加藤楸邨氏の『芭蕉全句』では『蕉翁句集』の所伝を採り、

……食慾がないので、草餅の時節だがそれは食べないでおこう。しかし、桃の花だけはしみじみ見ることにしよう」という意。……軽い即興の句として味わうべきである。「餅(もち)をも食はず」は「折角の餅さえも食わない」の意に近く、「餅こそ食はね」という形だと、はっきり「餅を食わない。けれども」という傾きをもつことになる。

と解している。「餅はくはじ」の場合、「餅」は「モチヒ」と訓むべきこと言うまでもない。

三句形何れも拠る所が明らかでないが、非として却ける理由も見当らぬ。就中「餅をも喰はず」は、一見ぼんやりした感じであるが、病中の懶い気分にも叶い、おっとりとして感じが良いと思う。初出でもあるこの句形を本位句とした所以である。「餅こそ喰はね」——→「餅はくはじ」——→「餅をも喰はず」の順に推敲されたのかも知れない。

964

# 日にかゝる雲やしばしのわたりどり（渡鳥集）

日にかゝる影やしばしのわたり鳥（泊船集書入）

目にかゝる雲やしばしの渡り鳥（蕉翁句集）

秋季（わたりどり）。

**語釈** **○日にかゝる雲や**　渡り鳥の大群が太陽を遮って空を行くさまを「日に懸る雲」といった。「や」は詠嘆の切字。**○しばし**「暫し」。鳥の影が陽光を遮るのも、暫らくの間なのである。**○わたりどり**「渡り鳥」。季節的に海を越えて移動する候鳥。移動は春秋の両季に行われるが、春の渡りは北へ帰るものも南から来るものも、集団になることはないという。これに対して秋の渡りは、シベリアやカムチャツカ方面から、鶫・真鶸などの大群が飛来し、内地を移動する椋鳥・鶲も、雲と見紛う何万という群れが南下する。秋の渡り鳥は目立つところから、秋季とされたようである。「小鳥渡る　秌也。小鳥と斗は雑也。色鳥と云も秌也。小鳥どもの事也」（『御傘』）「近頃、小鳥と計も秋に用ゆる。句作によるべし。唯、鳥渡るも秋か。可レ考」（『滑稽雑談』）「故郷も今はかり寝や渡鳥　去来」（『今日の昔』）。

**大意**　渡り鳥の大群が、暫らくの間日ざしを遮って空を渡って行く。まるで太陽にかかる雲のようだなあ。

**考**　初出の『渡鳥集』（卯七・去来撰、宝永元年刊）の巻頭にある支考の「贈芭蕉翁御句文」に、

十里亭の何がし撰集の望み有。其名を渡り鳥とかいふなるよし。先師に此句有て、西花坊が笈の中に久しくかくし置ける。此度此名の相あへる事の尊とければ、贈りて此集の歓に備へける。

とあり、この集の名に因んで支考の手許にあった芭蕉の句を贈ったことが知られる。ただ成立年代については何も触れておらず、『蕉翁句集』が元禄七年の部に入れた根拠も明らかでない。その句形「目にかゝる」は「日」の誤写であるべく、『泊船集書入』の句形も所拠不明で、初出の句形が最も信憑性が高い。

古注から近代に至るまで、「目にかゝる」の句形を採って、解釈に苦しんでいる。頴原博士が、『句選拾遺』に「めに」とあるのは、日を目と見誤つた杜撰であらう。然るに最近の句集・全集類に至るまで、すべてその誤りを襲うて居るのは、『渡鳥集』の原拠に全く気づかなかつた為である。……

渡鳥が群をなして飛去り飛来る時、遠く之を望めば全く雲かと誤またれる。鳥雲・鳥曇り等の語がある所以である。句は渡鳥の一団がしばし雲の如く天日を覆うたさまである。日に翳した雲かと思へば、暫しの間ですぐ晴れてしまつた。あゝ渡鳥だつたのだ。さういつた表現である。(『新講』)

と述べられた説で、初めて明解を得た。加藤楸邨氏は、それでは面白さが乏しいとして、

「日の面に薄々と雲がかかる、そのしばらくの間を、高い空を渡る渡り鳥の群れが見えて来る」という意。……日が翳ったしばらくの間は見えていた渡り鳥が、雲が流れ去ると、まぶしさのうちに、空の蒼さに溶け込んでふたたび見えなくなってしまう、そういう微妙なところをとらえている作であろう。(『芭蕉全句』)

と解しておられるが、日が翳った間は見えていたというのは却って分りにくく、渡り鳥の大群が空を覆うて移動する大景の力には及ばないと思う。やはり頴原博士の解に従うべきであろう。楸邨氏は『芭蕉講座』発句篇の時代から右の解であったが、

……「渡り鳥」の行方を見送つてゐる芭蕉の目付が感ぜられるのは私だけではあるまい。

此 の 秋 は 何 で 年 よ る 雲 に 鳥

の句が思ひ合はされてくるのである。(『芭蕉講座』発句篇(下))

という鑑賞は優れている。切字を上に置いて、「しばしのわたりどり」と言い納めた表現が、そうした余韻を感じさせるのである。

岱水亭影待に

## 965　雨折く思ふ事なき早苗哉　（木曾の谿）

蕉翁句集草稿・蕉翁句集・続寒菊

夏季（早苗）。

**語釈**　○**岱水亭**「タイスヰテイ」。岱水は深川住の蕉門俳人。既出（Ⅳ*796*）。○**影待**「カゲマチ」。正月・五月・九月の吉日に、知友を集め徹夜して日の出を拝する行事。近世には宗教的な意味は稀薄になって遊楽化した。既出（Ⅳ*796*）。○**雨折く**「雨折く」。雨が時折適宜に降って、旱などの憂いがないことをいう。○**思ふ事なき早苗**「思ふ事無き早苗」。天候が順調なので、苗代に育つ稲の苗（早苗）に何の心配もないのである。「早苗」は既出（Ⅲ*476*等）。

**大意**　夏に入って雨も時折適宜に降り、天候も順調だ。早苗の成長に何の心配もない。

**考**　『蕉翁句集』に「岱水亭」と前書して、貞享四年の部に入れているが、年代推定の根拠は明らかでない。元禄六年までには成っていた筈の「影待や菊の香のする豆腐串」（Ⅳ*796*）の句も岱水亭での吟であるが、これは九月の影待だから、当面の句とは別の時である。元禄七年の五月は、十一日に最後の旅に発途しているので、恐らくこの年ではあるまいが、決定的な裏付けはない。姑く年代不明として後考を待つ。

句は季節の進行が順調で、早苗の成育も良く、農事に何の心配もないことを言ったのである。

不足のない湿りの中に育ってゆく早苗である。「思ふこと無き」はその早苗を生ふし立ててゐる人の心を表はしたのである。（『芭蕉俳句研究』幸田露伴）

雨は不足なく折々降る。その潤ひで早苗は何の心配もなくすくくと生ひ立つて行く。「思ふ事なき」は語法上早苗にかゝつて居るけれども、勿論その早苗を育てる人の心を現はしたのである。影待の席上で折からのよいし

めりを喜んだのであらう。（穎原博士『新講』）
等と見るのが確説であって、「思ふ事なき」を、「後の世の事をだにしらで罪ふかきさま」（蚕臥『新巻』）としたり、「早苗を擬人法にして早苗自身が何事も思ふ所なく元気よく生育しつゝあると言つた」（内藤鳴雪『評釈』）とするのは、考え過ぎて真意を失っている。また岱水への挨拶を重視するところから、岱水自身が農事に携わっていたように考える向きもあるが、必然の論ではない。当時の深川はなお田園の趣があったから、岱水の家からも苗代時の田圃が見渡せたのであろう。その眺望を賞しつつ、五風十雨の順調な天候を言って、農事に心配もないとすることが、そのまま挨拶の意に叶うのだと思う。また、加藤楸邨氏は、
……影待に集まった人々が自然に口にする会話を、そのまま生かしたとでもいうような口吻（こうふん）である。おそらく、影待の夜折悪しく雨になったので、「思ふ事なき早苗」と興ずることによって、挨拶ないしは無念さ解消のよすがとしたものと思われる。（『芭蕉全句』）
とも見ておられる。日常会話の口吻といった感じは確かにあり、恐らくは晩年の作であったろう。

966　蝶鳥のうはつきたつや花の雲　（やどりの松）

春季（蝶・花の雲）。

**語釈**　○**蝶鳥**　「テフトリ」。蝶や鳥。何れも飛ぶもので、春らしい動物の代表として出した。「蝶鳥を待るけしきやものゝ枝　荷兮」（『あら野』巻二）。○**うはつきたつや**　「浮（う）はつき立（た）つや」。「うはつきたつ」は、「浮き立つ」などと同じく、浮き浮きと落着かなくなることをいう。「たつ」は強勢。「や」は詠嘆の切字である。「うわついて日よりと雨の中を行」（『柳多留』十五編）。○**花の雲**　桜の盛りを雲に見立てた表現。既出（Ⅱ 256等）。

大意　雲かと見紛う桜の盛り。春闌わの陽気に、蝶や鳥が浮き浮きと落着かなくなっていることよ。

考　『やどりの松』（雲鼓撰、宝永二年頃刊）以外、古集に所見のない句で、成立年代は明らかでない。蝶と鳥を言い立てているが、花の頃は人の心も浮き立って、花見などに出掛けるわけで、句の背景には勿論そうした春の世態が展望される。画賛を請われて作った即興の言い捨てかも知れない。

967　子に飽くと申す人には花もなし　（類柑子）

春季（花）。

語釈　○子に飽くと申す人　「子に飽くと申す人」。子育てには飽き飽きしたと言う人、の意。「申す」は「言ふ」の丁寧語。「飽く」は既出（Ⅱ412）。○花もなし　「花も無し」。「花」は、自然美や風雅の象徴。内面的な意味で風雅が分らない、風雅な気分がない、というのである。「月華の是やまことのあるじ達」（Ⅱ416）参照。「も」は詠嘆の間投助詞。

大意　子育てに飽きたなどと言う人は、花に象徴される風雅は分らないものだ。

考　『類柑子』（沾洲ら撰、宝永四年刊）初出の句で、年代について徴すべき資料はない。同書には、其角がその娘二人について記した「ひなひく鳥」という文中に、

桐火桶に、抑貫之が万葉の歌にはこれらぞまことある歌といへるに、

日くれたり今かへりなん子なくらん
その子のはゝもわれをまつらむ

と記した後、子への愛を詠んだ数句の最初に当面の句を挙げている。この扱いから見ても、この句は子を愛する誠の心が風雅に通ずることを、裏からいったと見るのが本筋であろう。『一葉集』に「示門人」と前書があるのは、何に

拠ったものか不明であるが、教訓的な寓意を盛った道句と考えたい。潁原博士はそういう教戒的な見方では余りに浅露になるとして、

……「子に飽く」といふ言葉は、市井人の日常口にする所であるが、それは必ずしも子に対する愛情の缺乏を意味するのでなく、たゞ所謂貧乏人の子沢山で、大勢の子供を育てるのに営々として居るといふ程の意である。思ふにこの句の「子に飽くと申す人」といふのは、やはりこの世間日常にいふ意の如く、生活に暇のない人といふ程に解すべきであらう。花よ月よと浮かれるのは世に有る人の事、から子沢山の貧乏に責め立てられては花も何もあつたものではない。さういつた一種の生活苦についての述懐である。(『新講』)

とし、桃印や寿貞関係の係累を抱えた芭蕉晩年の江戸生活を、この句の背景に考えておられる。しかし、この解ではただ事を叙したにとどまって、詩情の掬すべきものを見ない。教訓的な内容でも、「花」に風雅を象徴させる表現の方が、まだ増しであろう。山本健吉氏が訓戒の意味を認めた上で、

「子に飽く」とは子に対する愛情の缺如で、人情に乏しいことであり、「もののあはれ」を知らぬ人であり、したがって風雅にも至らぬ人である。『続五論』に「俳諧はなくてもありぬべし。たゞ世情に和せず、人情に達せざる人は、是を無風雅第一の人といふべし」とあるのは、芭蕉の言いそうな言葉で、まず芭蕉の言葉であることは確かであろう。その気持を句にすればこの句になるのである。(『芭蕉全発句』)

と述べられたのが穏当である。堀信夫氏も同じ立場から、

半ばは照れ臭さから、半ばは謙退から、子に飽きたなど心にもない強がりを言う男に、無理をするな、気楽に親馬鹿ぶりを披露したらいいではないか、とからかい気味に諭しているのであろう。相手は『類柑子』の著者其角その人であったかもしれない。(『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』)

とも見ておられる。これらと聊か異なる説を最後に挙げておこう。

……小供に飽き〳〵したといふ人には花もない、と同様ぢや、といふのを無いと言切つたのである。お前のやうな気では花の面白味も興もないだらう、今少し気を寛かに持つて浮世を軽ろく面白く見て楽まねばならぬ、世帯の苦労ばかりするものぢやない、といふ意であらう。併し裏面は芭蕉翁が親で門人が子で、我れは門人の教育には聊かも飽かぬ、多々益々楽んで花を愛づる心と同様に之を導きつゝあるとほのめかした処もある。（内藤鳴雪『評釈』）

「子への愛に十分満ちたりてしまったと言うような人には、花を友とする風雅のこころも所詮無縁であることだ」というのであろう。……「飽く」のもっとも基本的な意味は、満ち足りるということであるから、ここではしばらくその語義に従って解しておく。句としては、そう解することがいちばんおもしろいようにおもう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

貞徳翁の姿を賛して

*968*　おさな名やしらぬ翁の丸頭巾　（菊の塵）

冬季（頭巾）。

**語釈**　○**貞徳翁の姿**　「貞徳翁」は、戦国末から江戸初期にかけての歌学者、俳人。貞門の中心人物である。（Ⅱ*416*）参照。「翁」は、老人・先輩に対する敬称。ここの「姿」は画像であろう。（Ⅱ*390*）参照。「源氏の絵を見て／欄干に夜ちる花の立すがた　羽紅」（『猿蓑』巻四）。○**賛して**　賛句を書いたことをいう。既出（Ⅲ*612*前書）。○**おさな名**　「幼名」。人が幼少の時の呼び名。貞徳は幼名を小熊といったが、六十四歳の時から「長頭丸」という子供のような別号を称した。ここは後者を意識した表現と思われる。「お」は「を」の仮名ちがい。「おさな名でいつもさぶらふわかゑびす　重友」（『鷹筑波』巻四）。○**しらぬ翁の丸頭巾**　「翁」は貞徳を指

す。「しらぬ翁」が面識のないことをいう古くからの慣用表現であることは［考］参照。「丸頭巾」は、丸い頭巾。大黒頭巾ともいい、僧侶や老人のかぶり物である。「頭巾」は冬の季語。「和俗冬月に戴きて寒霜朔風を禦ぐ者は……其製、角頭巾・丸頭巾・投頭巾・焙烙頭巾・兎毛角毛頭巾等也。最老若に不レ限防レ寒具也。故に冬に許す」（『滑稽雑談』）「今撞木杖に丸頭巾、おとろえはてたる性力」（『男色十寸鏡』下）「Zzuqin.」（『日葡辞書』）。

**大意** お目にかかったこともない貞徳翁ながら、その丸頭巾をかぶったお姿を見ると、長頭丸という子供みたいな名が思われます。その名にふさわしいお姿だ。

**考** 『菊の塵』（園女撰、宝永三年頃刊）初出の句で、年代は明らかでない。「月華の是やまことのあるじ達」（Ⅱ416）とは別の時であろう。

「しらぬ」を上にかけて、「幼名を知らぬ」という風に取ると、有名な貞徳の長頭丸という別号を知らないことになって、解釈が混乱する。古注以来諸説紛々なのは、その辺に原因があろう。素丸の『説叢大全』は、『拾遺集』巻九所収の旋頭歌「ますかゞみそこなるかげにむかひゐて見る時にこそしらぬおきなにあふ心地すれ」と、宗祇が自らの像に賛した歌「うつしおくは我影ながら世のうさをしらぬ翁ぞうらやまれぬる」とに拠ったとする『百菴万々葉』の説を引き、

此句、幼名やといふやは、歎美のやにて、切や也。……幼名はよく知たるなれば、かく五もじに歎美せし也。貞徳如き人の幼名ひとつ知らぬ芭蕉にてもなし。句意は、幼名は勝熊丸とも言し人なれ共、古き人なれば逢ひ見もせず。依て、しらぬ翁と歌の詞を裁入て、其像を動かさずして、其幼名はもとより猛くすさまじきが、後に長頭丸と世に称せらるゝ此道の世話やきのやさ翁となれば、したはしく尊ふとくも思ふに、今此図を見るに、更に対せし思ひして、丸頭巾の俤、いよ〳〵古しへ恋しきと、余情をふくめたる句也。幼名はしらぬといはば、不知也。幼名やと歎美して、其の慕ふ心を籠たるゆへにこそ、句とはなれり。かゝる虚実をしらざる、亦世に多かりき。

と詳説しており、諸注の中で最も筋が通っている。但し、幼名については貞徳の諱との混同があるようで、それよりはやはり「長頭丸」を意識したものと見た方が良いと思う。子供じみた名を称しながら、老人らしく丸頭巾をかぶっているのに興じたのである。最近では、

古人だからその尊顔を拝する機会もなかった貞徳翁であるが、幼名めいた「長頭丸」という名から察するに、さぞ頭の長い容貌であろうと思っていた。しかし、思いもよらぬこの画像のような福徳長者の丸頭巾姿では、長いか丸いか、何とも判断がつかぬ。丸頭巾姿の貞徳像に賛を乞われた時、「長頭丸」の名をきかせ、「長」「丸」二つの言葉の対比を下地に働かせて、当座の挨拶にかえたものであろう。（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏）

という説も出ている。

*969*　世にさかる花にも念佛申しけり　（蕉翁句集）

春季（花）。

**語釈**　○**世にさかる花**　「世に盛る花」。世に時めいて盛んに咲いている桜の花。「さかる」は動詞。「わがためにおもはぬ山のおとにのみ花さかりゆく春をうらみむ」（『後撰集』巻二、小弐）。○**念仏申しけり**　「念仏申しけり」。念仏を唱えていることよ。他人のさまとしての表現であろう。「けり」本来の回想の意は殆んどない。「念仏」は既出（Ⅲ*558*）。「夜もすがら念仏申し敦盛の菩提をなほも弔はん」（謡曲「敦盛」）。

**大意**　世に時めいて盛んに咲いている桜の花に対しても、あの老人は有難がって、念仏を唱えていることよ。

**考**　『蕉翁句集』に貞享元年の部に収めているのが、古い資料としては唯一のもので、『芭蕉句選拾遺』にも同年作

として見えるが、これらの年代推定の根拠は明らかでない。
今を盛りの花は賑やかで陽気なもの、それに対して念仏は、寂しく陰気なもので、その対照が句中には明らかに見える。花見の賑わいの中で鉦を鳴らして念仏を唱える物貰いのさまと見ることも出来るが、それよりも、何を見ても有難がって念仏を唱える信心深い老人などのさまと見た方が面白い。
「何を見ても念仏を唱える人がいて、世間の人が笑いたのしむ今をさかりの花を見ても、南無阿弥陀仏と念仏を唱えたことよ」というのである。
自分の行為を詠んだともとれるが、そうとらない方がおもしろかろう。ただし諧謔だけではなくて、念仏三昧の人の一図なさまを詠もうとしたものである。「花にも」というところにややはからいが入りこんでいて弱い感じである。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）
という説が、略々肯綮に中っている。ただ、念仏三昧よりは、もっと日常的なさまであろう。花の盛りのはかなさも、おのずから匂って来る。

*970* 松風の落葉か水の音涼し　（蕉翁句集）

夏季（松落葉・涼し）。

語釈 ○**松風の落葉か**　松吹く風に散る落葉かなあ。「落葉」は冬季であるが、ここの「落葉」が「松の落葉」（夏）であることは、「松風」の語によって明らかである。（Ｖ*911*）参照。「か」は疑問に詠嘆を含み、ここで切れる。○**水の音涼し**　「水の音涼し」。

大意 松吹く風に落葉が散る為かなあ。谷川の水音が如何にも涼しく聞える。

考 出典として唯一の古い資料である『蕉翁句集』では、貞享元年の部に入れているが、年代推定の根拠は明らか

でない。『芭蕉句選拾遺』にも所収。

流の音のことに涼しきは、松風の落ちて和しぬるかとの曲いふべからず。渓川の風情などみゆ。且、季の詞をかりて落葉かと作り給へる手づま見つべし。（杜哉『蒙引』）

という解が、よく句意を悉している。「季の詞をかりて落葉かと作」るというのは、「松風落つ」に「落葉」を言い掛けて、季語「松落葉」を思わせた技巧を指すのである。それは言葉の綾をなす表現上のことであるが、この句は全体として、「落葉か」までが「水の音涼し」の原因を推測する趣向になっている。「落葉か」という表現をまともに取って、落葉その物が原因であるように言うのは、却って真を失うもので、実は渓流の上を吹く松風が颯々としている為に、水音が涼しく感ぜられるのである。こうした趣向表現の技巧的傾向から、

……その発想法が多分の覇気と空想とをもつて居る。……恐らく芭蕉が耳に松風の音を聴きながら、脚下を流るゝ清流に対して居る際の、自己の情感を詠んだものと察せられるが、その表現がまだ覇気に累らはされて居る為めに、句としては藝術的価値のさう高いものであるとは思はれない。（半田良平氏『新釈』）

という評が出るのであろう。技巧が渾然たる味わいを阻害しているのである。ただ、それは厭味というのとは違って、自然の涼味は素直に感得される。山本健吉氏は、「さらさらと流れる渓流の音に耳をすませば、松風の音か、風に落ちる松葉の微かな音かと思われるばかりに、涼しげにきこえる」と解して、

……「落葉」はやはり心耳に聴いたのであろう。涼しい水の音の中に、心耳を澄ませて、峯の松風の落葉の音を聴き取った。……この句は、……心頭に描き出した松風の落葉である。松風は時雨の外にも、茶釜の音にも松虫の声にも、その他古くからいろいろに見立てられている。その伝統の上に乗り、それを「松落葉」に転じたところに俳諧化があった。（『芭蕉全発句』）

と見ておられる。松風の音と松落葉の音と、両つながらに聞きなされると解せなくはないが、私はやはり松風の音を

本筋に考えたい。それを、松落葉のイメージも加えようと欲張った為に、「松風の落葉」という無理な表現になったのであろう。

971　萩の露米つく宿の隣かな（泊船集書入）

秋季（萩・露）。

**語釈**　**○米つく宿**　「米搗（こめつ）く宿（やど）」。「宿」は「家」に同じ。「米つく」は、米を精白すること。（Ⅰ157）参照。昔はあらづきした米を買って来て、精白はそれぞれ自家の踏み臼で行った。

**大意**　朝露に濡れて、庭の萩は一入風情がある。それなのに隣家では、そんなことにはお構いなく、米をつく物音がしていることよ。

**考**　年代不明。芭蕉が旅先で泊った家でもよいが、深川の芭蕉庵でも、句中のような場合はあり得たであろう。優しい萩の風情に、隣家の日常的風景を対照して興じたのである。

「萩に置いた露の玉がきらきらと美しい。この庭は米を搗いている宿の隣なので、今にも露が細い萩の枝先からこぼれはしまいかとはらはらする」（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

と解してしまっては、却って風情を損う。露がこぼれるこぼれないは、ここでは問題ではあるまい。露に濡れた萩の風情は夙く『枕草子』に、

萩、いと色ふかう、枝たをやかにさきたるが、朝露にぬれて、なよなよとひろごりふしたる。（六十七段）

と賞せられ、西行の歌「あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬみやぎ野のはら」（『新古今集』巻四）の歌も、萩を念頭に詠まれたものと思われる。

972
# 白芥子や時雨の花の咲つらん（鵲尾冠）

夏季（芥子）。

**語釈**　○**白芥子**　「シラゲシ」。白い芥子（けし）の花。既出（Ⅰ242）。○**時雨の花の咲つらん**　「時雨（しぐれ）の花（はな）の咲（さ）きつらん」。白い芥子の花を、去年の冬の「時雨」が花と化したものと見立てて「時雨の花」といったのであろう。「咲つらん」は強め。

**大意**　白い芥子の花がはかなげに咲いている。これは冬の時雨が花と化して咲き出でたのであろう。

**考**　蝶夢の『芭蕉翁発句集』に貞享元年の作とし、何丸の『句解大成』は延宝中の吟とするが、何れも確たる根拠のない臆測であろう。句風からすれば、蕉風本格化以後ではなく、天和以前の作と見られる。

当吟、至て見立也。白芥子の形容は清くもろし。時雨の風姿、間なく一気色のみにして哀に短かしと云より、時雨の花とは風雅の自在よりの佳作也。一体、雨は花の父母と云より、遁さず云ひ出給へる也。（鵰沙『過去種』）

清げにしてこぼれやすきを、ふりみふらずみ定めなき時雨の花の咲つらんとは、誠に形容の凡ならざる、賛するに詞なし。（杜哉『蒙引』）

等の古注の説は、蕉風時代の作と見ているようであるが、句の解としては誤っていない。

一書に、霜の花・雪の花とは云とも、時雨の花とはめづらし。芥子は秋に種まき、冬かけて生ひ出るものなれば、時雨の花の今や咲つらむと思ひめぐらしたまふにや。延宝中の吟也。（何丸『大成』）

という説は、「秋に種まき」云々が理に偏して、当を得ているかどうかおぼつかないが、蕉風以前の寓言的趣向であることは看取しているようである。句解としては、

瞿麦の花の白いのを見ると、如何にも淋しい趣がある所から、これは彼の冬の淋しい時雨が草になつて斯様な瞿

麦といふ花に咲いたのであらうか、と興じたので、実際そんな事のあるわけはないのを詩的理想で言ったのである。（内藤鳴雪『評釈』）

という見方でよい。ただ、「詩的理想」というと本格的な詩境を連想させるが、そうではあるまい。

白く清く、かつもろく散りやすい白芥子の花の特徴と、さっと降ってはやむ初冬の時雨の冷たく潔い感じとに、ある種の感覚的共通性を見出だし、白芥子を時雨の花と見立てた寓言的虚構。地上に降った時雨がそこで芽を吹き、夏になって白い花を咲かせる、との飛躍した連想のおかしみ。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

という説が肯綮に中っていると思う。白芥子のはかなげな趣と、時雨の空定めなき伝統的寂寥感とを結んだ感覚を高く評価して、「これはすでに談林の譬喩や見立ではない。誠に美しい詩人の幻想である」（潁原博士『新講』）という見方も出ているが、一方また「およそは天和・貞享頃の口質に近い」（同上書）ことも認められており、基本的には延宝・天和期の寓言的虚構とすべきであろう。「つらん」のあたりに興じた調子も認められる。

三河国二葉之松

三刕烏巣にあひ給て

973　かくさぬぞ宿は菜汁に唐がらし　（猫の耳）

秋季（唐がらし）。

**語釈**　○**三刕烏巣**　「烏巣」は加藤氏、三河国吉田（現豊橋市）の医師と伝えられる。「三刕」は、三河国（現愛知県東部の旧国名）の漢風呼称で、「参州」とも書く。「刕」は「州」の異体字。「酔うまい事か三州を長田出し」（『柳多留』十六編）。○**あひ給て**　「会ひ給ひて」。「給ふ」は、芭蕉に対する敬語。この前書は『猫の耳』の撰者越人の文である。○**かくさぬぞ**　「隠さぬぞ」。相手に対する呼び掛けの語気。伝えられる成立事情に関連して、この言い方に問題があることは［考］の条で触れる。「かくす」の主語を

烏巣とすれば、彼がその貧しい生活を客に隠さない意味になる。「浜出しの牛に俵をはこぶ也　芭蕉　なれぬ娵にはかくす内証　沾圃」（『続猿蓑』上）「Cacuxi, su, uita.」（『日葡辞書』）。○**宿**　この場合は、住む家。○**菜汁**　「ナジル」。干菜(ほしな)を入れた味噌汁。「菊に栗荷ひつれたる男ども　鯉風　何所も菜汁に飽しこのごろ　重厚」（『落柿舎日記』）。○**唐がらし**　「唐辛子(たうがらし)」。既出（Ⅲ*592*等）。秋の季語。

**大意**　このお宅では、菜汁に唐辛子だけの極く簡素なおもてなし。貧しさを隠そうともしない。まことにゆかしいお人柄だ。

**考**　『三河国二葉之松』（知尭撰、元文五年刊）には「三河烏巣にあふて」と前書がある。初出の『猫の耳』（越人撰、享保十四年刊）の注によれば、芭蕉が烏巣を名古屋近辺の寓居に訪ねた時の挨拶吟であるという。越人は句の成立事情を知っていたのであろうが、「かくさぬぞ」という言い方は、芭蕉自身が相手に対して貧しい供膳を恥じることなく、あるがままに隠さない意味にとるのが自然であって、客たる芭蕉が主に対して、その貧しい生活を隠さないと取るのは少からずおかしい。芭蕉自身が隠さないと解すれば、「草の戸をしれや穂蓼に唐がらし」（Ⅲ*625*）と似た発想の句になって、挨拶の意にも叶うのである。明治の鳴雪『評釈』や『句集講義』は、皆芭蕉が隠さない意に取っている。本書の［大意］では姑く烏巣が隠さない意として解したが、この句には表現上そのような問題があることに留意すべきであろう。芭蕉が秋に名古屋辺に居た時としては、貞享五年七月が考えられるが、『校本芭蕉全集』第一巻補注の阿部喜三男氏の説には、

　大礒義雄説によると……烏巣は……元禄末年に京都に居を構えるまで、常に尾張・京摂のあたりを往来していたというから、元禄三年秋に京都で芭蕉に会っていることも考えられる。初対面とすれば、貞享で、名古屋あたりであろうか――という。

とも見える。京でとすれば、元禄四年、同七年も可能性はあろう。兎に角成立事情がもう少しはっきり分る資料が欲

しく、年次はなお確定し難い。

974　梅がゝや見ぬ世の人に御意を得る（続寒菊）

春季（梅がゝ）。

**語釈**　○**梅がゝ**　「梅が香」。底本の原態は「梅かゝ」。仮名に濁点をつけない習わしの昔は、一見意味のとりにくいこのような表記がよく行われた。「むめかゝ」（Ⅴ*831*）参照。○**見ぬ世の人**　自分が見たこともない過去の世の人、昔の人。「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる」（『徒然草』十三段）が意識されていたであろう。○**御意を得る**　「御意を得る」。会って話をすること。相手を尊敬した言い方である。「今晩罷帰、明日可得御意候」（二月十一日付平庵宛芭蕉書簡）「Guioi. Micocoro. …… Guioiuo vru.」（『日葡辞書』）。

**大意**　梅が香がゆかしく漂う中、貴方にお目にかかって、まるで「見ぬ世の人」にお会いしたような気持です。

**考**　『続寒菊』（杏廬撰、安永九年刊）に「此句は楚舟亭におはしたる時、はじめてまみへたる人に対してとのはし書有」と注記があり、年代は降るものながら、信憑性の高いものである。楚舟は江戸の蕉門俳人で、『別座鋪』『炭俵』に句が見える。当面の芭蕉の句は江戸に於ける晩年の作であろうが、確かな年代は分らない。

「梅がゝ」は、この場の背景である。『徒然草』には、

花たちばなは名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立かへりこひしうおもひいでらるゝ。（十九段）

ともあり、ここからも「見ぬ世の人」が想起されたのであろう。遠い昔の風雅な人に会うようだ、と相手を褒めて挨拶としているのである。或いは「さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする」（『古今集』巻三、よみ人しら

ず）を一転して、橘の香なら昔の恋人の袖の香だが、梅の匂いは、ゆかしい「見ぬ世の人」の風雅だと言っているのかも知れない。「梅がゝ」「見ぬ世の人」と古典調でやって来て、最後が「御意を得る」と砕けた調子になったのは、晩年の風調か。鹿爪らしい侍言葉が、却って俗調を感じさせる。

975　蕎麥もみてけなりがらせよ野良の萩　（続寒菊）

龍が岡　山姿亭

秋季（蕎麦の花・萩）。

**語釈**　○**龍が岡**　「龍が岡（たつをか）」。現滋賀県大津市龍が丘。当時は義仲寺領の山林で、蕉門の俳人内藤丈草が、その晩年に仏幻庵を営んだ処として知られる。元禄十六年丈草は此処に芭蕉追悼の為の経塚を建て、これを中心に支考・正秀ら蕉門の供養碑約二十基が存する。○**山姿亭**　「山姿（さんし）」は、龍が岡住の農民荘右衛門の俳号と伝えられる。出自生歿年等未詳。○**蕎麦もみて**　「蕎麦（そば）も見（み）て」。この「蕎麦」は、下の「萩」と対照して「蕎麦の花」をいう。既出（V *887*）。○**けなりがらせよ**　萩を羨しがらせよ、の意。羨しいの意味の俗語形容詞「けなりい」に動詞化の「がる」を付け、更に他動詞化した語である。「藝子（げいこ）に目をつかはせ、下なる見物にけなりがらせける」（『世間胸算用』巻三ノ一）「Qenariguenі miyuru.」（『日葡辞書』）。○**野良の萩**　「野良（のら）の萩（はぎ）」。「野良」は、野原。「ら」は接尾語で意味はなく、「良」は宛字である。「野良仕事」など、「野良」は田畑の意に用いることもあるが、ここは山姿亭の敷地内か近くに見渡される萩であろうから、田畑とは見ない方がよい。「さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる」（『古今集』巻四、僧正遍昭）「Nora. i, Nobara.」（『日葡辞書』）。

**大意**　野原に咲く萩だけに見とれずに、人々よ、この家の畑に咲いた蕎麦の花も見て、萩を羨しがらせなさい。

**考**　錫馬の稿本『義仲寺』によると、この句は去来・丈草・乙州らと共に山姿亭に招かれた時の挨拶句であるという。蕎麦の花の時季から見て、恐らく元禄三、四年のことであったろうが、元禄七年も全く考えられないではなく、

姑く年代不明の部に入れる。

「山姿亭の庭に咲いている萩の花よ、あの野のあわれを備えた蕎麦の花にさえも、お前の野良の萩らしい楚々としたものやさしさを羨しいと見るほどに咲き出でよ」という意。……「蕎麦も」は……主語の格で「見て」にかかり、連用修飾語の格で「けなりがらせよ」までかかる特殊な語法であろう。（加藤楸邨氏『芭蕉全句』）

という「萩」を中心にした解は誤りであろう。句中には蕎麦の花と萩の花が並んでおり、何れを主とするか、説の分れるところであるが、秋の野草の花の代表のようによく採り上げられる萩に対して、殊更賞美されることもない蕎麦の花を取立てて言ったところに、この句の趣意があったと見たい。

その山姿亭の辺りには蕎麦畑もあり、萩の咲き乱れた野もあった。その美しい萩だけでなく、地味な花を咲かせる蕎麦も見せて、さんざん私を羨しがらせて下さい、と言ったもの。（山本健吉氏『芭蕉全発句』）

という説は、蕎麦の花を中心にしているけれども、「けなりがらせよ」の目的語を「私を」としている。恐らくそうではなくて、「当家の畠の蕎麦の花も見て、萩を羨ましがらせよ」（今栄蔵氏『芭蕉句集』）のように「萩」を擬人化して「けなりがらせよ」と言ったと見るのが最も良いと思う。山姿亭周辺の野趣ある景色を賞し、特に畑の蕎麦の花を取立てて言って、農に生きる山姿への挨拶としたのである。「けなりがらせよ」という俗語が、巧みに生かして使われているところに留意したい。

*976* ほとゝぎす今は俳諧師なき世哉　（鹿島紀行附録）

夏季（ほとゝぎす）。

語釈　**○俳諧師なき世**　「俳諧師無き世」。「俳諧師」は、門人を集めて俳諧の指導をする宗匠。「今朝国土笑はせ初ぬ俳諧師京住高

政」（『おくれ双六』）。

**大意**　ほととぎすの鳴く音が聞える。その声の素晴らしさに俳諧師は句も出来ずに口をつぐんでいるが、これでは今は世の中に俳諧師が居ないも同然だ。

**考**　寛政二（一七九〇）年に梅人の刊した『鹿島紀行』に付載された句中に見え、杉風から承け継いだ資料に拠ったものと思われるので、信憑性は十分である。頴原博士は「延宝末年乃至貞享初年頃の作」（『新講』）と推測しておられ、蕉風確立以前の風調を感じさせるが、成立の時期は確かめ難い。『一葉集』には、「時鳥いまだ俳諧師なき世かな」という句形になっている。

古注にはこの句に触れたものが殆んど無く、明治期以降のものでは、『一葉集』の「いまだ」の形に従って解したものが多い。頴原博士は『新講』で「今は」を信ずべき句形と認めた上で、

時鳥の声を聞いて、今は之を句にすべき真の俳諧師は無い世であると慨歎したのである。思ふに談林の末流が、俳諧を殆ど文藝圏外の駄洒落に堕せしめようとした時、ひそかにこれを憤つたのではあるまいか。……もしさうした契機によらない作だとすれば、むしろ自負の意があらはに聞え、或は単なる平凡の作にすぎない事になる。

と述べておられる。加藤楸邨氏は、「昔はこの時鳥を聞いてすぐれた句が詠まれたが、今はこれを詠み生かすべき真の俳諧師が見あたらなくなった」と解して、

「俳諧師」というのは、現代ならさしずめ詩人というにあたる。今は真の俳諧師のない世だというのは、世の俳諧師をさげすむ気持ちではなく、こういうことで、時鳥の趣深いことを強調しているのであろう。真の俳諧を求めようとする決意も働いていよう。（『芭蕉全句』）

と説かれ、

時鳥の声を賛美する伝統的美意識を、極端に大げさに言い立てることで滑稽化した談林調。（今栄蔵氏『芭蕉句集』）

……かつて俳諧師山崎宗鑑が「かしましや此さとすぎよ郭公みやこのうつけさこそ待つらん」（安原貞室著『嘉多言』慶安三年〈一六五〇〉刊）と言い放った俳諧師としての気概はどこへ行ってしまったのであろう。俳諧師による俳諧師らしい新しい作風が生れてこないことに対する、いら立ちのようなものが感じられる概世の句である。

（『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』堀信夫氏）

等の説に至っている。私としては、真の俳諧師が居ないことを歎ずるにしても、憤慨や概世といった大真面目なものには取りたくない。楸邨氏や今氏の説あたりが穏やかであろう。

# 芭蕉発句概説

## 俳意と俗と

芭蕉の文学を、歴史上どのような位置に据えるべきものか。先ず最初に概括的な考察を加えてみたい。「さび」「しをり」「ほそみ」といった観念を中心に置けば、芭蕉の文学は古代中世以来の美的観念を継承した近世的隠者文学の系譜の中に入ることになろう。「能因法師西行上人のきびすの痛もおもひ知〻と、松嶋の月の朧なるうち、塩竈の桜ちらぬ先にと、そゞろにいそがしく候」（元禄二年二月十六日付惣七・宗無宛書簡）「兎角拙者、浮雲無住の境界大望故、如此漂泊いたし候」（元禄四年正月十九日付正秀宛書簡）と書き、許六に対しては、

許子俳諧をすき出る時、閑寂にして山林にこもる心地するをよろこび、元来俳諧数寄出ずや。（『俳諧問答』許六「俳諧自讃之論」）

と問うて、「師もすく所かくのごとし」（同上書）と言ったところを以て見れば、中世の隠者の諸国に漂泊する俤が髣髴とする。近世に於ける特異な隠者文学という見方は、確かに芭蕉の作品の特色の一面を捉え得ている。しかし、若い頃貞門・談林の滑稽の洗礼を受け、享楽気分の横溢した『貝おほひ』の判詞を書いた人だったことを考えれば、隠者的側面だけを強調するのは、余り一面的に過ぎよう。「古池や蛙飛こむ水の音」のような閑寂味だけが芭蕉ではないのである。

談林風の行き詰まりを契機とし、天和の漢詩文調の摸索を経て確立された蕉風俳諧は、滑稽戯笑を専らにする従来の行き方を捨てて、有心正風体を志向した俳壇一般の趨勢の中で、最も目ざましい成果を挙げた。これによって俳諧は本質的な変革を遂げ、正統的風雅の伝統を継承する新しい分野の詩となったのである。だからこそ芭蕉は俳諧を「風雅」と呼んだのであろう。門人達にもその自覚があったことは、土芳の『三冊子』に見える左の記述で明らかである。

夫（それ）俳諧といふ事はじまりて、代々利口のみにたわむれ、先達終に誠をしらず。中頃難波の梅翁、自由をふるひて世

上にひろしといへども、中分いか(以下)にして、いまだ詞を以てかしこき名也。しかるに亡師芭蕉翁、此みちに出て三拾余年、俳諧初て実を得たり。師の俳諧は、名はむかしの名にして、昔の俳諧にあらず。誠の俳諧也。……むかしより詩歌に名ある人多し。みなその誠より出て誠をたどる也。わが師は誠なきものに誠を備へ、永く世の先達となる。誠に代々久しく過て、此時俳諧に誠を得る事、天正に此人の腹を待る也。師はいかなる人ぞ。(白雙紙)

これ位明確に芭蕉の史的位置を説いた文は、他に例を見ない。「誠」とは、要するに古代以来日本の詩歌の正統が表現して来た伝統的風雅精神をいうのであって、俳諧もまたそういうものを表現し得る器として再生したのである。「師はいかなる人ぞ」という土芳の賛嘆は、同郷の偉人に対する私情が幾許か交るにもせよ、「誠なきものに誠を備へ」た芭蕉生涯の事業の意義は、客観的に見ても正に偉大といわなければならない。

和歌以来の風雅の伝統を継承するといっても、芭蕉は和歌の丸写しを俳諧に持ち込もうとしたのではなかった。俳諧は俳諧として独自の新味を持たなければ、後発の新分野の意義はなくなってしまう。俳諧独自の新味を芭蕉は何処に求めたのであろうか。

去来が俳諧を作り始めた頃、芭蕉は「ほ句は句つよく、俳意たしかに作すべし」(『去来抄』先師評)と教えたという。「俳諧」とは俳諧らしい内容のことで、俳諧の発句にはそれがはっきりとあらわれていなければならないというのである。「俳意」とは要するに、俳諧を俳諧たらしめている所以のものであるから、趣向・作意・表現等全般にわたる広い意味を持つであろうし、それを「たしかに作」せよと指導したとあれば、芭蕉は俳諧の独自性を「俳意」の的確な表現に求めていたことは明らかである。

また、『三冊子』には左のような記事も見える。

又いはく、春雨の柳は全躰連歌也。田にし取烏は全く俳諧也。五月雨に鳰(にほ)の浮巣を見にゆかんといふ句は、詞にはいかひ(ママ)なし。浮巣を見に行んと云所、俳也。又、霜月や鴻のつくぐ〳〵雙居てと云発句に、冬の朝日のあわれ也けり

といふ脇は、心・ことば、ともに俳なし。ほ句をうけて一首のごとく仕なしたる所、俳諧也。詞に有、心に在。其外この句の類、作意にあり。依所(よる)、一すじにおもふべからずと也。

詩歌連俳は、ともに風雅也。上三のものには余す所も、その余す処迄、俳はいたらずと云所なし。花に鳴鶯も、餅に糞する椽(ママ)の先と、まだ正月もおかしきこの頃を見とめ、又、水に住む蛙も、古池に飛込む水の音といひはなして、草にあれたる中より蛙のはいる響に、俳諧をきゝ付たり。見るに有、聞に有。作者感るや句と成る所は、即俳諧の誠也。（白雙紙）

「春雨の柳」というものが大体からいって連歌のもので、謂わば和歌的な素材であるのに対して、「田にし取烏」は全く俳諧的な素材である。後者の如きは、和歌・連歌では殆んど採り上げられず、俳諧独自の素材といってよい。「五月雨に鳰の浮巣を見にゆかん」という句は、用語の上に俳諧はないが、五月雨の中をわざわざ「鳰の浮巣」を見に出掛けようという、風狂の情の表現が俳諧なのである。また、『冬の日』霜月の巻の「霜月や鸛(こふ)のつくぐ〲雙居て」という発句に、「冬の朝日のあわれ也けり」と付けた脇は、内容・用語共に俳諧はないが、発句を承けて脇と二句でもって一首の和歌のように仕立てたところが俳諧なのだ。このように俳諧性のあらわれは、用語・内容の外に、「冬の朝日」の句の場合のように、表面には出ない「作意」に見られることがある。だから、俳諧性は「詞」「心」などどれか一つに限定して考えてはならないと芭蕉は言ったという。ここで「俳諧」「俳」とあるのは、さきの『去来抄』の「俳意」に当ることは明らかである。

漢詩・和歌・連歌・俳諧の四つのジャンルは、何れも「風雅の道」として共通の性質を持っている。就中俳諧は、他の三つで扱わない所までも、凡てにわたって到らない所がない。『古今集』仮名序に採り上げられた「花に鳴鶯」も、俳諧にかかると「餅に糞する椽の先」となるが、こういう形でまだ正月気分の残っている頃の季節の情趣が捉えられている。また同じく「水に住む蛙」にしても、俳諧ではその声ではなくて「古池に飛込む水の音」となり、池辺の荒草の

中から蛙の水に入る響きに俳諧を聞きつけている。要するに見聞する凡ゆる物に俳諧があり、それによって作者の感情が動かされて自然に句が出来るところに、「俳諧の誠」がある。右の『三冊子』の一段は、大略このような意と理解されよう。後半は土芳の説の形を取っているが、芭蕉の考えが反映していることは十分に看て取れる。

芭蕉は「詩歌連俳」が共に風雅の道であることを自覚し、中でも俳諧が他の三つに比して広く自由な表現領域を持つことを知っていた。俳諧の俳諧たる所以を「俳意」に求めたが、それは詞・心・作意など種々のあらわし方があり、非常に多面的なものなのである。俳意の表現は初発期の俳諧からあったけれども、蕉風確立以前には専ら戯笑性を保証する「詞・心」でしかなかった。ところが、「心」の領域にしても、「鳰の浮巣を見にゆかん」というところまで俳意に含めるとなれば、その間口は格段に広くなる。更に、発句と併せて一首の和歌のように仕立てた作意を俳意と認めるとあっては、俳諧性の解釈は無限にひろがるであろう。そういう俳意の拡大解釈のもとに、貞享以後の所謂「有心正風体」の俳諧が出来上り、中でも蕉風の俳諧が最も目ざましい成果を挙げて、時代の代表となったのである。

「高く心を悟りて俗に帰るべし」（赤雙紙）という芭蕉の教説も、『三冊子』では「風雅の誠」を責める努力と共に説かれている。新しみを求める工夫は、自然と変風に結びつく理なので、これは芭蕉晩年に於ける「軽み」の唱道と密接な関係を持つ語と思われる。「俳意」の的確な表現を重視する所説と共に、「俗に帰るべし」というのも、芭蕉の考え方の重要な一面であろう。本来「俗」は「雅」と対立する概念であるが、風雅の道たる俳諧と「俗」とは、何処で結びつくのか。それは結局、「高く心を悟る」という基盤の上に立つからである。古来の詩歌の伝統に思いを致し、高い詩精神を把持することによって、「俗」は「雅」に包摂される。「花に鳴く鶯」ではない「餅に糞する鶯」も、「水に住む蛙の声」ではない「古池に蛙の飛び込む水の音」も、俳諧の詩材として活用されることになるのだ。『笈の小文』の風雅論にいう「見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事な」き自在が得られるのである。『笈の小文』は元禄三、四年頃の執筆と推定されるので、こうした芭蕉の考えは、奥の細道の旅以後のものであることは明らかで、

その頃に至って芭蕉の風雅観俳諧観は定着し、その基盤の上に、新しみを求めて流行の変風が追求されたのであった。「俳意」の拡大解釈と「帰俗」の信念が、蕉風展開の基調になっていると見られる。そして、この「帰俗」の強調こそ、貞門・談林の時代をくぐり抜け、『貝おほひ』を書いたこともあった若き日の芭蕉の、多感な詩精神を受け継いだものであって、それを高次の詩の世界に生かしたものといえよう。近世人としての芭蕉の資格を保証する肝要な点である。

そういう晩年の世界に到達するまでに、若い時代から芭蕉はさまざまの試行を重ねた。この人の行蔵を展望して最も印象的なことは、時宜を得たそれらの変風が、凡て自覚的に行われていることである。芭蕉は時代の流行に敏感であったが、それはただ新しい物に飛びつく浮薄な行為ではなく、凡て自覚に基づく文学的営為であった。後年には流行を追うだけではなく、自ら流行を創って俳壇の動向を主導するに至る。この人ほど生涯にわたって自覚的に変風を重ね、常に旧い殻を捨てて「新しみ」を求めた例は、史上に稀であろう。以下それぞれの時期に分けて、発句を中心にその軌跡をたどってみたい。

## 貞門時代

芭蕉の俳人としての経歴は、二十歳前後から出仕した伊賀の侍大将家の若君藤堂主計良忠（俳号蟬吟）との交流に始まる。芭蕉の出た松尾家は、柘植に土着していた郷士の家筋と思われるが、恐らく本家ではなく、家格も財力も言うに足りないものだった。そういう出自の者が藩主の一族たる蟬吟のような人に仕えることが出来たのは、やはり俳諧という共通の趣味があったからとおぼしく、つまりは上野の町の俳諧好きの若者として、若君のお相手に召し出されたのであったろう。蟬吟は身分柄伊賀俳壇の中心人物でもあって、宗房と称していた芭蕉は、蟬吟をめぐる俳人グループの中では、最も若かったようである。俳諧を通じての主従の交流は、この若者の俳諧熱を愈々高めて行くことになる。

当時の俳諧は、寛永期に歌学者松永貞徳を中心に興った貞門が主流で、「俳言」(俗語・漢語)を用いることを句の要件とし、縁語・掛詞の技巧を主として、機智的滑稽を楽しむものであった。

月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿

姥桜さくや老後の思ひ出

右の二句は松江重頼の撰した『佐夜中山集』(寛文四年成)に収められ、宗房の句の所出としては最も古い。何れも謡曲の詞取りであるが、この技巧は後に談林風俳諧の中心人物となる大坂の西山宗因の句「里人の渡りさふらふか橋の霜」(謡曲「景清」による)が評判になったのを契機として、万治年間から流行になったという。宗房のこれらの句は寛文二、三年頃の作と思われ、謡の詞取りが流行になってから、まだ数年しか経っていない。京・大坂に比較的近いとはいえ、辺鄙な山国に育った若者が、俳壇の先端的流行に意外と敏感だったことは、これによっても窺えよう。街道筋の宿屋の客引きの言葉を謡曲調にしたり(「月ぞしるべ」の句)、色香の深い年増女の俤に老将斎藤別当実盛のイメージを重ね合わせたり(「姥桜」の句)、型通りながらも、技巧は既にかなりのものである。

年は人にとらせていつも若夷

京は九万九千くんじゆの花見哉

寝たる萩や容顔無礼花の顔

「若夷」と対照的に「年は人にとらせて」といっただけであるが、明るいえびす様の表情が思われ、はずむような調子も快い。次は、「九万八千家」といわれる都の家数をせり上げて「くんじゆ」(群集)に続け、都の花見の賑わいをあらわしている。拍子に乗せてカ行音を連ね、撥音も多用した全体のリズムは、後の談林風さながらである。また、「寝たる萩」に「脛」を言い掛け、美女のしどけない寝姿を思わせたのは巧みなエロティシズムであり、小歌調も感ぜられる。寛文十二年春江戸下りの記念として編まれた発句合『貝おほひ』に収められた宗房の二句は、さして上出来ではないが、

小歌や奴詞を綾なした判詞の、享楽味満点の奇文の下地は、これら最初期の句に於いて既に用意されていたと言ってよい。

## 談林風謳歌

『貝おほひ』は芭蕉の処女著作というので有名であるが、以前から行われていた奴俳諧の変種として、奴詞を判詞にまでふんだんに取り込んでいる。流行の小歌を種にした、如何にも若者らしい機智縦横の文は、明らかに新しい時代の到来を告げるものであった。芭蕉が江戸に下ってから間もなく、大坂では西山宗因を中心とした新しい俳諧が勃興する。この動きが顕在化するのは、延宝元年の『生玉万句』(西鶴撰)からであるが、芭蕉が『貝おほひ』を公刊したのはその前年である。現存の板本が天下の孤本であるところから見ても、大して売れたものとは思えず、評判も呼ばなかったのではあろうが、俳諧史の流れの中で、その意義は小さくあるまい。

さて、宗因の新風は俳諧を「寓言」と規定し、「守武流」を標榜して「夢幻の戯言」と揚言している。しかし、その特色とされる古典の卑俗化にしても、当代風俗の取り入れにしても、既に貞門の時代から行われていたもので、新風は奔放な想像力を駆使して殊更に「無心所着」の風を煽り、或いは当代の風俗事象への強い興味から、手広く様々な材料を求めたに過ぎない。そうは言っても、駄洒落めいた低調な貞門の末流俳諧に飽きた人々にとって、新風は甚だ新鮮な魅力を持っていたから、宗因流の俳諧は急速にひろがって行ったのである。延宝三年、大名俳人内藤風虎の招きによって江戸にやって来た宗因を、桃青と改号した芭蕉も、他の上方系俳人と共に迎えて、百韻興行の席を共にした。この宗因の江戸下りに際して、地元の田代松意ら俳諧談林と称していた一派は、宗因から「されば爰に談林の木あり梅の花」の巻頭句を乞い請けて『談林十百韻』を刊行したが、これが評判を呼んで、宗因の新風を「談林風」と称するようにな

るのである。

新風に対する桃青ら江戸俳人の多くの受け取り方は、これを大いに歓迎する方向だったといってよい。翌延宝四年に刊行した俳友山口信章（素堂）との『両吟二百韻』各巻の巻頭は、

此梅に牛も初音と鳴つべし　桃青

ましてや蛙人間の作　信章

○

梅の風俳諧国にさかむなり　信章

こちとうづれも此時の春　桃青

となっている。桃青の発句は、「梅」を梅翁宗因、鈍重な牛を自身に比して、天神の梅の見事さに、鶯ばかりか牛までも初音を鳴くと言ったもの。次巻の脇では、宗因流（梅の風）全盛の俳壇で、自分のようなつまらぬ者も我が世の春を謳歌すると言った。いうまでもなく、宗因に随順し新風を歓迎する意を積極的にあらわしたものである。これ以後桃青は、延宝五、六年にかけて京から下って来た伊藤信徳を迎えての『江戸三吟』等の俳諧活動を通じて、江戸の代表的な談林俳人の一人として地歩を固め、延宝八年には『桃青門弟独吟二十歌仙』の如き門下の集を編むまでになる。

あら何ともなやきのふは過てふくと汁

『江戸三吟』所収の右の句は、「ふくと汁」といった俗な素材をとり上げて、「河豚は食ひたし命は惜しし」の心理を描くのに、「あら何ともなや」という謡の詞をからませた趣向である。その謡の詞も、「おやく〳〵」「なあんだ」という本来の意味ではなく、文字通り「何事もなかった」の意に用いられている。巧みな俗情の表現として注目すべき句であろう。

かびたんもつくばゝせけり君が春

流行に敏感な芭蕉は、新し物好きである。毛色の変った珍奇な趣向を求めるのと、外来語の使用とは表裏一体の関係にある。長崎のオランダ商館長が毎年三月江戸へやって来て将軍に謁見する行事は、物見高い江戸の人々の好奇心をそそるものだった。この句は用語のハイカラな感じと、国威発揚を喜ぶ心情が一つになっているが、恐らくカピタンの江戸入りを見て作ったというよりも、歳旦吟として「君が春」に「かぴたん」を配合して構想されたものであろう。「君」は天皇を指すのが本来であるが、このように用いると将軍の意に転ぜられる。

　庭訓の往来誰が文庫より今朝の春

寺子屋の教科書『庭訓往来』をとり上げ、子供達がそれぞれの文庫をあけて、それを取り出すさまを描いている。歳旦の句として、寺子達の文庫から年が明けるように言い立てたのは、談林らしい寓言の世界と見られるが、この句は市井の正月気分と、その中の子供達の姿を描いたものとしても成功している。そういう表現効果を作者自身予期したかどうかは兎も角、このようなところに芭蕉の詩才が窺えるのである。

## 天和調の摸索

延宝中期以降、さしも全盛を極めた談林風も、無意味に句数を競う矢数俳諧や、極端な字余りの異体などの続出で、漸く乱調を呈して来る。その混乱の中から目立って来たのが漢詩文調の俳諧であって、延宝末期から次の天和の数年間は、漢詩文を踏まえた佶屈調の俳諧が流行した。この風調が天和調と呼ばれる所以であるが、抑々漢詩文の古典が俳人達の関心の対象になったのは、貞門期以来俳諧の趣向の中心になっていた和歌・物語等の日本の古典や謡曲が、五、六十年も使われるうちに種切れに陥って、同一趣向を繰返すだけの弊が顕著になって来たことにも依るのであった。新しい種を求めて、俳人達はまだ使い古されない漢詩文に飛びついたわけである。放恣な談林風にうつつを抜かす者や、貞

門の立場を墨守する守旧派以外、この新しい動きを主導したのは、江戸の桃青一門や池西言水・椎本才丸ら、京の伊藤信徳一派であった。

　この過渡期のさ中、桃青は日本橋小田原町の住居を去って、隅田川の向うの深川に移ると共に、宗匠の看板をおろしてしまった。新しい方向を摸索する俳人達の中でも、これだけ思い切った生活の革新を断行した人物は他に無い。従来の行き方に対する反省が、彼にあってはそれだけ切実だった証左といえよう。延宝九年春に刊行された信徳らの『七百五十韻』を契機として、それに呼応する形で、同年秋には桃青が門下の其角・揚水に他派の才丸を加えて『俳諧次韻』を公けにする。これには『荘子』の影響が著しく、寓言調や怪奇趣味によって天和調の第一歩を印した歴史的意義は大きい。更に翌々天和三年の『虚栗(みなしぐり)』（其角撰）へと展開して、漢詩文調は頂点を極めることになるのである。

　この間、桃青も含めて俳人達の意識が、滑稽戯笑を事とする従来の水準からどれだけ蟬脱していたかは、頗る問題であろう。桃青自身にしても、

　於(ア)春々大ナル哉(カナ)春ト云々

　かなしまむや墨子芹焼を見ても猶

等の句では、徒らに大袈裟な漢文調だけが目立って、内容は空疎の感を免れない。しかし同じ頃の、

　夜ル竊(ヒソカ)ニ虫は月下の栗を穿ッ

　よるべをいつ一葉に虫の旅ねして

　蜘何と音をなにと鳴秋の風

となると、聊か様子がちがって来る。見えもしない栗虫のさまを想像して尤らしい調子に乗せたり、鳴かない蜘蛛に向って禅問答を仕掛けるような趣向に笑いがあるのであろうが、それとは別に、一句に遍満する深沈とした物寂しさは、従来の俳諧に見られなかったものである。ふざけながらでも、こうした句を作り続けて行くうちには、純粋な詩的動機

が目ざめるものであろう。これらは深川移居直前の作として注目すべき句である。

深川に移った直後の句には、孤独をかみしめるような調子が見られる。

こゝのとせの春秋市中に住佗て、居を深川のほとりに移す。長安は古来名利の地、空手にして金なきものは行路難しと云けむ人のかしこく覚へ侍るは、この身のとぼしき故にや

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

富家喰ニ肌肉ヲ一、丈夫喫ニ菜根ヲ一、予乏し

雪の朝独リ干鮭を嚙得タリ

芭蕉は前書に白楽天の詩句や『菜根譚』に引用された語を引きつつ、清貧の隠者を気取って、侘びた気分を句に盛っている。

茅舎買レ水ヲ

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

深川の地は隅田川を控えていながら水道の便がなく、舟で運んで来る水を買って飲用に宛てていたという。『荘子』に「鷦鷯深林に巣くふも一枝に過ぎず。偃鼠河に飲むも満腹に過ぎず」とあるのを踏まえた句であるが、自身を偃鼠にたとえながら、ここでは原典のような自足の心境を述べているのではない。「苦く」とあるのに徴すれば、むしろ貧に苦しむ自らの境涯を省みて、苦い自嘲をかみしめている趣であろう。その外、天和期の代表句としては、

茅舎ノ感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

深川冬夜ノ感

櫓の声波ヲうつて腸氷ル夜やなみだ

髭風ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ
憶フ老杜ヲ

等が挙げられる。芭蕉の葉に雨声をきく伝統的な趣によりながら、杜甫や蘇東坡の詩句を思い、「盥に雨を聞」と俳諧化した。或いは、深川三股の地の草庵に響いて来る舟の艪の音を聞きながらの霜夜の鬱懐を述べ、或いは、「白帝城最高楼」の詩句を踏まえて老残の杜甫の俤を描きつつ、自身の悲傷の情を託している。表現はやや大袈裟で、それだけ感情が空廻りしている感は否めないが、極端な破調に託された作者の切実な思いは、読者に訴えるものを持っている。「芭蕉」の号が使われ始めたのもこの頃からであった。

天和二年歳暮の大火に深川の草庵が類焼し、暫く甲州に流寓した後、翌三年夏に刊行された『虚栗』に芭蕉は跋文を寄せて、

李杜が心酒を甞て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句、見るに遥にして聞に遠之。侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて人の拾はぬ蝕栗也。……白氏が歌を仮名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。

と高らかに宣言した。李白・杜甫・寒山・白楽天・西行ら、和漢の詩歌の伝統を踏まえ、それをやつしたのが俳諧だというのは、滑稽戯笑を事とする俳諧観の革命に外ならない。本格的な詩としての俳諧は、ここに第一歩を踏み出したわけであって、跋文の最後に「芭蕉洞桃青皷舞書」と署した意気込みの程も分るのである。既に草庵類焼以前に成っていた「世にふるも更に宗祇のやどり哉」の句に付された「笠やどり」「笠はり」等の文を見ると、杜甫・蘇東坡・西行・宗祇らを引合に出して、その生き方に共感し、手作りの笠を着て旅をしたい気持が動いていることが窺われる。俳諧の本格化と共に、羇旅漂泊の境涯へのあこがれが、必然的に生まれて来たのである。

## 野ざらしの旅

天和四年が貞享と改元された四十一歳の年の秋、芭蕉は江戸を出て上方への旅に上った。

千里に旅立て、路粮をつゝまず、三更月下無何に入と云けむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の声そゞろ寒げ也。

野ざらしを心に風のしむ身哉
秋十とせ却て江戸を指故郷

旅立ちに当って自分の「野ざらし」の骸を心に思うとは、何とも凶々しい限りであるが、この大袈裟な身ぶりは、やはり「俳諧」であろう。行き倒れになった我が骸を思い描いて、観念の世界でそれを笑い飛ばすことは出来ても、現実の「風のしむ身」はどう仕様もない。ここには、そういう観念と現実の矛盾を見つめるもう一人の自分の目があり、そのほろ苦い笑いの味がこの句の生命である。「侘び」と「風狂」の俳諧の特色は、旅立ちの句にはやくも見られると言ってよい。

この旅中名古屋で成った『冬の日』五歌仙が、蕉風の確立を天下に示す記念となったことは余りにも名高く、その史的意義の大きさは異論のないところである。

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

という異体の巻頭句では、先ず前書に於いて風雨に晒された自身のわびしい旅姿を描き、物語の中の「狂哥の才士」に思い及んで、「竹斎に似たる」狂句（俳諧）の人と自己紹介した趣向である。このような風狂味は、

砧うちてわれに聞せよや坊が妻

市人よ此笠うらふ雪の傘

等の句にも見られ、旅中の句の主調を成しているのである。

この外、旅中の作としては、歌枕などでの懐古の秀吟が見える。

秋風や藪も畠も不破の関

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

辛崎の松は花より朧にて

「人住まぬ不破の関屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風」(『新古今集』巻十七、良経)の和歌を踏まえ、荒蕪の趣を述べるのに「藪も畠も」と新たに俳諧眼の見出したものを加えて新味を出している。熱田神宮での「しのぶさへ」の句では、昔を偲ぶよすがの草さえも枯れてしまった自然描写と併せて、境内の休茶屋で餅を買う自らの姿を句中に取込むことによって、飾らない懐しい俳諧的雰囲気を醸し出した。「辛崎の松」の句の「にて」と言い切らない表現は、旅の後に思いついたことらしいが、抑々古歌に名高い長良の山桜を背景にして辛崎の一つ松の立つ景色は、芭蕉の眺めた実景ではなく、句中の仮象に過ぎない。そうした謂わば架空の世界に、古来の多くの歌人がすぐれた詠歌を遺した湖水のほとりの雰囲気を盛り、嫋々たる余韻を響かせたのが「にて」の措辞であった。伝統を踏まえながら、さまざまの工夫によって、新しい詩境を拓いていることが分ると思う。また、

明ぼのやしら魚しろきこと一寸

海くれて鴨のこゑほのかに白し

春なれや名もなき山の薄霞

山路来て何やらゆかしすみれ草

等の自然詠も注目されよう。「明ぼのや」の句は、初案の「雪薄し」では実境にとらわれ過ぎている。季節に問題はあ

るが、「明ぼのや」と改めることによって、句の場は早暁の海辺の大景となり、浜辺に揚げられた白魚の白さが、「しろきこと一寸」という歯切れのよい表現によって際立つ。「海くれて」の句は、無形の「こゑ」を「白し」と色彩語で表現したことと、五五七の破調が特色であるが、作者の意図がこういう形をとるのには必然性があった。「海くれてほのかに白し鴨のこゑ」では、「白し」は暮靄に覆われて行く冬の海になお残る微光をいうだけである。それがこのように語序を置きかえると、聴覚を視覚的イメージに転化させた斬新性に加えて、「白し」は「海くれて」にも反響し、夕闇の海と鴨の声の両者を包み込む、特異ですぐれた表現になるのだ。「春なれや」の句では、香具山の春霞を詠じた後鳥羽院の御製を踏まえつつ、「名もなき山」で俳意を点じて、大和国原の早春の大景を悠揚とした調べにのせて描いている。「山路来て」の句は『紀行』では京から大津へ出る途次、志賀の山越えの道での作となっているが、初案はそれより後の熱田で成った句であった。それを木下長嘯子や大江匡房の歌文を背景にして「山路来て」と案じ変え、「山路」にすみれを詠む新味と、ささやかな草花にも見える自然の営みの大きさへの思いを表現しているのである。

このように見て来ると、野ざらしの旅は蕉風を確立した画期的なものといわれるだけに、さまざまな方面で実り多い旅だったといえよう。『冬の日』五歌仙は連句の分野の成果であるが、ここに見える晦渋なまでの凝った表現や、それによって描き上げられた高華艶麗な世界は、蕉風展開の全体の流れの中に置いて見た場合、所詮は特異な孤立した風調に見える。天和調以来の高踏性は、以後漸次薄められて、庶民の生活詩的方向を目ざす「軽み」へと移行するのである。

### 草庵生活から笈の小文の旅へ

深川の草庵に帰り着いて、

夏衣いまだ虱をとりつくさず

と吟じた芭蕉は、それから二年余り江戸に落着いていた。旅の前の草庵生活は、新風摸索の苦悩や思いがけぬ火難など、兎角障りの多い日々であったが、今は行くべき方向も定まり、門人達と風雅の閑日月を楽しんでいる。

名月や池をめぐりて夜もすがら

観音のいらかみやりつ花の雲

花の雲鐘は上野か浅草歟

はつゆきや幸庵にまかりある

といった句は、そのような心境の所産といってよい。この間貞享三年の春には、

古池や蛙飛こむ水のおと

の句を得て、これを巻頭に門人らの蛙の句を集めた『蛙合』（仙化撰）が成った。芭蕉の代表作のように言われて誰知らぬ者もないこの句は、「不用意に出来たる句」（東海呑吐『芭蕉句解』）であったかも知れないが、色々な見方を許容するだけ、やはりこの句のスケールは大きいのである。伝統的な「花に啼く鶯、水に棲む蛙の声」ではなくて、「蛙飛こむ水のおと」を聞きつけたところが句の興の中心であろうが、尋常でないのは「古池や」の初五である。其角の提案した「山吹や」を採らず、ただ「古池や」としたことによって、句の中心には永遠の閑寂味を湛えた「古池」がすわることになった。そこへ飛び込んだ蛙のポチャリと立てた水音を包み込んで、古池はひっそりとしずまりかえる。「枯朶にからすのとまりけり秋の暮」という「枯木寒鴉」の画題によった趣向よりも、この句の世界は遥かに新しく、一層深い。「水ぬるむ春の昼さがり、冬眠からさめた蛙がかすかな音をたててその池に飛びこむ。水音は一瞬のものでなく、断続的に聞えている。その春日遅々たる季感に宇宙の永遠の時間を捉えたと見る方が、……芭蕉の真意に近いのではないか」（白石悌三氏「蛙」）という見方も含めて、読者の鑑賞は自由であってよいが、句の味わいの中心は、宇宙の永遠の閑寂相であろう。

貞享期の作には、「古池の蛙」のような自然のささやかな生命に惹かれる心の所産と見るべき句が注意をひく。

はらなかやものにもつかず啼ひばり

永き日もさえづりたらぬひばり哉

よくみれば薺花さく垣ねかな

痩ながらわりなき菊のつぼみ哉

等の句であって、野ざらしの旅での「山路来て何やらゆかしすみれ草」にもあったものである。「はらなかや」では、西行歌の「何につくともなき心かな」の詞を踏まえながら、空高く揚って一途に囀り止まないひばりのさまを叙して、その無心さに自然の心を観じている趣がある。「永き日も」には前者ほどの深みは感ぜられないが、これまた微小な生命の天真の趣であった。「よくみれば」の句になると、表現は極くつくろわない「たゞごと」に類するが、ささやかな草にふと目をとめた心の揺ぎが、遺憾なく表現されている。春の七草の筆頭といえば聞えはよいが、「薺(なずな)」はぺんぺん草と俗称される雑草に過ぎない。そんな物にも春色が満ちていることをいったこの句の動機には、世界観的な大きさがある。「痩ながら」の句では、ひょろりとした頼りない姿ながら莟をつけている菊を「わりなき」と表現したところが眼目である。自然の催しはどんな微物にも現われる「わりなさ」がある。造化の理を其処に見出して賛嘆する気持を「わりなき」に籠めたのであろう。月山から湯殿山に下る途中で見た桜の莟について、「ふり積雪の下に埋て春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし」(『おくのほそ道』)と述べたのと同じ心である。

物皆自得

花にあそぶ虻なくらひそ友雀

の句では、寓意が余りに露わであるけれども、これらの句に通じているのは、「物皆自得」の相を観じて、其処に現われた造化の妙理に感動する心である。元禄期に入ってから、「造化にしたがひ造化にかへれ」(『笈の小文』)と説かれた風

雅観の実質は、既にこの時期に確立されていたといってよい。

貞享四年八月、『鹿嶋詣』の月見の旅をした後、十月末に芭蕉は再び上方へと旅立った。

旅人と我名よばれん初霽

の句には、旅へと勢い立つ心の勇みが窺われる。名古屋の越人を誘って、悲境に沈む愛弟子杜国を伊良古崎に訪い、尾張や郷里伊賀での風交の後、翌春伊勢で杜国と落ち合って、吉野の花見を楽しんだ。吉野行は出発前からの計画であったが、恐らく杜国の愁情を慰めようとする配慮が重要な動機であったろう。花見の後は大和・紀伊・摂津をめぐり、須磨・明石を見物するまでが、後年刊行された未定稿『笈の小文』の内容である。それからも旅は続いて、京・近江・美濃・尾張を経、帰途は越人と共に木曾路をとって更科の月を賞し、八月末には江戸に帰った。間もなく木曾路の旅だけを扱った『更科紀行』を執筆している。

今回の旅中の句にも、秀逸は乏しくない。

ごを焼て手拭あぶる寒さ哉
冬の日や馬上に氷る影法師
何の木の花とはしらず匂ひ哉
御子良子の一もとゆかし梅の花
雲雀より空にやすらふ峠哉
ほろ〳〵と山吹ちるかたきのおと
日は花に暮てさびしやあすならふ
若葉して御めの雫ぬぐはゞや
草臥て宿かる比や藤の花

たこつぼやはかなき夢を夏の月
おくられつおくりつはては木曾の秋
おもかげやうばひとり泣月の友
身にしみて大根からし秋の風

右の句どもの中には後年の推敲形も含むけれども、原案は旅中に得たものである。こう並べてみると、それぞれに特色があり、形象化の高さや、旅の境涯を基盤とした含蓄の深さは勿論のこと、豊かな抒情性も際立っており、句境の確かな進展が看取されよう。芭蕉はこの旅の初めの頃、貞享四年霜月廿四日付の寂照（尾張鳴海の俳人知足）宛書簡の中で、

はいかい急に風俗改り候様にと心せかれ、御耳にさはるべき事のみ、御免被成可被下候。され共風俗そろ〳〵改り候はゞ、猶露命しばらくの形見共思召可被下候。

と述べている。ここでの「風俗」は、俳諧の作風・傾向の意であって、この旅中、我人共に新風を拓く意欲を以て各地の門人に接していたことは疑いない。しかし旅を終って見て、期待通りの成果があったかというと、芭蕉自身あきたらないものが残ったのも事実であったろう。小一年にも及んだ長旅の後、半年ほど休息しただけで、また未知の奥羽北陸の地をめぐる大旅行に出掛けたのは、処々の門人達との交流を主とするのではない、旅そのものに没入する境涯を希求した為であったと思われる。

## 奥の細道の旅とその成果

細道の旅に出発するに先立ち、芭蕉は故郷伊賀上野の友人に宛てて、旅への期待を次のように書き送っている。

……猶観念やまず、水上の淡(ママ)きえん日までのいのちも心せはしく、去年たびより魚類肴味口に払捨、一鉢境界、乞

食の身こそたうとけれと、うたひに侘し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびは、やつしく〳〵てこもかぶるべき心がけにて御坐候。……ことしもわらぢにてとしをくらし可申と、うれしくたのもしく、あたゝかになるを待侘て居中候。

右にいう「貴僧」とは、奇矯な行動をとるまでに徹底して俗世の名利を厭離した平安中期の高僧増賀上人のことであるが、その人のような「一鉢境界、乞食の身」を願う厳しい旅を期しながら、そういう旅を「うれしくたのもしく」待ち侘びる気持を述べているのである。

奥羽地方は芭蕉にとって未知の辺鄙な土地ながら、古来の歌枕の宝庫であったし、彼が心を傾けること深かった義経ゆかりの遺跡も多い。随行した曾良の腰帳の「延喜式神名帳抜書」や「名勝備忘録」を見ても、旅人達が準備怠りなく、発途してからはそれらの名所旧蹟を丹念に見て廻っていることが分る。その探訪の総括的感想を、『おくのほそ道』の記述によって窺ってみよう。

むかしよりよみ置る哥枕おほく語伝ふといへども、山崩川流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれれば、時移り代変じて其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳存命の悦び、羇旅の労をわすれて、泪も落るばかり也。（壺の碑の条）

七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、甍を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。（平泉の条）

芭蕉のたずねたみちのくの歌枕は、多くは昔の俤をとどめていなかった。無常な時の流れの中で、文字摺石も武隈の松も昔の姿とはちがってしまっている。大方の物がそうであればこそ、壺の碑が天平の代の形そのままに残っているのを目のあたりにしたことは、尋常ならぬ感動を呼びおこしたのである。光堂も鞘堂に保護されて、六百年来の姿そのままに建っている。これらの場合、歌枕の壺の碑が果して仙台近辺の此処であったかどうか、天平の碑の真偽如何、或いは

光堂の金色燦然とした偉容を実見出来たかといったことは問題ではない。芭蕉は眼前の物を壺の碑と観じ、奥州藤原氏の黄金の文化を偲ばせる記念物と観じているのである。其処に芭蕉の看取したものが「不易流行」の思想であったろう。

不易流行とは、藝術作品に「不易」或いは「流行」という類別があるといった次元の低い話ではない。流行こそは世にある物凡ての相（すがた）であり、「不易」の価値はその中にこそ現ずるというのである。これを俳諧の風調の変化としていえば、絶えざる変風を期して努める俳人の不断の活動の中にこそ「不易」の価値を持つ作品が生まれるということである。こうして見ると、「不易」と「流行」は二律背反ではなく、二律相即の関係になる。この点に芭蕉の考えの独自性があろう。これについて参考になるものとして、土芳の『三冊子』に左のような説が見える。

師の風雅に万代不易有、一時の変化有。この二つに究り、其本一つ也。その一といふは、風雅の誠也。……千変万化する物は自然の理也。変化にうつらざれば風あらたまらず。是に押うつらずと云は、一端の流行に口質時を得たるばかりにて、その誠を責ざるゆへ也。せめず心をこらさゞる者、誠の変化をしるといふ事なし。たゞ人にあやかりてゆくのみ也。せむるものはその地に足をすへがたく、一歩自然に進む理也。行末いく千変万化する共、誠の変化はみな師の俳諧也。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の押うつるごとく物あらたまる、皆かくのごとし共いへり。（赤雙紙）

これは細道の旅よりは後に述べられた師説に基づく記述であろうが、芭蕉の考えを実に的確に要約し得ていると思う。「不易流行」は絶えざる変化を探求する思想であり、その根本には「風雅の誠」即ち風雅を求める藝術的精神があって、風雅を求めて流行することが「誠の変化」なのである。去来によれば、不易流行観は奥羽の旅の後上方に於いて説き始められたといわれ、芭蕉が旅の間に、この基本的な思想を確立していたことを思わせる。

旅中の発句についていえば、『おくのほそ道』に秀吟佳句の多いことは確かである。しかし、旅中には作られず、旅の後乃至は『ほそ道』執筆中に作られた句も多い。篇中次の句がそれに当る。

行春や鳥啼魚の目は泪
暫時は滝に籠るや夏の初
田一枚植て立去る柳かな
笈も太刀も五月にかざれ帋幟
あやめ艸足に結ん草鞋の緒
夏草や兵どもが夢の跡
五月雨の降のこしてや光堂
蚤虱馬の尿する枕もと
一家に遊女もねたり萩と月
浪の間や小貝にまじる萩の塵

その外、旅中の句を改案した結果句柄が変ったものには、

あらたうと青葉若葉の日の光
世の人の見付ぬ花や軒の栗
閑さや岩にしみ入蟬の声
五月雨をあつめて早し寂上川
暑き日を海にいれたり寂上川

等が挙げられる。秀逸のうち、かなりの数が、実は旅中の作ではないのである。だから、細道の旅の成果を考える場合には、旅中よりもその後の、やがて『猿蓑』に結集される元禄三、四年期の作がむしろ注目されよう。
たとえば、『ひさご』（珍碩撰、元禄三年刊）巻頭歌仙の発句、

木のもとに汁も鱠も桜かな

について、土芳の『三冊子』の伝えるところによると、

花見の句のかゝりを少し心得て、軽みをしたり。

と芭蕉は語ったという。これは晩年の風調「軽み」に関する最も早い頃の言及として有名であるが、句の意図したところは「花見の句のかゝり」を表現することであった。「かゝり」は、中世の連歌論や能楽論によく用いられる語で、「趣」「風情」といった意味であるが、芭蕉の言わんとした趣旨は、伝統的な花見の雅情の表現について聊か自得するところがあり、その上に俳諧らしい軽みを展開したものだというのであろう。この句の背景には、「木のもとに旅寝をすれば吉野山花の衾を着する春風」「木のもとの花に今宵は埋れて飽かぬ梢を思ひあかさむ」等の西行歌があり、句は「木のもとに」と優雅に始めながら、次の「汁も鱠も」は和歌・連歌に全く用いられない俗語で、俗間の慣用的成句を踏まえている。ここに描かれた情景は、花見に集う人々の綺羅びやかな衣裳とか、歌舞のざわめきや酔余の千鳥足といったあり来りではなく、花見の宴に出ている色々な料理の上に桜花が散りかかるさまであるが、それを汁も鱠も凡ての物が皆桜になった、と端的に叙して興じたのである。伝統的な雅趣と新しい俳諧の興が両つながら生かされ、「汁も鱠も」には軽快な拍子も見える。季節感の新しい表現がここにあり、作者自身もこれを会心の作として、控え目な表現ながら土芳に意中を漏らしたのであった。

ひばりなく中の拍子や雉子の声

『猿蓑』に収められた右の句についても、『三冊子』には、

此句、ひばりの鳴つゞけたる中に、きじ折〳〵鳴入る気しきをいひて、長閑なる味を取らんと、色〳〵して是に究る。

と、推敲の苦心を伝えている。始終鳴いている雲雀の声の中に、時折鋭い雉子の声がまじる。その面白さに春闌わの季

節感を言い取ろうとして、結局落着いた表現が、「中の拍子や」であった。月並な俗調とは似て非なる表現の力が生まれた所以であろう。

川かぜや薄がききたる夕すゞみ

という、京の四条河原の涼みを扱った句にも、「すゞみのいひやう少し心得て仕たり」(『三冊子』)という作者の解説があったという。「薄がき」の帷子の涼味が夕涼みの気分をよく表わしていることに、芭蕉は自信を持っていたのである。また、

桐の木にうづら鳴なる塀の内

という『猿蓑』所収の句について、『三冊子』には、

この句いかゞ聞侍るやとたづねられしに、何とやら一様有事におもふよし答へ侍れば、いさゝか思ふ所ありて歩みはじめたると也。

という師弟の問答が記録されている。「うづら鳴なる」の背景に「野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」(『伊勢物語』)「夕されば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里」(『千載集』俊成)等の古歌があることは、「木のもとに」の場合と同様である。また芭蕉の時代には、鶉の鳴く音を競って、金持の間でこの鳥が高い値段で売買されたといわれ、句中の大屋敷の中で鳴いている鶉は、古歌の背景とは別に、現実の存在としては飼われているものであろう。古歌を思わせながらも、実は眼前の塀の内に桐の木の目立つ屋敷の鶉を描いていることになる。この句の持つ季感には、如何にも秋らしい乾いた味があるが、山本健吉氏はそれを「そっけなさ」と表現し、句を「俊成の和歌的情趣を踏まえながら、同時にそれを否定することによって表現を獲得した一つの客観的世界である」と見て、更に次のように述べておられる。

しかもここに提出されたものは、「たゞ是桐の木あり、塀の内奥ゆかしきあり、鶉鳴けるあるなり」(露伴)とでも

言うより外ない、一つの自己充足的な世界である。結果としては、楸邨の言うように、凡兆の客観的傾向を示している。だが凡兆の純粋な客観句と違って、句の裏には、否定的ながら一定の関係のうちにある古歌の世界が存在する。無心のうちに成立する有心の世界──つまり風景に託した抒情詩の世界である。(『芭蕉その鑑賞と批評』)「桐の木に」の句に於ける古歌との関係が否定的なものであるかどうかは兎も角、それを踏まえながら芭蕉の時代の現実を描いたところに俳意が存することは論があるまい。ところで、前掲の土芳との問答で、芭蕉が「いさゝか思ふ所ありて歩みはじめたる」といったのは、どういうことを指した言葉なのであろうか。

既に能勢朝次博士が『三冊子評釈』で、「桐の木に」の句の、淡々とした中に静かに漂う明るさを指摘され、『猿蓑』の頃から芭蕉に「軽み」への眼がひらけて来たとして、「いさゝか思ふ所ありて歩みはじめたる」という語を、軽みへの志向を述べたものと見ておられるが、この見方は正しいと思う。細道の旅以後のこの時期に、「歩みはじめたる」という未来への展望を思わせる言葉を述べているのは、「軽み」の志向を示唆するものと見るのが最も妥当だからである。「桐の木に」の句に見られる客観的傾向は、句中の「物」自体の持つ味に多く依存しており、即物性めいた印象が強い。それによって秋の季節感を生かしているのである。「木のもとに」の句に於いても、眼目は古歌の気分よりも、「汁も鱠も桜かな」と、俗語を綾なして一日の興の終りを描く新味にあった。それが「軽み」といわれる所以であろう。「ひばりなく」の句に見える「長閑なる味」、「川かぜや」の句に於ける河原涼みの気分の生かし方、これらは凡てそれぞれの季節感の生かし方を主要なねらいとしている。「軽み」が標語としての呼び方ならば、この時期の芭蕉が手法として意識していたのは、季節のそれぞれの気分を生かす写実的姿勢であった。それは元禄俳壇一般の指標であった「景気」に相当するが、それは近代以降の「写生」と見掛けは似ていても、古人の態度はかなり異なる。「景気」は美的に構成された写生とでもいうべきもので、経験的事実のありのままの再現を期する近代の「写生」とは、発想法に於いて異なるものだったのである。たとえば、「ひばりなく」の句の場合、作句の時芭蕉は「ひばりの鳴つゞけたる中に、きじ折

〳〵鳴入る気しき」の中に身を置いていたであろうか。それよりは、何時かそういう春の鳥の音を聞いたことがあって、それを素材に「長閑なる味」を言い取ろうとして「中の拍子や」という表現に到達したものと思われる。

さきに見て来たように、この元禄三、四年期に於いては、写実的方向への強い傾斜を示しながらも、一方で古歌の気分の揺曳するのを拒否していないことも重要である。この点を、『猿蓑』発句の部の巻軸にある、

行 春 を 近 江 の 人 と お し み け る

の句について考えてみよう。

この句では、琵琶湖畔の春色を描写しようという態度は一切見られない。しかも句を誦すれば、湖水朦朧として春をおしむに便有べし。殊に今日の上に侍る。

と『去来抄』で去来自らがいうように、朦朧と霞む湖畔の春景色が、まざまざと眼前に浮んで来る。描写を全くせずにこのような表現効果をもたらしたのは、芭蕉の大手腕という外ないが、『去来抄』によれば、芭蕉は右の去来の鑑賞に付け加えて、

古人も此国に春を愛する事、おさ〳〵都におとらざる物を。

と言ったという。この時の芭蕉の脳裏には、琵琶湖の春を詠んだ多くの古歌があり、常に古人の詩魂との交響を期していたこの人の表現の特色が窺われるのである。

病 雁 の 夜 寒 に 落 て 旅 寝 哉

の句になると、写実的な味わいとは全く別物になっている。堅田に赴いて病臥した芭蕉の境涯を契機とした句であるが、このような句では、列を離れて地上に下りる孤雁の影を、芭蕉が実際に見たかどうかは問題ではない。それほどこの句では「病雁」と芭蕉とが一体になっており、近江八景の一「堅田落雁」を背景に、作者の境涯乃至は心象風景の象徴と化した「病雁」なのである。このように見れば、よくある解釈のように、「病雁の夜寒に落ちて、我は旅寝哉」と、「夜

寒に落て」と「旅寝」の主語を別々に設定する見方はとれない。それでは病雁と芭蕉とが一体化した渾然たる味わいに遠いのである。「格高く趣かすか」（『去来抄』）な高次の象徴句としての味は、病雁が芭蕉か、芭蕉が病雁か、分ちがたく結びついた表現として解した時に、はじめてあらわれるであろう。

美的に構成された風景の例は、

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し

という『猿蓑』の句にも見られる。前書と句が事実通りならば、芭蕉が冬に信濃路を通ったことがなければならないが、彼の生涯を通じてそういう機会は見出し難い。ただ、穂屋の神事が済んで程もない頃、更科の旅で諏訪を通った芭蕉は、「穂屋の薄の刈残し」を見たか、そういう表現が脳裏に浮んだ可能性は大きく、それが年を経て、「信濃野ノホヤノ薄ニ雪チリテ」という『撰集抄』巻七の表現を契機として、一句にまとまったのではあるまいか。この句の内容には、そのような想化に成る部分が多く、前書にしても、句に相応しく仮構されたものと思われる。しかも、句が実境であるかどうかとは関わりなく、秀逸であることは論がないのである。

同じく『猿蓑』に「画讃」と前書して収められた、

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時

という句にしても、契機は伝存する山吹の自画であったろう。そこから茶時の「宇治の焙炉」の趣へと、想を展開させて行ったのである。焙炉の匂いは、如何にも茶所の宇治に相応しい生活感のある俳諧の新境地であって、この句の初五と中七以下との関係は、連句に於ける「匂ひ付」を髣髴とさせるものがある。芭蕉の感覚の冴えが、この秀吟を生み出したのである。

から鮭も空也の痩も寒の内

という句になると、季節感の生かし方は、これまで見て来たものと随分異なる。『三冊子』の伝えるところでは、「心の味をいひとらんと数日腸をしぼる」苦心を経た句であった。この句を書いた真蹟懐紙には「都に旅寝して、鉢扣のあはれなるつとめを夜ごとに聞侍て」とあり、鉢扣き（空也僧）の夜毎の勤行をあわれと聞いた芭蕉の「心の味」を言い取ろうとしたのが動機だったことが知られる。しかも、この句では「長嘯のはかもめぐるか鉢たゝき」のような情緒的な表現をとることなく、「寒の内」のきびしく張り詰めた空気の中に痩せ枯れた空也僧の姿を置くことによって、謂わば即物的に表現している。「空也」に「から鮭」を配合したのも理窟ではなく、「から鮭」「空也」「寒」という三者が相通う「匂ひ」によって連なり、句は高次の象徴性を帯びるに至った。こういう究極の表現に到達しようとして、芭蕉は「腸をしぼる」苦心を重ねたのである。

発句のような極端な短詩型にあっては、説明的表現は切り詰められて、右の句の場合のように、名詞が並んでいるだけという例が現われるのも不思議ではない。

餞乙刕東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

という句について芭蕉は、

工みて云る句にあらず。ふといひて、宜しと跡にてしりたる句也。かくのごときの句は、またせんとはいゝがたし。

（『三冊子』）

と語ったと伝えられる。無成心に口を衝いて出た句なので、又同じような句を作ろうとしても無理だというのである。乙州の東行の前途を思って、途次に出逢うであろう梅や若菜、さては鞠子の宿のとろろ汁といった物の名を並べているだけであるが、初五の二つの自然の物に対して下は人事と、その間おのずから対照を成している。旅路の春色が思われ、芭蕉自身は「宜（よろ）し」と言って「良し」とは言っていないが、佳句としてよかろう。

梅が香やしらゝおちくぼ京太郎

という句にしても、古浄瑠璃の詞章に「梅が香」を配合したまでのことながら、梅が軒端に匂う深窓の姫が草子を繙くさまは、艶麗な気品に溢れ、これまた偶成の佳句であった。同じく説明的な語句を用いない表現にも、「数日腸をしぼる」場合と、「ふといひて宜しと知る」場合とがあるけれども、苦心を経る経ないに拘らず、其処には表現に対する作者の不断の工夫が窺われよう。以上に見て来たように、奥羽の旅を終えて上方に滞在していた時期は、芭蕉にとって実り多いものだったのである。

## 晩年の江戸住居

元禄四年の九月末、芭蕉は長かった上方滞在を打ち切って東下し、十月末には江戸に帰った。細道の旅に出る時、深川の芭蕉庵は人に譲ってしまったので、暫くは橘町に仮住居し、翌五年五月には門人達の志で第三次の芭蕉庵が竣工して之に入った。その頃の去来宛書簡には、江戸俳壇の情況を述べた次のような一節がある。

此方俳諧之体、屋敷町・裏屋・背戸屋・辻番・寺かたまで、点取はやり候。尤点者共之為には悦にて可有御座候へ共、さてく浅ましく成下り候。中く新しみなど、かろみの詮儀おもひもよらず、随分耳に立事、むつかしき手帳をこしらへ、磔(はりつけ)・獄門巻くに云散らし、あるは古き姿に手おもく、句作一円きかれぬ事にて御座候。愚案、此節巻而懐にすべし。予が手筋如此など顕し候はゞ、尤荷担之者少ゝ一等(統)可致、然らば却而門人共の害にもなり、沙汰も如何に了簡致候へば、余所に目ヲ睡り居申候。（五月七日付）

久しぶりに戻って見ると、江戸は点取俳諧の流行で、人の注目を惹こうとする殊更な表現やこしらえ物、さては昔ながらの複雑な趣向を構えた俳諧ばかり。芭蕉の考えている「新しみ」「かろみ」の追求は思いもよらない有様であった。

そこで自分の考えは暫くそっと蔵っておこうという。何故かならば、今自分の考えはこうだなどと明言すれば、それに味方する少数の者が一団となり、却って蕉門の分裂を招き兼ねないから、知らぬふりをしているのだというのである。ここでは「新しみ」と「かろみ」が同列の概念とされ、「耳に立事」「むつかしき手帳」「趣向沢山のこしらへ物」とは対蹠的なこととされている。これよりさき、二月七日付の杉風宛書簡では、「鶯や餅に糞する縁の先」という近作の句を報じて、「日比(ひごろ)工夫之処に而御座候」と言っており、この「工夫」とは「軽み」の工夫に外ならないであろう。この時期、芭蕉が「新しみ」「軽み」という名で何を考えていたかは、これらを併せ見ることによって略々その輪郭が明らかになると思う。

不易流行と同じく、芭蕉が最晩年に声を大にして門人達に説いた「軽み」についても、その具体的内容に自ら触れた言説は多くない。子珊の『別座鋪』(元禄七年刊)序によれば、最後の旅に出立する前、子珊の別荘に招かれた芭蕉は、彼に対して、

今思ふ体は、浅き砂川を見るごとく、句の形・付心、ともに軽きなり。其所に至りて意味あり。

と語ったという。これは「軽み」を「浅き砂川」に譬えてみせたのである。また、芭蕉と早くから交渉のあった甲州谷村藩の家老高山麋塒に宛てた元禄八年六月朔日付の杉風書簡には、晩年の芭蕉の言説として、左の事共が録されている。

段々句のすがた重く、利(理)にはまり、六ケ敷、句の道理入ほがに罷成候へば、皆只今迄の句躰打捨、軽くやすらかに不断の言葉斗にて致べし。

古事来歴いたすべからず。一向己の作なし。山賤・田家・山家[の]景気ならでは哀深き哥なし。俳諧も其ごとし。賤のうはさ、田家・山家、景気専に仕べし。……不断の所にむかしより云残したる情、山々あり。

近年の俳諧世人しらず。……門人どもに見様(やう)申聞せ候。

一辺(遍)見ては、只かるく埒もなく不断の言葉にて、古き様に見へ申べし。

二辺見申ては、前句へ付け様、合点いき申まじく候。
三辺見候はゞ、句のすがた替りたる所見へ申べし。
四辺見申候はゞ、言葉古き様にて、句の新敷所見へ申べし。
五辺見候はゞ、句は軽くても、意味深き所見へ申べし。

右は主として連句の付け方について言ったものではあるが、「軽くても意味深き所」というのは『別座鋪』の序とも一致し、「不断の言葉」を用いた新しみという点では、発句にも共通した考え方であったと見られる。「不断の所にむかしより云残したる情」を求めることは、卑近な庶民の日常生活の中に新しい詩の世界を見出そうとする態度であって、それが俳諧独自の新境地と考えていたのであろう。

名月や門に指くる潮頭
塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店
埋火や壁には客の影ぼうし
しら露もこぼさぬ萩のうねり哉
鞍つぼに小坊主乗るや大根ひき
煤はきは己が棚つる大工かな
毛衣につゝみてぬくし鴨の足
むめがゝにのつと日の出る山路かな
八九間空で雨降柳かな
春雨や蓬をのばす艸の道
青柳の泥にしだるゝ塩干かな

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏

卯の花やくらき柳の及ごし

紫陽草や藪を小庭の別座鋪

これら晩年の佳句を見ると、ここにはもう、こちたい本歌や故事来歴は無い。ただ句を見て浮ぶイメージが、そのまま句の内容であり、そこから生まれる感味が総てなのである。元禄五、六年にかけて芭蕉に親炙した許六が、

かるきといふは、発句も付句も、求めずして直に見るごとときをいふ也。言葉の容易なる、趣向のかるき事をいふにあらず。腸の厚キ所より出て、一句の上に自然ある事をいふ也。(『俳諧問答』俳諧自讃之論)

と言っているのも肯けるのである。

## 最後の旅

元禄七年、五十一歳になった芭蕉は、四月に『おくのほそ道』を完成し、翌五月にまた上方へと旅立った。見送りの人々に残した句、

麦のほをちからにつかむわかれ哉

にも衰老の状は覆い難いが、果して半途で倒れることになったのである。途中では、

どむみりとあふちや雨の花曇

の佳吟があったが、名古屋では師翁に離反する姿勢を明らさまにしていた荷兮を訪うて、

世を旅にしろかく小田の行戻り

と、自らの漂泊の生を詠嘆し、郷里に向う途次、見送りの露川と泊った佐屋では、

水鶏なくと人のいへばやさや泊り

と田園の風趣に興じた。京・湖南に着いてからの句では、

六月や峯に雲置〻あらし山

朝露によごれて涼し瓜の泥

秋近き心のよりや四畳半

たなばたや秋をさだむる夜のはじめ

等が注目されよう。盂蘭盆に郷里に帰っては、留守の芭蕉庵で歿した問題の女性寿貞尼を弔って、

数ならぬ身となおもひそ玉祭り

という句を成している。九月八日に郷里を辞して、翌九日夕大坂に着いたが、月末に死病の床に臥して十月十二日に臨終を迎えるまで、この大坂滞在中の句は、芭蕉の詩魂の最後の輝きを示す無類の傑作が多い。

秋もはやばらつく雨に月の形

炑の夜を打崩したる咄かな

此道や行人なしに秋の暮

此秋は何で年よる雲に鳥

しら菊の目にたてゝ見る塵もなし

秋深き隣は何をする人ぞ

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

清滝や波に散込青松葉

山本健吉氏はこれらを「軽みの昇華」と呼び、「軽み」を経た上での最高の到達点と見ておられる。そして「軽みの昇

華」といえるような表現の深味は、この年六月十七日膳所で成った、

夏の夜や崩て明し冷し物

という句あたりから兆しているとされるのである。芭蕉は正にその生の最後の時点で、物の本質を生かしながら、人生の寂寥相に観入した絶唱を成し得たのであった。

# 補訂

# I

*105*　草履の尻折てかへらん山櫻

「ひとえだはをりてかへらむ山ざくら風にのみやはちらしはつべき」（『千載集』巻二、源有房）を踏まえた趣向と思われる（田中善信氏所報。『新編日本古典文学全集・松尾芭蕉集1』の堀信夫氏の解にも採られている）。

*241*　團雪もてあふがん人のうしろむき

富山奏博士は、「団扇もて……うしろむき」の句形を初案、「団扇とつてあふがん人の後むき」を治定形と見る土芳の説を支持しておられる（「芭蕉の盤斎後向自画像への讃句」―『大阪俳文学研究会会報』30号―）。

*247*　山賤のおとがい閉るむぐらかな

深沢真二氏は、「山賤」「むぐら」の語の連歌以来の伝統を踏まえ、この句を作者自身の文学的営為を卑下した表現

と読んで、「山賤のすむ家居はなんとなくゆかしいものと古い物語などに描かれておりますが、私が今おります甲斐山中の寓居は、むぐらも茂るに任せて荒れ放題、もとより〈その様卑しき〉山賤のような私の俳諧ではありますけれど、頤を閉じたまま、句を詠むどころではありません」と訳しておられる。天和期の作とする見方も含めて、私とは立場が異なるが、参考までに掲げる。深沢氏稿「連歌の変奏」（『連歌俳諧研究』九十号）参照。

## Ⅱ

337
ふるさとやへその緒になくとしのくれ

「ふるさとやへそのをになくとしのくれ　はせを」とした真蹟懐紙が岡田彰子氏によって紹介された。『連歌俳諧研究』九十二号参照。

## Ⅲ

*462*　あらたうと青葉若葉の日の光

新発見の芭蕉自筆本『おくの細道』には、「あなたふと青葉若葉の日の光」となっている。曾良所持本『細道』の校訂前の原形が自筆本に忠実だったことが知られると共に、芭蕉自身が「あな」と書いたことが証せられたことによって、「あな」を曾良の書き癖と見ることは不可能になった。芭蕉はやはり最初『曾良書留』のように「あな」と案じ、高久でそれを「あら」に改め、『細道』執筆の段階になって又「あな」に戻し、更に推敲して「あら」で治定したことになる。どちらでもよいような言葉をこのようにいじった動機は明らかでない。

*466*　木啄も庵は破らず夏木立

芭蕉自筆本『細道』の中七は「庵はくらはす」で、曾良所持本に於ける訂正前の句形と同様である。

475

# 田一枚植て立去る柳かな

自筆本『細道』に貼紙で訂正した「田一枚」の句の原形は、「水せきて早稲たはぬる柳陰」で、「陰」を見せ消ちして「哉」と改めていることが明らかになった。従来全く知られなかったこの句の初案形である。「早稲」は普通「ワセ」と訓むけれども、それでは字数が足りない上に、「早稲束(たば)ぬる」では取入れの時のようで、時季に相応しくない。これは尾形仂氏の説の通り「早苗たばぬる」の誤記であろう（同氏著『「おくのほそ道」を語る』）。苗代からとった稲の苗を十茎から二十茎まとめて稲藁で束ねておく田植の準備作業である。それを田植の時早乙女が手でほどいて植えて行くので、束ねる作業は男がやる地方もあった。最初芭蕉が案じたのは、水をせきとめて満々と湛えた田の傍の柳陰で、早苗を束ねる作業をしている農民達の姿であった。稲の苗なのでうっかり「早苗」と書くべきところを「早稲」と誤ったのかも知れない。「柳陰」の語に西行の歌「道の辺に清水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立どまりつれ」を思わせながらも、この初案には写生的な色合が濃い。「柳陰」では付句の姿なので、「哉」というはっきりした切字に改めて、発句の姿にしたのであろう。なお、『炭俵』下巻所収、其角・孤屋両吟の歌仙未満秋の空の巻に、

息吹かへす霍乱の針　　其角
田の畔に早苗把(たばね)て投て置　　孤屋

という一連があり、「水せきて」の句案の参考になる。

「田一枚」の句は初案の内容を全く一新して、「早苗取り」の句から「田植」の句としている。「立去る」の語を入れて、前文の「立寄り侍りつれ」に呼応せしめ、芭蕉が柳の陰に立寄ってから立去るまでの暫しの間に、「田一枚」を植える早乙女の手業を置くという形で西行への思いをあらわしたのである。写生味の勝った句から、西行思慕の抒

情性へと句の内実が変ったと見てよい。「田一枚」の句形の解釈は、やはり右のように見るのが良いと思うが、「水せきて」の初案形を踏まえて、写生的に解することも出来る。「柳」を「柳腰の女共」と取る古注の説は論外としても、早乙女が田一枚を植え終えて柳の陰を立ち去って行く即景と見るのも、初案を支えにすれば、従来よりは有力になりそうである。しかし、西行ゆかりの地であることを強調したい気持は、前文に明らかであり、それを承ける句として、即景だけではやはり物足りない。

*478*　世の人の見付ぬ花や軒の栗

自筆本『細道』に貼紙で訂正した「世の人の」の句の原形は、「目にたゝぬ花を頼に軒の栗」であることが判明した。旅行当時の「かくれがや」から「世の人の」に推敲される過程での中間案で、『細道』執筆中の句案であろう。可伸の隠宅が影をひそめ、「軒」の語にそれがほのめかされるだけで、全体として「栗の花」の句になっている点は、定案と変りがない。「頼に」は擬人的表現である。

*483*　笈も太刀も五月にかざれ帋幟

自筆本『細道』には「弁慶か笈をもかされ帋幟」とあって、曾良所持本に於ける訂正前の句形と同様である。

*489*　五月雨の降のこしてや光堂

自筆本『細道』には「五月雨や年〱降て五百たひ」とあって、曾良所持本に於ける訂正前の句形と同様である。また、同じく自筆本には、「五月雨や」の句の次に「蛍火の昼は消つゝ柱かな」の句が並んでおり、まだ抹消されていない。

*490* 蚤虱馬の尿する枕もと

自筆本『細道』には「蚤虱馬の尿する枕もと」とあって、振仮名に「バリ」とはっきり濁点を付している。曾良所持本はこれを写して濁点は省いたものと認められ、自筆本の明確な書き方によって、この句の「尿」は「バリ」と訓むべきことが確定した観がある。

*498* 有難や雪をかほらす南谷

自筆本『細道』には、最初「有難や雪をめくらす南谷」と書き、「めくら」を見せ消ちして右傍に「かほら」と直してある。其角の『花摘』に見える「雪をめぐらす」の句形が芭蕉自筆の裏付けを得たわけであり、『細道』執筆を始めてからも、自筆本の段階までこの中間案が生きていたことが知られる。

*505* 暑き日を海にいれたり寂上川

自筆本『細道』には「暑き日を海に入レたる寂上川」とある。曾良所持本はこれを写し、「たる」の「る」を「り」

と朱訂して治定したのである。

542　月清し遊行のもてる砂の上

自筆本『細道』には「月清し遊行のもてる砂の上」とあるが、冒頭の「月」の部分の貼紙の下は「露」である。かなり推敲を重ねた句ではあるが、「なみだしくや遊行のもてる砂の露」の初案から、「月きよし遊行のもてる砂の露」の中間案を経て、「月清し遊行のもてる砂の上」に治定するまでの過程は、既に旅中晩くとも大垣までには終っていた筈である（Ⅲ232頁参照）。「月清し」は後で迷いを生ずる表現とは思えず、自筆本の原型「露清し」は恐らく誤筆に過ぎまい。

# 索引

## 凡例

一　三句索引・語句索引ともに五巻全体にわたるものである。

一　両索引ともに本位句だけに限定し、異伝については採り上げない。

一　三句索引は初句（初五）・二句（中七）・三句（下五）に分け、出来るだけ原本通りの表記としたが、余りに異体のものは原本の表記を改め、わかりやすくしたものがある。

一　一列は発音に準じて掲出し、難読の字には括弧内によみを記した。

一　語句索引において、活用語は原則として終止形で掲出した。本文の表記には必ずしも拘われない。

# 三句索引

## 初句索引

### あ行

## か 行

さ　行

## た　行

## な　行



## は　行

### ら行



### わ行



## 二句索引

### あ行

**か　行**

## さ　行

**た　行**

## な 行

## は行

## ま行

**や　行**

### ら行



### わ行



## 三句索引

### あ行

## か　行

## さ　行

## た行

## な行

## は 行

**ま 行**

## や　行



## ら　行



## わ　行

# 語句索引

## あ行

## か行

## さ行

## た行

## な行

## は 行

## ま 行

## や行

## ら行



## わ行

阿部正美（あべまさみ）
昭和7年　東京生。
現在　専修大学教授。
著書『芭蕉連句抄』（1～12）
『芭蕉伝記考説』（行実篇・
作品篇）等。

芭蕉発句全講Ⅴ

平成十年十月三十日発行

著者　阿部正美

発行者　明治書院　三樹　讓

印刷者　大日本法令印刷　田中　忠

発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町一-一-六
振替口座　〇〇一三〇-七-四九九一
電話（〇三）三二九一-三七四一（代）

　ISBN 4-625-51126-7　製本星共社